
呪眼一闇の呪縛

以春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪眼―闇の呪縛

【Nコード】

N4617T

【作者名】

以春

【あらすじ】

呪いの力を宿したユキハとタカヤ。二人をとりまく環境は次々と変化をしていく。それぞれに闇を抱える契約者たち。そしてその存在理由。ユキハたちはその果てに何を見るのか……。

呪眼―黒の契約に続くお話です。

1 沈黙のピアニスト (1) (前書き)

いろんな人物が増えて楽しくなっていけたらいいなと思っています。
のんびりペースですがどうぞお付き合いください。

(読んでわからない人は黒の契約からお願いします)

1 沈黙のピアニスト（1）

西洋風の大きな屋敷の一室。一人掛けのソファに座って、少年はホットミルクを少し飲んだ。何気なく見た窓の外は真っ暗で、とても寒そうだった。

「珍しいな。天が人の代役を受けるなんて」

部屋にはもう一人いた。巨大なベッドの端に腰を下ろした男は、じつと少年を見つめている。

「忠浩ただひろさんの頼みだから・・・」

少年の声は幼い容姿に似合わず、大人びていて冷たかった。

「お前が世話になったわけじゃないだろ」

「・・・」

少年は冷たい目で男を見返す。

「わかったから、そんな目で見るなよ」

男は立ち上がって少年に近寄ると、そっと頬に触れた。

「その優しさが自分を苦しめてるんじゃないかって、心配してるだけだよ・・・大地だいち」

・沈黙のピアニスト（2）

クリスマスが近付いていた。街中はすでにイルミネーションで彩られ、中央広場には巨大なクリスマスツリーがお目見えしている。子供たちの目が輝いて見えるのは、クリスマスプレゼントにかける期待と、その後で訪れる冬休みへの待ち遠しさによるものだろう。

店頭や街灯にクリスマスのイベントが記されたポスターが数多く貼られたり吊されたりしている。その中でも圧倒的な枚数で街を埋めつくしているのが、イヴに行われるクリスマスピアノコンサートのポスターだった。

多加弥^{たかや}はビルの屋上から吊り下げられた、一番大きなものを見上げて、ため息と共に白い息を吐き出した。視線を下げれば、手元には同じコンサートチケットがある。父親から渡されたものだ。

昨日、学校から帰ると珍しく父親がいた。

「おかえり」

「あ、ただいま・・・」

気まづくなる前にさっさとリビングを通り過ぎようとしたところ呼び止められた。

「多加弥」

「なに？」

「これをお前に。聴く価値のあるものだ。行きなさい」

父親の手にはチケットが二枚あった。多加弥は嫌な予感がしたが、とりあえず近付いて見てみる。やはりピアノコンサートのチケットだった。

「父さんが出るはずだったんだが、別の仕事の関係で無理になつてな。代わりを頼んだところ、あの天君が受けてくれたんだ。なかなか聴けるもんじゃない。小さなホールだが、きっと素晴らしいものになるだろう」

多加弥の父親はピアニストだ。実力もあり、海外で演奏すること

もある。母はピアノの先生をしていて、姉は現在音大でバイオリンを専攻している。つまり音楽一家なのだが、その中で多加弥だけが浮いた存在となっていた。

「父さん、俺・・・もうピアノは・・・」

「まだそんなことを言っているのか。いつまで逃げるつもりだ」

「父さん。もう無理なんだ」

「何が無理なんだ。とにかく聴きにいつてみる。少しは考えも変わるだろう」

「違うんだ。もう・・・弾けないんだ」

父親は目を見開くと、ソファから立ち上がり多加弥の腕をつかんだ。そのまま強い力でピアノの前まで引っ張っていく。リビングに置かれたピアノの前で、父親は声を荒げた。

「弾いてみろっ」

多加弥は抵抗しなかった。言われたままイスに座ると鍵盤けんばんに指を置く。ほどなくして多加弥の指先は音を紡ぎだした。

無感情のまま流れる音楽は、機械的で完成されたものだった。

しかし、父親は途中で多加弥を止めた。

「もういい」

「・・・」

静かな時が二人の間に流れた。多加弥は顔を上げられなかった。

「・・・ごめん」

父親は何も言わず、鍵盤の上にチケットを置くとリビングから出ていった。

浦沢天、クリスマスピアノコンサート。
うらさわ

一つの区切りが、今ついたと思った。

「タカヤっ」

息を弾ませて駆けてくる人物がいた。後ろで二つに束ねた髪が揺れる。

「ごめん、寒い中待たせて」

「平気」

やってきたのは彼女の由起葉ゆきはだった。

「ああ、こんなに手が冷たくなってる」

由起葉は多加弥の手をとって体温の違いを確かめる。

「平気だよ」

「ねえ、タカヤ。すごいね」

「うん？」

「クリスマスだね。街中がキラキラしてるよ」

街をぐるりと見回す由起葉の目に、輝くイルミネーションが映り込む。見えないはずの右目にも、まるで光が戻ったかのようなだった。

「楽しそうだね」

「ワクワクしない？今年も道場でクリスマス会やるんだよ。タカヤも手伝いに来てくれる？」

「たぶん行けると思う」

「よかった。タカヤって結構子供に人気あるからね。みんな喜ぶよ」

「あのね、ユキハ。イヴの予定はある？」

「イヴ？ないよ」

多加弥は由起葉にチケットを見せた。

「これに、一緒に行ってみる気ない？」

由起葉はチケットを手にとって間近に寄せた。文字を追っていく。「クリスマスピアノコンサート・・・浦沢天・・・。浦沢天っ？」かばっとチケットから顔を上げると、穏やかに笑う多加弥の後ろに巨大なポスターが見えた。由起葉は好んでクラシックを聴くほどでもなく、自身も音楽には関わりが薄い。それでも浦沢天は知っていた。

「このチケットすぐに完売して、街の人でも取れなかったって話なのに、どうしてタカヤが？」

「あれ？ユキハでも知ってるんだ。浦沢天」

「さすがに知ってるよ。最年少で数々のピアノコンクールで賞を総なめ。事故でお兄さんを亡くしてからほとんどしゃべらなくなっただけの話だけど、それがまた話題を呼んで・・・」

熱弁しかけたところで由起葉は急に黙り込んだ。気まずそうに多加弥をうかがう。

「よく知ってるね」

「うん・・・。テレビでやってたし」

「どうしたの？聴きにいきたくない？」

「そうじゃなくて。だってさ・・・だって、ピアノ・・・」

由起葉が何を気にしているのかはすぐにわかった。優しいなと思う。多加弥はチケットごと由起葉の手を両手で包んだ。

「心配しなくても大丈夫だよ。このチケット、父さんからもらったんだ。それに、父さんの前でピアノも弾いた」

「お父さん、なんて？」

「何も言わなかった。結構まともに弾けたんだけど、やっぱりわかる人にはわかるんだろうね。まだまだ時間はかかりそうだけど、これでひとつ決着がついた気がするよ」

「そう、なんだ・・・」

「なんでそんな悲しい顔するの？俺の左腕に責任感じてるとかやめてよ。自分が選んできたことなんだから、そんな顔されると否定されてるような気持ちになる」

「否定だなんて・・・。ただ、私にはしてあげられることないんだなあって思ってる」

「ユキハにできることあるじゃん。これと一緒に来てよ」

多加弥はチケットをひらひらと振る。

「さすがに一人で行くのはキツイ」

「タカヤが平気なら、喜んでおつき合います」

多加弥がにっこりと微笑んでくれたので、由起葉は気持ちが軽くなった。思わず自分も笑顔になる。

ゆっくりでも、少しずつでもいい。多加弥が自分にしか歩めない道を進んでいくのが、由起葉にはうれしかった。

・沈黙のピアニスト(3)

「本当に前日入りするのか？当日でも大丈夫だぞ？」

天は大きなトランクのふたを閉めると、ベッドの脇に置いた。

「手は抜きたくない」

「なんだよ、それ。柏井忠浩かしわいの代理だからか？くう、妬やけるなあ」

「バカ言っでないで、火臣ひおみも準備しろ」

「へいへい」

火臣は天のマネージャーだ。あの浦沢天に、こんな軽々しい口の利き方するのは火臣くらいではないだろうか。

いい大人が少年にたしなめられてしぶしぶ準備を始める。それを確かめてから天はベッドに入った。

「夕方のリハーサルに間に合わせればいいな？ホテルはとつてあるから」

「・・・ああ」

「まあ、でも、お偉いさん方のご機嫌をとらなくていいっていうコンサートも、たまにはいいよな。ちよつとくらい好きなことやっても怒られないんじゃないか？オレ的には天のピアノより大地のバイオリン・・・って、もう寝てるし」

振り返ったときには、天は布団にくるまって寝息をたてていた。

火臣は手を止めてベッドの脇に寄る。

「寝顔はただの子供なのにな」

火臣だけが知っている天の秘密。小さな背中に負わされた過酷な未来。自分が選んだとはいえ、天にはそうするだけの罪があるのだろうか。無邪気に笑って、好きな音楽をして、幸せに暮らすことは許されないのか。

やりきれない。やりきれなさで胸が詰まる。

いつか必ず。火臣は何度も唱えたその言葉を、もう一度噛み締めた。

次の日、天は学校を早退して会場のある街まで向かった。天才ピアニストといえどまだ小学生だ。天は多忙であつてもなるべく学校へ行くようにしていた。

火臣の運転で家を出る。車に他の人間は乗っていない。天は基本、火臣しか傍に置かない。移動するときもほとんど二人きりだ。

「街の方じゃ、結構騒がれてるみたいだな」

「……」

「ビビることないぜ。オレがついてる」

「ビビってなんかない。ただ、なんだか嫌な予感が……」

「嫌な予感？」

「いや、違う……。うまく言えない」

「それはボキャブラリーが足りないからじゃないか？」

「……もういい。火臣とは話したくない」

「えっ？怒った？ごめんて。機嫌直してよ」

天はじとつと火臣をにらむと、黙って窓の外を眺めた。景色が流れていく。火臣がひたすら謝っているが、天はすべて無視した。

車が会場の駐車場に着いた頃には、空は茜色に染まっていた。冬の空はすぐに暗くなる。気温も一気に下がり、外に出た天は身震いした。すぐに火臣がコートをかける。

「時間ギリギリだ。すぐに弾けるか？」

「僕をなめるな」

「さすがっ。まあリハーサルだから、ちょちょいっとな」

物言いたげな天の厳しい視線を受け流し、火臣は天の手をとって会場入りした。

ステージには明日の本番で演奏する楽団のメンバーが揃い、天が

来るのを待っていた。天は火臣の陰からメンバーを一瞥いちべつすると、おずおずと前に出て丁寧ていねいに頭を下げる。

「よろしく願います」

火臣の前で見せる態度とは打って変わって、少し恥はにかみそうにしながら挨拶あいさつする小さな姿は、一気にみんなを魅了した。

（本当、恐ろしい奴だよな）

思わずにやけそうになる火臣の足を、天は思い切り踏んだ。火臣の顔が歪む。笑みはどこかへ飛んでいった。

そのまま天はすぐに合わせを行い、大人も顔負けの腕前を見せてホテルへ帰った。

事務所の人間や浦沢邸の人間も同行しているが、別のホテルをとっていたり、同じホテルでも別の部屋だった。ここでも一緒なのは火臣だけだ。天はずっと火臣と一緒にいる。家族よりも近い存在だった。

「天の演技力には毎回感心するよ」

「そんなものに感心しなくていい」

「もちろんピアノにも感動してるぜ。やっぱすごいよ、天は」
褒められてもうれしくなかった。天は窓の外に視線を移す。ホテルの横にある公園の木々が、黒く風に揺れていた。

そのまま外を見続ける天に、火臣は近付いていつて後ろから抱きついた。天は動かずに火臣の腕の中にいる。

「また気に障ること言ったかな、オレ。天のピアノに感動なんてしてほしくなかったか？」

「・・・」

「でも、やっぱすごいもんはすごいんだからいいだろ。それはそれ、これはこれだよ。オレはもちろん大地の方が好・・・」

「おいっ」

「なんだよ、今まさに愛の告白をしようってところだろ」

「バカ言ってるんで見てみる」

言われて火臣も窓の外を見る。木々が黒く、夜の闇よりも黒く揺

れている。その中に二人の人の姿がうかがえた。時折、白い何かが見え隠れする。

「あれはマズいな。巻き込まれるかも」

「行こう」

「それならオレだけでいいよ。天が出ていくまでもないだろ」

「狙いは僕だ。それに、あの白いのが気になる・・・」

さっさとコートを羽織ってドアに向かう天を、やれやれといった様子で火臣も追いかけていった。

・沈黙のピアニスト（4）

多加弥と由起葉はホテルに向かって公園を通り抜けようとしていた。公園というより小さな森だ。緑が多くて昼間は本当に綺麗だが、夜は木々が覆い尽くして不気味である。

「あのホテルに浦沢天が泊まってるんだ」

「父さんもなんで俺に頼んだんだろう・・・」

「私にはなんとなくわかるけど」

「どういうこと？」

電話がかかってきたのは今朝のことだった。すでに海外に飛び立っていた父親から、浦沢天に届け物を頼まれたのだ。A4サイズの封筒には何やら書類らしきものが入っているが、中までは見ていない。特別重要なものとも思えなかった。

「お父さんは今までのタカヤを無駄にしたくないんじゃないかな」

「ますます意味がわからないよ」

「だから、浦沢天みたいなピアニストと・・・」

由起葉が突然足を止めた。多加弥も一緒に止まる。

「どうしたの？」

「タカヤ・・・ここ、なんかマズい気がする」

多加弥も周囲の気配に精神を集中する。得体の知れないもやもやとした闇が、心の中に広がっていくような感覚。

「ユキハ、何か見える？」

「わからない。でも、何かいる気がする」

ナギが寄ってきた。鼻をひくつかせて周りをうかがっている。

何も見えないのに囲まれている。そんな感覚が由起葉にはあった。見えないわけではなく、見えているのに認識できないと言ったほうが正しいのではないかと思えてくる。

「もう引き返せないかもしれない」

「それなら突破しよう。ユキハは俺が守るから」

「うん」

うなずく由起葉の目に、赤い点が映った。木々の間で光ったかと思うとすぐに消える。

「タカヤっ」

叫んだ瞬間、後ろでナギの鳴き声があがった。急いで振り返るとナギの姿がない。

「ナギっ？」

「ユキハ。あそこ」

多加弥は宙を指差していた。見上げると確かにナギの姿があった。まるで網にでもかかったかのようにもがいている。

由起葉は目を凝らした。右目が赤く光り、瞳の中に五芒星ごぼうせいが表れる。少しずつその正体が浮かび上がってきた。

「糸・・・？」

一本見えると、一気に全体が見えるようになった。由起葉たちの周りには無数の糸が張り巡らされていた。その糸に絡めとられたナギは、まるでクモの巣にかかった虫だ。

「タカヤ、クモがいる」

「蜘蛛？」

由起葉の声に反応したかのように、いきなり茂みから数本の糸が飛び出してきた。とっさに手を伸ばした多加弥の腕に巻きつく。

「タカヤっ」

「ぐっ・・・」

糸の先は暗闇に吸い込まれている。引き込まれたら終わりのような気がした。

多加弥は必死で抵抗するが、糸は頑丈がんじょうでまったく切れない。それどころか強い力で徐々に引っ張られはじめた。由起葉は多加弥の体を反対の方向へ引っ張るが、ずるずると地を滑って茂みに引き寄せられていく。

（どうしよう。このままじゃタカヤが・・・）

ぐっと目を瞑つむって精一杯力を入れた瞬間だった。急に体が軽くな

り、由起葉は多加弥ともども思い切り転がった。多加弥に絡みついていた糸が急に切れたのだ。

わけがわからず、しりもちをついたまま顔を上げる。

「やあ、どうもどうも」

二人の前に立っていたのは赤毛の男だった。この場面には似つかわしくない爽やかな笑顔。ビシッとスーツを着こなしている一方で、耳にはいくつもピアスが揺れている。きちんとしているのか、いいかげんなのか、よくわからないスタイルだ。

「あなた、いったい・・・」

「ああ。びっくりした？びっくりして当然だよね」

男はやけに陽気だった。

「ユキハ。あの人片足だけで糸を切った」

「切ったって・・・。ただの糸じゃなくて呪いだよ？」

「俺と、同じ・・・？」

「おっと。一緒にされちゃあ困る。君よりオレの方が強い。君はまだまだ修行不足だな。そんなんじゃ大事なガールフレンドを守れないぜ」

ちっちっ、と指を振る男。由起葉たちは拍子抜けして言葉も出なかった。

「そんなばかんとした顔しないでくれよ。オレは君たちを助けに来てやったんだぜ？」

あまりの陽気な雰囲気、今置かれている状況を忘れかけていた。由起葉の目に再び赤い点が映る。男の真後ろでそれは光っていた。

「危ないっ。後ろっ」

由起葉の声と、クモの口から糸が吐き出されるのはほぼ同時だった。男は軽やかに糸をよけて着地する。

「やっと出てきたな」

茂みの中を真っ黒い生物が動いた。由起葉の目にははっきりとクモの姿が見える。人の腰の高さくらいまである巨大なクモだった。

「一気にケリをつけてやるぜ」

「待て」

クモを見据えて構える男の横から、冷静な子供の声が響いた。

「天」

（ソラ・・・？）

「こいつは単体じゃないかもしれない。もし複合体だった場合、お前の攻撃で散る可能性もある。そうになったら面倒だ」

「なるほど。さすがだな、天」

なにがなんだか、ますますわからない。由起葉はテレビや雑誌でしか見たことのない浦沢天を目の当たりにして、口をあんぐりと開けていた。

「おい、お前」

「え・・・えっ？私？」

「そうだ、お前だ。お前見えてるんだろう？僕に呪いの姿を教えろ」

「呪いの・・・姿？」

「早くしろ。僕たちには正確に姿をとらえることができない。予測はつくが間違っていたら面倒だ。だからお前の見ているモノを教えろ」

「クモ・・・。あれはクモよ」

事実を口にするだけで精一杯だった。天はそれを聞くと、いきなり舌を出した。すると、舌の上に五芒星が表れる。茫然と眺める由起葉たちの前で、天はただ一言だけ呟いた。

『蜘蛛』

すると、茂みから飛び出してきたクモを大きな影が包み込んだ。予呑み込まれたクモは影の中で暴れていたが、やがて影もろとも地に吸い込まれて消えていく。あっという間に辺りは静まり返った。

「浦沢・・・天・・・」

「いったい何がどうなってるの？」

二人は軽いパニックに陥っていた。突然いろいろなことが起こりすぎて頭がついていけない。立ち上がることもさえできなかった。

「大丈夫？」

「はい……。ちょっと混乱してますけど」

「ずいぶんすごいの連れてるね、君」

「気付くと傍にナギが立っていた。無事だったようだ。」

「ナギの姿も見えてる……」

「そりゃ見えるさ。契約者なんだから」

「契約者……」

「べらべらしゃべるな、火臣。お前たち、こんなところで何してる」

子供とは思えないほど冷めた声で天は聞いてきた。

「私たち、浦沢天に届け物があってあのホテルに向かったの」

「届け物？」

多加弥は持っていた封筒を差し出した。火臣が受け取り、中を確認する。

「ねえ、こういうことなの？あなたもフキと契約したってことなの？」

「答えるつもりはない。用は済んだんだ。さっさと帰れ」

「あなた本当に浦沢天？有名なピアニストがなんでフキと？」

「うるさい女だな。話すことなんか無いって言ってるだろ」

くるりと方向を変えて立ち去ろうとする天を、火臣が止める。

「ちょっと待てよ、天。これ、見てみろ」

火臣は封筒の中に入っていた書類を見せた。軽く目を通した後、天は動きを止めて多加弥を振り返る。

「お前……」

「？」

「世界は狭いな、天。それともこれが運命とかいうやつなのかな」
「黙れ」

天は火臣をにらむが、火臣にはまったくこたえていないようだ。
相変わらずへらへらしている。

「帰る」

天は背を向けてホテルの方へ歩きだした。少し行ってから振り返る。

「火臣。せっかく来たお客さんだ。お茶にくらい誘ってやれ」

「さすが天。そういうところ、好きだぜ」

火臣の投げキッスに心底嫌そうな顔をして、天はホテルに帰っていった。

「さて、天から許可も出たことだし、お茶でもしながら話そうか。オレたちのこと」

きょんとしている二人に向かって、火臣はウィンクした。

・沈黙のピアニスト(5)

多加弥と由起葉はホテルの喫茶室の隅に並んで座っていた。この街で一番高いホテルだ。妙に緊張してしまう。

目の前の火臣はネクタイも外し、完全にリラックスモードだ。ソファに体を預けて気を抜いている。普通ならだらしなく見えるところなのに、この男だと色気が増すから不思議だ。

「改めて向き合おうと、何から話していいのか迷うな。よかったらそっちから質問してくれよ。答えられる限りで答えるから」

どこかで聞いたような言葉だ。由起葉はぼんやりと思った。

「あの、さっきの男の子は浦沢天で間違いないんですよ」

「そうだよ。それでオレは天のマネージャーけん兼護衛の黒川火臣くろかわ。

以後お見知りおきを」

「こちらこそ……。私は岬みさき由起葉。そして彼は……」

「柏井多加弥、だろ？」

「俺のこと、知ってるんですね……」

驚いた様子もなく、多加弥は声を落として言った。

「忠浩さんの息子だからね。あの人はすごい人だよ。天もお世話になってる。まあ、偉大な親がいると、子供はたいてい苦労するもんだ」

多加弥は思わず火臣をにらんだ。この男はどんな風に自分のことを聞いて理解しているのだろう。偏った見方をされているようで不愉快だった。

「君は眼、彼は腕、か……」

「あなたもフキと契約したんですよ」

「ああ。オレは足をくれてやった。おかげで力を使わないときは右足がなかいかうことをきいてくれない」

実際火臣は右足を少し引きずるようにして歩いていた。それでも相当鍛きたえているのだろう。不自由さを感じさせないくらい動きがス

ムーズだった。

「天君は口をフキに・・・」

「でも普通にしゃべってた。事故のときからあまりしゃべらなくなったとは言われてるけど、まったく口が利けないわけじゃないみたいだし」

それどころか非常に口が悪い。テレビ番組の特集で見た天とは、まるで別人のような態度だった。

「天の契約による呪いはちょっと特殊だね。あいつの場合、口から出た言葉が呪いになっちゃうっていう厄介なもんなんだ。慎重に言葉を選ばないと、誰彼かまわず呪いを振りまっちゃう。だから人前ではあまりしゃべらないんだ」

「それにしても人を罵る^{ののし}ような言葉ばかり吐いてた気がするけど・・・」

「心の制御ができてれば別に平気なのさ。もし天が本気でうるさい、黙れなんて言ったら、言われた相手の喉^{のど}は一瞬で潰れてるかもしれない」

火臣は軽く言っただけのけるが、かなり恐ろしい力だ。

「事故でお兄さんを亡くしたショックでしゃべらなくなったわけじゃないんだ・・・」

「ただの口実さ。事故のせいで失ったものは、声よりも重い・・・」

浦沢天は二年前、ピアノコンテストの会場から帰る途中事故にあった。兄の大地と乗っていた車が、信号無視の車に衝突され大惨事となったのだ。ニュースで連日報道され、奇跡的に生き残った天は、天才ピアニストから悲劇のピアニストとして世にさらなるインパクトを与えた。

「もしかして、事故のショックで二重人格になっちゃったとか・・・」

「二重人格かぁ・・・。あながち外れてないかも」

「俺、大地君のバイオリンだけは好きだったんだよな」

ぽつりと呟く多加弥に、火臣は突然握手を求めてきた。つい、つられて手を差し出してしまふ。

「って、なんで握手？」

「いや、ちよつとうれしくなつて。気にしないでくれ」

火臣も大地のバイオリンが好きだったのだろうか。もう聴くことの叶わない音色。もしあの事故で生きていたのが天ではなく大地だったら・・・。

「あの、さっきのクモは何だったんですか？」

「見たまんまさ。呪いだよ」

「誰の？」

「誰？そんなのわからないよ。天くらいの有名人なら見ず知らずの人間から妬まれることだってある。ひとつひとつの念は小さくても、集まればあんな風に形を成して襲ってくることもあるさ」

「まるでいつものことって感じですね」

「まあね。この街に来る前から多少は覚悟してたし。いざつてときに守れるように、オレの足はあるんだし」

「もしかして、黒川さん、天君を守るために契約を・・・」

火臣はいきなり真顔になると多加弥をじつと見た。短い時間だったと思うが、多加弥は息をするのを忘れていたようだ。火臣の表情が戻ったとたん、気が抜けると同時に一気に肺に空気が入ってきた。

「さあ、どうかな・・・」

（この人、すごく危ない人かもしれない・・・）

「まあ、オレがいなくても、天だけでも充分強いけどね」

「さっきクモを消しちゃいましたよね」

「天の言葉は呪いを生む。呪いに対して向けられた言葉には相殺能力があるんだ。同じだけの力で呪いをぶつけなきゃいけないから、適格な言葉が求められる技なんだけどね」

「だから私に見ろって言ったんですね」

「そういうこと。君は理解が早いなあ。なるほど、不生在が好きな子だ」

褒められたのかどうか微妙なところだったが、由起葉はなんだか照れてしまった。

「明日の天のコンサート、君たちも来るの？」

「はい」

「そうか。じゃあ明日また会うかもしれないね。あつ、言つとくけど終わってから楽屋に来て也会えないからね。天は演奏後は誰とも会わないんだ。関係者はもちろん、家族にすら会わない。ずっとそうだから、例外もない」

「そうなんですか。何か理由が？」

「あつたとしても、答えられない」

多加弥に引き続き、由起葉も息を呑んだ。火臣の瞳に氷の刃が宿っている気がした。それ以上踏み込んではいけない。警鐘が鳴らされている。

「さて、今日はもうこの辺で。わざわざ書類を届けてくれてありがとう。君たちとはまた縁があるかもしれないね。天は仲間みたいなのはあんまり好きじゃないみたいだけど、オレは同じ契約者と会えてうれしかったよ」

「私も、いろいろ聞けたしよかったです。明日も楽しみにしています」

「天にも伝えておくよ」

そのままホテルのロビーで二人は火臣と別れた。

部屋に戻ると、天が届けられた書類に目を通していた。

「長かったな」

「危うく秘密をしゃべりそうになったよ」

ぎろりとにらまれて、火臣はすぐに謝った。

「冗談だって」

火臣は近付いていって、書類のひとつを手取る。紙には今回のコンサートの関係者について、簡単なプロフィールが書かれていた。「忠浩さんて、本当マメな人だよな。しかも息子に持って行かせるなんてさ」

天が小さな紙を火臣に突き出した。手紙のようだ。火臣は読み終えて、皮肉めいた笑みを浮かべる。

「愛されてるなあ、彼。あの手じゃもう弾けないってのに・・・。しかも当の本人はまだ親の影から逃げてるみたいだし」

「・・・」

「そんな顔するな。オレが耐えられない」

火臣は天を抱きしめた。足りないことはわかっている。それでも与えられる分だけでも与えてやりたいと思う。

「オレがいるだけじゃ、ダメか？」

「・・・」

「お前が気に入らないっていうなら、オレが消してやってもいいぜ」

「やめろ。そんなことしてほしくない」

天は火臣のシャツをつかんで体を寄せた。小さな体は火臣に包まれて見えなくなる。

「そういうとこ好きだぜ・・・」

火臣は天を抱き抱えるとベッドまで運んだ。

・沈黙のピアニスト（6）

イヴのコンサート会場は満員だった。もともと父の忠浩がやるはずだったからだろう。渡されたチケットは特別席のものだった。

「ピアノのことなんて大してわからないのに、こんないい席でいいのかな」

「いいじゃないか。どうせなら天君のピアノがよく聞こえるところで聴こうよ」

さすがというべきか、多加弥は慣れた様子で落ち着いている。一方の由起葉は普段着ないようなドレスを着ているというだけでそわそわしていた。

「なんか落ち着かないなあ・・・」

「俺も」

「はあ？どこが」

多加弥は由起葉をちらりと見て、すぐに視線を外した。

「ユキハがいつもと違うから、ドキドキして落ち着かない」

「なっ・・・」

「そのドレス、似合ってる。すごく綺麗だ・・・」

由起葉の心拍数は一気に上がった。いつも優しい言葉で褒めてくれる多加弥だが、そんな風に少し照れながら言われると、うれしさと恥ずかしさで気が狂いそうになる。

顔が真っ赤になるのを感じて、手で覆うと思い切り反対方向を向いた。そのとき、由起葉の視界に見覚えのある人物の姿が入ってきた。

（あれって、確か・・・）

由起葉は多加弥に知らせようと手を伸ばした。その手が多加弥に触れる前に、由起葉の動きが止まる。見覚えのある人物について隠れるように入ってきた女性。あまりにも信じられない光景に、呼吸をするのも忘れていた。

（なんであんなすごい人が・・・？）

今度こそ知らせなければと多加弥の方を向いた瞬間、照明が落ちて暗くなった。会場内が静まり返る。

スポットライトがピアノを照らした。緊張感が増す中、光の中に天が現れる。天は銀色のタキシードに半ズボンを合わせ、頭には帽子型の飾りを付けていた。きちっとした中にも子供らしい遊びがあって、なんとも可愛らしかった。

天は丁寧にお辞儀をするとピアノに向かった。ゆっくりとした動作で最初の音が弾かれる。コンサートは天のピアノソロから始まった。

その後に続くクリスマスにぴったりの曲たちは、どれも静かで、それでいて迫力があり、会場の空気を一気に呑み込んだ。天は小さな体を目一杯使って音を紡ぐ。まるでピアノとひとつになっているかのようなだった。

由起葉は細かいことなんてわからない。それでも天のすごさは感覚でわかった。心をわしづかみにされる音楽があるなんて、由起葉は今まで知らなかった。

（すごい。でも・・・なんでそんなに、悲しそうなの？）

由起葉の目には、天がピアノに向かって泣いているように見えて仕方なかった。天の創る音は、心の奥の辛いところを突くようで、じんわりと涙がにじんでくる。単純に感動して涙が出るのとはちょっと違うような気がした。

コンサートが終わり、会場内が拍手で沸き上がる。天は最後に深々と頭を下げると、儂^{はかな}げな笑顔を残して袖に消えていった。由起葉は立ち上がることもできず、しばらくぼんやりと音のないピアノを見つめていた。

「ユキハ、大丈夫？」

「う、うん。なんか力抜けちゃった」

多加弥がそっと手を握ってくる。それだけで、心の奥からじんわりと温かくなった気がした。

天のピアノは魔法だ。この会場にいたいって何組のカップルが、言葉を使わずに心を通わせあったことだろう。

由起葉は多加弥に手を引かれ、ゆっくりと会場を出た。肩越しに見える多加弥の横顔。きつと天のピアノは多加弥には違って聞こえている。純粹に感動なんてしていないはずだ。冷たく曇る多加弥の目を見て、由起葉は今すぐにでも抱きしめてあげたくなった。

「あ」

「あっ」

代わりに手をしっかりと握り返そうとしたとき、二人はほぼ同時に声をあげて立ち止まった。

「あれ？ 柏井君？」

二人に気付いて先に声をかけてきたのは西本久実にしもとくみだった。傍にはスーツを着た右京うきようがいた。

「なんだ、右京も来てたのか。西本さんと一緒に・・・ってわけじゃなさそうだね」

「当たり前だろ。こんな格好で入れるわけがない」

久実は完全に普段着だった。それでも充分にかわいいが、コンサートには不向きだ。口うるさい右京がそれを許すわけがない。

「偶然見かけて声をかけたの。柏井君は岬ちゃんと一緒に？」

「うん。すごく良かったよ。西本さんも聴けたらよかったのにね」

「ムリムリ。チケット全然取れなかったもん。もっと地元の人に回してくれたらよかったのにさ」

「そうだね。まあ、浦沢天じゃ仕方ないかもだけど」

由起葉は一步下がったところからじっと右京を見ていた。以前一度だけ会ったことがあるが、あのときの軽い調子の彼とはまるで別人のような姿だ。格好はもちろんだが、雰囲気うれが違う。憂いを帯びたような横顔から目が離せなくなりそうだ。

そしてもうひとつ。由起葉には気になっていることがあった。天のピアノで忘れかけていたが、会場で見た人物。右京が連れていた女性。

「どうしたの？」

「えっ」

「そんな綺麗なドレス着てじっと見つめられたら、彼氏がいても手出しちゃうぜ」

「なっ・・・」

右京の発言に由起葉は思わず赤くなった。ずっと見ていたことに気付かれていた。

「右京」

多加弥が前に出る。由起葉は後ろに隠されてしまった。

「冗談だよ。でも、岬ちゃんが俺のこと熱い視線で見てるからさ」

「なにが熱い視線だ。西本さん、早く右京を連れて帰って」

「だから一緒に来たわけじゃねえって・・・」

「なんでもいいから早く行けよ」

納得のいかない顔で、右京は久実と去っていった。

「ねえ、タカヤ」

二人の姿が見えなくなってから、由起葉は多加弥の袖を引いた。

「なに？」

「あのさ、私ね、会場内で見たの。右京君、かたくら片倉奈々子ななこと一緒にいた」

「・・・」

「あれ？なんであんまり驚かないの？片倉奈々子だよ？超人気女優だよ？」

片倉奈々子は数年前に突然テレビに現れ、それから次々とドラマの主演を勝ち取り、一気に上り詰めた有名女優だ。テレビで彼女の映像を見ない日はないのでというくらい出ている。

「いや、驚いてないわけじゃないんだけど・・・思い当たることがあるから」

「右京君と片倉奈々子ってどういう関係？」

「右京っていうより、右京の父親と関係があるんじゃないかな。あいつの父親、デザイナーだから」

「デザイナー？」

「ユーイチって、知ってる？」

「もちろん。テレビとかでもよく見るし」

「あれ、右京の父親」

由起葉は口を開けたまま、しばらく放心状態になっていた。浦沢天。片倉奈々子。ユーイチ。自分とは無縁と思っていた有名な人たちの名前が、頭に浮かんでは消えていく。

「ユキハ？」

「あのさ……。なんでタカヤの周りってそんなすごい人たちばっかなの？ 竜崎君りゅうさきといい右京君みぎぎょうといい……。普通じゃないよ」

そもそも多加弥たかみだって普通じゃない。由起葉は急に隣の多加弥が別の世界にいつてしまったように感じた。改めて、自分はどうでもない男を彼氏にしているんじゃないかと思う。

「ユキハ、大丈夫？」

「ついていけなくなりそう……」

由起葉は頭がくらくらして、思わず手で押さえた。

2 華世界の掟(1)

「出かけるの？」

右京はベッドの上で上半身だけ起こし、鏡に向かう人物に声をかけた。乱れていた髪はすでに整えられ、サラサラと揺れている。

「祐一さんゆういちから連絡があったの。これから会いに行くわ」

振り返ったのは、片倉奈々子かたくら ななこだった。パチンとコンパクトを閉じる。

「なんだ……。俺、いらなかったじゃん……」

「そんなことないわ。右京君に会いたかったから来たんだし」

「でもあの人を優先するんだろ？」

「それはね。右京君だってわかってることでしょ」

右京は目を伏せた。わかってのことだ。自分は奈々子の心の隙す間を埋める代わりの存在にしかねない。わかったうえで求めた結果だ。奈々子は悪くない。

ゆっくり目を開けると、いつ近寄ったのか目の前に奈々子の顔があった。

「そんな顔しないで。もう会いにこれなくなっちゃうわ」

奈々子は右京の頬に軽くキスをした。

「私は心も身体もひとつしかないの。誰かにあげたら他の人にはあげられない。今の私は祐一さんのもの。わかってね、右京君」

「わかってるよ……」

その言葉がどれほど右京を傷付けているかなんて考えてもいないような笑顔を向けて、奈々子は部屋を出ていった。

一人残された右京は、静かにただじっと膝を抱えていた。

・華世界の掟(2)

クリスマス当日、由起葉ゆきはは学校が終わるとすぐに道場へ向かった。たいいていの学校は終業式しかない。道場の子たちも夕方までにはほぼ集まる予定だった。

「おお、ユキハ。ずいぶん早いな」

迎えてくれたのは兄の一葉いちはだ。由起葉の兄は双子で、上が一葉、下が二葉ふたばである。一葉は師から道場を継ぎ、太極拳を中心とした武術を教えている。

「走ってきちゃった。タカヤがちょっと遅れるみたいなの。だからその分私が早く来たってわけ」

「えええ。タカヤ君遅れるのお？」

「百合子ゆりこさんっ」

わざとらしく嘆く声に振り返ると、百合子が立っていた。百合子は一応二葉の彼女だ。一応というのは、二人の関係がかなり曖昧あいまいなためである。一葉と二葉と百合子は共にこの道場の同期生であり、後々百合子は二葉とつき合うのだが、由起葉が知っているだけでも二人は何度も別れては戻りを繰り返している。

二人は一步引くということを知らない。どちらも好きなことをやって相手を振り回しているの、当然の関係とも言えた。

「百合子さんが来てるなんて知りませんでした」

「偶然にも今日お休みもらえちゃったの。でも、クリスマスだからって相手があのだ二葉でしょ。デートにも誘ってくれないし、だったら道場に顔出そうと思って」

「すいません。妹の私が謝ります・・・」

「もともと期待してないから全然平気。それにここにいればあいつも顔出しそうだし」

百合子はけらけらと元気に笑う。強い人だ。二葉に振り回されて傷付くこともあるだろうに、悩んでいる姿を由起葉は見たことがな

い。

「百合子さんがいるってことは、手料理、食べられるんですよね」
「あ、やっぱ期待してる？」

「もちろんですよ。私も手伝いますから教えてください。百合子さんの料理ならみんな大満足、間違いなしです」

百合子の料理は、その性格を表したような豪快な量と盛り付けである。だが、味は拔群ばっぐんにおいしい。道場では百合子の料理は有名で、子供たちも大好きだ。

由起葉はそんな百合子の料理の技を盗もうと、百合子がいるといつもついて回って一緒に料理をしているのだ。おかげでだいぶまくなったが、それでも本人はまだまだと思ってやり続けている。

「一葉兄ちゃん、台所貸して」

「心配しなくても、ユリコがすでに用意を整えてあるよ。ユキハが来るのを待ってたんだ」

「そうなんですか？」

「だって、見つかったら絶対そういう展開になるってわかってるし」

「兄妹してすいません」

「さあ、さっそく取り掛かろう。大人数だからね」

「はいっ。がんばります」

意気込んで二人が台所のある母屋の方へ消えていった後、ぱらぱらと道場の生徒たちが集まりはじめ、ツリーを飾ったり、テーブルのセットをしたりと大にぎわいになった。

クリスマスパーティーには多加弥も間に合い、プレゼントを渡すときにはサンタの格好をさせられていた。

そこにもう一人、勢いよくサンタが飛び込んでくる。

「悪い子はいねえか？悪い子にはプレゼントなしだぞ」

なぜか手には棒を持っている。物騒なサンタだ。

「なんで若干じゃっかんなまはげみたいなの？」

「あいつはまた・・・」

呆れる一葉と由起葉。子供を追いかけて回すバカサンタの前に、百合子が仁王立ちで立ちふさがる。

「出たわねえ、二葉っ」

「げっ、ユリコ」

「げっ、とは何よ。クリスマスに電話にも出ないで、私のこと放ったらかしかと思えば、こんなところにこのこ出てくるなんてね」
百合子は手に棍こんを持った。美しい構えだ。

「マジかよ・・・」

急いで二葉も棒を構える。

子供たちが取り巻く中、二人の激しい打ち合いが始まった。クリスマスパーティーはめっちゃくちゃだが、場は盛り上がり、最後は百合子が勝ってお開きになった。

小学生以下は先に帰され、中学生以上は片付けを手伝ってから順に帰っていく。大人たちはこれから母屋の方で飲み会をするらしい。百合子はまた大忙しだ。

由起葉は多加弥と二人で縁側に座っていた。

「昨日とは大違いだね。私はこっちの方が性にあってる気がするけど」

「俺も好きだよ。賑やかで楽しいし」

「でも・・・これが私とタカヤの違いなのかもしれないな」

「え？」

「私の住む世界はいつもこんな感じで騒おこがしくてさ。けど、タカヤのいた世界はもっと静かで厳おこかで・・・。住む世界が違うのに、私が強引に引っ張っちゃったんだって」

「何それ。後悔してるってこと？」

「ううん。そうじゃないけど、ちょっと不安になったっていうか・・・。私で大丈夫かなあなんて、考えたりもして」

よくよく考えてみれば、今まで由起葉が多加弥の世界に足を踏み入れたことはほとんどない。それが昨日の天そらのコンサートでほんの一部を垣間見たのだ。知っているはずの多加弥の、知らない部分を

見て戸惑ってしまった。

「タカヤのすごさ、わかってたつもりで、あんまりわかってなかったのかも」

「俺はすごくなんてないよ。むしろ俺に言わせればユキハの方がよっぽどすごいよ。ユキハといると、いろんな自分が見つかる。いろんなことに挑戦できて、いろんなものを手に入れることができる。ユキハは俺の可能性を広げてくれるんだ」

「それこそ大げさだよ」

由起葉は苦笑した。

どんなに違っていても、今はこうして二人でいる。それが全てでいいのかもしれないと、由起葉は思った。

・華世界の掟(3)

冬休みに入り、右京は毎日のようにスタジオに通っていた。

右京は父親の影響もあってか、芸能や芸術に興味を持ち、物心ついた頃からカメラを手^にしていた。今ではアシスタントとしてカメラマンにつき、技術^みを研^みいでいる。卒業後には本格的にカメラについて勉強するつもりだった。

「今井^{いまい}さん、今日は何の撮影するんですか？」

「今日はオーディションの写真を撮る。最終選考に残った子たちのグラビア撮影だ」

右京のついている今井カメラマンはグラビアや芸能写真を中心に撮っている人物だ。腕は悪くないが、写真展を開いたりするようなこともないので、世間での認知は低めだ。

今井の話では、ある青年向けマンガの表紙を飾るアイドルのオーディションが行われており、今日はその最終選考なのだという。素人がいきなり表紙デビューするという大きなチャンスであり、応募者数もかなり多かったようだ。

右京は両肩からたくさんの荷物を下げて、第六スタジオに入った。最終選考に残った子たちが来る前に、急いで撮影の準備を整える。

「さて、アイドルの卵はいるかな」

「どうですかね」

「右京君さあ、なんでもっとウキウキした感じになんないの？ 青年向けマンガの表紙なんていったら、ピチピチ、ムチムチの女の子が揃^{そろ}ってるに決まってるじゃん。君若^{わか}いんだからさ、もっと心踊^うっちゃっても俺は許すよ」

「何言^{なん}ってるんですか。さんざんグラビアアイドルの水着姿見てるんですよ？ もう慣れちゃいましたよ」

「いや、君は初めの頃からそんな感じだったよ。あ、もしかして・

・」

「今井さんが何考えてるかわかりました。違いますから。俺は昔から女の子にしか恋したことありませんから」

「わかってるって」

今井はカメラを持っていないときはまるで気の抜けたおやじだ。若者をからかつてはにやにや笑っている。

準備は整い、今井がタバコに火を点けたときだった。スタジオの扉が開き、そろそろ女の子たちが入ってきた。みんな同じ黄色い水着を着ている。今井の言ったとおり、魅惑的な体つきをしている子ばかりだった。

（最近の子は発育がいいよな・・・）

おやじ臭い感想を持ちながら端から一応目を通していく。そして最後の一人を見たとき、右京は思わず機材を落としそうになった。

（なっ、何やってんだ、あいつ）

相手も気付いたらしく、驚いた顔をした後気まずそうに下を向く。さり気なく、露出した肌を手で隠して立っていたのは西本久実にしもとくみだった。

オーディション関係者の一人が今井のところへやってくる。

「すいません、写真撮りお願いしちゃいまして。面接でだいぶしぼれてるんで、撮影は一応って形で」

「いいですよ。で、誰かい子いました？」

「まあ、みんな悪くはないんですが。審査員の間ではあの最後の子が結構評価高いんですよ。勢いがあっていいっていうか」

「へえ。プロポーションも悪くないですね。健康的な感じだし、顔もきりっとして意志が強そうだ」

右京はなんだか恥ずかしくなってきた。よく知った人物のことを評価されているのがむずがゆい。

（西本評判いいみたいだな。これに通ればあいつが表紙に載るか・・・）

右京の目に、水着姿で見も知らぬ男たちに笑顔を向ける久実の写真が浮かぶ。どうでもいいはずなのに、少しイラっとした。

一人目の子から順に撮影が始まった。今井はやはりプロだった。会話をしながら次々とポーズを要求し、女の子たちの魅力を引き出していく。カメラのレンズをのぞく目は真剣だった。

そして最後、いよいよ久実の番がやってきた。

ところが、どうしたことか久実がガチガチだった。笑顔まで引きつってしまっている。勢いがあっていいと好評だったはずなのに、その勢いはまったく感じられなかった。

（本当、何やってんだよ・・・あいつは）

場の空気がどんよりと重くなるような、ひどい撮影だった。結果は後日出るとのことだが、おそらく久実チャンスをつかめなかっただろうと右京は思った。

スタジオの片付けを済ませ、荷物を車に詰め込む。この後今井は事務所に帰って写真の整理等を行うのだが、右京は今日はもう帰っていいと言われていた。今井の言葉に甘えてスタジオから出ようとしたとき、建物を出てすぐのところに久実の姿を見つけた。ひどく肩を落としている。

「おい」

右京は走っていった呼び止めた。びっくりした様子で久実は振り返る。

「お前、いつからアイドルなんて目指してたんだ？」

「べつにいいでしょ・・・」

「なんだよその言い方。そりゃ西本が本気でなりたいたなら、俺に口出しできることじゃないけどさ。けど、さっきの撮影はひどかったぜ。あれでグラビアなんて勤まるわけないだろ」

「うるさいな。わかってるよ」

「うるさいって・・・なんだよ、さっきから」

「私は絶対なるの。アイドルになれば、きっと・・・」

（きっと、私を見てくれる）

久実は唇を噛んだ。それを見た右京は、今回の撮影が相当悔しかったのだらうと解釈して、久実の頭をなでた。慰めているつもりら

しい。

「またチャンスがあるよ、きっと」

「やめてよ」

久実が右京の手を払った。

「優しくしないで」

「なんだよ。応援してやるって言ってるんじゃないか」

「そういうのいいから。べつにアイドルになってみんなに見てもらいたいわけじゃないし。私は・・・私は、ただ片倉奈々子から右京君を引き離したいだけよ」

「西本・・・」

「バカにしないでよ。私だっていろいろ知ってるんだから」

右京はなんと答えていいかわからなかった。久実は小学校からずっと一緒に幼なじみで、その関係性が崩れることは今までなかった。仲はいいが決して一線は越えない。そもそも右京には周りの子に恋をする心がなかった。

だが、久実の方は違った。右京の様子の変化に誰よりも早く気づき、あらゆる力で原因を探った。その結果わかったのが、奈々子の存在だったのだ。久実は二人の関係を知り愕然がくぜんとした。なんとかして右京を取り戻したい。その思いが少しずつ久実を支配していった。

「あの女は毒よ。いつか右京君を不幸にする」

「お前に何がわかるんだよ」

「わかるよ。だって、ずっと・・・」

（ずっと、見てきたんだから）

言葉の先を飲み込んで、久実は背を向けると逃げるように走って行ってしまった。

右京は追いかけることもできずにその場に立ち尽くしていた。

・華世界の掟(4)

一年がもうすぐ終わろうとしていた。由起葉は多加弥と連れ立って、神社まで来ていた。いつもは由起葉の家の近くにある柳樂神社なぎらに行くのだが、今年は電車に乗って別の大きな神社まで出かけた。

ひとつには多加弥の受験をひかえて学問の神様にお祈りしたかったことがある。そしてもうひとつには、やはりナギのことが気になったということがあった。ナギは柳樂神社から生まれた呪いの犬だ。そのためか、ナギ自身柳樂神社に入ること嫌がった。

「やっぱりすごい人だね」

「この辺じゃ有名だもん。ユキハ、はぐれないように気をつけて」
「うん」

境内は人でごった返していた。真夜中とは思えないほど賑やかである。

二人は新年になってすぐにお参りすることに決め、一度人混みから離れた。

「タカヤ、ずっと冬期講習だったんだよね。どう？調子上がってきた？」

「まあ、たぶん大丈夫。もう来月には受験なんだな・・・」

「タカヤ一般入試じゃないもんね。きっと受かるよ。ずっとがんばってきたんだもん」

「そうだね。ずっとがんばってきたんだ・・・ユキハと一緒に、ずっと・・・」

ここまでできたのに、どうして由起葉とまた離れなければいけないのか。なぜ自分にだけ道は伸び、由起葉の道は断たれたのか。これも運命だと思ふことが正しいことなのか。

「ユキハは何してたの？」

「私も勉強してたよ。それから学校見学とかも行ってみた」

「いいところあった？」

「うん。なんとなくは決まった」

由起葉は片目の光を失ってから、かつての目標であった理工学部を諦め、同時に多加弥と共に挑むはずだった名門大学への受験もやめた。代わりに見つけた道は、整体師やマッサージ師といった手で何かを感じられるものだった。

「ごめんね、タカヤ。一人でがんばらせて」

「何言ってるの。そりゃユキハと一緒にがんばったけど、ユキハだってがんばってるんだろ？それなら俺も負けないよ。それに、俺に道を示してくれたのはユキハだから、可能な限り進んでいくよ」

「そう言ってくれるとうれしい。だってタカヤの頭脳は天才的だもん。ピアノも武術もすごいけど、タカヤの本当のすごさはその頭の良さだって、私は思ってる。だから絶対無駄にしちゃダメだよ」

「うん。・・・わかってる」

秒針が進み、ついに新年がおとずれた。二人はお互いの未来に向けて指切りを交わしながら年を越した。

本殿にお参りし、おみくじを引いてみると二人共大吉だった。

「こういう日っていいやつしか入れてないって言うよね」

「それでいいよ。嘘でも大吉の方が気分がいい」

「そりゃそうだ」

由起葉の提案で、二人は絵馬を書くことにした。内容はもちろん多加弥の合格祈願だ。そのためにこの神社を選んだといってもいい。

「ユキハは自分のこと書かないの？」

由起葉の絵馬には多加弥の受験についての祈願が書かれていた。

「私はいいの。でもタカヤには受かってほしいから」

「プレッシャーだな」

「えっ。ごめん、そういうつもりじゃ・・・」

「わかってるよ。俺も絶対受かるって気持ちでいるし。今の俺は多少のことじゃぶれないから」

多加弥の力強い笑顔に、由起葉も心強くなる。二人は絵馬を結び、最後のお祈りをした。

目を開けて多加弥を見ると、由起葉の視線の先に、見知った人物の姿があった。だが、人混みの中すぐに見えなくなってしまう。

「どうしたの？」

そちらの方に歩いていく由起葉を追いかけながら多加弥は聞いた。

「あれ？ やっぱり見間違いだったのかな」

「誰かいたの？」

「うん。あの、西本さんて子がいた気がしたんだけど・・・」

きよろきよろする由起葉だが、久実の姿は見当たらなかった。その代わりに一枚の絵馬が目に残る。

「あつ、これ」

由起葉に続いて多加弥も覗き込む。その絵馬には、合格や必勝といった字の躍る中であって、浮いた願いが西本久実の名前と共に書かれていた。

「アイドルに・・・なる」

「西本さんてアイドル目指してたの？」

「俺はあんまり知らないから・・・」

そういうタイプには見えなかったが、本人が何になりたいかなんて本当のところはわからない。絵馬に書くくらいなのだから、それなりに思っている夢なのだろう。

「アイドルかぁ・・・」

しみじみと繰り返す由起葉の肩を、ふいに誰かが叩いた。同じく多加弥も叩かれていたらしい。二人で同時に振り返る。

「やっほう。明けましておめでとさん」

「右京っ」

「二人で年越しデートか？ うらやましいねえ」

陽気な笑顔で立っていたのは、右京だった。

「なんで右京がいるんだよ」

「なんでって、この辺り俺の地元だもん」

右京は高校生になってから学校の近くのマンションで独り暮らししていた。家からでも充分通えるが、あえて親元を離れたのは父親

との関係を友好なままで保ちたかったからだった。

「そうか。だから西本さんもいたのか」

「西本？」

「見かけたただけなんだけどね」

「ふうん・・・」

右京は二人の間に絵馬を見つけた。驚いた顔をして手を伸ばす。

「これって・・・」

「私たちもさっき見つけたの。西本さんて、アイドルになりたかったんだね」

「・・・」

右京の表情が陰しくなる。

「なあ、柏井^{かしわい}」

「どうした？」

「できたらあいつの話を聞いてやってくれないか？お前になら何かしゃべるかもしれないから・・・」

「なんだよ、それ。俺より右京の方が仲いいんだし、幼なじみなんだから力になってやれよ」

「俺じゃダメなんだ。俺じゃあいつの力にはなれない」

「右京君？」

怪訝そうに覗き込む由起葉に、右京ははっとしていつもの様子に戻った。

「いや、ごめん。気が向いたらでいいから相談にのってやって。」

じゃあ、俺地元の友達と来てるから」

右京は逃げるように去って行ってしまった。二人は顔を見合わせる。

「そんなこと言われても・・・」

「・・・タカヤ。話聞いてあげた方がいいかもしれない」

「え？」

由起葉は久実の書いた絵馬を手し、多加弥を見た。

「この絵馬、すごく薄いけど呪いの跡が見えるの。薦^{つた}みたいなの

が絡みついている。まだ全然完成されてないから、早くに手を打てば間に合うと思うの」

「西本さん、いったい何を恨んで・・・」

「右京君も何か知ってそうだったよね。受験前に大変だけど、力になってあげようよ」

「ユキハがそう言うなら」

二人は改めて絵馬を見つめた。

・華世界の掟(5)

そうは言っても、どうにもきっかけがつかめず、冬休みは終わりに近付いていった。学校が始まってからなら久実と会う機会など山ほどある。話はそれから聞くことにしよう。多加弥はそう考えていた。

明日は始業式という冬休み最後の日。多加弥は塾から帰ろうと電車に乗り込んだ。すると、電車の中で思いがけず久実と会った。偶然とはいえ、またとないチャンスだ。多加弥は迷わず近付いていった。

「西本さん」

久実の方は気付いていなかったようで、呼びかけられて驚いた様子で多加弥を見た。

「柏井君っ」

「偶然だね。帰り？」

「う、うん……。ちょっと出かけてて」

久実はきつちりと化粧をし、髪も丁寧にブローしていた。遊びに行くにしては気合いが入りすぎだし、デートかなとも思ったが、久実の顔はどこかどんよりと暗かった。

「どうしたの？　なんか元氣ないね」

「そ、そうかな」

「そんなにオシャレして、デートでもしてた？」

「違うよ。デートなんて・・・」

久実はうつむいてしまった。多加弥はどの辺がまずかったのだろうと必死で考える。わかるのは、久実が何かしらの悩みを抱えているということだけだった。

「彼氏と喧嘩けんかでもした？」

「彼氏なんていないよ・・・」

「じゃあ今日どこ行ってたの？　もしかして・・・アイドルになる

ために・・・」

多加弥は久実の顔を寄せて小声で言った。周りに聞かれたくないかもしれないと思つての、多加弥なりの配慮だった。

久実はアイドルの言葉に反応して、勢いよく顔を上げる。近付いていた多加弥の顎あごに思い切り頭がぶつかる。二人はお互いに、ぶつけた箇所を手で押さえると顔を歪めた。

「いてて・・・。ごめん、柏井君。大丈夫？」

「うん・・・平気。それより西本さん。少し話さない？俺でよかったら聞くよ」

「・・・」

久実は迷った様子だが、多加弥と共に電車を降りた。

右京は一人、部屋で写真を見つめていた。手にしているのはオーディションのときに撮った久実の写真だった。

プロになる意識が足りないと言つてしまえばそれまでだが、久実の表情を見るに、本当になりたいのか疑わしく思つてしまう。被写体としていろいろな子を見てきた右京だ。アドバイスならいくらでもしてやれるが、久実自身が望んでいないなら、逆にもうこんなことから手を引いてほしかった。

（西本は、今のままの方がいい・・・）
ピンポン。

誰か来たようだ。右京は写真を置いてドアに向かった。

ドアの向こうに立っていたのは奈々子だった。すぐに開けて招き入れる。姿を隠しているとはいってもバレないとは限らない。

「どうしたの？また時間が空いたの？」

「その言い方ひどくない？それでも超多忙な人気女優よ。わざわざ

ざ会いに来たっていうのに・・・」

「そうだよな・・・。ごめん」

「なによ。右京君の方こそどうしたの？なんか変な感じ」

奈々子は自分の家のように遠慮なく部屋に入っていく。甘い香りがゆっくりと部屋に広がっていく。誘い絡めとるような甘い香り。とりあえずベッドに腰掛けた奈々子は、側のテーブルに一枚の写真を見つけた。細い指先でつかむと目の前に持ってくる。奈々子の眉がぴくっと動いた。

「ひどい写真ね」

右京は落ち着いた様子で傍に寄ってきた。

「オーディションの写真なんだ。本当にひどい写真だよな」

「誰、この子」

「友達。一応アイドル希望らしい・・・」

「右京君が撮ったの？」

「いや、撮ったのは今井さんだよ。その場には俺もいたけど」
奈々子は写真を置くと、じっと右京を見つめた。大きな瞳に、少し不機嫌な色が浮かんでいる。

「なるほど。右京君がこの頃私に冷たいのは、そういうこと」

「そういうことって、どういうことだよ。そもそも冷たくなんてしてないし」

「そうね。冷たくなったのは私の方かもしれない。最近は特に祐一さんのことばかりだったから」

「父さんとはうまくいってるみたいだね」

「ええ。そのことで話をしようかと思って来たんだけど・・・。気が変わったわ」

奈々子は右京を引っ張ってベッドに押し倒した。馬乗りになって右京を見下ろす。右京は動揺することもなく、静かに見つめ返していた。

「そうやって何でも受け入れちゃうのね。あの子とはもうしたの？」

奈々子は写真を指差している。

「ただの友達だよ。そういう関係じゃない」

「本当に？」

「嘘なんて言わないよ」

「でも、あの子はどう思ってるかしら。右京君は優しいから、迫られたら受け入れちゃうかもしれない」

「何が言いたいの？」

「寂しいなあって思っただけ。私だけの右京君じゃなくなっちゃう日も、そのうち来るのよね」

「何言ってるの。そもそも奈々子さんは俺のものにならなかったじゃないか」

「やだ。拗^すねてるの？」

「そうじゃないけど・・・」

奈々子は右京の耳元に顔を寄せた。吐息がかかる。奈々子はそのまま擦^{かす}れるような声で囁いた。

「私は祐一さんのものだけど、右京君はまだ、私のものでしょ？」

耳を甘噛みされて反応する右京を満足そうに眺めて、奈々子は自ら服を脱いでいった。

・華世界の掟(6)

二人が降りたのは久実が降りるはずだった駅の一つ前の駅だった。「ここからでも歩いて帰れるの。柏井君がいいなら歩きながら話さない?」

多加弥は承諾し、二人は久実の家に向かって歩きだした。

「寒くない?」

「大丈夫」

久実はおしゃれの方を優先したためだろう。首回りが空いた服装をしており、気になった多加弥は自分のマフラーを巻いてやった。

「それでよかったら着くまでしときなよ」

「柏井君・・・優しいね。岬ちゃんみさきがうらやましい」

「そうかな。右京だって充分優しいと思うよ」

「なんで右京君? 私たち、そんなじゃないよ・・・」 久実はまたうつむく。右京とアイドル。久実が反応する二つの言葉の接点がいまいちつかめない。

「西本さん、今日どこ行ってきたの?」

「・・・」

「オーデিশョン、とか?」

「・・・知ってるの?」

久実是真っ直ぐ前を向いたまま聞いた。

「いや。ただ、西本さんの書いた絵馬を見たんだ。アイドルになりたいって、本気なんだよね」

「見られちゃったか・・・」

久実は力なく笑った。

「本気だよ。でも、アイドルになることが夢じゃない」

「アイドルは目指してないってこと? じゃあ何のために・・・」 何のために。重い言葉だ。こんなやり方でなくとも変えられるかもしれない現実。だが久実が華の世界に飛び込む道を選んだ。

「柏井君、誰にも言わないでね。私のためじゃなくて、世間に知れたら大変なことなの」

「ちょっと待って。そんな大きなこととは思ってなかったから・・・」

「・・・やっぱり」

「あ・・・」

「どうせ右京君に頼まれたんでしょ。あいつの悩みを聞いてやってくれ、とかなんとか言われてさ」

見破られてしまった。まんまと久実の話術にはまった多加弥は肩を落とすしかない。

「本当、柏井君て優しいよね」

「右京だって、西本さんのこと気にして俺に頼んできたんだ。あいつの方が優しいよ」

「優しくなんかないよ・・・」

久実は立ち止まった。表情が強張る。

「優しくなんかない」

「西本さん？」

「むしろひどい奴だよ。右京君のせいで私は、苦しくて苦しくて仕方がないんだから」

久実の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「西本さん・・・、右京のこと好きなんだね」

「・・・好き。でも、右京君が私を選んでくれなくても構わないって思ってる。けど・・・だけどあの女だけは・・・」

久実はカバンを持つ手に力を込めた。目を潤ませながらも強い眼差しで多加弥を見つめる。

「右京君は私にやめろって言うかもしれないけど、柏井君は応援して。私、どうしてもやらなきゃいけないの。右京君に見てもらうためには、やるしかないの」

「西本さんがアイドルになりたいのって、右京のため・・・？」

「世の中をバカにしてるって言われるかもしれない。本気でアイ

ドルになりたい子に失礼だって思われるかもしれない。でも、私だって本気なの。本気で取り戻したいものがあるの」

「どうして？ 今だって充分一緒にいられるじゃないか」

「ダメなの。今の右京君は私のことなんて見てない。あっちの世界に行かなきゃ、隣にすら並べないの」

「なんでそんなに必死に……。西本さん以外で右京の傍にいる子なんて俺は知らないし、考えすぎなんじゃ……。」

「そう……。知らない……。知るわけない」

（だって秘密なんだから。右京君とあの人だけの秘密……。）

久実は興奮を抑えるように深呼吸をひとつすると歩きだした。遅れて多加弥も歩きます。

冷え冷えとした空には白い月が光っていた。とんでもないことに巻き込まれようとしている。そんな気配がした。

「私、いつから右京君のこと好きだったのかな……。」

久実は下を向きながらぼつりと呟いた。

「もっと早く気持ちに気付いてたら、どうなったのかな私たち。

右京君、変わらないまままでいられたかな……。」

「西本さんの知ってる右京って、昔とは違うの？」

「違うよ。大人になればみんな変わっていくものだと思うけど、

右京君は大人になる前に苦いものばかり味わっちゃったから、普通じゃなくなっちゃったんだ」

「俺は調子の軽いあいつしか知らないから」

「それでいいと思う。きっとそれが右京君の姿だから」

「でもそうじゃない右京を知ってるから西本さんは苦しいんだろ？」

「それは……。でも、大丈夫。あのね、次こそ道が開けそうなの」

久実は多加弥を見た。その表情には明るさがあった。

「この前行ったオーディション、ダメだったんだけどその後審査員の一人から連絡があってね、もう一度会ってみたいって言われて

るの」

「会うって・・・」

「それで気に入ってもらえたら別の仕事でデビューできるかもしれないチャンスなの。明日始業式だけ出てすぐに行くつもりなんだ」

「右京には？」

「まだ決まってるのに言えるわけないよ。いちいち報告するよ
うなことじゃないし」

久実は一瞬外して多加弥に返した。

「家、そこだから。マフラーありがと。それからいろいろ聞いてくれてありがと。なんか一人で盛り上がり過ぎて柏井君には訳わかんなかったかもしれないけど、私は気持ちがちょっとすっきりした。またがんばれそう」

「応援するよ。アイドルになることも、右京とのことも。けど、
無駄はダメだよ」

「うん。やっぱり柏井君は優しいね」

ここからなら戻るより次の駅に行った方が近いというので、久実
に道を教えてもらって多加弥は別れた。

単純な話ではなさそうだ。高校生の恋の悩みに芸能界がからん
できたら、多加弥ごときには手もつけられない。大事にならなければ
いいのだが……。多加弥は願うしかなかった。

・華世界の掟(7)

始業式にはみんな揃っていた。久実の姿もちゃんとある。

だが、教室に戻るとすでに久実はいなくなっていた。カバンもない。昨日の話は本当だったようだ。

その後のホームルームを終えてから、多加弥のところへ右京がやって来た。

「なあ、西本今日来てなかったっけ」

「ああ。始業式だけ出てすぐ帰るって言ってたから」

「西本と話したのか？」

「昨日、ちょっとだけ・・・」

多加弥は自信なさ気に声が小さくなる。話してはみたものの右京に報告できるようなことは聞けなかった。久実の力になれたとも思えないし、あまり追求されても困ってしまう。

「そうか・・・。あいつ、がんばってるみたいだったか？」

「うん。次こそチャンスがつかめそうって言ってたよ」

「マジで？なんか受かったのか・・・？」

「オーディション自体はダメだったけど、そのときの審査員の人から連絡があったらしい。今日会いに行ってるはずだよ」

「え・・・」

急に右京の顔が強張った。

「その審査員の人の名前とか聞いてないか？」

「そこまでは・・・。どうかしたのか、右京」

右京は焦った様子で携帯を取り出すと電話をかけはじめた。

「右京？」

「あ、もしもし。お前いったい今どこにいるんだよ」

右京が電話したのは久実だった。口振りから多加弥もなんとなく察する。

「え？テレビ局の前？なあ、これからお前が会うのって誰だ」

久実が答えているようだ。しばらくの沈黙の後、右京の表情が一変した。電話に向かって声を荒げる。

「バカ、行くな。そんなうまい話あるわけないだろ。気にしないでいいから今すぐ帰ってこい」

「右京？ いったい何が・・・」

「俺の言うことを聞け。おいっ、西本っ。おいって」

電話を切られたようだ。携帯を耳から離す右京の顔は心なしか青ざめていた。

「どうしたんだよ」

「あのバカ・・・。今日西本が会いに行った佐久間さんっていう芸能プロダクションの人、あんまりいい噂聞かないんだ。もしかしたら西本、危ないかもしれない」

「どういうことだよ」

「だから、仕事やる代わりにやらせろって迫ってくるような奴なんだよ」

「えっ」

「とにかく俺、これから西本のところ行ってくる」

「それなら俺も行くよ」

右京の話を聞いて放っておけるわけがない。久実の覚悟がどれほどのものかわからないが、とにかく一度落ち着いてもらわなければ。後々に残る傷なんて、絶対に負うべきではない。右京と多加弥は連れ立って教室を飛び出した。

電車を乗り継ぎ、久実の言っていたテレビ局のビルの前に着いた。大きな建物だ。圧倒されるように見上げていた多加弥を置いて、右京は受付に駆け込む。

右京にしてみれば慣れた場所だ。慌てて後を追ってきた多加弥はまだきよろきよろしている。

「すいません。今日佐久間さん来てますか？」

右京は身分証のようなものを見せながら聞いた。受付の女性は親しげに笑いかけてくる。身分証なんてなくても一目見て右京とわか

った様子だった。

「どうしたの、そんなに慌てて」

「いろいろあって急いでるんです。芸プロの佐久間さんにどうしても会いたくて」

「ちよつと待ってね。今調べるから」

女性はどこかに電話をかけた。その間中、ずっと美しい姿勢を保ったままだ。さすがだな。妙なところに多加弥は感心した。

「残念だけど、もう佐久間さんはいないみたいよ」

受話器を置いてから受付の女性は言った。

「確かに一度来てるけれど、ちよつと前に出ていったみたい」

「どこに行ったかわかりませんか？」

「さすがにそこまではわからないわよ」

これ以上受付の女性を困らせても仕方がない。出ていったことがわかってるのでビルの中を探しても無駄だろう。右京はもう一度久実^{ひさみ}に電話してみるが、出ることはなかった。

「何やってんだ、あいつは。よく知りもしない奴にふらふらついていきやがって」

証拠はないが、佐久間と久実が一緒にいるだろうことはほぼ確かだった。承知のうえか無理矢理か。それはわからないが、どこかに連れ込まれたら助けるのは難しくなる。

途方に暮れてテレビ局を出る二人の前に、一台の車が止まった。ウィンドウが下がり、顔を出したのは赤毛の男だった。

「やあ、カシ君」

「く、黒川^{くろかわ}さん？てか、カシ君で・・・」

「柏井だからカシ君。ちなみに由起葉ちゃんはユツキーだ」

「なるほど・・・。って、そんなことどうでもいいですよ。なんで黒川さんが？」

「いやあ、偶然見かけて、うれしくなって声かけちゃったよ」

後部座席をのぞくと、不機嫌な様子の天^{あま}がいた。火臣^{ひおみ}の勝手で車を止めたことが気に入らないのだろう。

「柏井、お前いつから浦沢天と知り合いになったんだよ・・・」
右京も後ろに乗っている天に気付いたらしい。

「いや、知り合いつてほど知り合ってはいないんだけど・・・」

「そういえばお前の親父さん、ピアニストだったよな。それでか」
「まあ、そんなところ・・・」

説明なんてできるわけがない。嘘をついているわけではないので、多加弥はとりあえずそういうことにしておいた。

「で、ずいぶん困った様子に見えたけど、何かあったのかい？」

「それが・・・」

「よかったら話してごらんよ。力になれるかもしれないし」

ちらりと、多加弥は後ろの天を見た。ぎろり。寒気を覚えるようなきつい目で、天は多加弥をにらんでいた。余計なことに巻き込むな。そう言っているようだった。

「や、やっぱいいいです。俺たちの問題なんで・・・」

「あの、今テレビ局から出てきました？」

天の機嫌を考え辞退しようとする多加弥に構わず、右京は身を乗り出して火臣に聞いた。

「そうだけど」

「同じ場所に佐久間さんという芸能プロダクションの人がいたんですが、知りませんか？」

「局内では会わなかったけど・・・なに？佐久間さん探してるの？」

「はいっ。友達が危ないんです」

佐久間の名前に天が反応した。ものすごく嫌そうな顔をする。

「なるほどね」

何も話していないのに、火臣はすべて承知したようにうなずいた。

「佐久間って人のこと、知ってるんですか？」

「まあね。あのエロおやじ、本当に懲りないな。天、どうする？
ちよっとだけ助けてあげる気ない？」

「・・・」

「探してあげるくらい、してあげようぜ」

「・・・」

天は何も言わず車を降りると、助手席に乗り直した。

「さすが天。やっぱり女の子はあんなおやじに汚されるべきじゃないよな。さあ、二人共後ろに乗って。探しに行こうぜ」

多加弥と右京は顔を見合わせる。探しに行くというより、見つかることが前提のような口振りだ。何をするつもりなのだろう。

二人はとりあえず車に乗る。それを待っていたのか、ドアが閉まると同時に天が舌を出した。舌の上に五芒星が表れる。天は一言、小さく呟いた。

『鳥』

急に車の前に真っ黒な小鳥が現れた。ボンネットの上に舞い降りると、こちらをうかがうようにぴょんぴょんと軽く跳ねる。はつきりしないその姿。鳥らしい形をした鳥ではないもの。（あれって・・・天君の呪い・・・？）

隣の右京はまるで気にしていない様子だ。おそらく見えるのは呪いの契約者にだけ。心の中の問いに答えるように、火臣はミラー越しに多加弥に向けてウィンクした。

「さあ、行こうか」

火臣が車を出すと、小鳥は小さな羽を広げて飛び立った。

・華世界の掟（8）

呪いの小鳥を追いかけて辿り着いたのは、とあるホテルだった。火臣は迷わず車を乗り入れる。

「ここにいますか？」

「さあ、どうかな。でもあの人が使う場所のひとつではある」

「詳しいんですね」

「天に手を出すような奴のことは徹底的に調べるからな」

「えっ」

「火臣」

聞き捨てならない話を聞いた気がしたが、すぐに天に制されてしまふ。

どうやら佐久間は女の子だけでなく、天にまで迫ったことがあるようだ。なんとという危ない奴だろう。ある意味では命知らずだ。

駐車場に車を停める頃には小鳥はいなくなっていた。火臣は車から降りるとぶらぶらと駐車場を見て回る。

「どんピシヤリだ」

戻ってきた火臣はにかつと笑う。

「佐久間さんの車で間違いない。いるよ、あの人」

「でも、このホテルのどこにいるかわからないし・・・」

「それならこっちから呼び出せばいい」

「呼び出す？」

天が火臣のスーツの裾を引っ張った。

「まあそう言うなよ。あとちょっとだけ手伝ってやろうよ。な？」

何も言っていないのに、火臣には天の言わんとしていることがわかるようだ。右京の前だからだろう、天は子供らしく小さくうなずいて手を放した。

「オレがフロントから電話してもらおう。こっちには天がいるし、仕事の話ならいくらでもでっち上げれる。やましいことしてるんだ、

こっちがしつこく迫れば出てくるしかないだろう。佐久間さんを下に呼び出してる間に、その友達を助けに行けばいい」

「そんなことが・・・」

「成せば成るもんさ。それに、オレたちもあの人はどうも嫌いでね。カシ君の友達が危ないっていうのに助けないわけにはいかないよ」

「ありがとうございます。なんとしても助けます」

右京と火臣は作戦を決行するために先だってホテルに歩いていった。多加弥も行こうとして背後に殺気を感じ、おそろる振り返る。天が、じとつと多加弥をにらんで立っていた。

「巻き込むなと伝えたつもりだが」

「いや、それはわかったんだけど・・・」

「ここまで連れてきてやったんだ。あとは自分たちでなんとかすればいいだろう」

やはり怒っていた。自分が責められていることに理不尽さは感じるものの、反論する気にはならなかった。少なくとも力を使って協力してくれたのだ。あの天がと思うと、むしろ感謝するべきか。

「あの鳥、呪いだよね」

「対象が明確なら追尾することができる。呪いというのは対象者に向かって発せられるものだから、後を追えば相手に辿り着くのが普通だ」

「それって、天君が佐久間って人を呪ったってことになるんじゃない」

「あんなエロおやじ、呪われて当然だ。ほんの軽い念で済ませてやったが、本当なら呪い殺してやってもいいくらいだ」

前に行く右京たちから離れたところで、天は恐ろしい発言を次々と口にした。これが浦沢天の本性だと知ったら、世の中は大騒ぎになるんじゃないだろうか。

遅れてホテルのロビーに入ると、火臣がすでにフロントで電話をしておらっているところだった。天は中に入る直前に、用意していた帽子を深くかぶると多加弥の背後に隠れた。

「天君？」

「見つかると面倒なんだ」

忘れかけていたが、浦沢天は超有名人だ。突然ホテルに現れたら騒ぎになる可能性も充分ある。子供が一人でいるのも不自然だし、かといって一緒にいるのは忠浩の息子だ。ただひろ

（確かに厄介だな）

火臣は直接電話をとり、いくつかやり取りをしたあと多加弥たちの方へやって来た。

「もう少ししたら佐久間さんがロビーに来るはずだ。オレが仕事の話をして足止めしておくから、その間に友達を連れ出せ。部屋は五〇一号室だ」

「ありがとうございます」

「お礼は無事に助け出してからで」

ひらひらと手を振る火臣と、その傍に隠れる天に頭を下げて、二人は五階まで階段で向かった。エレベーターは佐久間と鉢合わせる危険がある。多加弥はいいが、右京は顔がわれているので怪しまれかねない。

五階まで駆け上がるとさすがに息が切れた。廊下に出る前に辺りをうかがう。飛び出さなくて正解だった。廊下の端にはエレベーターを待つ佐久間がいたのだ。

右京は佐久間がエレベーターに乗り込んだのを見届けてから火臣に教えられた部屋の前まで急いで向かった。とりあえずノックしてみるが反応がない。右京は強くドアを叩きながら、中にいるであろう久実呼びかけた。

「西本っ。いるのか？」

右京は呼び続ける。

「いるならここ開けろ。西本、俺と帰ろう」

「西本さん、とりあえずここから出よう」

ドアの向こうから小さな声がした。

「柏井君もいるの？」

「西本？」

「ごめん・・・私・・・」

「いいからここ開けて。あの佐久間って人危ないんだ。俺たち助けに来たんだよ」

「私を、助けに・・・？でも、私・・・」

「何ためらってんだ。早くしないと戻ってくるぞ」

「西本さんのために浦沢天が協力してくれてるんだよ。今下で足止めしてくれてる。だから逃げるなら今のうちだよ」

「浦沢・・・天・・・」

「なんでもいいから開けろっ。後のことは俺に任せておけばいい。俺がお前を守ってやるから」

カチャリ。音がしてドアがゆっくりと開いた。

「西本」

右京は取っ手を思い切り引いて部屋の中へ駆け込むと、頼りなげに立っていた久実を抱きしめた。

「何もされてないか？」

「・・・まだ」

「よかったあ」

本気で心配していたことがわかるくらい、一気に気の抜けた声になる。多加弥はそっと立ち去るべきか迷ってしまった。

「とにかく出るぞ」

感動のシーンにも右京は酔いしれることなく、冷静に判断する。

久実は何物を手にすると、右京に連れられて部屋を後にした。

下に降りると、ロビーにはまだ火臣たちと佐久間がいた。見つからないように別の出口を使って外に出る。

ホテルから走り去る間、久実は何も言わなかったが、振り返ることもなかった。

・華世界の掟(9)

途中で多加弥と別れ、久実は右京と二人で帰りの電車に乗っていた。

「家まで送るよ」

右京は自分の降りるべき駅をやり過ぎそうとした。その腕をつかんで久実はフォームに降り立つ。

「なんで降りるんだよ」

久実は手を放そうとしなかった。

「西本？」

「連れてって・・・」

「え？」

「右京君の家、行きたい」

「何言ってるんだよ」

「お願い・・・」

久実の懇願するような目に、右京は返す言葉もなく黙って改札に向かった。

二人は右京の家に着くまで一言もしゃべらなかった。ただ黙ったまま、それでも手を握り合って歩いていく。途中までは二人の通う桜蘭学園高校への道のりと一緒だ。見知った景色のはずなのに別世界のようだった。

真っ暗な部屋に明かりを点けて、右京は先に入る。後について久実も部屋に上がった。

「右京君・・・」

「なに？」

「ごめんね。それから、ありがとう」

いきなり久実の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「すごく・・・恐かった。そのときは決心したつもりだったけど、いざとなったら足が震えて。どうなっちゃうんだろうって思った」

「バカだな。だからやめろって言ったんだ。あんな奴に好きなようにされて、それでアイドルになんてなったって、すぐ終わりが来る」

「でも・・・なりたかったの。アイドルにこだわってるわけじゃないけど、どうしても芸能界に行きたかったの。どうしてもあつちの世界に入りたかったの・・・」

「なんでそこまで？昔はそんな話してなかっただろ」

「・・・右京君があの人しか見てないって、わかったから・・・」

「西本？」

久実は驚く右京の胸に飛び込んだ。

「右京君は幼なじみくらいにしか思っていないかもしれないけど、私は・・・私は右京君のことが好き。だから見てほしかったの。片倉奈々子だけじゃなくて、私のことも見てほしかったの」

「・・・」

「どうしてもあの人じゃなきゃダメなの？あの方はユーイチさんに近付くために右京君を利用しただけなんだよ？」

「・・・わかってるよ」

「わかってるのにまだ・・・」

久実は右京からゆっくり離れると、その瞳に決意の色をたたえて見つめた。

「右京君、私を抱いて」

「え？」

「私、これでも初めてなの」

「お前、それで佐久間さんのとこなんて行ったのかよ。あんな人にバージンくれてやるつもりでいたのか？」

「それくらい本気だったの。どうってことないって思えるくらい必死だったの、あのときは。でも、今は嫌だなんて思う。せめて初めては好きな人とがいい」

「俺には・・・できないよ。西本のこと、嫌いじゃないけど、お前が俺に向けてるような想いは俺にはないから。中途半端な気持ち

でするなんて、できないよ」

「お願い」

久実 は右京の腕をつかんで訴えた。

「お願いだから、して……。誰かに汚される前に、右京君としたいの。私のことなんて好きじゃなくてもいい。片倉奈々子のこと思いながらも構わないから……。お願い」

「なんてこと言うんだよ。もっと自分を大切にしろ……。」

右京 は久実を包み込むように抱きしめた。

「このまましたら、もっと辛くなるかもしれないよ？」

「構わない。私のわがままだもん。でも、右京君を苦しめることになるのは、ちょっと心が痛い……。」

「俺は大丈夫。今さら苦しいことなんて何もないよ」

「……。ごめんね、右京君……。」

右京 は久実の顔を引き寄せると熱くキスをした。

静かに、優しく久実を抱きながら、右京は今まで忘れていた気持ちが蘇よみがえってくるような感覚になっていた。

どんなときでも自分の気持ちは嘘ではなかった。奈々子に対する思いも間違いなく本物だった。でも、今はこんなにも久実が愛しい。守ってやりたい。

でもこれが恋と呼べるものなのか、右京にはまだ確信がなかった。

・華世界の掟（10）

初めて片倉奈々子と会ったのは、まだ中学生になりたての頃だった。父親について入ったテレビ局で、奈々子はドラマの撮影をしていた。もちろん脇役だ。

「こんにちは。あなた、祐一さんの息子さん？」

廊下で突然声をかけられ、振り返ると奈々子が立っていた。奈々子は右京にしてみれば大人の女性で、名は売れていないといっても美人だった。

「ごめんなさい。突然でびっくりするよね。さっきちょっと姿を見かけたから声かけちゃった」

「どうも・・・。三上^{みかみ}右京です」

「右京君。素敵な名前ね。私まだまだこれからの女優なんだけど、がんばるから応援して。それでね、いつか祐一さんと仕事ができるようになるの」

「父さんと・・・？」

「そう。私の目標なのよ。私、片倉奈々子っていうの。まだあんまりテレビとか出てないけど、よかったらチェックしておいて」
奈々子は元気よく、くるくると表情を変えた。右京はこの数分の間だけで完全に心奪われていた。

そして一ヶ月も経たないうちに、右京と奈々子は肌を重ね合っていた。右京にとっては奈々子が初めての女性だった。

今ならわかる。あの初めて声をかけてきた時点で完全に右京を狙っていたこと。右京と関係を持つことで祐一に近付こうとしていたこと。右京と寝る一方で様々な仕事関係の人間と寝ていたこと・・・。

（それでも、好きだったんだ・・・）

ゆっくりと目を開ける。隣を見ると久実の寝顔があった。

右京は眺めながら髪をなでる。奈々子に対してはしたことの無い

ことだった。

（無防備だなあ・・・。かわいい奴）

軽くキスをする、久実は気付いたのかうつすらと目を開けた。

「起こしちゃった？ごめん」

「・・・右京・・・君」

久実はだるそう。それも仕方ないかと思う。昨日痛がりながらも必死で応えようとしてくれた久実を、右京は愛しく思う。

「大丈夫か？まだ時間あるから休んでて平気だよ」

「私、昨日・・・。夢じゃないよね？」

「夢じゃないよ」

久実は照れながら、それでもうれしそうに笑った。右京は少し罪悪感を覚える。純粋で綺麗な久実を、泥沼にはまった自分が汚してしまったような気になる。

「なあ、西本」

「なに？」

「もう芸能界に入るなんて、やめにしないか？」

「・・・」

「お前がどうしてもアイドルになりたいっていうなら俺はサポートするけど、もしそうじゃないなら、こんなこと終わりにしよう。

俺も奈々子さんとは終わりにするから・・・」

久実はがばっと起き上がると、目を見開いて右京を見つめた。

「奈々子さん、父さんと結婚するんだ。そのうちメディアでも報道される」

「右京君・・・」

「俺は反対するつもりないし、父さんも俺が小さい頃に母さんと離婚したせいで苦労しただろうから、そろそろ幸せになってもいいと思うし。世間体がどうか、父さんに悪いからとか、そういうことじゃなくて、俺自身もう一度やり直したいって思ったんだ」

久実は右京の手に自分の手を重ねた。胸が痛い。右京が奈々子から離れることを強く望んでいたはずなのに。

「なんでそんな顔するんだよ。誰も悪くないんだ。でも、もし悪い奴がいたとしたら、俺だよな……。義母親ははおやになる人とずっと関係を持ってたんだから」

「右京君は悪くない。むしろ被害者だよ」

「それを言うなら父さんの方が被害者だよ。考えられないような裏切りだよな」

「右京君がどんな風に思われようと、私はちゃんと知ってるから。私が好きなのは、右京君だから……」

「ありがとう。俺、西本と恋してみようかな」

「えっ」

「今さら普通の恋愛なんかできるのかなあ、俺。時間かかるかもしれないけど、気長につき合ってくれる？」

「もっ、もちろんだよ。私ずっと右京君を想ってきたんだもん。右京君が見てくれるなら、私どれだけだって待てるよ」

「俺の傍にいるのが西本でよかった……」

右京は優しく笑いかけると、唇を重ねた。

会議室という名の、狭いシンプルな一室。テーブルにパイプイスが並んだだけのその部屋は、カーテンが閉められ鍵がかかっていた。

「湯川さんゆかわ。私もうあなたの誘いにはのらないの」

窓際の壁にもたれて笑みを見せるのは片倉奈々子だった。湯川と呼ばれた男はイスに座り、火のついていないタバコを弄もてあそんでいる。彼はこの局のプロデューサーだった。

「つれないなあ」

「当然でしょ。私もうすぐ人妻になるのよ。それにもう湯川さんと寝なくなっちゃって仕事もらえないもの」

「そりゃそうだ」

湯川は奈々子を有名にするために一役買った人物である。奈々子は体と引き替えにいくつも仕事をもらった。売れてからは仕事以外で会うこともほとんどなくなり、今日は久しぶりに二人きりで密会しているのだ。

「話があるって言われて来てみれば、結婚します、だもんなあ」

「がっかりした？」

「まあ、なんとなくはわかってたけどさ。奈々子ちゃん、ユーイチ好きだったもんなあ。手に入れるためには手段も選ばなかったし・・・」

「あら、右京君はただの手段だったわけじゃないわよ。こう見えて嫌な人とは寝ないんだから」

「それ、オレのことも好きってこと？」

「そうね・・・。湯川さんイイ男だし、嫌いじゃないわ」

「嫌いじゃないけど好きじゃない・・・。好きなのはユーイチだけってか。そういうところブレないよな」

湯川は眼鏡を外して伸びをした。少し長めの茶髪に、赤いフレームの眼鏡。色白なので不健康そうだが、知的な雰囲気も持った確かにイイ男だった。

眼鏡をかけ直し、タバコに火をつけようとする。そのタバコを細い指が横から奪い取った。

「湯川さん。私はあげられないけど、代わりにピチピチの若い子をあげるわ」

「は？」

「悪くない子よ。胸も大きいし。いつもみたいにお仕事あげるって言えばあっさりオーケーしちゃうかも。でも、もし拒否したら、そのときは・・・」

奈々子は湯川の耳元でその言葉をささやいた。

「魔法の言葉よ。もう彼女は湯川さんの言いなり」

奈々子は声を弾ませる。楽しんでいる。そんな印象さえ受けた。

「その子って、いったい・・・」

「後で連絡先教えるわね。一応これ、写真」

湯川は差し出された写真を受け取った。そこには、いつ撮ったのだろう、西本久実の姿が映っていた。

「見た感じ普通の子だけど・・・」

「あら、普通なんかじゃないわよ。だって、私の右京君をたぶらかした女の子なんだから」

「たぶらかしたのはむしろ君だし、そもそも右京君は君のじゃないだろう」

「もう、いちいち訂正しないでよ。とにかく、その子なら好きなことができるわよ」

「恐いなあ、奈々子ちゃんは。いったい何がしたいんだい？」

「湯川さんに結婚前にプレゼントをと思って」

奈々子はにっこりと笑う。

「それに、お母さんとして息子の恋人の愛を確かめておかなくちゃ、ね」

・華世界の掟（11）

日曜日。多加弥と由起葉は久実と一緒に電車で揺られていた。多加弥たちは火臣に呼ばれ、久実は最後のオーディションを受けに、それぞれ同じ場所に向かっていった。

「これで最後にするの。受かって受からなくても、これで終わり。これからは違う形で右京君の隣にいられるようにがんばるんだ」
「そっかあ」

「私も柏井君や岬ちゃんみたいになりたい。無理して自分を見せなくても、自然に一緒にいられる。そんな関係に右京君になりたいな」

「西本さんと右京君ならなれるよ。私たちみたいっていうのは別にしてもね・・・」

三人はビルに入ると、それぞれの場所に向かって別れた。鬼気迫る感じでオーディションに向かっていた頃と違い、久実の後ろ姿には光が溢（あふ）れているようだった。

「西本さん、楽しそうだね」

「うん、輝いて見えるよ。あの調子でいったらオーディション受かったっちゃうかもよ」

由起葉には久実と右京のことは簡単に話してあった。ただ、あの絵馬に絡みつく呪いの核心に触れる部分はまだ話していない。久実の恨みの念が片倉奈々子にあったことは多加弥しか知らないのだ。

奈々子とユーイチの婚約発表があったのが数日前だ。右京ももう関係を切ると誓った。このまま久実の念も消えてくれればすべて丸く収まる。多加弥はそうなることを信じていた。

「ごめんねユキハ、つき合わせて」

「私は平気。でもタカヤは今それほどじゃないのに・・・」

「本当だよ。俺来週には受験だよ？ 黒川さんに助けてもらったから断れずに来ちゃったけどさ」

火臣から電話があったのは昨日のことだ。急に人出が足りなくなったから来てほしいと言われ、久実を助けるのに力を貸してくれた恩もあるので引き受けてしまった。

「何させられるんだろ」

「天君のおもり・・・とか？」

「それ、一番大変だったりして」

二人は苦笑した。

久実はおーディションの全過程を終えて、会場となっていたスタジオを出た。結果は後日出る。最後だという思いもあって、全力を出せた気がした。

（私、今まで何やってたんだろうな。アイドル目指してがんばってる子たちに本当に失礼だった・・・。みんな毎回全力で挑んだだろうに）

守りたいもののために必死だったのは嘘ではない。だがそれは夢とは違う。久実の本気と、夢を追いかける者の本気とは質が違うものだった。

「えっと、西本、久実さん？」

前から歩いてきた男性に突然声をかけられた。

「そうですけど・・・」

「よかった。連絡する前に偶然会えるなんてラッキーだな」

「あの、あなたは？」

「オレはこういう者です。君には一度会いたいと思っていたんだ」男は名刺を差し出す。久実を受け取って見た。湯川宏司^{ひろし}。プロデューサーだった。

「おーディションいくつか受けてるみたいだね」

「ええ。でもどれもダメで。今日ので最後にするつもりなんです」
「最後？もったいないな。違う路線で受けてみたら案外受かるかもしれないよ？」

「ありがとうございます。でも、もういいんです」

「そう……。でもさ、ちょっとだけでもオレの話聞いてみる気ない？最後にするにしても、一度くらいテレビの仕事味わっておくのも悪くないと思わない？」

「どうして私なんか……」

「オレはいいなって思ってたからだよ。もちろんメインを張れるようになるにはまだまだだけど、次の番組で君に入ってもらいたい粹があるんだ」

久実は警戒していた。佐久間のときのようなこともある。

「ちょっとだけでもいいから。その会議室でどう？」

湯川は廊下の先にある部屋を指差して言った。話をする場所がすぐそこにあるということが久実を油断させた。隠れた場所ではなく、思い切り廊下に面している。もしものときは突き飛ばして逃げれば何とかなる。久実は湯川についていくことにした。

右京の部屋には奈々子が上がり込んでいた。

「奈々子さん、もうここへは来ないでほしいんだ」

「なあに？息子の様子を見に来ちゃいけないの？」

「俺は二人の結婚には反対しない。でも家族になる気はないんだ。あの家に帰るつもりもないし、奈々子さんとも仕事以外で会うつもりはない」

「急に冷たくなっちゃって……。私は右京君のこと好きよ。だから恋人じゃなくても、お母さんとして大切にしたいのに」

母親だと言うわりにはやたらと体を寄せてくる。右京は拒否しきれずに、ただ動かずにいることしかできなかった。

「もうやめようよ。奈々さんは父さんと幸せになれば、それでいいじゃないか」

「拗^すねてるの？」

「そうじゃない」

「じゃあ・・・」

奈々子は鼻がつきそうになるくらい右京に顔を寄せた。大きな瞳に怪しい光が宿る。

「じゃあ私以外に大切な子ができちゃった？」

「・・・」

「私との関係を断てずに苦しんでたのにね。子猫ちゃんに魅せられて、私なんてあっさり切っちゃうんだわ。ひどい話よね・・・」

「奈々子さん・・・？」

「でもいいの。仕方がないもの。けど、私から右京君を奪うんだから、それ相応の覚悟と愛が必要よね」

「何を・・・言ってるの？」

奈々子は右京の髪を愛しそうに優しくなでながら、口元だけで笑う。

そうだ。この人はいつもそうだった。自分のほしいもの、したいことのためなら他人を傷付けることなんていとわない。そうやって生きてきた人だ。

「まさか、西本に何か」

「やっぱりあの子だったのね。本当に悪い子・・・」

「違う。西本はただ・・・」

「ただ、何？ただ右京君のことが好きだっただけ？言ったでしょう、右京君。あなたは優しいから何でも受け入れちゃうんだって。あの子の感情は右京君には拒めなくらい重いもの。でもね、それって本物かしら。あの子は右京君のためにどこまでできるかしら」

「なんで・・・」

「だって私、お母さんになるんだもの。息子にはちゃんとした子とつき合ってほしいじゃない？母親の私より強く愛してくれる子じゃなきゃ、大事な右京君はあげられないわ」

「・・・やめろよ」

そのまま唇を寄せようとする奈々子を、右京は拒んだ。肩をつかむと押し放す。

「やめろよ、もう」

「あら、怒ったの？」

「奈々子さんがどういう存在だろうと、西本を傷付けることは許さない。あいつが俺をどう思ってるかじゃなくて、俺があいつをどう思ってるかが大事なんだ。俺はあいつを守るよ。たとえ奈々子さんが相手でも」

「腹立たしいほど素敵よ、右京君。さすが祐一さんの息子ね。でも、守れるかしら・・・」

奈々子はわざとらしく考えるふりをした後、うつすらと笑みを浮かべて右京を見た。

「もう手遅れだったりして」

「なっ・・・」

右京は立ち上がると、上着を手に部屋から飛び出していった。

・華世界の掟（12）

久実我真っ直ぐに湯川を見据えて立っていた。湯川が提示してきた仕事は確かに悪くないものだった。だが、それには条件がついていた。

やっぱり。久実は思っていたとおりの展開にうんざりした。

「すみません。私そういうのはもうやめたんです」

「なかなかいい話だよ？」

「それはわかりますが、もうこの業界に未練もないですし」

「そうか。残念だな」

湯川はあっさり引き下がった。その余裕のある態度が妙に引っ掛かる。

久実は気になりながらも、この話は終わりだと思い、部屋を出ようとした。

「そういえばさ、ユーイチさんの息子さんで確か、右京君とかいう子だったよね」

「えっ？」

「彼、カメラマン目指してるんだっけ」

「なんで・・・それを？」

「がんばればなれるかもね。ユーイチさんの息子だけあって、感性は光るものがあるし。けど、もしユーイチさんを裏切るようなこととしてたら、この世界から追放されちゃうかもしれないよね」

「どういう・・・意味ですか？」

湯川は穏やかに笑っている。

「君も知ってるのかなあ。右京君と片倉奈々子の関係」

久実は目を見開いて湯川を見た。なぜこの男が知っているのか。いったいどこから洩れたのか。

「真実は違ったとしても、世の中の人は右京君がユーイチさんの婚約者を汚したって思うだろうね。立場的に考えてもユーイチさん

の方が上だし、メディアは情報を操作するものだからね」

「……」

湯川は久実の様子をじっくりとうかがってから、おもむろに立ち上がると近付いていった。久実は逃げる事ができなかった。湯川は久実の肩に顔を乗せるようにして耳元にささやく。

「黙っててあげようか？ 君次第では、大好きな右京君を守ってあげてもいいよ」

言いながら手を伸ばし、ドアの鍵を閉める。その音を聞きながら、久実は自分の心も閉じていくのを感じた。

「右京君は悪くない……。あの人が右京君を……」

「そうだね、奈々子ちゃんは悪い女だ。でも、善悪なんて関係ないんだよ。この世界では力を持った者こそが最も強いのだ」

湯川の手が久実の体を触りはじめる。慣れた手つきに体がぞわりとした。

「いい子だね。それでも約束は守る方だから安心してくれていいよ」

首元から胸まで口付けされて涙がにじんだ。ほんの少し前に大好きな人に預けた体が、違う男の手で汚されていく。乱暴にされないだけマシだったかもしれないが、久実の心は暗い闇の中に引きずり込まれていった。

（あの女さえないなければ……。あの女が私と右京君を……）

久実が湯川にたつぷりと愛撫され、涙に濡れながら朦朧とする意識の中で奈々子を呪った。そして同時に、無力な自分自身のことも呪った。

ことを終えると湯川は衣服を整えて出ていった。もし他から右京の情報が出たとしても、自分の力でもみ消してやると約束までしてくれた。その優しさともいえる湯川の言葉が余計に久実を追い込んだ。

少しずつ、黒い影が久実を包みはじめていた。

「あれえ？」

もう三度目だ。その廊下の角を曲がれば目的の部屋があるはず、
と思って進むと違う場所に出る。由起葉は完全に迷っていた。

火臣にお使いを頼まれ、一緒に行くという多加弥を置いて一人で
来たのが間違いだった。ここは複雑な迷路ではない。ただのビルだ。
その考えが甘かった。同じような部屋が延々と並んでいるせいで、
余計に位置がわからなくなる。

（困ったなあ。恥ずかしいけど助けてもらうか・・・）

由起葉はしぶしぶ携帯を取り出した。お使いに出た先で迎えに
来てもうなんて非常に恥ずかしい。手伝っているはずが、むしろ邪
魔になってしまっている。

ため息をつきながら、携帯の短縮ボタンを押したときだった。ど
くんっと心臓が鳴り、右目が熱くなるのを感じた。由起葉は手で顔
を覆うと一度目を閉じ、そしてゆっくりと開いた。由起葉の瞳に五
芒星が表れる。

（な・・・に・・・これ）

見開いた目に映ったのは、廊下の床から天井まで壁をつたうよう
に張り巡らされた無数の太い線だった。不規則に曲がりながら建物
の中を侵食している。よく見るといくつもの束とけがあった。どうやら
植物の形状をしているようだ。

（バラ・・・。蔓つるバラ？）

真っ黒なバラの蔓は呪いの形だ。誰かの呪いがここで形成された
ということか。対象者は誰なのか。もう手遅れなのか。

由起葉はバラの根元を探して廊下を進んでいった。

辿り着いたのは、会議室と書かれた部屋だった。おそろおそろド
アノブに手を掛ける。鍵は開いていた。そっと開けて中をのぞくと、

人が倒れていた。

「だっ、大丈夫ですか？」

駆け寄ってびっくりする。なんと、倒れていたのは久実だった。

「西本さん。どうしたの？しっかりして」

倒れた久実を抱き起こそうとして体を寄せたときだった。急に久実の下からバラの蔓が何本も伸び、ヘビのようにうねりながら体にまとわりつきはじめた。久実の体だけでなく、由起葉までもが蔓に絡めとられていく。

「な、なんなの？これっ」

由起葉はその様を見ることができない。引き剥がそうともがくが、触れることができない。

「西本さんっ、起きて」

二人の体は蔓バラに包まれて真っ黒な塊かたまりと化していく。

（誰か……。タカヤっ。助けて、タカヤっ……。）

ついには視界の全てが真っ暗になり、由起葉は久実と共に深い闇の世界へ引きずり込まれていった。

・華世界の掟（13）

多加弥はさすがに気になりはじめていた。あまりにも由起葉の歸りが遅い。もうすぐ天の仕事も終わりそうだ。

「どうしたんだろう」

「まさか、迷っちゃったかな？」

「ちょっと上の階に行っただけですよ？」

「慣れない場所はどこで迷うかわからないからね。それに、ユツキーみたいな真っ直ぐなタイプの子は、一度迷うとなかなか抜け出せない」

「黒川さん、ちょっと楽しそうなのは俺の気のせいですか？」

「楽しそうだなって。オレだって心配してるよ？ カシ君、電話してみたなら？」

釈然としない気持ちのまま、多加弥は携帯を取り出した。その目の前に、突然ナギが現れる。

「うわっ」

思わず声を出して、急いで口を押さえる。周りの人間にはナギの姿は見えない。

「ナギ、どうしたんだよ」

小声で問い掛ける多加弥に向かって、ナギは激しく吠える。何かを訴えているようだ。火臣もその尋常ではない様子に危機感を覚える。

「ユツキーに何かあったのかも・・・」

「ナギ、ユキハのところへ案内してくれ」

ナギは答えるように首を振ると、多加弥たちに背を向ける。ちょうど天の仕事も終わったようだ。火臣は走って天に近付くと、そのまま肩に担ぎ上げた。

「おいっ、何するんだ」

「すいません、皆さん。お疲れ様でした。天は急ぎの用があるの

でこれで失礼します」

「火臣っ」

火臣は天を担いだまま頭を下げると、そのまま多加弥の後を追って走っていった。残されたスタッフたちは茫然とするしかない。

「どういことだ、火臣」

「説明は後。降ろすのも後。それから怒るのも後にして」

「・・・」

ぶすつとして黙る天に若干の恐怖を感じながらも、火臣は多加弥と共に廊下を駆け抜けていく。階段で上の階まで上がり、さらにナギの後を追う。上の階には不思議と人の姿がなく、代わりに黒い霞かすみのような影が廊下全体にたちこめていた。

「これって、呪い？」

「呪いではあるけれど、だいぶ薄まってる。散った後みたいだ」
ナギがある部屋の前で止まった。多加弥は躊躇うことなくドアを開けて中に入っていく。火臣も続いた。

「なっ・・・なんだよ、これっ」

二人の前にあったのは、真っ黒な塊だった。妙な形をした岩のような塊から、手や足がわずかに飛び出している。その塊に向かってナギは必死に吠えていた。

「まさか、この中にユキハが・・・？」

「巻き込まれたか」

火臣に降ろされた天が、黒い塊に寄っていつてまじまじと見る。

「巻き込まれたって、呪いに？」

「あいつのことだ。どうせ助けようとしてもしたんだろう。まったく厄介だな、自殺に巻き込まれるなんて」

「自殺？」

「一般的な意味の自殺じゃないよ。オレたちの間では、呪いを自分にかけることを自殺って呼ぶんだ。たまにあるんだよ。殺してやりたいくらい強い恨みを持っているにも関わらず、対象者を見失ってしまうことが。行き場を失った呪いは自分に降り掛かる」

「恨みの大きさと同じくらいの強さで自分を責めてしまうとなりやすい」

「どうやって助けたら・・・」

「助けるのは無理だ」

天にきっぱりと言い切られ、多加弥は救いを求める目で火臣を見た。しかし火臣も首を振る。

「オレたちにできることはないよ。もちろん、ずっとこのままなわけじゃない。時間が経てば呪いの影は消えるけど、自殺した人間は何事もなく戻ってくることはまずない。心のどこかを病んでしまいか、悪いときには目を覚まさないままってこともある」

「たとえ契約者であっても、外から手を出すことはできない。自力で現実に戻ってくるしかないんだ」

「じゃあユキハは？巻き込まれた人間はどうなるんだ」

「普通は無事じゃ済まない、かな」

いきなり別のところから声がして、三人は一斉にそちらを見た。聞き覚えのある声。視線の先にはテーブルに腰掛けた不生在いた。

「フキっ」

「やあ」

不生は呑気に手を振ってくる。

「なんでお前が・・・」

「なんでって、彼女がピンチだからさ」

「オレたちが危ないときに出てきたことあったかよ。ユッキーだけ特別か？」

「ああ、特別だ。君たちは強いが彼女は弱い。それにワタシは彼女を失うわけにはいかないからな」

「なんだよそれ。オレたちはどうでもいいってことかよ」

「なんだ？ワタシに必要とでもされたいのか？」

「バカ言うな」

「やめろ、火臣。今は助けるのが先だ」

火臣と不生はどうにも合わないらしい。今にも飛び掛かりそうな

勢いの火臣を天が止める。確かに言い合いをしている場合ではない。

「フキ、助けられるのか？」

「さあ、どうかな」

「どうかなって・・・」

「助かるかどうかは君次第だよ。タカヤ君」

不生は笑いかける。多加弥は意図がよめずに困惑した。

「俺次第・・・。いったいどうすれば」

「忘れちゃったかい？君と彼女は繋が^{つな}ってるってこと」

多加弥ははっとして、思わず自分の胸に手を当てた。

「繋が^{つな}ってる？どういう意味だ？」

「俺とユキハは魂が繋が^{つな}ってるんです。死にかけてた俺を、ユキハは自分の魂を半分分けることで助けてくれた。だから俺の中にはユキハの魂があるんです」

「二人で一つ、か・・・」

「ちよっと待てよ。それじゃあ・・・」

何かに気付いた火臣は再び不生に詰め寄ろうとするが、すぐに制されてしまう。

「ソラ君の場合とは条件が違うんだ。あのときは不可能だった」

「・・・」

「火臣、落ち着け。お前に冷静になってもらわないと、僕だけでは対処できない状況だ」

「・・・すまん・・・天」

火臣が静かになったのを確認して、不生は多加弥の傍に寄った。

「手を握^{うな}って目を閉じるんだ」

不生に促^{うなが}されて多加弥は黒い塊から出ている手をしっかりと握った。冷たく、反応のない手。ゆっくり目を閉じると、心臓の辺りが熱くなるのを感じた。

「今から君をあちらに送る。魂の断片を感じて探すんだ。彼女を見つけたら迷わず引き上げろ。もたもたしていると君も巻き込まれる危険性があるから、なるべく急ぐんだ」

「わかった。ユキハは必ず連れ戻す」

多加弥は握った手に力を込めた。

不生が二人の手に自分の手を重ね、小さく唱える。多加弥の意識は一気に暗闇へ落ちていった。

・華世界の掟（14）

真っ暗だった。頭がズキズキする。

由起葉は起き上がってみて、足元が水に浸かっていることを知った。水かさは足首の辺りまでである。

何もない。風もなければ音もない。静寂だった。その中に、突然ぼんやりと明かりが灯り、光の中に久実の姿が浮かんだ。

「西本さん」

由起葉は歩きにくい中を必死で近付く。久実は頭を抱えてしゃがみこんでいた。

「西本さん。大丈夫？」

「・・・岬・・・ちゃん？」

「いったい何があったの？」

ここが現実でないことは由起葉にもわかっていた。どうやってここに来たのかはわからないが、こんなおかしい世界に引きずり込まれたのには、きっと何かのきっかけがあったに違いない。久実の心を追い詰める何かが呪いを生んだ結果だと、由起葉は考えていた。

「私・・・私・・・」

「落ち着いて。傍にいるから」

由起葉は久実の体を支える。そこから立ち上がらせようとしたときだった。前方にぼんやりと人の姿が浮かんだ。しだいにはつきりと見えるようになり、それが久実だとわかる。

もう一人の久実は衣服がはだけ、頬は紅潮していた。その背後にふっと湯川が現れる。湯川の手が体を這うたびに、久実は反応して声を洩らした。

「ちょ・・・ちょっと、どういうこと？」

「いや・・・見ないで。違うのっ、あれは私じゃないっ」
久実は耳を塞いで目を固く瞑った。

「西本さん・・・まさかあの人に・・・」

信じられない光景を目の当たりにし、由起葉は見知らぬ男である湯川に怒りさえ感じた。すると、少しずつ湯川の姿が変わりはじめる。やがて歪んだ線が戻ると、そこには湯川ではなく奈々子がいた。奈々子は久実の口を塞ぐと首筋に舌を這わせる。

「片倉・・・奈々子・・・」

「あの女が私を・・・。自分の秘密を売ってまで、私を・・・」
「いったいどういうことなの？なんで片倉奈々子が？」

「全部あの女の計画だったんだ。仕組まれてたことなのに、私は・・・」

奈々子にはやりと笑うと、久実の首に齒を立てる。一筋の血が流れ落ち、それと共に久実の姿は右京に変わった。

「嫌なら逃げればよかったじゃない。私と右京君のことなんて知ったことじゃないって顔して、さっさと去ればよかったじゃない」
「それができないってわかってて仕組んだことでしょうがっ」

「あら、言いがかりはよくないわよ、子猫ちゃん。あなたに力があれば、こんなことしなくても守れたんだから」

由起葉は曖昧あいまいながら事態が少しずつ呑み込めてきた。

「私の右京君を奪おうっていうんだから、それなりの覚悟があるんでしょ？」

「あんたにはユーイチがいるでしょうが。どうしてやっと自分の道を歩きだそうって決めた右京君を自由にしてくれないの」

「右京君はね、私のことをすごく愛してくれたの。だから私も右京君を大事に思っ**て**あげるの。大事な右京君。本当に愛してくれる人にしかあげたくないわ」

奈々子は後ろから右京を抱きしめ、頬に口付ける。久実は涙を流しながら、そんな奈々子をにらみつけていた。

「右京君はあんたのものじゃない」

「あら。でも、あなたのでもないわよ」

「そんなのわかってる。右京君は物じゃないもの。私はあんたとは違う。右京君を本当に大事にするんだから」

言い切る久実の言葉を聞いて、奈々子は驚いた顔をする。しかし、次の瞬間バカにしたようにくすつと笑った。

「何の力もないくせに」

「……」

「あなたにできることなんて、好きでもない男に体預けて、言うこと聞いてもらうくらいでしょう？汚い体。そんなので右京君を守ってるつもり？」

「あんたに言われたくないっ」

「でも事実じゃない。これからどうやって右京君を大事にするっていうの。それとも、右京君に守ってもらおうとか考えてるわけ？」

「違うっ」

「ただ好きなだけじゃ右京君を苦しめるだけ。ただ想うだけなら誰だってできるのよ。さあ、あなたはどやって右京君を幸せにするのかしら？」

「私は……」

急に水かさが増しはじめた。静かに、音もなくせりあがってくる。

「私は……無力だ……」

「違うよ、西本さん。誰かを大切に思うのって、本当はすごく難しいんだよ。思われてる人はそれだけで救われるときもあるの。西本さんの思いが本物なら、それだけで右京君を幸せにできるんだよ」

「そんなの、綺麗事だよ。私には何もない……。もうやめるって約束したばかりなのに、あつという間に汚れちゃったよ……」
水は腰の辺りまでできていた。今さら動くこともできない。

「西本さん、自分を信じて。右京君はあなたとだからやり直そうとしたんじゃないの？」

奈々子と右京の姿は消え、視界には黒い水が一面に広がっていた。

俺の傍にるのが西本でよかった……。

あの日右京の言った言葉が久実の心に響く。傍にいただけでいいならいくらだって傍にいる。

（あのときの右京君は、幸せそうだった・・・）

ついに二人は水の中に沈んだ。由起葉は久実を抱えながら、なんとか水面に上がろうと手を伸ばす。

（タカヤっ。タカヤ、助けてっ）

強く願ったときだった。由起葉の伸ばした手を、誰かがつかんだ。

「ユキハっ」

水の中から姿は確認できなかったが、確かに多加弥の声が聞こえた。

由起葉はつながれた手をしっかりと握り返す。多加弥はその手を思い切り引いて、由起葉を水中から引き上げた。

・華世界の掟（15）

急に息ができるようになって咳き込む。頭が痛くて目をしつかりと開くことができない。それでもここが現実だとわかる。由起葉はほっとしていた。

「ユキハ、大丈夫？」

多加弥は傍に寄って背中をさすってくれた。手はつながれたままだ。

「タカヤが助けてくれたんだ・・・」

「フキが力を貸してくれたんだよ。俺はユキハを見つけただけ」

「・・・見つけてくれてありがとう。タカヤの手じゃなかったら、私は握ってなかったかもしれないもん」

由起葉は横の久実を見た。気絶しているようだ。黒い蔓バラは姿形もなかったが、このまま何事もなく久実が目覚めるとは限らない。

「西本さん・・・」

「ごめん、ユキハ。俺、ユキハに言っていないことがあったんだ。

右京と片倉奈々子のこと・・・。ユキハが絵馬に見た呪いの跡。あれ間違ってたかった」

「西本さん、片倉奈々子を恨んでたんだ・・・」

「知ってたの？」

「ううん。見たの。確信はなかったけど、たぶんそうかなとは思った」

「右京は自分が利用されてるのを知ってて片倉奈々子の傍にいたんだ。西本さんはその事実を知ってなんとか二人を引き離そうとした。結果右京は西本さんを選んで、二人はこれから幸せになるって、俺は安心してた・・・」

甘かった。一度染まった罪から、そう簡単に抜け出させてくれるはずがないことくらい、わかっていたはずなのに。

「西本さんは片倉奈々子への恨みと、自分自身へのふがいなさで

自殺に追い込まれたんだ」

「自殺？」

「呪いを自分にかけてしまうことを自殺って呼ぶんだって」

由起葉は倒れたままの久実を不安気に見つめた。ただ好きな人を守ろうとしただけなのに、なぜ理不尽な罰を受けなければならぬのか。片倉奈々子を恨みきれなかった久実は、いったい何を思っていたのだろう。奈々子に何を感じて久実は迷ったのだろう。

「さて、君はタカヤ君に連れ戻されて無事ここにいるわけだが、そちらの彼女はまだ自分の念の中だ」

「フキ。どうやったら西本さんを助けられるの？」

「どうやったらか……。残念ながらどうにもできない。まあ、強制的に連れ戻すこともできなくはないが、ワタシにはそうする理由がない」

「なんでよ。私のことは助けてくれたのに」

「それは君だからだよ。ワタシは君の呼び掛けには応えるし、君ならば助ける」

「なっ……。なにそれ」

「それに、君を助けたのがタカヤ君なら、彼女にはふさわしい王子様がいるだろう。彼女が無事だろうが無事でなかろうが、この先支えていくのはワタシではない」

不生は久実の手首に指を当てると、すっと引いた。ほんの浅い傷ができ、手首から血がにじむ。

「ちよっと、何してるのっ」

「彼女は自殺しようとしたんだ。文字どおりの自殺に見せるための細工だよ」

不生はやれやれといった様子で立ち上がると、ドアの方に目を向けた。

「ただ倒れてるだけじゃ不自然だろう。さあ、王子様のご到着だ。あとは君たちでなんとかしてくれ」

不生は姿を消した。それを見届けるとほぼ同時で、ドアが勢いよ

く開いた。立っていたのは右京だった。捜し回ったのだろうか。額に汗が浮かんでいる。

「西本っ」

久実を見つけた右京は、急いで駆け寄ると抱き上げた。

「柏井、岬ちゃん……。西本に何が？」

「……。自殺、しようとしたみたい……」

「なんでだよ。なんでこんなことに……」

右京は久実を強く抱きしめた。気を失っていたはずの久実の目が、ゆっくりと開いていく。

「……。右京……。君？」

「西本っ？」

「ごめんね……。約束、したのに……」

「なんで謝るんだよ」

「せっかく、右京君が私を、選んでくれたのに……。右京君が、あんなに大事にしてくれたのに……。私……。私汚れちゃったよ……」

久実の目からぼろぼろと涙がこぼれた。

「ごめんね……。ごめんね、右京君」

「もういいから。西本は何も悪くないよ。俺のせいで辛い目にあわせてごめん。俺が受けるはずの罰なのに、全部西本が受けてくれたんだよ。西本が俺を救ってくれたんだな」

「私が……。右京君を……。？」

「そうだよ。お前が俺を助けてくれたんだ。だから今度からは俺がお前を助けてやる。必ず守ってやる」

「私、何もしてあげられないんだよ？ 足引っ張るだけなんだよ？ それなのに、まだ好きって言うてくれるの？」

「……。何言ってるの、お前」

「……」

「当たり前だろ」

「うっ……。ぐすつ……。右京くん……」

久実はしっかりと右京に抱きつくど、その胸で有りつただけの涙を流した。

これから二人が歩む道は平坦ではないかもしれない。それでも二人が共に進むのなら、いつしか鎖は断ち切られ、自由を手に入れる日も来るかもしれない。

愛し方は人それぞれ。久実と思う。奈々子は間違いなく右京を愛していた。ただ利用したわけじゃない。奈々子にはそれ以上にほしいものがあっただけだ。

片倉奈々子が永遠のライバルになる。負けられない。一度手に入れたものを手放さないために、久実は自分の気持ちを確かめた。

「若いっていいよなあ・・・」

右京たちと別れてから、火臣はずっとこの調子だ。

「気持ちに正直で、思いに熱くてさ。結果的に全てを許してしまふところが、またなんとも・・・」

「面倒臭いぞ、火臣」

「冷たいなあ、天は。おじさんの若者に対する憧れを、なぜ理解してくれないんだ」

「理解できるかつ。僕はまだ十一だ。それに火臣だっておじさんなんていう年じゃないだろうが」

「ははは・・・まあね」

（そういえば、黒川さんていくつなんだろう・・・）

二人のやりとりを一步下がって聞きながら、由起葉と多加弥は同じことを考えていた。

「そういえばさ」

突然火臣が振り返ったので、二人はどきっとした。

「ユツキーの犬、なんかちょっと小さくなってない？」

「えっ？」

言われてみれば。いつも傍にいるせいで目が慣れてしまっていた。
「でもナギはもともと呪いなんだし、大きさくらいいつでも変えられるんじゃない？」

「そうなのかなあ・・・」

火臣は考えている様子だったが、すぐにやめたようだ。

「まあ、ユツキーが気にしてないなら、それでいいんだ」

「・・・」

由起葉はナギを見つめる。ナギも由起葉を見つめ返す。なぜなのか、由起葉の心に少しの不安が芽生えた。

3 柳楽神社の犬（1）

由起葉は多加弥を迎えに来ていた。今日は多加弥の受験の日だ。

「ユキハッ」

「あ、タカヤ。お疲れ様。どんな感じ？」

「俺的にはがんばった」

「そっか」

多加弥ががんばったと言っているのだ。由起葉はそれを信じる。いつだってそうだ。多加弥はいつも結果を出す。

「次は私だね。きっちり受かってみせるからね」

「待ってよ。俺まだ結果出てないから」

「タカヤなら大丈夫。タカヤががんばったときはいつも失敗しないもん」

「・・・だといんだけど」

由起葉につられて多加弥も思わず微笑んだ。

「寒いねえ。きつともうすぐ雪が降るよ」

駅前通りは人で賑わっていた。皆立ち止まることなく行き来しているのは寒さのせいかもしれない。由起葉も赤くなった鼻を両手で覆って暖めた。

「お嬢さん」

突然女の人の声が聞こえた。辺りを見るが、それらしき人物が見当たらない。

「どうしたの？」

「うん・・・。今女の人の声がしたんだけど・・・」

多加弥もぐりと周りを見る。女性はいるが、どの人も由起葉に話しかけている様子ではない。

「お嬢さん、素敵なペットを連れてるわね」

「あ、また・・・」

「何て？」

「素敵なペットを連れてるって……ペットっ？」

（ナギが見えてる）

由起葉は目を凝らした。右目に意識を集中する。そのままぐるりと見回すと、ずっと離れたところにいる占い師に目が留まった。水晶玉を前にしてこちらを見ている。紫色のローブのせいで口元しか見えないが、少し笑っているようだ。

（まさか、あんなに離れたところから声が聞こえるわけない）

由起葉はまじまじと占い師を見つめる。その口元がゆっくりと動いた。

「でも、かわいそう」

「タカヤ、あの人だよ。あの人が私に話しかけてる」

「えっ？」

由起葉の指差す先に占い師を見た多加弥は、事態が呑み込めずに呆然としていた。

「どこから連れてきたのか知らないけど、あなたのワンちゃんだ
いぶ弱ってるわよ。このままじゃ消えちゃうかもしれない」

（ナギが、消える？）

「一度、生まれた場所に帰ってみるべきじゃないかしら」

「あなたいったい誰なの？」

由起葉は占い師の元へ行こうとした。すると、突然巨大な白い猫に視界を阻まれた。そして瞬きの間に猫と占い師は忽然と姿を消す。何事もなかったように行き交う人々だけが視界に映っていた。

「タカヤにも見えた？」

「うん。ナギと同じくらい大きな猫だった」

由起葉は少し離れて行儀良く座っているナギを見た。

「やっぱりちよつと小さくなったかも……」

疑問ばかりを残して占い師は姿を消した。このまま放っておくのはよくない気がする。多加弥を見ると、同じ気持ちのようだった。

・柳楽神社の犬（2）

次の週末、由起葉は再びあの駅前通りに来ていた。多加弥は用があつて後で合流するので、先に由起葉はあの占い師を捜していた。

（いつもいるわけじゃないのかなあ）

そもそも、あのときだって一瞬で姿を消してしまったのだ。実際に路上で占いをしているのかも怪しいものだ。

由起葉は範囲を広げて搜索してみたが、それらしき人物は見つからなかった。

約束の時間になり多加弥と合流した由起葉は、大した成果はあげられなかったことを報告した。

「見つからないなあ」

「うん……。ナギにも捜してもらったんだけど、ダメだった」

「その人はさ、ナギが見えるんだし契約者の可能性があるよね。だとしたら、知らないかな」

多加弥はどこかに電話をかけはじめた。由起葉はそれを黙って見ている。

「あ、すいません突然。ちょっと聞きたいことがあつて」

多加弥は口パクで、電話の相手が火臣ひおみであることを伝えた。

「今ですか？ 今駅前にいます。えっ？ そうなんですか？」

興味津々で覗き込む由起葉に、多加弥は笑いかけて電話を切った。
「なにになに？ どうしたの？」

「今から黒川くろかわさん来るって。俺も今知ったんだけど、天君そらの家ってこの辺にあるんだって」

「そうなの？」

「やっぱおっきな家なんだろうなあ」

到着した火臣に、どうせなら浦沢邸うらざわで話をしようと連れていかれた先は、おっきな家の想像をはるかに超えるお屋敷だった。

「なにここ……。家？ ホテルか何かじゃないの？」

「天の父親は資産家で、天が稼がなくても元々お金持ちなんだよ」
「・・・次元が違う・・・」

多加弥の家は音楽一家ということもあってか、それなりに立派だ。だが、天の家はもはや家ではない。比べものにならないほどの広大な敷地に、白塗りのおしゃれな豪邸が翼を広げるようにして建っている。巨大な門と屋敷の間には噴水があり、その周りには鮮やかな花々が咲いている。少し視線を移すと、手入れの行き届いた緑が屋敷をぐるりと包み、まるで森の中のお城のようだった。

二人は見とれる一方で、なんだか心がもやもやしてきた。

「どうかした？二人共眉間に皺しわがよってるけど」

「いえ・・・別に」

（このお屋敷に黒川さんが似合っていないなんて・・・言えない）
車は屋敷の前へは行かず、横の入り口から地下へ降りていった。

地下の駐車場には高そうな車が、こんなに必要なのかというくらい並んでいる。

「本当は正面玄関でお迎えが普通なんだけど、オレここでは自由によっちゃってるからごめんね」

「いえ、むしろ気が楽でいいです」

見たまんまだな、と二人は思った。

「それに、天には内緒で連れてきちゃったから、あんまりバレたくないんだよね」

呑気に笑いながら三階でエレベーターを降りようとした火臣の前に、小さな体が立ちふさがった。

「何がバレたくないって？」

「うわっ。天っ」

慌ててエレベーターの奥に後退りする火臣を、天は素早く捕らえた。

「また勝手なことをして。ここは僕の家だぞ」

「ごめん、天。ちょっと話したらすぐ帰ってもらうつもりだったんだ」

「なんでこの二人と関わろうとする。僕はあまり好ましく思っていない」

「まあまあ。同じ契約者として困ったときは助け合おうよ」

「僕はこいつらに助けてもらうことなんて、何もない」

自分で怒らせておいてなだめようとする火臣は、あっけなく制されてしまった。居心地の悪い気分で立ち尽くす由起葉と多加弥に、天の視線が注がれる。二人は思わず息を止めた。

「話があるから来たんだろ。早く降りろ」

それだけ言うと、天はさっさと背を向けて歩いていってしまった。

「さすが天。そういうところ好きだぜ」

（この二人のやりとりって、疲れる・・・）

脱力したまま二人はエレベーターを降りると、火臣の後を追って長い廊下を歩いていった。

着いた部屋は飾り気のないそこそこ広い部屋だった。家具の一つ一つがレトロ調のおしゃれなもので、あえていろいろしなくても充分くらいおしゃれだ。ただ、ホテルの一室のような部屋には大きなテーブルやイスはなく、来客には適していないようだった。

「連れてきておいてなんだけど、オレの部屋でいいかな？」

「ここ、黒川さんの部屋なんですか」

「何もないですね」

「必要ないからね。ちなみに隣は天の部屋だよ」

「余計なことは言わなくていい」

またもや絶妙のタイミングで天が現れた。一度ドアを閉めると、火臣をにらむ。反省していない様子ながらも謝る火臣を見届けてから、天は再びドアを開けた。

一台のワゴンが部屋に入ってきた。紅茶のいい香りがしている。ワゴンの上には由起葉の目が輝くようなお菓子もたくさん乗っていた。

「天様、こちらでよろしいでしょうか」

「・・・ありがとう。後は火臣にやってもらおうから・・・」

天はメイドにやんわりと笑いかけた。目が点になる由起葉と多加弥とは対称的に、メイドは頬を赤らめて静かに部屋を出ていった。ドアが閉まるのを確認して、天が振り返る。

「何か文句あるか？」

「いえ・・・」

「二人共、これくらいで驚いてちゃまだまだだぜ。天の必殺技はもつと・・・」

「火臣。くだらない話はいからお茶の用意を早くしろ」

必殺技の一言がものすごく気になったが、天の機嫌が悪くなるといけないので、二人は黙ってスルーした。

「これ、天君が頼んでくれたの？」

「火臣の部屋には何もないからな。僕に話せば応接室だって使えるのに、そういうところがずぼらでいけない」

「きっちりしてるなあ、天君は」

「あれ？もしかしてオレ、遠回しに怒られてる？」

無駄口をたたきながらも火臣の手さばきは完璧だった。紅茶をいれる仕草やケーキを取り分けるあざやかさなど、目を見張るものがある。いいかげんでルーズな印象の火臣からは想像もできない優雅さだった。

「ユツキーたち、ここに来てから驚いてばかりだね。オレだってこれくらいはできるよ。天の側近として、できて当然のことは徹底的に仕込まれてるからね」

「黒川さんて、ただ傍にいただけじゃなかったんですね」

「オレは傍にいたいから特別になる努力をしたんだよ」

火臣はしまわれていた簡易のテーブルとイスを出してくると、そこにティーセットを並べてお茶会の用意を整えた。

「さて、それじゃあお茶でも飲みながら話を聞きましょうか」

由起葉と多加弥は駅前で会った不思議な人物について火臣に話した。天も紅茶を飲みながら聞いている。

「今日捜しにいつてみたんですが、結局会えなくて」

「もしあの人も契約者なら、何か知ってるかなと思って黒川さんに電話したんです」

「ああ……。それなら知ってる」

火臣と天は顔を見合わせて微妙な顔をする。

「アベだ」

「阿部^{あべ}？」

「その呼び方はお前だけだろ。勘違いさせるな」

「え？阿部さんじゃないの？」

「違う。結城^{ゆうき}だ。結城^{まりあ}万利亜だ」

「ユウキ、マリア……。なんでアベ？」

「だってさ、マリアっていったらアベだろ」

「もしかして、アヴェ・マリア……」

（この人のネーミングセンスって……）

天の相手をする火臣をすごいと思っていたが、火臣の相手をする天もなかなかである。

「で、万利亜がなんだって？」

「あ、うん。ナギが弱ってるって」

由起葉はナギを呼んだ。すぐに窓を擦り抜けてナギが現れる。そのまま由起葉の傍に来ると、行儀良く座った。

「言われてみればって感じなんですけど、やっぱりちょっと縮んだ気がして。いつもおとなしいから元気があるかないかはよくわからないんですけど」

そもそも呪いに元気なんてあるわけがないのだが。

「万利亜がそう言うなら、そうなんだろう」

「どうしてあの人にはわかるの？」

「アベは呪いの耳を持ってる。力を使えば呪いの声が聞けるのさ」
「その犬も元は呪いだ。だから何かわかったんだろう」

「マリアさんはナギとしゃべれるってこと？」

「そういうことじゃない。聞こえるのは呪いに託された声だ。つまり、その犬を生み出した人物の恨みの声を聞いたってことさ」

由起葉はぼんやりと、あの日神社から降りてきた女性の姿を思い出した。

「でも、それだけでいろいろわかつちゃうなんて、すごいですね」

「あいつの場合はいろんな技を持ってるからな。ただ聞くだけじゃなくて、相手に呼びかけたり、位置を探ったり、戦闘能力にしたって人並み外れたもんがある。本職の占いだって結構ちゃんとしてるみたいだぜ」

「ほう……。ずいぶん万利亜を褒めるじゃないか、火臣」

「ちっ、違う。褒めてるわけじゃないっ」

にやりとする天に向かって、火臣は言い返す。由起葉たちはまだ関係性がわからないので何とも言えなかったが、何かあるんだろうなとは思った。

「マリアさん、生まれた場所に帰れて言ってた。柳楽神社に行けば何かわかるかも・・・」

「行く前にアベのところに行ってみるかい？あいつの店なら知ってるぜ」

「今日は日曜だろ。店にはいない」

「あっ、そうか」

「いいです。タカヤと一緒に神社へ行きます。私、ナギを生み出した人も見たことがありますし」

「うん。急いだ方がいいのかもしれないしね」

由起葉と多加弥は明日さっそく行ってみることに決めた。

「いろいろ教えていただいて、ありがとうございました」

「いやいや。それにしても不思議なもんだな。いつの間にか契約者が揃ってるんだから」

「あいつが動かしているのかも・・・僕らの運命を」

「偶然じゃなくて、必然・・・」

（私たちはフキの何なの？）

傍らに座り込むナギをなでながら、由起葉はゆっくりと目を閉じた。

・柳楽神社の犬（3）

次の日、二人は学校が終わるとすぐに神社に向かった。長い石段を見上げる。

「なんだろう。すごく嫌な感じ・・・」

石段を囲む木々がザワザワと風に揺れている。ただ薄暗いせいではない。石段の先に何か重苦しい圧力を感じ、由起葉は身震いした。

「何か見える？」

「ここからじゃちよつと・・・」

「行ってみようか」

二人は石段を登りはじめた。少し行っただけで振り返る。一緒に来たいたナギは一步も動かずにじっとしていた。

「ナギ・・・」

前から柳楽神社を嫌がっていたのは知っていた。だが、今回はまるで壁でもあるかのように前に進むことができない様子である。

「なんだか大変なことになったみたいだね」

「この声・・・フキッ」

声に反応して、再び石段の上を見ると、数段上に不生の姿があった。

「どうやら呪いが完成したらしい。ナギが一代目だとすると、二代目の犬がより強大な力で誕生したわけだ」

「呪いが、完成した・・・？」

「あとは恨みの対象者へ向かうだけだ。そうなればナギも消える」

「そんな・・・」

「いいじゃないか、べつに消えても。また違うモノを君にあげるよ」

由起葉はナギを見つめる。まだ短い期間でしかないが、ずっと一緒にいた存在だ。由起葉のピンチを何度も救ってくれた。寝る前になでる毛の感触、いつも真っ直ぐに見つめてくる赤い瞳、主人に答

える鳴き声。そんなに簡単には忘れられない。

「私はナギと一緒にいたい。まだできることがあるなら教えて」
「・・・そう言うとは思ったよ」

不生はため息混じりに微笑すると、神社の方を指差した。

「この先にまだ犬がいる。呪い主も一緒だ。方法の一つ。二代目の犬を消し去ること。だが、そのためには呪い主の恨みの念を断ち切らなければならない」

「恨みの心を鎮^{しず}めるってこと？」

「そうだ。そうしないと妨害されたと認識した呪いは呪い主に降り掛かる。神の力の宿った呪いだ。呪い主は死に、犬も消えて全てが終わってしまう」

「でも、どうやって・・・」

「そのために、彼女を呼んである」

すつ、と不生の背後から女性が現れた。ウェーブのかかった金髪に、紫色のスーツ。切れ長の目にきつと結んだ唇。豊かな胸に締まったウエストの、ナイスバディなお姉さんだった。

「なんで私が・・・」

お姉さんはいきなり不満をもらす。

「マリア、君がけしかけたんだろう。責任をとって当然だよ」

「けしかけただなんて、人聞き悪いわね。私はただ教えてあげただけよ」

「その結果がこうなんだから、同じことだ」

「あの・・・マリアって、もしかして結城万利亜さん？」

「あら、私のこと知ってるの？」

「黒川さんと天君に聞きました」

「ああ・・・。あの二人ね」

万利亜は微妙な顔をする。万利亜の話をしたときの火臣と天の表情と一緒に。あまり仲が良くないのだろうか。

「マリア、あとは任せるからね」

「ちよつと、あんなヤバイ呪い、私たちだけで何とかしろってい

うの？」

「大丈夫。無理だと思ったらやめればいい。ナギが消えるだけで、何の問題もない」

「・・・相変わらず無責任ね」

「責任なんて、ワタシには元々ないよ」

不生は笑みを見せると姿を消してしまった。残された三人はしばらく考え込む。やがて万利亜が諦めたように口を開いた。

「やめる、気はないわよね」

「ナギを助きたいんです」

「ふう・・・。じゃお腹を括らないとね。相手は神様の力を借りた犬なんだから」

万利亜は両耳を押さえると目を閉じた。くっと力を込めると、頭に二つの耳が飛び出す。金色の毛をした猫の耳だった。

「びっくりした？私の五芒星はここに出るのよ」

万利亜は猫耳の後ろを見せた。

「今から呪い主の声を確認するから、それを元に恨みの念を断ち切るのよ」

万利亜が再び目を閉じて集中すると、猫耳の周りで小さくスパークが起こった。ピリピリと電気の輪ができる様は、まるでアンテナのようだ。

どうして・・・。どうしてなの・・・？

なぜ私は一人なの？あの人はなぜ私のところへ来てくれなかったの？

（何かしら。恋愛のこじれ？）

あの女がいなければ、彼は私のものになったのに。

あんな女、いなくなればいい。

彼がちゃんとしていれば、私は一人で苦しまずに済んだのに。

彼なんて、いなくなればいい。

（相手の女だけじゃなく、好きな人までも恨んでいるなんて・・・

）

どうして私は一人なの？

この子をどうやって守ってあげればいいの？

この子に罪はないのに、苦しい・・・苦しい・・・

生まれてこない方がいい命なんて、あるの？

「妊娠・・・してるわね」

「え？」

「呪い主は不倫相手かなにかの子供を妊娠してる。相手の女を恨み、彼をも恨み、産むことへの疑問に悩まされて苦しんでるわ。迷っている状態……。この恨みの念を子供への愛情に変えることができれば、道は開けるかもしれないわね」

「妊娠……。一人で産もうとしてるんだ・・・」

由起葉はしばらく考えてから万利亜を真っすぐに見つめて力強く言った。

「私、やってみます。ナギのためにも、その人のためにも、赤ちやんのためにも」

「ユキハ・・・」

「タカヤ。私なら伝えられることがあるかもしれないの。それに、ナギのいない私は見ることしかできない。呪いと戦^{すべ}う術がない」

返す言葉がなく、多加弥は黙ってうなずいた。

「それじゃあ私と、えっと・・・」

「多加弥です。柏井^{かしわい}多加弥」

「タカヤ君。二人で呪いを消しに行くわよ」

「はい」

三人はうなずき合い石段の上を見上げた。

そこに一人の女性が現れる。女性はふらつきながら手すりに寄り掛かるようにして一段一段ゆっくり降りてくる。女性のお腹はかなり大きくなっていた。

「あっ」

女性の膝が曲がったのを見て、由起葉は急いで駆け寄っていった。危ないところでしつかりと受け止める。女性は額に汗をかき、息があがっていた。

「大丈夫ですか？」

「・・・ありがとうございます・・・」

「もしかして、もう産まれそうなんじゃ」

由起葉は女性を正面から抱くようにして支えながら、石段の先へ目を向けた。真っ黒な雲がわきあがるようにして広がってゆく。その中に二つの赤い目が光った。

はっとして女性の顔を見る。間違いない。以前ナギを連れて神社から出てきた女性だ。

「マリアさんっ」

「ええ・・・。こっちは何とかするから、早く彼女を病院へ」

由起葉はうなずくと、女性を連れて下まで降りていった。その間に力を込めた万利亜の足元から光の線が伸び、神社の周りをぐるりと回って円を描く。

「結界を張ったわ。ここから勝負よ」

多加弥は由起葉の背中を見送って、石段の上で牙をむく柳楽神社の犬に視線を向けた。

・柳楽神社の犬（４）

万利亜と多加弥は石段を上まで登り、境内へと足を踏み入れた。他に人の姿はなく、薄暗い霧が全体に漂っている。

「これはまた、すごいのが相手ね」

目の前に巨大な犬が立ちふさがる。人の身長をゆうに越える柳楽神社の犬は、上から二人を見下ろして唸り声をあげている。

「タカヤ君の契約は？」

「俺は腕に」

「なるほど。でも素手の攻撃だけじゃ、この大きさには辛いわね。何かできることはある？」

「武術をやってます。棒なら扱えますが」

「よし。それでいこう。ハクッ」

呼ばれて出てきたのは白い猫だった。万利亜の肩に乗ったハクは、がばっと口を開けるとそこから先に十字架の付いた黒い棒を出した。

「猫から棒が・・・」

「この子は呪いのなの。あの子の連れてる犬と同じよ」

万利亜は棒を手にとると、端から手を当てていった。万利亜の耳にスパークが走り、それが手にも表れる。端まで手を当て終わると、多加弥に棒を投げてよこした。

「その棒なら呪いにも当たるわ。使って」

「ありがとうございます」

（マリアさんて、本当にいろんなことができるんだな・・・）
感心しているところへ、犬の前足が振り下ろされた。二人は素早く飛んでよける。

「あの子が恨みの念を断たせるまで何とか持ちこたえて。恨みが消えてから倒さないと、呪い主に降り掛かる危険があるから」

「わかりました」

「呪い主の声は私がよむから、合図するまで耐えてね」

多加弥はうなずくと、棒を構えて犬と対峙する。自分を守るのも大事だが、万利亜の方も気にしなければ。いろいろな技を持っているといっても、直接呪いに触れられないのは由起葉と同じはずだ。

（どうやって戦うんだろう。ハクを使うのか？でも、あんな小さな猫じゃ・・・）

犬の一振りが多加弥を襲う。はっとして棒で受け止めると、くると体を回して受け流した。力が強すぎて押し合いではとても勝てない。次の攻撃は飛んでよけた。

多加弥に夢中になっていると思いきや、犬は後ろにいる万利亜に向かって尻尾で攻撃しようとする。

「マリアさん、危ないっ」

この位置からでは間に合わない。振り下ろされた尻尾は万利亜も難なくよけたが、犬はそこから尾を横になぎ払った。

「ハクっ」

万利亜の声に応えてハクが飛び出る。すると、着地するまでにどんどん巨大化し、地に足が着く頃には犬と同じくらいの大きさになった。巨大な猫となったハクは襲いかかる尻尾に思い切り噛み付く。犬は鳴き声をあげて尻尾を激しく振った。

「す・・・すごい・・・」

巨大な動物同士の戦いに、多加弥は夢でもみているかのような気持ちになる。契約者となってから呪いと対することは何度かあったが、ここまで激しい戦いは初めてだ。

犬の尻尾を放したハクは万利亜の後ろに下がる。積極的に攻撃するつもりはないようだ。

再び犬は体勢を立て直し、多加弥と万利亜を交互に見る。ギリギリと歯を鳴らして赤い瞳を光らせると、多加弥に向かって前足を振り下ろした。右、左と立て続けに攻撃が繰り広げられる。

多加弥は素早く足をよけていたが、上から犬が大口を開けて襲ってきたのをよけた後、右前足の攻撃をよけきれずに横へ吹っ飛ばされた。

「タカヤ君っ」

多加弥は棒を支えにくるりと体を回し着地する。着地の際の衝撃は抑えられたが、前足が直接当たったときにガードした左肘が少し痛んだ。

「大丈夫？」

「平気です。これくらい・・・」

（これくらい、二葉ふたばさんの攻撃に比べれば）

比べるのも失礼かもしれないが、由起葉の兄の二葉に打たれて打たれて棒術を叩き込まれた多加弥にしてみれば、少しくらい吹っ飛ばされようがどうということはない。体が動く以上、何度でも立ち上がるだけだ。

「結構タフなのね」

「打たれ強さはある方だと思います」

「タカヤ君で、素直で頑張り屋さんね。あの性悪坊やと赤毛バカにも見習わせたいわ。同じ契約者なのにえらい違い」

「それって・・・天君と黒川さんのことですか・・・？」

「あの二人以外誰がいるのよ」

「あの・・・マリアさんたちって、仲が良くないんですか？」

「べつに、良くも悪くもないわ」

そう言う万利亜の顔は複雑な感情に歪む。本気で嫌ってはいないようだが。素直になれない思春期のようだ。

「さ、おしゃべりしてる暇はないわよ。少し呪い主の心が動いたみたい。もうちょっとだから、がんばりましょ」

「はい」

由起葉を信じて、多加弥は再び目の前の犬を見据えた。

・柳楽神社の犬（5）

石段の下まで降りると、由起葉は女性を座らせて救急車を呼んだ。
「かかりつけの病院わかりますか？」

「バッグの中に診察券が」

由起葉は失礼して、診察券や母子手帳の入った小さなファイルをバッグから出した。必要な情報はここから伝えればいいだろう。診察券には杉原緑と書かれていた。
すぎはらみどり

「すみません、ご迷惑を・・・」

「気にしないでください。あの、どなたかに連絡をした方がいいのでは・・・」

緑はお腹をさすりながらうつむく。

「・・・いないんです」

「・・・」

「私、一人で産むしかないんです。こんなこと、あなたに話すのもおかしいんですが、この子は世間的に認められない存在で、両親とはそのことで言い合いになり、それから連絡をとっていません。誰からも望まれない出産を助けてくれる人なんていないんです」

「・・・そうですか」

緑の話に、由起葉はあっさりと答えた。反論されたり、諭されたりするのではと思っていた緑は拍子抜けする。口うるさく周りからさんざん言われた言葉を、由起葉はひとつも口にしなかった。

「じゃあ、私が付き添います。とはいっても、何ができるわけでもないですが」

「そんな・・・今会ったばかりなのに・・・」

「あ、そうですよね。見ず知らずの人間にいきなり付き添うって言われても、信用できないですよね」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

緑は由起葉の腕をつかんだ。

「この子の父親は、家庭を持ってる人なんです」

「不倫・・・ですか」

「そうです。だからこの子は・・・」

「この子は？なんですか？私にとっては一生懸命子供を産もうとしているお母さんと、必死に外の世界に出ようとしている赤ちゃんでしかありませんが」

「軽蔑・・・しないんですか？」

「知り合ったばかりなので、そこまで考えが及びません」

にっこりと笑う由起葉に対し、緑は目に涙を浮かべて見つめ返す。遠くで救急車の音が聞こえた。

「もうすぐ来ますね。大丈夫ですか？」

「あっ、あの。この子は・・・この子は生まれてきて不幸ではないでしょうか」

今会ったばかりの人間にするにしては、重すぎる質問だった。それだけに彼女は迷い、不安を抱えていた。

由起葉は落ち着いていた。逃げることも、ごまかすこともしなかった。

「生まれてくることは不幸じゃありません。不幸になるかどうかは、生まれてきた子供を、あなたがどうやって迎えるかで決まるのではないのでしょうか」

「私の・・・気持ち」

「不倫はいいことじゃないけれど、だからって授かった赤ちゃんが汚れて生まれるわけじゃない。赤ちゃんを疎ましく思い、汚そうとしているのはあなた自身じゃないんですか？」

由起葉は緑のお腹に手を当てた。

「大きなお腹。迷いながらもここまで来たんですね」

「私は、苦しいのは耐えられます。でも、この子には父親もなく、私だけで何もできなかったら・・・。子供を、私の過ちに巻き込んでしまったような気がして・・・」

はらはらと、緑の目から涙が落ちた。あまり自分を責めてしまっ

たら自殺してしまう。もう呪いは出来上がっているのだ。

だが、由起葉はそれを危惧きぐしているわけではなかった。ただ自分の思いを伝えたくて、口を開く。

「私には、父親がいません」

「え？」

「幼い頃に亡くなりました。その頃住んでいた家はマンションの五階で、父はベランダから転落して命を落としました。事故だったと聞いています」

（事故だった・・・。そう、事故だった・・・）

「その頃のことはあまり覚えていないんですが、私はなぜか両親の部屋のベッドで寝ていて、起きたときには家の中は静かで、みんな集まっていました・・・」

（・・・あれ？そうだったかな・・・。私、何か忘れてるような・・・）

ズキン。急に右目が痛み、由起葉は思わず手で押さえた。胸がざわつく。思い出したいことなのに、思い出さない方がいいと自分の心が語りかけてくる。

「大丈夫ですか？辛いお話をしたせいか、顔色が悪いですよ」

「あ・・・いえ、大丈夫です」

由起葉はゆっくりと息をして、気持ちを落ち着けた。

「辛い話、ですよ。でも、私はこんなにも強く、元気に生きています。そして、今がとても幸せです。それは母のおかげでもあると思っっているんです」

「お母さんの？」

「私の母はとても素直で、父がいなくなって目一杯泣いて、沈んで・・・。子供の私から見ても強いお母さんではなかった。一人のただの弱い女の人でしかなかったんです。私はそんな母の姿をずっと見ていました。傷付いて、落ちていくお母さん・・・。でも、数日経ったある日の朝に、たくさんの食事が並んだテーブルの前で母はにっこりと笑っていたんです」

さあ、みんなでご飯を食べましょ。母はそう言った。

「何が何だかわかりませんでした。兄たちも呆然としていて……。そりゃそうですね。おかしくなりそうなほど落ち込んでいた人が、いきなり元気になっているんですから。それも、何の前触れもなく」

あのときの光景は今でもはっきりと思い出せる。柔らかい光の差すりビングに多すぎるくらいのお食事を並べて、起きたばかりの子供たちが目を見開いて立っている前で明るく笑う母。どうしたの？そんな顔して。とても言いたげに、少し首を傾^{かし}げてエプロンを外すと先にイスに座る。由起葉たちが席に着くと、いただきますっ、と元気に言ってもりもり食べた。

「お母さん、無理に元気に振る舞ってたんじゃ……」

「いいえ、母は元気でした。そして私たちに言っただけです。お父さんのために悲しむのは昨日で終わり。今日からはあなたたちのために精一杯元気に生きるからね、って。それからの母は本当に強く、明るく私たちを守って育ててくれました。私はそんな母の姿を見て、父がいけない淋しさを超えるほど、母のいる喜びを感じていました。今でも私は幸せです。母の愛が私たちを幸せにしてくれています」

救急車が坂を上がってくるのが見えた。由起葉は道に出て誘導する。救急車が目の前に停まる前に、緑の方を振り返る。

「だから、緑さんはその子を幸せにしてください。母親にはその力があるんですから」

「私が、この子を……」

「あなたしか、いないでしょう？」

由起葉は優しく笑いかける。緑は自分のお腹に手を当てて見つめると、決心したように顔を上げた。

緑の暗かった表情に、光が差したような気がした。

・柳楽神社の犬（6）

万利亜の猫耳がぴくっと動いた。

「タカヤ君、呪い主の念が消えたわ。攻撃開始よ」

「はい」

逃げ回ってばかりで体力を消耗していたので、こちらから仕掛けられるのは正直ありがたかった。多加弥は棒の構えを変えた。

「いくわよ、ハクっ」

万利亜の後ろに控えていたハクが前に出た。柳楽神社の犬を威嚇して毛を逆立てる。犬も今までとは何かが違うと感じているのだろう。ギリギリと歯を鳴らして体勢を低くすると、ハクと多加弥を交互ににらみつける。

犬が動いた。尻尾を一振りすると、ハクに飛びかかる。ハクは巨大な体を身軽に動かし一撃目をよけると、爪を立てて犬の腹を引っ掻いた。犬も体を曲げてさけようとするが、爪先がわずかに当たり毛が散った。

ハクはたたみかけるように前足を振り回して犬の体勢を崩す。そこへ多加弥が棒を振り上げて飛びかかった。反応の遅れた犬は顔に思い切りくらってうめき声をあげる。痛みを振り切るように激しく暴れると、ハクを尻尾でなぎ払ってから首に噛み付いた。今度はハクが鳴き声をあげる。

「ハクっ」

多加弥は犬の首を狙って棒を力一杯振り下ろした。犬はハクから口を放してよろめく。

「ハク、こっちへ」

その隙にハクを呼び寄せた万利亜は、ハクの口から数本の短剣を出させた。地に刺さった短剣を拾いながら手に力を込めていく。耳にまたスパークが起こった。

万利亜は短剣をすべて拾い終わるとハクの背に乗る。

「そろそろ終わりにしてやるわ」

万利亜を乗せたハクは犬の周りを飛び回る。攻撃をかわしながら指示どおりに動くハクの背から、万利亜は狙いを定めて短剣を投げてゆく。短剣は犬には当たらず地面に刺さった。

犬の正面に降り立った万利亜は、ハクから降りると高々と両手を上げた。

「いくわよお」

万利亜は両手を地面につける。すると、そこから光の線が伸び、短剣の刺さった場所を通して犬を取り囲んでゆく。魔法陣のような模様が浮かび上がったかと思うと、文字の一つ一つが光り、犬を照らした。

「タカヤ君、とどめよ。犬の口に突き刺して」

万利亜が力を込めると耳から手へ、手から陣へスパークが走る。

柳楽神社の犬はまるで感電でもしているかのように、苦しげに吠えながら悶える^{もた}。それでも陣の外には出ることができなかった。

「ウガアアアアア」

犬が大口を開けてうめいたところへ多加弥が棒を振りかざす。多加弥はハクの背をつたって犬の上部に飛び上がると、開いた口に向かって思い切り棒を突き刺した。

「マリアさん」

「あとは任せて」

万利亜は地面から手を放すと、胸の前で手を組んだ。目を閉じて小さく言葉を唱える。すると、犬に突き刺さった棒が光り、やがてあふれだした光が犬全体を包んで一気に散っていった。

わずかな衝撃が風となり、神社の木々を揺らす。光が消えた後に呪いの影はなく、枯れ葉が何枚かカサカサと上から舞い降りるのみだった。

「お・・・終わった・・・」

脱力して座り込む多加弥の横に万利亜が立つ。ハクはすでに小さくなり、万利亜の肩に乗っていた。

「よくやったわね。どんなもんかと思ったけど、なかなかやるじゃない」

「ありがとうございます。でも、正直余裕なかったです。こんなんじゃダメですよ。マリアさんのすごさを考えたら、俺なんて全然ダメです」

万利亜の肩から多加弥の頭へ飛び移ったハクは、上から多加弥をのぞき込んだ。

「はは・・・猫に慰められてるようじゃ・・・」

多加弥は力なく笑って肩を落とす。それでもハクの優しさを無下にするつもりはなく、そっと下ろすと抱き抱えてなでてやった。

（それにしても、なんでこんな普通の子が契約者に？あの女の子も特別には見えなかったし・・・）

ハクと戯れる多加弥をまじまじと見つめて、万利亜は考え込む。

（不生と契約できるのは心に闇を持つ者だけ・・・のはずなんだけど、この子たちに闇なんてあるのかしら。こんな純粹そうでいい子が、あの二人と同類だとは思えないんだけど・・・）

万利亜は好奇心にあっさり負けて手を伸ばす。万利亜の力を使えば呪われた者の声を聞くことができる。契約者が心に秘めた声。心の闇は聞くことでのぞき見ることができる。

「タカヤ君、これから力をつければいいのよ」

万利亜は励ましの意味で肩に手を置く。その瞬間、万利亜は心の中でごめんと謝りながら、少しだけ力を使った。

（えっ）

真っ黒な闇が万利亜を襲った。もはや聞き取れないほど入り乱れた声が一気に耳に入り、頭痛と耳鳴りを引き起こす。果てしなく、底の見えない世界の遙か遠くに小さな光が見えたが、それを確認する前に恐くなって手を放した。

「どうかしました？」

「う、ううん。なんでも・・・ないわ」

不思議そうに見てくる多加弥に、首を振ってごまかす。その間も

万利亜の心臓はばくばくいていた。

（いったい何なの？この子の中、真っ黒じゃないの）

信じられない思いで多加弥を見つめながら、万利亜はもう一人の契約者、由起葉のことを考えていた。

由起葉は待ち合いのイスに座り、膝の上のナギをなでていた。ずいぶん小さくなってしまった。このまま消えてしまうのではないだろうかと思うと、触れていなくては安心できない。

（タカヤとマリアさん、大丈夫かな・・・）

緑は今出産の苦しみと戦っている。本人に言わずに悪いと思いながらも、由起葉はさっき緑の実家に電話を入れていた。緑の母親は動揺した様子ではあったが、なるべく早くそちらへ向かうと言って電話を切った。どんな経緯であるにせよ、やはり親子なのだ。心配しないわけがない。

「人間で、いろんなものを生み出すんだね。呪いも人が生み出すなら、命だって人が生み出すんだもん。いいものも、悪いものも、全部人の中にあるんだ・・・」

「クウン・・・」

ナギが膝から飛び降りた。

「ナギ？」

ナギはくるりと体をひねって一周すると、突然弾けるように大きくなった。元の大きさに戻ったナギは、上から顔を寄せて頬擦りしてくる。

「戻ったんだ。よかったぁ・・・」

（タカヤたち呪いを消すのに成功したんだ）

うれしさに、思い切りナギを抱きしめようとしたところへ足音が

近付いてくる。由起葉は急いで手を引っ込めた。

「あ、岬さんですか？」

「そうです」

やって来たのは看護師さんだった。

「杉原さん、無事出産しましたよ。岬さんと呼んでいます」

「そうですか。すぐ行きます」

由起葉は看護師さんについて緑の元へ向かった。さっき知り合ったばかりでこんな場面に自分がいいのかもしれないと思うが、緑には今誰もいないのだ。

「緑さん」

緑はベッドの上で笑顔を見せる。その顔は大きな仕事を成し遂げた母親の顔だった。

「岬さん、ありがとう。私、がんばったよ」

「うん。お疲れさま」

緑の傍に産まれたばかりの赤ちゃんがいた。

「これからですね」

「ええ。これから……。これからたくさん愛してあげなくちゃ」
緑の言葉を聞いて、由起葉はもう大丈夫だろうと思った。緑は子供を愛し、愛された子供はまた誰かを愛する。柳楽神社の犬は、きつともう生まれない。

「あのね、この子の名前なんだけど……」

「？」

「美咲みさきにしようと思うの。ダメかしら？」

「……」

由起葉は胸の辺りがむずがゆくなるような感覚に、思わず表情が崩れた。なんだか照れてしまう。

「いい名前だと、思います」

「あなたがいたから生まれた命なんだって、忘れないためにも……。美咲って呼ぶたびに愛する大切さを思い出せるように……」

「私は何もしてませんよ。緑さんが自分で決めてがんばったんで

す。あのときの思いがあれば、きっとこの先も大丈夫ですよ」

由起葉はにっこりと笑う。緑も輝く笑顔で応えた。

母親が向かっていることを告げると驚きの中にうれしそうな表情を見せた緑と病室で別れ、由起葉はナギと一緒にロビーに歩いていた。

「時田^{ときた}さん、こちらへどうぞ」

背後で看護師さんの声がする。

新しい命がひとつ、またひとつと生まれていることに、由起葉は喜びを感じていた。

4 結びの糸 (1)

「おはよお」

「あ、おはよう。昨日どうだった？」

由起葉は教室に入ってきた詩織しおりに挨拶しながら寄っていった。昨日は詩織と圭けいの受験の日だったのだ。二人は同じ短大を目指していた。

「うん……。どうだったかな……」

「なんでそんな曖昧なのさ」

「き、緊張してたから」

「精一杯やったなら結果もついてくるよ」

美和みわも話に加わった。なんとなく暗い表情の詩織を、励ますようによしとする。

「あ、ケイ。おはよう」

「おはよ」

気のせいだろうか。圭の名前に反応して、詩織の肩がびくつとしたように見えた。

「ケイ、昨日どうだった？」

「まあまあかな。思ったよりできたと思う。結果が出ないとわからないけどね」

「そりゃそうだ」

「あのさ、詩織。ちょっといいかな」

圭は詩織の肩をつかんだ。表情に変化はなかったが、つかんだ手にはしっかりと力がこもる。

「う、うん……」

詩織は圭と一緒に教室を出ていった。二人は目を合わさなかったが、それ以外で不自然なところはまったくなく、由起葉たちも気にしなかった。

圭は人のいない反対側の校舎まで詩織を連れていくと、詩織を壁

に押しつけて鋭い目で見つめた。詩織は逆に見ることができない。逃げたい一心で顔を背ける。

「どういうこと？ 詩織」

「・・・」

「何とか言いなよ。あたしが知らないとも思ってるわけ？ こっちは必死で探したっていうのに・・・」

「ケイちゃん・・・」

「あんな大事な日に、いないってどういうこと？」

「ご、ごめん・・・なさい」

「何があったの？ あたしにはちゃんと言って。今度は何なの？」
激しくたたみかける圭は泣きそうな顔になっていた。詩織は胸が締め付けられる。圭は優しい。自分の痛みを同じだけ味わおうとする。

「あのね・・・ケイちゃん、ごめんね。シオリね、ケイちゃんと同じ学校行けなくなっちゃったの・・・」

「どうして？ 他のところ行くの？」

詩織は首を振る。

「学校には、行けないの・・・」

「なんで。大学行って小学校の先生になるのが夢じゃないの？」

「あのね、ケイちゃん・・・。お母さんに、赤ちゃんができたの」

「え？」

「だから、シオリは大学に行かないで働かなきゃいけないの。ごめんね・・・」

「・・・っ」

圭は拳で壁を叩いた。怒りが全身を駆け巡る。今すぐ詩織を連れてどこかへ逃げてしまいたかった。

「詩織。あたしはそんなに納得しないから」

「ケイちゃん・・・」

「詩織が嫌って言っても、あたしは諦めないからね」

圭は宣言して去っていった。詩織はその場にへたり込む。

圭は優しい。自分の代わりに怒りを噛み締めようとする・・・。

「詩織、この人は新しいお母さんになるんだよ。仲良くやってくれるかい？」

父親が再婚相手を連れてきたのは詩織が中学生になって間もなくの頃だった。

「詩織ちゃん・・・。よろしくお願いできるかしら・・・？」

綺麗な人だった。控えめに手を差し出してくる新しい母。中学生という複雑な年頃の詩織は迷わないわけがなかった。父に恋人らしき人がいるのは前からなんとなくわかっていたし、心の準備がまったくなかったかと言われると、どこかで覚悟のようなものはしていた。

（シオリの・・・お母さん・・・）

詩織には母親の記憶が一切なかった。それほど幼い頃に母はいなくなっていた。だからこそ一人の女性を前にして詩織は迷っていた。母親がどんなものか知らない詩織にとって、新しいも古いもなく、母親という存在が理解の外にあるものだったのだ。

（お母さん・・・）

詩織はその手をとった。

その瞬間が新しい家族の誕生であり、詩織に母というものができた日であり、幸せな日々と、それが終わり地獄のような日々が始まる物語の初めでもあったのだった。

受験当日の朝だった。全ての準備を整えて、最後に圭と一緒に買ったお守りをカバンに入れる。圭とは待ち合わせをしているわけではなかったが、同じところを受けるのは知っていたので心強かった。父はすでに会社に行っていたので玄関には靴がなかった。詩織は気合いを入れて出ていこうとする。家を出る前から受験は始まっているのだ。

「行ってきます」

「詩織ちゃん」

母の聖美がリビングから出てきて呼び止めた。

「詩織ちゃん、どこへ行くの？」

「どこって・・・、今日受験の日・・・」

「受験？何言ってるの？」

聖美はにっこりと笑いかける。詩織はぞっとしてそんな聖美の次の言葉を待った。

「あのね、詩織ちゃん。お母さんね、赤ちゃんができたの。詩織ちゃんに弟妹きょうだいができるのよ、うれしいでしょう」

「・・・赤ちゃん・・・」

「昨日病院に行ったら間違いないって。お父さんには話してあるけど、詩織ちゃんにはまだ言ってなかったから」

「あ、あの・・・。お母さん・・・？」

「ほら、いつまでそんなところにいるの。早く戻ってお母さんのお手伝いをしてちょうだい」

「お母さん、シオリっ」

訴えかける詩織の頬を、聖美は激しくぶった。詩織はよろけて玄関に座り込む。

「詩織ちゃん、お母さんの話聞いてなかったの？お母さんのお腹には大事な赤ちゃんがいるのよ。詩織ちゃんも家族なんだから、大事な赤ちゃんのためにこれからがんばってくれなくちゃ」

「お母さん・・・」

「受験なんて行かなくていいの。だって詩織ちゃんは今からこの子のために、家族のために働くんだから」

「……」

詩織は力なく立ち上がると、家の中に戻っていった。

「お母さん、シオリ着替えてくるね」

精一杯の笑顔でそう言うのと階段を上がる。自分の部屋に入って初めて涙がにじんだ。

この家のことは聖美の力でなんとでもなる。それを詩織は知っていた。今反発して無理矢理受験に行ったところで、きっと学校には通わせてくれない。いきなり事実を突き付けられた詩織には、一人でなんとかする準備ができていなかった。

（ケイちゃん……ごめん……）

結局は家から逃げ出せず、聖美の言うがままに生きる自分をやめられないことも詩織は知っていた。母親を知らない彼女が新しい母親に抱いた感情はあまりにも歪み、激しい固執を生んでいた。誰かに愛されるより母に愛されたかった。母が自分を愛してくれなければ、誰かを愛する価値もないと思い込んでいた。

詩織はほんの少し味わっただけの幸せな日々には捕らわれ、どんどん落ちていくばかりだった。

・結びの糸（2）

「ミワっち、最近何か変だと思わない？」

「それ、どっちのこと言ってるの？」

「どっちも」

ずっと気になっていた話題を、由起葉はついに口に出した。美和も感じていたようで、相づちを打つ。

「やっぱ、変だよね・・・」

由起葉と美和は掃除当番の週だった。そそくさと教室を出ていく詩織と、それを見送りながら不機嫌な表情を浮かべる圭。その二人を見ながら、由起葉と美和は黙ってホウキを動かしていた。

最近こんな光景が増えていた。詩織にいたっては学校を休む日も急に多くなり、いつもならお構い無しに口を出す圭が黙っているのも不気味だった。

二人は何も言わない。前々から圭と詩織の間には見えない何かがあるような気はしていたが、うまくいっていたので一度も踏み込んだことがない。こんなにこじれる前に四人で分け合っておくべきだったのかもしれないと、由起葉は少し後悔していた。

（シオリはケイにしか本当のことをしゃべらない。シオリを助けられるのはケイしかない・・・）

その圭があんなに苦しい顔をしているのだ。由起葉には今できることが何も浮かばなかった。

「ミワっち、どうしたらいいのかな・・・」

「とりあえず、もう少し様子を見ようよ。私たちが変に首を突っ込むより、ケイ一人の方が強いかもしれないし。私たちは二人にどんな結末が来ても、変わらず友達でいることが大事なんじゃないかな」

「ミワっちって・・・大人・・・」

「違うって。ただどうしていいかわかんないだけ」

二人は苦笑いだ。

圭はとにかく真っすぐで、その行動がたとえ周りを巻き込もうと、誰かを傷付けようと、自分の信念にそって突き進む。信じた道に間違いはないと思って進むがゆえによく過ちもおかすが、圭はちっともへこまない。そうやって詩織の心もこじ開けてしまった。

誰にでも好かれようと振る舞う詩織を、自分を偽ってでも可愛く見せようとする詩織を、あんなに嫌っていたのに。素直に生きようとしないう詩織を、圭が一番苛立った思いで見えていたのに。

激しいぶつかり合いの末、圭は詩織の本当の姿を知った。いや、詩織の姿というよりは詩織の影で糸を引く狂った執念を知ってしまった。二人の間に何があったのか、実のところ由起葉たちは詳しく知らない。だから今も、全てを圭に託すしかなくなっているのだ。

「ケイの方が潰れちゃったら、どうしよう・・・」

「それはないよ。ケイは私たちが思ってるより強いんじゃないかな」

「でも、ケイだっていつもうまくいくわけじゃないじゃん」

「それはね。けど、詩織のことは諦めないんじゃないかな・・・」

そんな気がする」

「気がするって・・・。ミワっち、曖昧なのに妙に力強いね」

「それが私の持ち味なのね」

二人がふざけ半分でやり取りしている間に、圭はひとつの決意を胸に学校を出ていった。

それから数日して、圭はついに行動を起こした。詩織が学校を休んだその日に、圭も休んだのだ。担任は風邪だと言ったが、由起葉と美和は顔を見合わせる。圭は今まで病気で休んだことなど一度も

ないのだ。

二人の思ったとおり、圭は風邪などこれっぽっちも引いていなかった。街中に忽然と姿を現す。見据えた先には詩織がいた。

「ケイ・・・ちゃん・・・」

「学校休んでどこ行ってるのかと思えば、何その格好。就活でもしてるわけ？」

「だってシオリ、働かなきゃいけないから・・・」

「バツカじゃないの？今更探したって、就職先なんて見つかるわけないじゃん」

「そんなのわかんないじゃん。シオリはやらなきゃいけないんだもん」

圭は詩織のコートの襟をつかんで引き寄せた。

「いいかげんにしろって言ってるのがわかんないの？なんでそんな簡単に自分の道捨てられるの？一緒にがんばろうって、あたしに言ったの詩織でしょう？」

「それは・・・ごめん・・・」

「誰に謝ってるのさ。あたしは謝ってほしいわけじゃないよ。もう一度ちゃんと考えてほしいの。本当にそれでいいのか」

「・・・いいか悪いかは、シオリが決めることじゃない・・・」

詩織はぼつりとつぶやいただけだったが、圭の耳にはしっかりと届いた。圭は苛立ちをあらわにして詩織の腕をつかむと、引っ張って歩きます。

「ケ、ケイちゃんっ。どこ行くの？」

「うるさい」

戸惑う詩織を振り返ることもなく、圭は足早に歩き続ける。詩織の腕を放す気はなさそうだった。

（もう、あんな危ない場所に帰すわけにはいかない。たとえ詩織が独りになっても離さなきゃ・・・。あたしが傍にいる。あたしが必ず守る）

圭が連れていったのは自分の家だった。二階建の庭付きの一軒家。

デザインに凝ったという家の造りは、アートを感じさせる箱形のモダンなものだった。

一人っ子の圭は恵まれて育ったという自覚を持っている。だからこそ、詩織の境遇から目が離せないのかもしれないと、圭自身どこかで思っていた。

「ケイちゃん、シオリ・・・」

圭は詩織を家に連れ込むと、二階の自分の部屋まで引っ張っていく。詩織が階段でつまずきそうになってもお構い無しだった。圭の信念は前しか見ていなかった。

乱暴に壁側に放り投げられた詩織は、そのまましりもちをついてへたり込んだ。

「いた・・・」

「ごめん、詩織」

「ケイちゃん？」

「あたし、もう我慢できない。このまま詩織をあの家には帰せない」

圭は詩織に近付いて間近まで顔を寄せた。驚く詩織の顔を、圭はしっかりと見つめる。迷いはなかった。

「詩織、この部屋から出ないで」

「な、何言ってるの？シオリ帰らなきゃ」

「詩織の居場所はあたしがつくる。だからお願い。あたしを信じてここにいて」

「・・・」

詩織は抵抗しなかった。ただ目を伏せてうつむく。

（ごめん……。ごめんね、詩織。もう傷付けないから、今だけ我慢して）

詩織の心の葛藤かっとうを考えると胸が痛んだが、圭は唇を噛んで揺らぎそうになる気持ちをこらえた。

・結びの糸(3)

外は暗くなってきた。圭の両親は今日は帰りが遅いらしく、今もこの家には二人きりだ。圭は一緒にご飯を食べようと言って、下のキッチンへ夕食を作りに行っていた。

おとなしく言われたとおりにしていた詩織だったが、まだ家のこととは考えていた。なぜこんなに帰りたいと思うのかわからない。帰りたいのではなく、帰らなければならない。強迫観念に近い気持ちだった。

(ケイちゃんはシオリのことを一番大事にしてくれる。きっと、家族よりもシオリのことを考えてくれる。だから・・・だからこそ・・・)

圭に頼りきりになるのは嫌だった。圭がいなければ生きていけないような人間になるのが怖かった。自分の力で、自分の手で幸せになって、対等に笑い合えなければ、いつか圭がいなくなったとき、立っていられる自信がなかった。

(ごめん・・・ごめんね、ケイちゃん。シオリはケイちゃんのこと信じてるけど、今はまだダメなの・・・)

詩織は窓を開けた。圭の部屋にはベランダではなく、大きめの窓があるだけだ。開けて下を見るが脚を架けられそうなどころはない。だが、外に出るためにはここから出るしか道がないのだ。下の階に降りればすぐに圭に見つかってしまう。

詩織の覚悟も半端なものではなかった。部屋のカーテンを外すと、二枚をきつく結び合わせて長くする。窓が大きいこともあり、カーテンもそこそ長かったので、二つを合わせるとなかなかのものになった。詩織はその端に更にベッドから引っ張りだしたタオルケットを結び、十分な長さにした。それをベッドの脚にくくりつけ、窓から外に垂らす。

詩織はあまり運動神経のいい方ではなかった。もしかしたら途中

で落ちて大怪我をする可能性もある。それをわかったうえで、詩織は窓から外への脱出を試みた。

必死で体を支えながら降りてゆく。手の握力が段々と落ちていくのを感じながら、それでも着実に下へ近付いていく。

なんとか外に出ることができた詩織は、靴のないまま走りだした。振り返れば心が揺らぐ。詩織は前だけ見て冷たいアスファルトを蹴った。

「詩織？」

圭は部屋を開けた。目に映ったのは開け放たれた窓と、そこから垂れ下がるカーテンだけだった。大きなカバンは置かれたまま、詩織の姿だけがなくなっていた。

圭は窓に駆け寄り下をのぞく。そこにはもう人影はなかった。

「詩織……。なんでよっ」

圭は苛立ってベッドを叩きつけた。

守りたいのに守れない。なぜ神様は平等の環境を与えてくれないのかと思う。自分の味わってきた幸せな世界を、ほんの少し詩織に分け与えてくれるだけでいいのに、それも許されないのだろうか。

（あたしはただ、守りたいだけなのに……。なんで逃げるの？）

あの母親の方が、詩織には大事だっていうの？

圭はすぐに答えを出す。そんなわけがない。圭はもう止まるわけにはいかなかった。

駅に着いてカバンを置いてきたことに気付いた。財布がない。コートのポケットを探すとパスケースが入れたままになっていた。詩織はいつも千円札を一枚だけパスケースに入れている。こんなときに役立つとは思っていなかったが、詩織はそれでなんとか電車に乗

り込んだ。

とりあえずはこれで家まで帰れる。周りの人の視線が詩織の素足に向けられていたが、気にしなかった。そんなことより気にしななければならぬことがたくさんある。

詩織は電車を降りると家まで急いだ。もう足の裏が痛くて走ることができなかった。

ふらふらになりながらやっと辿り着き、玄関のドアを開けようとする。しかしドアには鍵がかけられていた。

（お母さん・・・）

詩織はびくびくしながらインターホンを押した。

「誰かな、こんな時間に」

家の中では、帰ってきていた父と聖美が食事をしている最中だった。聖美は席を立とうとする父を止める。

「私が出るわ」

聖美はインターホンの画像をちらりと見ると、すぐに切った。それから受話器を取り、わざとらしく応える。

「今行きますね」

「なんだい？」

「荷物が来たみたい。赤ちゃんができたって言ったら、お母さん張り切って服とか買っちゃったみたいで、送るわねって言われてたの」

聖美は引き出しから印鑑まで出して、すっかり信じ込ませると玄関に向かった。歩きながら徐々に笑顔は消え去り、驚くほど冷たい顔に変わっていく。

聖美は靴箱の上にあった花瓶から花だけ抜き取ると、水の入ったままの花瓶を手に玄関のドアを開けた。

「あっ、お母さん・・・」

バシャッ。詩織は頭から水をかぶった。聖美がドアを開けるとすぐに花瓶の水をかけたのだ。詩織は一瞬何が起こったのかわからず、^{したた}滴る水音を聞いていた。見開いた目で、ゆっくりと聖美を見上げる。

すると、今度はいきなり口を塞がれた。

「声出すんじゃないわよ」

「……」

「どこで何してたか知らないけど、今日は家には入れないわよ、詩織ちゃん。お父さんには友達の家にお泊まりだって言っているから、どっか行きなさい」

詩織は謝ろうとしたが、口が塞がれていて声にならない。

「あんまりお母さんを怒らせないでね、詩織ちゃん。いい子になったら明日帰ってらっしゃい」

聖美は詩織のコートのポケットに一万円札を押し込んで突き飛ばすと、ドアを閉めた。再び鍵のしまる音がした。

詩織はしばらくそこに座り込んでいたが、やがて立ち上がると歩きだした。うつむいたまま家から離れていく。ドアを叩いて父を呼ぶことも、どこか入れるところはないかと開いている場所を探すこともしなかった。

なんとなくこうなることはわかっていた。わかっている圭を置いて家に戻ってきた。悲しくも辛くもなく、詩織は涙も出なかった。ただ、今頃自分を責めて苦しんでいるであろう圭のことを思うと、胸が痛んで息が詰まりそうになった。

（ケイちゃん……本当にごめん……）

寒さで足の感覚も麻痺しはじめていた。痛さも感じなくなってきた足をとにかく動かしながら、詩織はあてもなく夜道を歩いていた。

多加弥は時計を見た。今日は道場に行ったのだが、百合子にあまりだいたい遅くなってしまった。

(百合子さん、あれで結構女の子だからな……。二葉^{ふたば}さんももっと大事にしてあげればいいのに)

暗い夜道を自転車で走り抜ける。

前から人が来た。多加弥は少し速度を落としてすれ違う。その瞬間、多加弥ははっとしてブレーキをかけた。自転車のきしむ音と共にバランスを崩しながら急停止する。

「シオリちゃん？」

多加弥の呼びかけに振り返ったのは詩織だった。

「……柏井^{かしわい}……くん？」

「どうしたの？こんなところで……」

多加弥は詩織に近付いて初めて彼女の姿に驚く。詩織は頭から水に濡れ、靴も履いていなかった。

「いったい何があったの？なんでそんな格好……」

「なんでもないよ」

「なんでもないわけないだろ。とにかく家まで送るよ」

詩織はうつむいて首を振った。家になんて帰れるわけがない。

困った多加弥は由起葉に連絡しようとした。携帯を取り出した多加弥の手に詩織が慌てて飛びつく。

「ダメ。誰にも言わないでっ」

「えっ、でも……。ユキハなら力を貸してくれるよ？」

「ダメ。ユキちゃんに言っちゃダメ……」

由起葉に知られればきつと圭のところにも連絡がいく。詩織はそれが嫌だった。

「家にも帰らない。誰にも言っちゃいけないんじゃない、どうすればいいのさ」

「……見なかったことにして。シオリは一人で大丈夫だから」

「何言ってるんだよ。こんな寒い中濡れたままでしたら絶対風邪引くよ。うちに連れていってもいいけど、ちよつと遠いしな……。あっ、そうだ」

多加弥は詩織に後ろに乗るように言った。

「シオリちゃん、俺は秘密は守るよ。だから信じて一緒に来て」
多加弥が詩織を連れて向かったのは道場だった。今頃はもう一葉いちはしかいないはずだ。由起葉に近からず遠からずだが、直接知られるわけではないので、バレても許してくれるだろう。

「柏井くん、ここって・・・」

「俺が通ってる道場。この師匠は絶対人に言ったりしないから、今日だけお世話になろう」

「でも・・・」

「俺、話してくるからちよつとだけ待ってて」

母屋の方に駆かけていく多加弥を止める間もなく、詩織は自分の息が白くなるのを眺めながらたたずんでいた。ひどく疲れていた。体もだるかったが、何より心が重くて楽しいことなんてひとつも考えられなかった。

「シオリちゃん、こっち」

しばらくして母屋の玄関から多加弥が出てきて手招きした。詩織は行こうとしてよろけ、その場に倒れ込んだ。

「シオリちゃんっ」

慌てて多加弥は駆け寄り詩織に手を貸す。

「大丈夫かい？」

多加弥の後ろから別の声がした。詩織はゆっくりと立ち上がって声の主を見る。背の高い、優しい顔の男の人が立っていた。

「シオリちゃん、俺の師匠の一葉さんだよ」

「あ、あの・・・」

一葉はかがんで詩織の頬にそっと手を当てた。詩織はどきつきとして固くなる。

「冷たいなあ。とにかく体を温めなくちゃ。お風呂に入って、それからご飯を食べようか」

一葉はにつこりと笑う。詩織は何か言おうとして口を開くが、言葉の代わりに涙がぼろぼろとこぼれた。自分でも訳がわからない。ただ、一葉の前では全てが許されるような気がして、詩織は心が安

らぐのを感じていた。

戸惑う多加弥に対し、一葉はすっぱりと包み込むように詩織を抱きしめる。

「もう大丈夫だから」

「・・・ご・・・め・・・なさい・・・」

よしよしと、一葉は詩織の頭をなでながら泣き止むのを待った。そんな様子を見ながら多加弥は小さくため息をつく。

（一葉さんわかってんのかなぁ。相手は小学生じゃなくて女子高生なんだけど・・・）

一葉は二葉と違って元々穏やかな性格だが、詩織に対する様子を見る限り、多加弥には幼い子供か犬でも相手にしているように見えて仕方なかった。

一葉は子供と由起葉には特別甘いのだ。

・結びの糸（４）

多加弥が帰ってから、詩織はお風呂に入らせてもらい、一葉の作った夕食をごちそうになっていた。

「おいしい・・・」

「本当？うれしいなあ」

体も心も温まってゆく気がした。頭の片隅で圭のことを考える。自分のために夕食を用意してくれた圭。全て無駄にしてしまった。

（ケイちゃんのご飯、食べたかったな・・・）

「どうしたの？大丈夫？」

箸が止まっていたようだ。考えにとらわれてぼうっとしていたのだろう。

「すいません。大丈夫です」

「無理に大丈夫に見せなくてもいいよ。考えなきゃいけないことがたくさんあるんだろう？逃げようとしたって、忘れようとしたって事実は消えないんだ。関わった人も、そのとき抱いた思いも消えはしない。だったらちゃんと向き合った方がいい」

「一葉・・・さん・・・」

「知りもしないのに偉そうだったかな」

詩織は首を振った。全部バレているような気になる。見透かされて落ち着かないはずなのに、詩織はどこか安心していた。

「食べ終わったら、ちょっとあっちの部屋にいいかな」

「はい」

何かわからなかったが、詩織は言われたとおりにした。

一葉は詩織を座らせると救急箱を持って前に座る。

「足出して」

「え？」

「怪我してるだろう？素足で歩いてたんだから無理もない」

隠していたのにバレてしまった。怪我といっても小さなものだった。

たが、さっきお風呂の中で確認すると何ヶ所かすり傷と切り傷ができていた。体が温まると同時に痛みも感じたが、我慢できないほどではなかったのと言わずにいたのだ。

「そんなに驚かなくても見てたらわかるよ。これでも武術の先生してるんだ。観察力はあるんだよ」

詩織はおずおずと足を出した。小さな足は痛々しく傷付いていた。
「消毒するから、ちょっと我慢してね」

「大丈夫です」

消毒液は傷口にしみたが、なんてことはなかった。母親にぶたれる度に味わう心の痛みに比べれば、顔をしかめるほどでもない。詩織はぴくりとも動かず、丁寧に手当てしてくれる一葉の指先を黙って見つめていた。

「君は、不思議な子だね」

「え？」

「相当精神を鍛えているのか・・・ほとんど心が動かないね」

「そんなこと・・・ないです」

心が動かなかったらどんなにいいかと思う。自分はただ、周りに悟られないようにしているだけだ。鍛えられているというのは、あながち間違っていないかもしれないが、べつに自分で望んだわけではない。

「一葉さんは、優しい方ですね」

「私だって、誰にでも優しいわけじゃない。それに、こんなのは形だけだよ。私はタカヤ君に頼まれたから君を迎え入れた。相手のことを嫌いだと思わなければ、これくらい誰にだってできる。本当の優しさっていうのは、もっと辛くて、痛いもんだったりするんだよ・・・」

「・・・」

「さあ、疲れてるだろうから、もう寝ようか」

手当てを終えて立ち上がりとうする一葉の手を、詩織は勢いよくつかんだ。

「あ、あのっ」

「なんだい？」

「シオリ……、シオリは知ってます、本当の優しさ。でも、それにどう応えていいかわからなくて……」

一度話しだすと止めることができなかった。一葉ならわかってくれる。そんな気がして詩織は夢中で言葉を並べた。

「大事な人です。シオリの辛さを同じだけ感じてわかろうとしてくれる。シオリの代わりに怒ったり泣いたりしてくれる。けどシオリは悲しいことしか分けてあげられなくて、いつも守ってもらわばっかりで。自分が戦わなきゃって思うのに、それで余計に傷付けてしまったりして……。本当はもっと笑ってほしいのに。そのためにはシオリが笑わなきゃいけないってわかってるのに、今のシオリにはできない……。できないんです」

「シオリちゃん……」

「何度も何度も救おうと手を伸ばしてくれるのに、シオリはその手がとれない。その手をとってしまったら、もう一人では立てないような気がして……。頼らなくても大丈夫だって思えてからじゃなきゃ、シオリはその人と一緒には生きられない。だから突き放してしまった……。本当は二人でいっぱい楽しいこととして、なんでもない日を幸せだねって言って笑っていたい。でも……。でも、シオリにはその資格がない……」

一葉は詩織の頭を優しくなでた。

「シオリちゃんはその人のことが好きなんだね。私には伝わってきだよ」

「好きです。シオリは何もしてあげられないのに、そんなの関係なく愛してくれる。シオリはそんなの、味わったことない……」

母親でさえくれたことのない無償の愛を、圭は絶えることなく与えようとしてくれた。今まで母に愛されたくて勉強もスポーツもがらばった。可愛がられたくて容姿にも気を使い、誇りに思ってもらいたくて周囲の人間に好かれるよう自分すら作り上げた。それでも

手に入らなかった愛を、圭が与えようとしてくれたのだ。

なのに、詩織は今でもそれに応えることができない。圭の愛情が、手に入れた瞬間に消えてしまうのが恐い。

「シオリちゃんは どうしてその人と二人で生きようとしなの？」

「だって、傷付けるだけだから。シオリといたって、いいことなんてひとつもないから・・・」

「それはシオリちゃんが勝手に思ってるだけじゃないのかい？もしその人がそう思ってるなら、今頃離れていつてるんじゃないかな」

「放っておけない・・・。そういう人なんです」

「それならシオリちゃんにこだわる必要はないだろう？よく考えてごらん。その人がしてくれたことは、本当に放っておけないからただけのこと？」

（ケイちゃんは強くて、厳しくて、それでいて人一倍優しくて・・・。でも、シオリにだけ・・・。あんな顔するのは、シオリのこと考えてるときだけ）

「一葉さん」

詩織は何かが見えた気がして、勢いよく顔を上げる。一葉は相変わらず穏やかに微笑んでいた。

「今思ったことは、私にじゃなくてその人に伝えてあげなさい」

「・・・」

どこかで見たことがある。少し遠くを見るような目で、全てを受け入れるような優しい顔をする。悲しいことを呑み込んだうえで前しか向かない強さを感じさせる。

一葉の影に誰かが重なりそうな気がしたが、詩織には答えが見つけられなかった。

次の日詩織は朝早く目覚めると、お世話になったお礼に、せめて朝食を作ろうと台所に向かった。

「あ、おはようシオリちゃん」

「あ・・・。お、おはよう・・・ございます」

道場の朝は早かった。詩織が意気込んで入った台所では、すでに一葉が朝食の用意を始めていた。

（がんばって起きたつもりだったのに・・・）

がつくりとしながらも、とりあえず横に立つ。朝食を作る計画は失敗に終わったが、それならせめて手伝いだけでもと詩織は考えた。「手伝ってくれるのかい？」

「シオリ、お料理はできるんです。お母さんが教えてくれたから・・・」

まだ出会って間もなく、会話もおぼつかなかった頃、聖美と詩織の距離を縮めたのは二人でする料理の時間だった。母親がいないので、父は家事全般をがんばっていた。そのため詩織はちゃんとした料理を自分で作ったことがなかったのだ。そんな詩織にとって料理を教えてくれる聖美の存在は母親以外の何者でもなかった。

（あの頃は大丈夫だったのに・・・。いつからこんな風になっちゃったんだろう・・・）

今となってはあの頃聖美が心の内で何を考えていたのかわからない。優しくしてくれたのも、全部偽りだったのかもしれない。それでも詩織は幸せだった。ずっと知らなかった時間を、これからたくさん味わえるのかと思うと、まだ恥ずかしいながらもうれしかった。

「今日は学校行くのかい？」

「はい。一度家に帰って着替えてから行きます」

「そういえば靴がないだったね。うちには君の足に合うようなサイズの靴はなさそうなんだが・・・」

朝食を終え、片付けをしながら話していると、外で何やら物音がした。

「お迎えが来たのかな。あれなら靴じゃなくても大丈夫だろう。道場にあるサンダルでよかったらとりあえず履いていくといいよ」

「お迎え・・・？」

詩織は廊下に出て窓から外を見てみた。

「柏井くん」

玄関先に自転車を停めて、多加弥が入ってくるところだった。詩織に気付いて手を振ってくる。

「わざわざ来てくれたの？」

「もし家に帰るなら必要かなと思って」

「ありがとう・・・」

「ユキハに話せない分、俺が代わりにできることするよ」

「ユキちゃん・・・」

「あ、もちろんこのことは誰にも言っていないから」

詩織は二人の関係をうらやましく思った。多加弥は由起葉ならきつとこうするだろうということを考えて代わりにしているのだ。何も話していないのに、まるで分身のように行動を起こせる信頼の強さが、詩織には眩まぶしかった。

「一葉さん、本当にありがとうございました」

「詳しいことは知らないけれど、あまり無理をしちゃダメだよ。」

苦しいときは周りの人を頼ったっていいんだから」

玄関先で頭を下げると、一葉が手を伸ばしてなでてくれた。大きく温かな手だった。

「あの、一葉さん。シオリ、ちゃんと話してみようと思います。」

とにかく向き合ってみなくちゃ、わからないこともあるから」

「そうだね。相手のことを思うだけじゃ、すれ違ってしまうことも多い。分かり合うことは大事だよ」

詩織は不安だった。今まで偽ってきた自分が、今更素直な気持ちで言葉をぶつけられるのか。うまく伝わらなくて圭を苛立たせてしまっているのではないだろうか。

だが、一葉の笑顔はそんな詩織の心を後押ししてくれていた。た

とえダメだとしても、決めつける前にやるべきだと、一葉の目は語っていた。

詩織は多加弥の後ろに乗せてもらい家に向かった。

あと少しで着くというところで、家の近くに人影を見つけた。落ち着かない様子でうろうろしている。先に気付いた多加弥が声をあげた。

「あれ？ ケイちゃん？」

近付いてくる自転車に気付いて振り返ったのは、間違いなく圭だった。思いもよらない登場の仕方に驚き、戸惑って複雑な表情になっている。

「な、なんで柏井君が？」

「ケイちゃんっ」

おろおろする圭に詩織は飛びついた。がっちり腕を回して抱きつく。

「ケイちゃん、なんでこんなところにいるの？」

「なんでって……。心配してたから。それにこれ、カバンと靴」

「ごめんね、ケイちゃん」

「……。うん。ごめん、詩織」

なんだかよくわからないが、多加弥の役目は終わったようだ。圭は事情を知っているようだし、任せても大丈夫だろう。

「じゃあ、俺はこれで」

「柏井くん、ありがとう。本当に、ありがとう」

多加弥は手を振って離れていった。一度家の方まで戻ってから電車に乗らなければならない。時間的に遅刻ギリギリだった。

詩織たちも早くしないと遅れてしまう。家に入るにはそれなりの勇気が必要だったが、今は圭がいる。詩織は躊躇いなくドアを開けて家に上がった。

「あら、詩織ちゃん。今帰ったの？」

リビングから聖美が顔を出した。どきっとしたがいつも通りに振る舞う。

「うん。シオリ着替えたら学校行ってくるね」

「そう。いってらっしゃい」

聖美は何もなかったかのような顔をして詩織を送り出した。この人はいったいどこを見ているのだろうか。この人に愛されるなんて、不可能なんじゃないだろうか。詩織の心には少しずつ迷いが生じてきていた。

二人で学校に向かいながら、詩織はチラチラと何度も圭の方を見ては目を逸らしていた。

「あのさ、詩織。言いたいことがあるなら、はっきり言いなよ」

「う、うん・・・」

圭の少し苛立った声に言葉が詰まってしまふ。詩織は優しく頭をなでてくれた一葉の手を思い出す。

「ケイちゃん。今日学校終わったらいいかな？ちゃんと、シオリの言葉でちゃんと伝えたいことがあるの」

「・・・」

圭は考えるように前を向いて間を置いた。不安になる詩織を安心させるように微笑む。

「ちゃんと聞くよ。自分の気持ちを押しつけるだけじゃなくて、詩織の気持ちをちゃんと聞く。約束するよ」

「ケイちゃん・・・」

詩織は無性に泣きたくなったが、ぐっところえて圭のコートの袖を握った。

・結びの糸(5)

「ミワっち、今度はどうなってるわけ？」

「私に聞かれても・・・」

二人は顔を見合わせる。

昼休みもそうだったが、いつになく仲良さげな圭と詩織は、放課後も連れ立って教室を出ていった。

「ケイががんばったってことじゃない？」

「それならいいんだけど・・・」

由起葉はこの数日間起きた二人の変化に、少しだけ不安を感じていた。

圭と詩織は歩きながら今までのことを話していた。いつもより一生懸命に詩織はしゃべり、圭はいつもより静かにそれを聞いていた。

「シオリはね、ケイちゃんがいてくれて幸せだなんて思うんだ。出会った頃は本当にいじわるばかりで、なんてひどい人なんだろうって思ったけど、あれはただ嫌がらせでやってたわけじゃないんだよね。今ならちゃんとわかるんだ」

「どうかね。昔は本当に嫌いだったし、詩織の行動全てに苛々してたからね」

「わからなかったただだよ。本当はシオリのことを心配してくれていた。シオリが本当は違う生き方をしたいんじゃないかって、ケイちゃんだけは考えてくれてた」

「そのときはそこまで考えてなかったよ。でも、気にはなっていた。なんだか詩織が見えてるのにそこにいないような気がして。何考えてるんだろうって思ったよ」

「やっぱりケイちゃんはシオリのこと……。普通はそんなの気にしないよ」

上目遣いで笑いかけてくる詩織に、圭は少し照れた。

「ケイちゃん……。シオリはケイちゃんのこと傷付けたくない」

「あたしはべつに何も傷付いてないよ」

「嘘。ケイちゃんは苦しんでる。シオリのこと考えて苦しんでるでしょう？シオリが傷付いてたら、ケイちゃんも同じだけ傷付くでしょう？全部同じだけ背負おうとするでしょう？」

「・・・」

「シオリはそれが嫌でケイちゃんから離れようとしたの。だけどケイちゃんは放してくれなかった」

「大事な友達を、幸せにしてやりたいって思って何が悪いの」

「・・・悪くない。今なら思えるの。ケイちゃんがシオリにしようとしてくれたこと・・・。シオリも同じこと思うようになったの。シオリも、ケイちゃんを幸せにしたい」

「詩織・・・」

「シオリはケイちゃんにあげられるものなんて何もない。自分のこともろくにできてないのに、人を幸せにするなんて、笑われてもおかしくないこと言ってるって思う。けど、ケイちゃんに対してはできることがあるの。ケイちゃんは、シオリが自由になったら少しでも喜んでくれるでしょう？」

「ど・・・どういうこと・・・？」

「シオリは恐かった。お母さんに愛されたくて、愛されたくてがんばってきた自分が、あっさり捨てられるのが恐くてたまらなかった。だからどんなことがあっても耐えてきた。シオリだけが我慢すれば、みんなは幸せだって思ってた。でも違った。シオリが平気だっと思ってた苦しみは全部、代わりにケイちゃんが味わってた。だからシオリはケイちゃんを楽にしてあげたいの。もうお母さんに愛されなくなってもいい・・・。ケイちゃんを自由にしてあげたい」

「なっ、何するつもり？」

今まであんなにすがってきた母親の愛情を、きっぱり捨てると言う詩織に、圭は驚いて聞いた。

「シオリ、もう一度ちゃんと話してみる。お母さんに話して大学に行かせてもらうの」

「そんなの、素直に聞いてくれるわけないよ」

「聞いてくれるまで言う。お父さんにも力になってもらう。シオリは Кейちゃんと一緒に学校に行くの」

圭は迷った。確かに詩織には自分の道を進んでほしかった。もつと自分を大切にしておしかなかった。だが、今詩織がしようとしていることは、あまりにも危険に思えた。正式な子供を宿した聖美の力は今までよりも強く、詩織のことなど邪魔にしか思っていないかったとしたら、我を通そうとする詩織の言葉など怒りの対象にしかならない。

聖美は異常だ。もし詩織の行動によっておかしなスイッチが入ってしまったら・・・。

「ダメだ。やっぱりそんなのうまくいくわけないよ」

「学校を出たらいっぱい働いて、赤ちゃんのことも大事にするって約束する。きっと許してもらえる」

「そんな人じゃない・・・。甘いよ、詩織。あたしが必ず道を開くから、それまで待って」

「シオリは一人でもやれるよ」

「ダメだってば。詩織に何かあったらあたしは・・・」

詩織は圭の前に回り込んで見上げた。

「そんな顔しないで。もう Кейちゃんを苦しめたくないの」

「・・・詩織。ダメだよ・・・お願いだから言うこと聞いて・・・」

圭は包むように詩織を抱きしめた。

圭の願いは届かなかった。圭の思ったとおりだった。恐れていたことは現実となり最悪の形で詩織に降り掛かった。

「お・・・お母さん・・・？」

意を決して自分の決断を伝えた詩織の前には鬼の形相をした聖美がいた。せめて父親がいるときに話をすればよかったのだが、詩織が話を切り出したのは聖美と二人でキッチンに立っているときだった。

「詩織ちゃん。お母さん今の話、よくわからなかったわ」

「あのね、シオリちゃんと勉強して、ちゃんと働くから、学校に行かせてほしいの。まだ受験する方法も残ってるし、今からでも間に合うの」

「・・・だから？」

「だ、だから、お母さんに許してもらいたくて・・・」

聖美は詩織をぶった。詩織はよろけて後ろに倒れたが、すぐに顔を上げる。予測の範囲内だ。まだ引き下がるつもりはない。

「お願いします。お母さんとお父さんに認めてもらって学校に行きたいの」

「なに？ お父さんにも話すつもりなの？」

「それは、だって家族だから・・・」

聖美はいきなり笑いだした。たまらなくおかしいとでもいうように大笑いしている。詩織はぞっとした。聖美が笑うのはたいてい暴力を振るう前触れなのだ。

「詩織ちゃん。お母さんの家族にはそんなことを言う子はいらないのよ」

「・・・」

「お父さんと、この子がいれば充分だわ。詩織ちゃんはこの家にいるだけの子でしょ？ お母さんには言うこと聞かない詩織ちゃんなんて必要ないのよ」

「お母さんっ」

「うるさいっ。お母さんて呼んでいいのはお母さんの子供だけよ。わからないなら、もう二度とおかしなこと言わないように体に覚えさせてあげるわ」

なんと、聖美は傍にあった包丁をつかんで詩織に切りかかっていた。信じられない光景に、固まりそうになる体を必死で動かしてよける。それでも刃先が腕をかすり、詩織は血のにじみ出てくる傷口を押さえて唇を震わせた。

理解の範疇はんしゅうを超えていた。この人は本気で自分を殺そうとしているのかもしれない。今までほしくてたまらなかった温かい母の手は、冷たい刃物を振り回して詩織を傷付けようとしている。夢でも幻覚でもない。これは現実なのだ。

詩織は心の真ん中に、大きな穴が開くのを感じた。無だった。もう死んだ方がいっそ楽なのではないかとさえ思った。家族にさえしてもらえない自分など、いなくなったところで誰もなんとも思っていない。

（シオリがいなくなったって、べつに誰も・・・）

そのとき、心の穴の奥底で、両手を広げている圭が見えた気がした。

（ケイちゃん）

まだ死ねない。そう思った。詩織はしっかりと目を開くと、聖美が振り下ろす包丁を今度はきつちりとよけた。そのまま立ち上がり家の外へ逃げ出す。傷口を押さえながら走り、何度か後ろを振り返ったが、聖美が追いかけてくる様子はなかった。

詩織はただ必死に足のおもむくままに走り続けた。寒さも痛さも忘れるくらい、生きること**に**必死だった。心の穴はどんどん大きくなっていたが、その底で圭だけはずっと両手を広げて待っていた。

・結びの糸（6）

由起葉は母から渡された大量のミカンを持って道場に来ていた。知り合いの人からもらったのだが、由起葉と二人では多すぎるので道場の子供たちにあげたらどうかと、母に頼まれたのだ。

「ああ、重かった」

「ご苦労様。わざわざ悪かったな」

「私とお母さんだけじゃ食べきれないもん。腐らせちゃうのももつたいないもんね」

一葉の煎れてくれたお茶で体を温める。

「一葉兄ちゃん。タカヤ、大学受かったよ」

「そうか」

「四月から遠くなるし、道場も頻繁には来れなくなってしまう。また改めて話があると思うけど」

「まあ、それは仕方がないだろう。タカヤ君の場合は武術自体に意味があったわけじゃないし、心の鍛練たんれんならどこだってできるものだしな」

「そうだね。二葉兄ちゃん、淋しがるかなあ」

「いじめる相手がなくなるからな」

二人は笑い合った。二葉が淋しがるわけなんてないとわかっている。

「それにしても今日は寒いな。雪でも降るんじゃないか？」

一葉は外の廊下の方に歩いて行って窓から庭を眺めた。思った通り、はらはらとかすかに雪が舞い降りてきていた。そのことを由起葉に伝えようとして動きを止める。一葉の目には突然の訪問者の姿が映っていた。

一葉は部屋に戻ると由起葉に席を外してくれるように頼んだ。急なことに訳が分からないまま、とりあえず言われた通りにする。奥の部屋に移動しようとする由起葉に、一葉は真顔で言った。

「ユキハ、お願いがある。もしここに来た人を見ても、決してユキハは顔を出さないでほしい。どんなことを聞いても、決して騒ぎ立てないでほしい。守ってもらえるかい？」

「訳ありなの？」

「たぶん、な」

「わかった。一葉兄ちゃんがそう言うなら、約束するよ」

一葉は由起葉の頭をなでると玄関の方へ向かった。それを見送り、由起葉はおとなしく奥の部屋に入っていた。

玄関の前には真っ青な顔をして腕を押さえている詩織がいた。この寒さの中、上着も羽織っていない。唇の色が悪いのは寒さのせいかと思ったが、どうやらそれだけでもないらしいと、一葉は冷静に詩織の様子を見て判断していた。

「とにかく入って。話はその傷を手当てしてから聞こう」

詩織は何も言わず一葉に支えられるようにして家に上がった。

一葉は詩織の腕の傷を慎重に観察し、丁寧に手当てしはじめた。幸い傷は浅く、病院に駆け込むほどでもなさそうだ。消毒さえしっかりすれば一葉でも手当てできる範囲だった。

腕に包帯を巻きながら、心の準備を整える。詩織の姿を見たとき、一葉は少なからず動揺した。彼女は追い詰められている。それがどこまで危険な段階で、自分はそれに対し何ができるのか。詩織が語れば一葉も受けとめなくてはならない。どんなに怒りや憎しみを覚えても、彼女にとって一番いい道を示すべきだと一葉は考えていた。

「大丈夫かい？」

詩織の体を温めるためブランケットを掛けてやる。小さな体はそこの中にすっぽりと収まった。

「・・・ごめんなさい」

「何か謝るようなことをしたのかい？」

「迷惑・・・かけてばかりで・・・」

「迷惑じゃないよ。頼ってくれてうれしいくらいさ。私が君の力になれるなら、迷わずここに来てくれたらいい」

「・・・一葉さん」

詩織は堪えきれずに涙を流すと、必死に腕を伸ばして一葉を求めた。一葉は応えるように傍に寄って抱きしめてやる。詩織は一葉にしがみついて激しく泣いた。今まで我慢していた分まで全て出し切る勢いで涙を流した。

その声は奥の部屋まで届いていた。誰の声かはわからないが、泣いているのはわかる。由起葉は気になってそわそわしはじめた。

「ナギ、誰が来てるんだろう」

傍らのナギは相変わらずおとなしい。由起葉と違って興味がなさそうだ。

「一葉兄ちゃんが女の子泣かせてるなんて信じられないよ。二葉兄ちゃんならまだわかるけど・・・」

あまりにも泣き声が続くので、由起葉も段々堪えきれなくなってきた。そつと部屋から出て、足音を立てないように廊下を進む。

そういえば、一葉は部屋から出るなどとは言わなかった。顔を出さないことと騒ぎ立てないことしか約束していない。何か訳があるのかもしれないと由起葉は考えた。もし一葉が何らかの思いを託して言ったのであれば、由起葉は応えなければならぬ。冷静な判断が求められる。由起葉は一葉たちのいる部屋をのぞく前に、心を落ち着かせた。

由起葉は壁にぴったりと体をつけて、ガラス戸の端から中をのぞく。

（シ・・・シオリっ？）

うっかり声が出そうになって、由起葉は慌てて口を塞いだ。なぜ詩織がここにいるのかわからない。もう一度確認するが、一葉の前で泣いているのはやはり詩織で間違いなさそうだ。

「少し落ち着いたかい？」

「すいません・・・。シオリ、一葉さんの前だと我慢ができなくなる。一葉さんには全部聞いてほしいって、思ってしまう・・・」
「・・・いいよ。私でよければ聞くから、話してくれないかな」

「・・・」

詩織は少し考える。その間に由起葉は立ち去ろうか迷ったが、気持ちとは裏腹に足はまったく動かなかった。

「・・・シオリは・・・、シオリは今までお母さんに愛されようとがんばってきました。シオリにはちっちゃい頃からお母さんがいなくて、今のお母さんが来たのは中学生のときです。とっても綺麗な人で、すごく優しくしてくれました。なのに、いつの頃からかうまくいなくなつて、それはきっとシオリがいけないんだって思つて、好かれるように変わろうといろいろしてきたつもりでした。でも、いつまで経つても、何をしてみても昔のお母さんに戻ることはなくて、シオリは・・・シオリはがんばってきたつもりだったのに・・・」

そんなのはおかしいと、頭から否定してきた圭の姿が浮かんできた。今までの詩織を完全に否定し、ありのままに生きるよう強く手を引いた圭。受け入れられなくてあらがい、激しくぶつかり合ったことを思い出す。

「お母さんに愛されるような人物像を思い描いて、それに近づけるようにできることは何でもしました。自分の考えも振る舞いも、全とお母さんのために作り上げてきました。そこまでしてでもお母さんに好かれたかったんです」

詩織はどこにいてもいい子だった。どんな相手にも好かれるように振る舞い、いつもにこにこ笑って可愛い女の子を演じていた。おかげで先生からも男子からも受けはよかった。しかし一部の女子からは妬む者も出てくる。詩織は男女で差をつけているわけではなかったが、一度歪んだ思いで見えるようになった者からしてみれば、可愛い子ぶっているとしか見られなかったのだ。

そして詩織は軽いいじめを受けるようになる。それでも詩織は何も変わることはなく、いつも通りにこにこして毎日を送っていた。それが逆にいじめを加速させていくのだが、ある日を境に環境は変わり始める。その日とは、圭が動いた日だった。

圭は詩織をいじめるグループの中にいた。直接何かをしたことはなかったが、詩織が受けている嫌がらせに対し、圭は特に何も思うことはなく黙って見ていた。圭はいじめのような陰険なことは嫌いだったが、それよりも本心を隠して人によく思われようとする人間はもつと嫌いだった。だから詩織のことなど何とも思っていないかったし、どうなってもいいと考えていたのだ。

だが、徐々に見方が変わってきた。詩織があまりにも変わらないことに疑問すら抱くようになってきていた。彼女はいったいどこにいるのか。見えているはずの詩織に実体がないような気がして、圭は段々と詩織から目が離せなくなっていくた。

「シオリはそのままがんばっていけばいつかはっていう思いがあつて、なかなか生き方を変えることができませんでした。それなのに、ケイちゃんはずっとシオリから離れてくれなくて・・・」

「ケイちゃんていうのが、君の大事な人？」

「そうです。ケイちゃんは本当にしつこくて、放っておいてって何度も言ってるのに、全然聞いてくれなくて・・・。どんな人にも同じように接してきたのに、ケイちゃんにだけです、あんな大声で怒りをぶつけたの」

懐かしくて、なんだか笑えてくる。圭は本当にしつこかった。詩織の内に何かがあると感じた圭は、何度も詩織を捕まえては本心を暴こうと迫った。圭は一度決めたら直進しかしない。そのやり方はかなり強引で、周りから見たら暴力的ないじめにすら思えた。しかし詩織は一度だって圭に傷付けられたことはない。包み込むような優しさは正直感じられなかったが、圭は詩織を人一倍大事にしようとしてくれていた。

「ケイちゃんはシオリのことを誰よりもわかってくれました。わかっていなかったのはシオリの方で、ケイちゃんはシオリにとつていつも正しいことを言っていた・・・」

詩織は包帯の巻かれた腕を押さえた。

「その怪我はどうしたの？」

「お母さんに、切られました」

ガラス戸の向こうで由起葉は息を呑んだ。何も知らなかった。詩織の笑顔の裏の苦悩を知っていたのは圭だけだった。

「お母さんはシオリを知らない子だって言いました。好きになってほしくて、それだけのために一生懸命生きてきたのに、もういないって……。本当はずっと前からそうだったんです。シオリが知らないふりをしていただけで、お母さんはシオリを疎ましく思っていたんです。今ならわかります。お母さんはシオリのことを愛せないって……。努力したとしても、きっと愛せないって……」

「シオリちゃん……」

「お母さんに包丁を向けられたとき、死んだ方がましかもしれないって思いました。でも、そのとき見えたんです。ケイちゃんが手を広げて待っているのが。シオリは生きたいって思いました。シオリは……。家族を捨てても、ケイちゃんのところへ行きたい」

詩織は信じたかった。この思いこそが自分の本当の願いなのだということ。偽りのない本当の自分が選んだ道なのだということを……。

「一葉さん。シオリはまだ生きてもいいでしょうか。何もできないってわかっていながら傍にしようとしているシオリは、許されるでしょうか」

「……」

一葉は必死に訴えかけてくる詩織の頭を優しくなでた。この手から少しだけでもいい、自分に与えられた幸せが詩織にも分け与えられればいいのと思った。たくさん愛されるべき子だ。たとえ詩織が世界中で一番愛される人になったとしても、神様は妬むまい。

「幸せになりなさい。君にはその資格がある」

「……なれるでしょうか。シオリは幸せになって、それをケイちゃんにも分けてあげられるでしょうか」

「できるさ。君が、君にとって一番大事なものさえ見失わなければ」

全て失ってもいいと思った。圭さえいてくれれば、他に何もなかったとしても生きていけると思った。それだけの強い思いを、詩織は確認することができた。

心が晴れた気がした。詩織は涙でぐしゃぐしゃの顔を満面の笑みに変えて、誇らしげに一葉を見た。

そのとき、外で騒がしい物音がした。何かが倒れたような音だ。

一葉が様子を見にいこうと廊下に出たとたん、玄関がものすごい勢いで開いて、一人の女の子が飛び込んできた。

「詩織っ」

「その声、ケイちゃん？」

どうやら表で転んだらしい。コートについた雪を振りまきながら、圭は詩織を見つけると走って行って抱きついた。突然のことに驚きながらも、詩織はうれしくて圭の胸に顔をうずめた。

・結びの糸（7）

「どうしてケイちゃんがここにいるの？」

「詩織がここにいて聞いたら、急いで走ってきた」

「走ってって・・・」

「詩織のことが気になって家の近くまで行ってたの。そしたらユキハから連絡が入って」

「え？ユキちゃん？」

詩織は驚いて一葉の方を見た。そしてやっとわかった。一葉の影に見えていた人物が誰なのか。

「隠していてすまなかったね。タカヤ君から口止めされてたから言えなくて」

「詩織。この人は？」

今頃気付いた圭が不思議そうに聞いてくる。

「一葉さん。ユキちゃんの、お兄さん・・・」

「実は今日ユキハもここに来ていてね。彼女に知らせたのはユキハの勝手な判断だ。許してやってほしい」

「許すだなんて・・・。ユキちゃんは友達なのに、シオリ話せてないことがいっぱいあって、傷付けちゃったかもしれない・・・」

「大丈夫だよ。ユキハはちゃんとわかってる。話してくれなくても、シオリちゃんを助けてくれる人が他にいて知ってたから、そつと見守るだけにしてたんだろう。そして必要だと思ったから助けを呼んだ。ユキハはそういう子だから」

「・・・そうですね。ユキちゃんはそういう人だ・・・」

その頃由起葉は奥の部屋でナギに埋もれていた。

「はああ・・・。余計なことだったかなあ。ねえ、ナギ」

「ガウ・・・」

「なんでそんな関心なさげなのよお。おせっかいだって思ってるなら、はつきり言ってよお」

「・・・グウ・・・」

困った主を持ったナギは仕方なく由起葉の頬に擦り寄った。おせっかいだとわかっていながらやってしまうのが由起葉だ。それは時に余計なことにもなりかねないが、たいていの場合驚くほどの力で誰かを救う。そんなことはナギには充分にわかっていることだった。

「詩織、この腕どうしたの？」

主は詩織の怪我に気付いて尋ねた。たず

「う、うん・・・。お母さんに、包丁で・・・」

「う・・・嘘でしょ？」

圭の声が震えた。信じられない思いで詩織を見る。

「嘘じゃないよ。シオリ、お母さんに言ったの。学校に行きたいって。ケイちゃんと一緒に、学校に行きたいって。そしたらお母さん怒って、シオリのこと知らないって。もう二度とそんなこと言わないようにって、包丁で・・・」

「バカ・・・。だから待ってって言ったのに」

圭は再び詩織を抱きしめた。

「腕の傷だけで済んでよかった・・・。もうあの家はダメだよ。」

もう二度と、あんな場所に帰っちゃダメだ」

「でも・・・」

「詩織。あたしと一緒に暮らそう。あたしね、黙ってたけどずっとお金貯めてたんだ。詩織をいつかあの家から連れ出そうと思って、計画してたの。学校だって、奨学金とか使えば何とかなるよ。だから諦めないで。あたしを信じてついてきてほしい」

「ケイちゃん・・・」

詩織は思わず一葉を見た。この選択は人生を変えるほどの大きな意味を持つ。詩織はほんの少しでいいから、背中を押してほしかった。

「決めるのは私じゃないよ。シオリちゃん、君が選ぶんだ」

「シオリは・・・」

「君が本当にほしいものを取ればいいんだよ。迷うことなんてな

いさ」

「シオリは・・・、シオリはケイちゃんと一緒にいたい」

「詩織・・・。あたしは詩織の母親にはなれない。けど、絶対に幸せにするから。約束するから」

詩織が自分の手を取ってくれた。そのことが圭にはかけがえのないこととなった。がんばれる。詩織のためなら、自分はまだまだがんばれる。

「もう迷わないで。すぐにでもあの家を出よう。住むところはほとんど決まってるし、ちょっと待ってくれたら準備できるし。学校の資料も取り寄せてあるし、今からでもギリギリ間に合うから。卒業までの残りの日はうちから通ったっていいんだし」

「そんな、ケイちゃんにばかり負担が・・・」

「卒業するまで、なんならうちに泊まってもいいよ。ユキハもちよくちよく来るしね」

「一葉さんにまで迷惑かけられないです」

「迷惑じゃないよ。私も彼女も、迷惑だなんて思っていない。特に彼女はそうだろう。君が言ったんじゃないか、大事な人を幸せにするためには自分が幸せにならなきゃいけないんだって。君は自分の幸せを見つけたんだろう？ だったら全力でそれをつかみにいけばいい」

一葉の言葉は詩織の迷いや躊躇いを吹き飛ばしてくれる。とんでもなく大変なことを乗り越えてきた人の持つ強さのようなものを感じ、信じてもいいと思わせてくれる。

詩織は自分の幸せのために、何でもしようと思った。それは同時に、圭の幸せのためなら何でもするという誓いでもあった。

数日後、圭と詩織は荷物をまとめて家を出るために、二人で詩織の家に帰った。この数日間は結局一葉のところに泊めてもらい、一度も家に帰っていない。聖美ともあれ以来だ。

「大丈夫だよ、詩織。あたしがついてる」

（それにしても父親までなんの反応もなしだなんて。普通心配するもんじゃないの？）

時田家ときたの人間は誰一人騒ぎ立てず、まるで詩織など初めからいなかったかのように変わらぬ日々を送っていた。圭にはそれが解せない。

玄関のドアには鍵がかかっていた。圭がインターホンを押す。詩織の脳裏に忌まわしい記憶が浮かんだが、今回はあっさりと鍵が開いて、聖美が迎え入れてくれた。圭と一緒にでなかったらどうなっていたかわからない。それを予測して二人で来たのだが、詩織は妙に緊張して手に汗をかいてしまった。

「あら、詩織ちゃん。遅かったわね。お友達？」

「う、うん……」

「一ノ瀬いちのせといいます。あの、急で申し訳ないんですが、今晚詩織ちゃんの部屋に泊まってもいいですか？あたしたち卒業文集の担当になっちゃって、今夜中にどうしても終わらせなきゃいけないところがあるんです」

「まあ、そうなの？でも、急にお泊まりだなんて……」

卒業文集なんてまったくの嘘だ。それでも聖美の警戒心を解いて中に入れてもらわなければ作業ができない。圭は夜中に詩織を連れてこの家を完全に出ていくつもりだった。

「すいません。うちは今親戚が来ていて無理なものですから。一晩だけなんです、お願いできませんか？」

「そうねえ……」

そのとき、詩織の父親が突然リビングから出てきた。

「いいじゃないか。詩織が友達を家に泊めるのなんて初めてだろう」

「お父さんがそう言うなら・・・」

「一ノ瀬さんでしたか？なんのお構いもできませんが、ゆっくりしていつてください。詩織を、どうか手伝ってやってください」

「いえ、こちらこそ・・・」

圭は詩織の父親を前にして、妙な違和感を感じていた。ただ単に娘の友人を迎え入れているのとは違うような、もっと重い感情を感じる。

気にはなったが、正面から聞くわけにもいかず、圭は心に留めるだけにした。

部屋に入ると気が抜けた。とりあえず山は越えた。あとは両親が寝てから出ていけばいい。

「やっぱり変だよ、この家。あたしたちがあんなに悩んで苦しんでいたのに、何もなかったみたいに普通じゃん。母親は血がつながってないし仕方ないとしても、父親は本当の親でしょ？見て見ぬふりなんて・・・」

「ケイちゃん」

「・・・ごめん。ちょっと悔しくて。でも、ここまで詩織を育ててくれたことには感謝しなくちゃね」

「うん。二人は悪くないんだよ」

（はぁ・・・この子はまったく・・・）

圭は詩織の頭をなでてやった。もうそういうことにしておこう。詩織さえ無事なら、恨みの念はこの際捨ててしまっても構わない。今までのことより、これからが大事だ。

「生活に必要なものは用意してあげるから、大事なものだけ選んで入れてね」

圭は小さく丸めて持ってきたバッグを引っ張りだして詩織に渡した。詩織は入るだけ詰め込んでいく。

そして運命のときはやってきた。しんと静まり返った真夜中の二時。今頃は二人共、下の部屋で眠りにっているだろう。外はひどく寒いに違いない。圭と詩織はしっかりと着込んで大きなバッグを

それぞれで持った。

圭が先に立って階段を降りていく。ひたひたと、冷たい廊下を足音を忍ばせて通り過ぎる。玄関で物音さえ立てなければもう大丈夫そうだ。

二人は慎重に靴を履き、ゆつくりと、少しでも音がしないようにドアを開けて表へ出た。もう戻れない。どんなに迷っても、この家にだけはもう戻れない。

「詩織、平気？」

「平気だよ。もう気持ちの整理はできてるもん」

「そっか・・・」

嘘だ。圭は何も言わなかったが、そんなに簡単に割り切れる感情でないことくらいわかっている。

（それでもいい。どちらかしか選べないなら、あたしを選んで・・・）

圭は詩織の手を握った。そのとき、突然後方に人影が現れた。

「ちょっと待ってくれ」

「！」

びつくりして振り返る。見つかってしまった。圭は逃げ出せるよう足に力を入れて声の主と向き合った。

「お父さん」

「・・・」

悲しげな顔で立っていたのは詩織の父親だった。急いで飛び出してきたような様子ではなく、前々から知っていたように落ち着いている。

「出ていくのか？」

「止めても無駄ですよ。詩織を守るのはあたしです」

「・・・」

父親は何も言わずに近付いてきた。圭は詩織を隠すように前に立つ。

「すまなかった、詩織」

父親は前まで来ると頭を下げた。

「わたしは父親として、何もしてやれなかった。聖美がやっていることを知りながら、決断できずに詩織を追いつ込んでしまった。父親として、人として失格だ」

「お父さん・・・」

「一ノ瀬さん。最後まで身勝手なわたしの代わりに、詩織をお願いできますか？」

「そのつもりです」

圭はきっぱりと言い切った。言われるまでもなく、覚悟ならとうにできている。そんな圭の強い眼差しを受けて、父親は安心したようにやんわりと笑った。そして大きめの封筒を差し出してくる。

「詩織、これを持っていきなさい」

詩織は圭の後ろから出て、封筒を受け取った。

「大学に行くんだらう？受験に必要な書類は全て揃えてある。それから住民票もお婆さんのところに移しておいたから、住所を書くときにはお婆さんのところの住所をとりあえず使いなさい。そうすれば必要な書類は全て向こうに送ってもらえる。お婆さんには話してあるから、力になってもらったらいい」

「そんな・・・」

「聖美には詩織の邪魔はさせない。本当にほしかったものをあげられなかったわたしの、せめてもの償いだ。それからこれを・・・」

今度は小さな袋を圭に差し出した。受け取って中を見ると、通帳と印鑑が入っていた。

「充分な額ではないんだが、少しでも足しにしてほしい。名義は詩織になっているから」

「どうしてあたしに？」

「あなたになら詩織を任せられると思ったからです。この子は強いが、まだ一人では生きられない。あなたがいてくれたら、この先も大丈夫だと、そう信じているんです」

「ここまでできるのに、どうして詩織を止めないんですか」

「・・・わたしは父親です。詩織の父親でもあり、産まれてくる子供の父親でもある。うまくいけばどんなによかったか・・・。でも、もうどうしようもないところまできてしまったんです。聖美は弱い。そして産まれてくる子供もまだ弱い。わたしには捨てられないんです・・・」

「お父さん、シオリは大丈夫だよ」

「本当にすまない・・・。大事な子を追い出すようなまねをしてしまうなんて・・・」

「お父さんはシオリのためにがんばってくれた。だからここまでこれたの。シオリはこれから笑って生きていくから、お父さん、泣かないで」

（本当にこの子は・・・）

圭は詩織の手を握ると引き寄せた。

「泣かないでください。あなたは自分で決めたんでしょ？ だったら今更泣いて迷う必要なんてない。自分の家族を全力で守ればいい。詩織はあたしが守ります。誰よりも大事にします。この家の人間より数百倍は幸せにしてやります。そして、いつか・・・いつかあなたに詩織の本当の笑顔を見せてやりますよ」

圭は失礼を承知で父親に向かい宣言した。父親は驚き止まってしまっていたが、やがてまだ涙の残る目で笑った。

「一ノ瀬さんでよかった・・・。詩織を救ってくれるのが、一ノ瀬さんで本当によかった」

父親は圭に握手を求めた。圭はその手をとる。

「どうか、よろしく願います」

圭と父親の手が離れると、詩織が父親に飛びついた。久しぶりだった。こうして抱きしめてもらうのは、子供のとき以来のような気がする。

「お父さん、ありがとう」

「元気でがんばるんだよ」

真夜中の暗い道を、二人は明日に向かって歩き出した。詩織の手

はしっかりと圭とつながっている。圭は横の詩織を見ることがなく言った。

「詩織、泣いていいよ」

「平気だよ」

「我慢する必要ない。今は泣いていいときだよ」

「・・・」

詩織は圭の横で、ぬぐうこともなく涙を流した。圭は何も言わず、黙って詩織の手を握り、歩いていった。

・結びの糸（8）

桜蘭学園高校の卒業式は他の高校よりひと足早く行われた。桜が咲くにはまだ早かったが、よく晴れた気持ちのいい日だった。

これからみんなバラバラになってしまう。それぞれが別れを惜しみ、お互いの明日を励ましあう。

「柏井」

式の終了後に駆け寄ってきたのは右京だった。

「やっと解放されたぜ」

「人気があると大変だな」

右京は後輩からの人気が高い。桜蘭学園高校には第二ボタンをもらう代わりに、胸元に付ける学園のバッチをもらうという風習があり、右京はまさにそれを欲しがる女子たちに囲まれていたのだ。

「あれ、なくなってるじゃん。誰にあげたの？」

「俺の写真を愛してくれる男の子に」

「え？」

騒ぎ立てる女子たちの輪の外に、一人の男子生徒が立っていた。

右京はその子の胸にカメラが提げられているのを見つけ、呼びかけたのだ。

「写真好きかって聞いたら、文化祭のときに飾られてた俺の写真が好きだって言うから、そいつにバッチを投げてやったんだ」

「その男の子はお前にメロメロだな」

「だろうな。俺って誰にでも好かれちゃうから、本当困るよ」

「調子に乗るんじゃないわよっ」

右京の頭を後ろからこづいて久実が現れた。久実はいく以来芸能界に関わろうとせず、右京に少しでも近付くため専門学校を受けた。右京はプロの世界で修業するが、久実はずっとカメラの世界に入るところから始めなければならぬ。右京について歩くこともできたが、久実は自分の力で進む道を選んだ。

「俺はいつもこの調子なんですけど」

「・・・確かに」

「訳わかんない女の子にあげるよりいいだろ」

「まあね。そうだ、写真撮ろうよ。竜崎君たちも呼んでくるから」
「いいねえ。俺カメラ取ってくるよ」

右京と久実はそれぞれの目的に向かって走っていった。一人残された多加弥は空を仰ぐ。そのとき携帯が鳴った。出てみると由起葉だった。

「卒業おめでとう」

「ありがとう。やっとこの学園ともお別れだよ。本当ならこの先はユキハと一緒にいられるはずだったのにな・・・」

「そんなこと言わないでよ。悲しくなる・・・」

「ごめん。あ、あれからどう？ケイちゃんとシオリちゃん」

「うん。シオリもなんとか受かって、四月からは二人で大学行けるみたい。二人での生活も今のところうまくいってるみたいだよ」

「そっか。あのさ、ごめんね、ユキハ」

「なにが？」

「今更だけど、シオリちゃんのこと黙ってて・・・」

「まだ気にしてるの？いいって。タカヤの判断は間違ってたなかつたと思うよ。タカヤはタカヤでやれることをしたんだし、それでいいじゃん」

「シオリちゃんたちと気まづくなったりしなかった？」

「しないよ。シオリはそんなことで変わったりしないもん。シオリはさ、本当に強いよ。改めて思った。あれだけの辛い思いを味わってたのに、憎しみとか恨みの念とかを持とうとしなかったなんて、すごいとしか言えないよ。ケイだって知っててずっと耐えてたんだと思う。私さ、人は辛い思いとか苦しい思いをすると、誰かを呪ってしまうものだと思ってた。けど、それは人の弱さであって、呪いを生み出さない強い人もいるんだよね。私はシオリとケイに、それを教えてもらった気がする」

「うん・・・。そうだね」

多加弥は由起葉の言葉を聞きながら考える。あんなに小さな体を傷だらけにされてもなお、母親を呪わなかった詩織。詩織にとって母親は、呪いの対象ではなく、何よりも欲しいものでしかなかった。それを知りながら、応えなかった母親を憎いと思わなかった圭。二人は本当に強かった。

呪いのない世界なんてない。だが、この世界は呪いであふれているわけでもない。人を恨み、人に恨まれるだけの世界ではないことを、二人は教えてくれた。

「ねえ、タカヤ。今日はこれからどうするの？ 右京君たちと何かある？」

「いや。これからみんなで写真を撮ったりはするけど、終わったら帰るよ。みんなとはまた別の日に集まる予定あるし。それに、明日は天君そらのところに行かなきゃいけないから、今夜荷物をまとめないと」

「そうか。そうだったね」

多加弥は火臣ひおみの半ば強引な誘いにより、大学に通う間浦沢邸うらさわの一室に住むことになっていたのだ。天はものすごく嫌そうな顔をしたが、結局は承諾してしまった。多加弥の方も、あの浦沢天の家ということで、両親は反対するどころか感激し、さっさと息子を送り出そうとする始末だ。

「本当に、離ればなれだね」

「ユキハこそ、悲しくなること言わないでよ」

「ごめん」

「いつだって会えるよ。俺とユキハはつながってるんだから」「そうだね。じゃあさっそくだけど、今日会える？」

「うん。俺もユキハに渡したい物があったから。もう少ししたら帰るし、駅に着いたら連絡するよ」

「わかった。じゃあ帰ってくる頃神社の階段のところで待ってるから」

電話を切った。風がやわらかく髪をなでてゆく。多加弥は由起葉に胸元のバッチを渡すつもりだった。

5あの頃の夢(1)

由起葉は多加弥ゆきは たかやから連絡を受けて家を出た。これから会う約束をしている。

家の近くの柳楽神社なぎらまで来ると、石段の途中に腰掛ける。手には小さな花束。形だけでも卒業のお祝いをしようと思ひ用意したのだ。白い花ばかりを集めた独特の花束だったが、多加弥には白がよく似合うと思っている由起葉にとっては満足のいく出来だった。

(タカヤには白が似合う。何にも染まらないほどの白が、本当は・・・)

あるときだってそうだった。初めて会ったあの日にはもう、白いはずの多加弥は汚れてしまっていて、由起葉は哀しくなったのだ。

「私のせいでタカヤはまた汚れてしまうかもしれない。呪いの世界なんか足をつっ込んで、どんどん染まっちゃったらどうしよう・・・」

ナギが後ろから擦り寄ってきた。

「ごめん、呪いなんかなんて言って。全部私たちが作るものなのにね」

そのとき風が吹いた。思いの外強い風に、めくれ上がるスカートを押さえようとして由起葉は花束を落としてしまった。花束はふわりと揺れて下まで落ちる。

急いで石段を駆け降り、由起葉は花束を拾い上げた。そのまま顔を上げると一人の男の子と目が合った。見覚えのある顔だ。茶色の髪に、両耳にはピアス。かなり着崩されているが、彼が着ているのはおそろく、小戸川第一高校の制服だ。小戸川第一、通称コトイチは、一部の喧嘩っ早い生徒がしょっちゅう暴力事件を起こしているせいであまり評判が良くない。そして今日の前にいる人物も、その一部の生徒のうちの一人で間違いなかった。

「須王・・・くん？」

「お前、岬ユキハか」

背が伸び、声も男らしくなっているが、由起葉の前にいるのは須王亮平で間違いなさそうだ。亮平は多加弥と同じ中学で、由起葉とも面識がある。だが、中学卒業以後はずっと会っていなかった。

「久しぶりだね。その様子じゃ昔とあんまり変わってないみたいだけど・・・」

「オレはタカヤとは違うからな」

刺のある言い方だ。まだ多加弥のことを諦めていないのかと、由起葉は心の中でため息をついた。

「須王くんだって変わればいいのに」

「オレは今のままでいいんだ。タカヤだって、お前がいなけりゃ今頃はオレと・・・」

「まだ言ってるの？タカヤはね、須王くんよりずっと先に進んでいるの。昔のまま動けずにいる須王くんとは違うんだから、もうあの頃に戻そうとしないで」

「今のタカヤはタカヤじゃない。お前のために我慢してるだけだ。あの頃のギラギラしてたタカヤは本物だった。オレにはわかる」

（そんなの、私にだってわかってるよ）

由起葉は唇を噛んだ。昔の多加弥が偽りだったとは思っていない。あれも本当の姿だ。でも、今の多加弥だって本物なのだ。やっとここまできたのに、今更戻されてはたまらない。

「須王くん、こんなところで何してたの？」

「今日、あいつの卒業式だろ？会いに行ってもう一度確かめてやろうと思って」

「確かめるって、何を？」

「あいつの本当の気持ちをだ。お前抜きで本心を聞きたい。あいつ、すげえとこの大学行くんだろ？お前がそうさせたのか？」

「タカヤは私の言いなりじゃないよ。自分で決めて、自分で努力したの」

「自分で決めて・・・か。都合のいい考えだな。オレにはお前の

ためとしか思えないけど」

由起葉は言葉に詰まってしまった。わかっている。そんなのはずっと前からわかってのことだ。自分が多加弥を動かしている。多加弥のことを思い、自分の考える方向へ引っ張っているのは事実だ。自由を奪っているのかもしれないと悩んだことなんて何度もあった。だが、やはりあの頃には戻したくない。多少強引でもなんでも、多加弥を黒く染めたくはないのだ。

「本当、つまらないぜ。すっかりおとなしくなっちゃって……。あいつとオレなら最強になれると思ってたのに、今ならオレでも余裕で勝てそうだしな」

「須王くんじゃ勝てないよ」

「なんだと？」

「今のタカヤの強さ、知らないでしょ」

「その言い方、気に入らねえな。ああ、知らねえよ。知りたくても知りようがないんだから仕方ないだろ。あいつはオレと正面からやり合うこともなくなっちゃった。オレだってあの頃から比べたら強くなってるのに、それを受けようもしない。お前がいるから、オレは本気のあいつを知ることができなくなっちゃったんだ」

「なんでわかんないの？タカヤは須王くんを傷付けたくないんだよ。須王くんのこと、大事な友達だって思ってると思う。喧嘩で相手の本心を探るなんてやり方じゃなくて、普通に一緒にいられる関係になりたいんだよ、きつと」

「わかったように言うな。オレはタカヤとは違う。お前の言葉なんか流されたりしない」

「べつにそんなつもりで言ってるんじゃない」

「あいつは本当にお前のことが好きだよな……。お前のためなら何でもやっちゃまいそうだしよ。どこがいいんだか、オレには……」

ため息混じりに言われ、少々カチンときた由起葉を見て、亮平は何かを思いついたように動きを止めた。

「お前のためなら、何でも……か」
「？」

亮平の顔つきが急に変わった。鋭さの宿った目で由起葉を見ると、口元だけで笑う。由起葉は思わず身構えた。

「お前を助けるためなら、本気を出すかもしれないねえよな」

「は？何言ってる……」

「ちよつとの間眠ってる」

亮平はいきなり襲いかかってきた。普通の人なら一発目で気絶させられているところを、由起葉は素早くよける。

「相変わらず早いな」

みくびられては困る。多加弥ほどではないが、由起葉だって一葉いちはの元で武術を教え込まれているのだ。しかも由起葉は中学時代に亮平と何度かやり合っている。一対一ではなかったが、そのどれもが由起葉の勝利で終わっていた。あれからどれほど強くなったのか知らないが、由起葉だってあの頃のままではない。

「そんなにタカヤと喧嘩したいの？」

「オレはあいつを越えたい。仲良しこよしの関係なんていらねえんだ。オレは……オレはあいつに勝って自分を変える。こんな中途半端なままじゃ、先にすら行けねえんだよ」

「もうタカヤを戻さないで。そんな身勝手なことにタカヤを巻き込まないで」

亮平の二発目をよけて、由起葉は蹴りを放った。亮平も難なくよける。由起葉はそのまま反動で体を回転させ、連続で回し蹴りをした。昔ならこれで由起葉の勝利だ。しかし、亮平は口だけではなかったようだ。由起葉の足を体で受けてそのまま両手でつかむ。由起葉は体勢を崩して倒れそうになった。

「ちよつと、放してよ。変態」

「なっ……そんな言い方ねえだろ」

亮平はぱっと手を放した。そして間髪入れずに拳を突き出してくる。由起葉は素早くガードして受ける。

（女の子に対してすることじゃないんじゃないの？）

亮平の顔を見るに、余裕がある。手加減しているのはわかったが、それでも重みのある一撃だった。腕がしびれる。その瞬間、由起葉は思わず左目を瞑ってしまった。

（しまった）

思ったときには遅かった。右目の見えない由起葉は視界が真っ暗になった一瞬の隙を突かれてみぞおちにくらってしまった。両膝が落ちて意識が遠退く。

倒れていく体がしっかりと受けとめられる感覚だけをぼんやりと感じながら、由起葉はしばしの眠りについた。

・あの頃の夢(2)

彼の名は、地元の中予ではかなり広く知れ渡っていた。どこまで本当かわからないが、血生臭いうわさ話でかめられた彼の存在は、謎の多い、できれば出会いたくない人物として由起葉の頭にも刷り込まれていた。

由起葉は、いわゆる不良と分類されるような人たちと関わる機会もなければ、出会うこともまずないと思っていたので、あまり気にしないで過ごしていた。それが、まさかあんなことになるなんて・・。事件というのは、突然降り掛かるから事件なのである。

「ユキハちゃん、大変なのっ。どうしよう」

夏を前にして蒸し暑くなりはじめた頃。友人の芽衣めいが突然泣きついてきた。

「どうしたの？落ち着いてよ」

「先輩がっ。先輩がっ・・・」

芽衣にはつき合っている一つ上の先輩がいる。つき合っているとこのも最近聞いたばかりで、由起葉は芽衣の言葉だけではすぐにピンとこなかった。

「先輩って、メイの彼氏のこと？彼氏がどうしたの？」

近くにいたクラスメイトも心配そうに寄ってきて耳を傾けている。

「今、三年生が言っていたの。先輩たちが柏井多加弥かしわいと・・・」

「柏井っ？」

由起葉より先に周りの子たちが反応する。由起葉は頭の隅に追いやっていたその名前を引っ張りだして、状況を整理しようとした。

「で、メイの彼氏は柏井多加弥といったい何をしてるって？」

「そんなの決まってるじゃん。柏井っていったら喧嘩しかないとしょ、ユキハ」

周りの子が代わりに答える。

「そうなの？でも、メイの彼氏って喧嘩とかあんまりしなさそう

だけど・・・」

「先輩は普通だけど、一緒にいる人たちは結構激しいっていうか・・・。気に入らないことがあると手が出ちゃうタイプの人たちっていうか・・・」

（そんな遠回しに言わなくても、はっきり不良だって言っちゃえばいいのに）

自分の彼氏の友人を悪く言うのに気が引けるのだろう。芽衣は非常にわかりやすく説明してくれた。

「それで、メイの彼氏は強いのか？」

「えっ。今そこ、気にするところ？」

「だって、強かったら心配しなくても大丈夫じゃん」

「ユキハ、柏井多加弥だよ？ユキハだって聞いたことあるでしょ、あいつの伝説の数々。やり合って無傷で済むわけじゃないじゃんよ」

「見たことないし、わかんないよ」

この流れでいくと、嫌なことに巻き込まれそうだ。まずいなと思いつつも、頼まれたら断れないのが由起葉だ。

「ユキハちゃん、お願い。先輩のところに一緒に来て」

「な、なんで私？」

「だってユキハちゃん強いし。先輩を助け出すのに私一人じゃ・・・」

「それはわかるけど・・・」

「様子を見るだけでもいいの。お願いユキハちゃん」

芽衣にしがみつかれ、周りからは熱い視線を向けられ、由起葉は完全に断れない雰囲気の中にいた。元々おせっかいなタイプの人間だ。薄情なことなんてできるわけもない。

（頼む人、間違っていないか？伝説がどうか言ってたのに、私なら勝てるっても？先輩は心配でも私の心配はしないのかよお）

由起葉は心の中で散々叫び、メイに連れられてしぶしぶ出ていった。

着いた先は川原だった。この近くには兄たちの通う道場がある。まさかこんなところで喧嘩が行われていたとは。由起葉もこの辺りは何度か通っているの、ぞっとした。

「ユ、ユキハちゃん。あそこ」

震える声で小さく指差す芽衣。その先を見て、思わず由起葉も目を見開いた。

川原には、同じ制服姿の男たちが何人も倒れていた。遠くて傷などは確認できないが、その中に一人たたずむ別の制服を着た男、柏井多加弥のシャツの汚れを見るに、血の流れる喧嘩だったことは間違いないさそうだ。

「うわさは本当だったんだ・・・」

「感心してる場合じゃないよ」

「そうだけど、もう終わってるみたいだよ」

そのとき、多加弥が足元に転がる一人の頭を押さえて持ち上げた。ぐったりとした様子の相手は抵抗する気力もないようだ。それを見た芽衣が突然飛び出す。

「先輩っ」

「ちよつと、メイっ」

頭を持ち上げられていたのは芽衣の彼氏だった。耐えきれずに走りだす芽衣を急いで追って引き止める。川原に降りる途中で止めたのだが、もう手遅れだった。他に人影のないこの場所において、由起葉たちは完全に目立っていた。

気持ちだけで先走るのはやめてほしい。どの道こういうことになるのかと、半ば諦めながら、由起葉は芽衣をかばうように後ろにして下まで降りた。いざ惨状を目の当たりにすると、嫌でも心臓が激しく鳴った。さすがにこれはまずい。

「あの・・・」

多加弥が血で汚れた顔でこちらをじっと見てきた。

「その人、放してもらえます？」

「なに？知り合い？」

「・・・彼氏、です」

私じゃなくてメイのね。と心の中で付け加える。

多加弥は間近の男と由起葉たちを交互に見た後、頭をつかんだままこちらに差し出してきた。まるで物のような扱いだ。由起葉はそっと近付いて行って先輩を受け取る。額から流れた血はすでに固まり、顔にこびりついていた。頭に激しい衝撃を受けて気絶しているのだろう。声をかけても目を覚まさなかった。

「そいつ、喧嘩なんかしたこともないのに、ついてくるからこんな目に合うんだ。安っぽい友情か知らないけど、惨めだよね。しかも女に助けに来てもらうなんて」

多加弥は笑いながら話した。由起葉は何も言わず、多加弥の方を見ようとしなかった。分の悪い戦いをするつもりはない。それでも今多加弥の顔を見たら、腹立たしきで殴ってしまいそうだった。

「なあ、そんな男やめて、俺にしろよ」

「・・・はあ？」

由起葉は意味がわからずに、多加弥を怪訝な顔けげんで見た。何を言っているんだ、こいつは。

「女って結局は強い男が好きなのわけ。だから俺はこれで結構モテるんだ」

「はあ・・・」

「そういうわけで、弱い彼氏は今日で捨てて、俺にしろ」

「そういうわけって、どういうわけだか全然わかんないんだけど。そもそもこの人、私の彼氏じゃないし・・・」

「なんだよ。じゃあ、あっちの子の彼氏？」

多加弥に指差された芽衣はびくっとなる。さっきは後先も考えずに飛び出したほどのなのに、今は恐くて近寄れないらしい。少し離れ

たところから様子をうかがっている。

「なんで人の彼氏を助けてるわけ？ お前のしてることって、そんなに価値のあることなの？」

「この状況で、価値のあるかないかなんて考えてるわけないですよ」

「確かに。まあ、お前のじゃないならちようどいいじゃん。俺のになれよ」

多加弥はにっこりと笑う。血の飛び散った姿で爽やかに笑われても恐いだけだ。こいつは何なんだ。伝説やうわさ話で固められたイメージとの違いに、由起葉はかなりの戸惑いを感じていた。

よく見れば綺麗な顔をしている。声だって、どちらかというとき穩やかで粗野なところが無い。彼の後ろに広がる景色とのギャップに、由起葉は目が回りそうだった。

「ごめんなさい。何がなんだか、わからなくなってきたるんだけど・・・」

「考えなくていいことを考えようとするから、わからなくなるんだ」

「もっともらしいこと言ってるようで、だいぶ間違ってるよ。考えるでしょ、普通。だって、それに応えるってことは、よく知りもしないあなたとおつき合ってることになるわけで・・・」

「そういう難しいことじゃないんだって。ただお前は俺を好きになれればいいんだよ」

「なんで私だけ一方的なの？」

「俺は誰かを好きになったりしないから。だからお前のこともべつに好きじゃない」

「なっ・・・」

（なんなんだ、こいつはっ）

「じゃあ、俺帰るわ。後は救急車でも警察でも何でも呼んで」

「ちよっ、ちよっ」と

何一つ理解できないままの由起葉を残して、多加弥は歩いていっ

てしまった。あんな格好でふらふら歩いていって大丈夫なのだろうか。慣れた感じなのが逆に恐い。

「ユキハちゃん、何話してたの？大丈夫だった？」

多加弥が立ち去ってから芽衣が寄ってきた。

「うわさなんて、あてにゃない・・・」

「さっきは本当だったって言ってなかった？」

「あの人ちよっと・・・、いや、だいぶおかしいよ。全然わけわかんない」

由起葉は思い返して少し頭痛がした。

「もう・・・この後始末どうすんのよ・・・」

ぼろぼろの姿で転がっている男たちは、誰一人起き上がることにできなかった。

・あの頃の夢(3)

もう会うまい。もう関わるまいと思っている人物ほど、また会ったりするものである。

由起葉は二葉ふたばの忘れ物を届けに、道場へ向かうところだった。あえて道を変えようかとも考えたが、悩んでいるうちにいつもの川沿いの道に来てしまった。

(まあ、いつもいつも喧嘩してるわけじゃないだろうしね・・・)
たとえ川原にどんな景色が広がっていても無視するつもりだった。そもそも見なければ、いようがいまいが関係ない。だが、いくら由起葉がそう思っている相手の方から来られたら、そういうわけにもいかなくなる。

「あっ」

由起葉はどきつとした。川原の方から声をかけられた気がしたが、知らないふりをして通り過ぎようとする。

「おい、ちょっと待てよ」

「・・・・」

気のせいと思いたいが、どう考えても自分が呼ばれている。由起葉はおそろおそろ下を見た。目が合った。それと同時に、前回以上の惨状が目飛び込んでくる。殺人現場のように男たちが倒れている中で、一人だけが地に足をつけこちらを見上げていた。

「お前、この間のだろ」

この間かどの間か知らないが、失礼な呼び方に由起葉はちょっとムッとした。

「何か用ですか？」

「お前、この辺に住んでるのか？」

「違いますけど。じゃあ、私急いでるんで」

「あっ、おいっ・・・・うっ・・・・ゴホッ」

突然多加弥が膝について倒れ、大量の血を吐き出した。

「えっ？なに？」

さすがにこれは無視できない。由起葉は急いで川原に駆け降りると、多加弥の傍に寄って様子をうかがった。

「ちよっと、どうしたの？」

「べつに……。こんなのどうってことない……。大丈夫だ」

「大丈夫なわけないでしょ？そもそもあなたのやってることに大丈夫なことなんて一つもないんだから」

多加弥は笑おうとして、また血を吐いた。相当まずい状況だ。

「もしかして、どこか強く殴られたりした？」

「今回はちよっと分が悪かったんだ……。それでも俺は勝った。どうだ？俺のこと……」

「そんなのどうだっていいから、ちゃんと答えて。こんなに血を吐くなんて、おかしいんだから」

「どうだっていいって……」

多加弥は気に入らない様子でもごもご言っていたが、由起葉の迫力に負けてしぶしぶ答えた。

「あれで、腹の辺りを何回か……」

多加弥の指差す物を見てぎよっとする。川原に転がっていたのは木製のバットだった。あんな物で思い切り打たれたら、単純な怪我では済まない。しかも冷静になってよく見ると、バットだけでなく、木刀や棒のようなものも何本か投げ捨てられていた。

「一人相手に武器まで持ち出すなんて……。最低」

「だろ？俺はよくやった方だと思……。ゴホッ」

「もうしゃべらないで。内臓が傷付いてる可能性があるから。もしかしたらあばらも折れてるかも……。とにかく救急車を呼ぶから」

立ち上がろうとする由起葉を多加弥が止めた。

「いい……」

「は？何がいいのよ。すぐに病院に行かなきゃ、大変なことになるよ」

「・・・いいんだ。俺は・・・助かりたくない・・・」

「どうしちゃったの？何言ってるのか全然わかんないよ。早く病院に行かなきゃ死んじゃうかもしれないんだよ？」

「それでいい・・・。生きてたって・・・何も・・・ないのに・・・」

由起葉は多加弥の手を振り払って立ち上がると、上の道まで駆け上がった。そして立つことすらできない多加弥に向かって叫んだ。

「私はまだあなたのこと全然知らないのに、こんなところで死んじゃったらどうやって好きになればいいのよ。待ってて。私が必ず助けるから。私が戻るまでそこから動かないで」

由起葉は全速力で道場まで走っていくと、兄たちに助けを求めた。由起葉の必死の訴えを受けて一葉と二葉が向かったときには、多加弥は気を失って血の中に倒れていた。

病院に運ばれた多加弥はすぐに手術をすることになった。医師の判断では、そこまで重症ではないようなので、手術も早く済むだろうということだった。

「ユキハ、彼の家に連絡してやらないと」

「うん・・・。そうなんだけど、私連絡先とか知らないんだ」

「え？友達じゃないのか？」

「違うよっ。そもそも名前しか知らないし」

兄たちは驚いた顔で由起葉を見る。我が妹は、よく知りもしない少年のことを必死の思いで助けたらしい。

「どうしよう・・・」

「ああ、あの患者さんでしたら大丈夫ですよ。柏井さんとこの多加弥くんですよ。病院から連絡入れておきますんで」

「わかるんですか？」

「初めてじゃないですから」

にっこりと看護師さんが笑いかけてくる。どれだけ病院のお世話になっているんだと、由起葉は呆れた。親もさぞかし大変だろう。兄たちは道場を途中で抜けてきたこともあって、先に帰ることになった。由起葉は多加弥の親が来たら帰るということで、とりあえず残ることにした。

手術は本当に早く終わり、多加弥は病室のベッドに移された。まだ眠っている。

（こうして見ると、いいとこのお坊ちゃんって感じ・・・）

さっきまで喧嘩で血だらけになっていた人間とは思えない。静かに眠る姿はどこか儂げで、扱い方を間違えると崩れてしまいそうな危うさを感じさせる。喧嘩に明け暮れているわりには体の線が細く、色白なのもそう思わせる要因かもしれない。

（なんかこの人が、ますますわからなくなってきた・・・）

点滴の打たれた腕はしなやかに長く、度々の喧嘩で傷付いてはいるものの、その指は由起葉でも見とれるくらい綺麗だった。こんな手で人を殴ってはいけない。傷付けるのがもったいなく思えてしまう。

「それにしても遅いな・・・」

多加弥の親はなかなか現れなかった。仕事だろうか。普通の怪我ならまだしも、手術をしているのに慌てて駆け付けてくるようなこともない。こういうことも初めてではないということなのだろうか。外が少しずつ暗くなり始めていた。由起葉は兄たちに連絡した方がいいだろうかと考えながら、ついうとうとし、やがてベッドに半身を乗せる形で眠りに落ちてしまった。

どれくらいそうしていただろう。由起葉は頬に触れる人の温もりに気付いて、ゆっくりと目を開けた。瞬きを繰り返し、ぼんやりとした意識を呼び覚ます。

「あ、起きた」

触れていたのは多加弥の手だった。由起葉は一気に目が覚めて、がばっと起き上がる。

「やだっ、私。寝ちゃって・・・」

「寝顔、かわいかったよ」

「なっ・・・」

「ずっといてくれたんだ」

由起葉はイスに座り直した。ペースを乱されないようにしなくては。

「だって、放っておくわけにもいかないじゃない。あなたの親が来たら帰るつもりだったの。あ、ここの看護師さんが連絡してくれたから」

「そう・・・じゃあもう帰った方がいいよ」

「え？だってまだ・・・」

「待ってても来ないよ。俺はもう平気だし、この病院は慣れてるから、一人でも大丈夫」

「・・・ねえ。なんで来ないの？」

多加弥の目が急に冷たく光った気がして、由起葉はぞくっとした。触れてはいけないところに触れてしまっただろうか。

「ごめん。言いたくないならいいよ。でも、遅いだけでちゃんと来るよね？そうじゃないと私、安心して帰れないよ」

「なに？心配してるわけ？関係ないのに？」

「当たり前でしょ。目の前で血吐いて倒れられて、病院に着いたらすぐ手術だし、こんな状況であなたの家族は誰も来ないしさ。どんな理由があるのか知らないけど、一人で大丈夫なんてこと、絶対ないって思うから」

「お前って・・・結構暑苦しいタイプの女だな」

「はあ？」

人が心配しているというのに、こいつは。由起葉はこんな奴でも放っておけない自分が少し嫌になった。

「気にしなくても、そのうち誰か来るよ」

「そう・・・。ならいいんだけど」

「早く帰った方がいいよ。俺にかまってる遅くなる」

多加弥は素っ気なく言って顔を背けてしまった。由起葉は仕方なく立ち上がる。人に好きになれと言っておいて、今はかまうなど言ってくる。本当にどこまで勝手な男なのか。

帰り支度をしながら、もうこれで関わるのは終わりにしようと思起葉は心に決めた。・・・はずだったのだが。

由起葉が最後に多加弥をちらりと見て歩きだそうとしたとき、病室の扉が開いて男の人が入ってきた。上等と思われる皺しわ一つないスーツを着て、髪もきつちりと固められている。少し吊り上がった目は、きりつとした口元と相まって、厳しい印象を与えていた。色白で腕も指も長い。顔はあまり似ていなかったが、由起葉はもしかしてと思った。

男の人はつかつかとベッドの傍までやってくると多加弥を見下ろした。由起葉の方などまるで見ない。そこにいないかのような扱いだった。

「またやったのか」

「・・・」

「手は動くのか？指は使えるな？」

「・・・問題ないよ」

多加弥は腕を上げると、指を一本一本動かして見せた。とても滑らかな動きで、特別なもののように見えた。

「それならいい」

男の人は冷たく言った。それに対し由起葉は納得のいかない様子で熱くなる。

「いいって・・・何がいいんですか？手術してるんですよ？」

「君はなんだい？多加弥にまわりつく女の一人か？」

「なっ・・・女って・・・」

あまりの言われように由起葉はうまく言葉が出なかった。父親だろうが、立派な大人だろうが、そこまで言っている権利はないはず

だ。

「こいつは違うよ。そういうんじゃない。俺を病院まで連れてきてくれたんだ」

「そうか。これは失礼した。だが、関係がないのならなおさら、今後多加弥とは関わらないでいただきたい」

「どういう意味ですか？」

「多加弥の周りの人間はあまりいい影響を及ぼさない。君もその一人とならないうちに、多加弥の前から姿を消していただきたい」
由起葉は怒りの沸点を通り越して顔面が蒼白になっていた。胃の中が熱くて、体に火が点きそうだった。今口を開いたら、いったいどんな言葉が出るだろう。由起葉は恐ろしくて唇を噛み締めた。

「わたしは仕事があるからもう行く。後で母さんが来てくれるから大丈夫だろう」

「……」

「多加弥。父さんはお前の行いを許しているわけではない。それはわかってるな？」

「……ああ」

「その腕を失ったとき、お前の柏井家の人間としての価値も失われるということを忘れるな」

父親は由起葉の方をちらりとも見ずに向きを変えると出ていってしまった。病室がしんと静まり返る。

張り詰めた糸を断ち切るように思い切り息を吸ったとたん、由起葉の目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「えっ、ちょっと……何？」

それに気付いた多加弥が慌てる。

「わかんない……。なんでかわかんないけど、涙が……」

「……」

「悔しいよ……。確かに関係ないかもしれないけど……すっごく悔しい」

ぬぐってもぬぐっても出てくる涙を邪魔そうにしながら、由起葉

はため息をついた。

「言ってやりたいこといっぱいあったのに……。あなたが黙ってるから、私まで何も言えないままだったんじゃない……」

「おいおい。言いがかりだろ」

多加弥は手を伸ばして由起葉の腕をとると、強く引いた。引っ張られた由起葉はベッドに手をつけて体を支える。顔を上げると間近に多加弥の顔があった。

「俺は平気だ。だからお前も泣くな」

多加弥は両手で由起葉の頬を包むと口付けた。いきなりのことにびっくりして動けずにいる由起葉に、多加弥は優しく微笑む。今まで見た顔のどれとも違う、本当に優しい表情だった。

好きになるわけなんてない。こんな訳のわからない男にときめくわけがない。ただちよつと……。そう、ほんのちよつと気にかかっただけだ。

まるで自分に言い聞かせるように心の中で思いながらも、由起葉はもう一度重ねられる多加弥の唇を拒否しようとはしなかった。

・あの頃の夢(4)

どうかしている。今までの自分では考えられない行動をしていることに、由起葉は自分自身で驚いていた。

悪いのはこいつだ。もう関わるまいと決めた矢先に喧嘩の場面に遭遇し、どう見てもやばい状況に陥っているのに逃げようもしないこの男を放っておけない自分が恨めしい。

「何しに來たんだよ」

「何しにって……。今にも倒れそうな人の言う台詞？」

「べつに、これくらい平気だ」

多加弥は口元から流れる血を手の甲でぬぐうと立ち上がった。腕の何ヶ所かが赤くなっている。下はズボンで見えないが、足も同じように腫^はれているかもしれない。

(なんでこう、次から次に喧嘩をふっかけられるわけ？この人の首に賞金でもかかってるんじゃないの？)

今回多加弥の前にいるのは、体格のいい男数人だ。高校生か、もしかしたらそれ以上の歳の者もいるかもしれない。とにかく力に差がある。正面からやり合うには分の悪い相手だ。

「どこが平気なのよ。だいたい手術してからそんなに経ってないじゃない。無茶にも程があるよ」

「俺が平気だって言ってるんだ。お前にごちゃごちゃ言われる筋合いはない」

「はあ？人が心配してるのに、何それ。とにかく、今日のところはやめにしよ」

由起葉は多加弥を連れて逃げるつもりで腕をとった。その手を多加弥は振り払う。

「なっ……」

「お前は帰れ。俺にかまうな」

多加弥は由起葉をにらんだ。ぞっとするほど冷たい目をしていた

が、それを受けても何も感じないほど、由起葉は腹立たしさで熱くなっていた。逆に多加弥が驚いてびくつとなる。

「なんなのっ？その態度。ああ、帰るわよ。帰りますとも。あなたを連れてねっ」

「……」

二人のやりとりを見ていた男たちは、タイミングを失い声をかけられずにいたが、いきなり言い合いをはじめたのを見て堪らず口を出してきた。

「おいっ、お前なんなんだ？いきなり来て俺たちを完全に無視か？」

「お前、こいつの女か？」

「お嬢ちゃん、助けに来たのか知らないけど、こいつの言うとおり早く帰った方がいいぜ」

にやにやしている男たちを由起葉はきつとにらんだ。そして多加弥の方に視線を戻すと、不快な色を浮かべる。

「なんであなたの傍にいただけで、すぐに女、女って言われるわけ？」

「知るかよ」

「あなたどれだけ女癖悪いの。そこらじゅうの女の子に手出してるから私までそんな目で見られるんじゃない」

「向こうから寄ってくるんだ。俺は断るのが面倒だから相手してるだけだ」

「はあ？あなた私には自分から……」

由起葉は思い出して、不覚にも赤くなってしまった。その様子に気付いた多加弥はにんまりと笑う。

「もしかして、キスのこと気にしてる？」

「しっ、してないよっ」

「初めてだった？ごめん、奪っちゃって」

悪びれた様子もなく、片手を軽く上げて謝る多加弥に対し、由起葉は顔一面を真っ赤にして震えた。怒りと呆れと恥ずかしさで、こ

の男もろとも全員ぶつとばしてやりたい気分だった。

「は・・・は・・・」

わなわなと震える由起葉に向かって、無視され続けていることに我慢がなくなつた男の一人が殴りかかってきた。

「初めてなんかじゃ、ないよっ」

由起葉は叫びにも近い声をあげながら、殴りかかってきた男を返り討ちにしてしまった。力は劣るが、スピードでは由起葉の方が勝っていた。相手の攻撃も完全に見切っている。

「・・・すごいな、お前」

いつもの由起葉なら、一人目を殴ってしまった時点で冷静さを取り戻すはずだった。しかし、どういうわけかまだ胸が高鳴っている。本当にどうかしていると思いいながらも、由起葉は覚悟を決めていた。

「こうなったら、やるしかないよね。一人じゃ無理でも、二人なら・・・」

「お前、あいつらとやり合う気かよ」

「だってしょうがないじゃん。もう一人殴っちゃったし。ごめんなさいじゃ済まないでしょ」

「でもあれは、あっちから仕掛けてきたんだし・・・」

「それに。これが終わらなきゃあなた帰るって言わないんでしょ？」

「・・・」

心底驚いた顔をしている多加弥を横に、由起葉はきっちり構える。その目は真剣に相手の様子をうかがっていた。

「なんだ？やる気か？」

「女を殴る趣味はねえが、やるってんなら仕方ねえな」
(すでに一人殴りかかってきてるでしょうが)

口々に言いながら構える男たちを呆れた目で見る。すると、多加弥が少し面倒臭そうに、ずっと由起葉の前に立った。この状況で由起葉をかばうつもりだろうか。

「なんのつもり？」

「もう、終わらせて帰る。お前は自分の身だけ守ってろ」

多加弥の周りの空気が変わった。触れようとすればその手が切れてしまいそうな、鋭く殺気立った気配を背中から感じる。男たちがひるんでいるような気もした。

本気、というやつだろうか。空気を震わせ、辺りを黒く染めてしまような狂気じみた感情が多加弥の体からにじみ出る。彼の力はどれほどのものなのか、由起葉は見るのが恐いような気がした。

「来ないなら、こっちから行かせてもらう」

「ふっ、ふざけんなっ」

多加弥の動きは早かった。あっという間に間合いを詰めると相手の一人の顔面を思い切り殴る。男は鼻血を流しながら倒れた。それを見て立ち尽くしている隣の男に回し蹴りが入る。足が高く上がり、もう少して相手の耳に当たりそうだった。由起葉は危ない、と一瞬心臓が固まる思いだった。多加弥は強いが、その強さで相手がどれだけ傷付くかを理解していない。

次々と倒されていく男たちと、その前で踊るように殴る蹴るを繰り返している多加弥を見て、由起葉は段々違うことを考えていった。（こんなのはダメだ……。このままじゃあの人、いつか大変なことになる・・・）

それは多加弥の行為が犯罪に及ぶ心配をしているわけでもなく、体がぼろぼろになって動かなくなる心配をしているわけでもなかった。由起葉は多加弥の力の在り方と、心の在り方を心配していたのだ。

おそらく多加弥の持つ能力は高い。だがその力を間違った方向に向かわせる隠れた心がある。多加弥自身がそれを見つめて制御しなければ、いつか全てを支配され己が壊れるか周りが壊されるかまでいくのではないかと、由起葉はぞっとしたのだ。

ぼろぼろの姿で口元の血をぬぐっていたはずの多加弥は、再び立ち上がってからのすごいスピードで男たちを全滅させていた。

広がる無惨な光景を前に、由起葉は関わらないという選択肢を捨

て
た。

・あの頃の夢(5)

「なんだよ。またお前かよ」

あれからというもの、由起葉は多加弥を見つけては喧嘩の最中に乱入していた。おなじみになりつつある登場に、多加弥は呆れ顔でため息をつく。

「情熱的な女は嫌いじゃないけど、しつこい女は嫌いなんだ」

「そりゃどうも。べつにあなたに好かれたいわけじゃないから、どうでもいいよ」

「俺だけじゃなくて、一般的にしつこい奴は嫌われるんだぞ」

「あなた以外にはしつこくしないから大丈夫」

「それって・・・愛の告白？」

「違うっ」

由起葉は隙について飛びかかってきたであろう男の一人を蹴り飛ばした。我ながら思う。段々喧嘩慣れしてきてしまった。強くなる一方で生傷も増えたが、数を重ねるうちに力の加減や間合いのとり方もわかってきたので、今は無闇に相手を傷付けずにやり合える。ただ、この強さの影に武術の存在があるのが心苦しくもあった。

（お兄ちゃんたち、ごめんなさい。神聖な武術の教えを喧嘩なんかに使ったりして、本当にごめんなさい）

心の中で謝りながら、由起葉は殴りかかってきた男の腕をとって投げ飛ばした。

「あの、もう今日はこの辺で終わりにしませんか？ ちょっとこの人と話があるんです」

さんざんカウンターで倒しておいて、由起葉は途中で相手のグループに頼み込む。これもいつものパターンだ。由起葉は多加弥のように、どちらかが立てなくなるまでやり合うようなことはしない。殺気立った場の空気をぶち壊す勢いで現れ、向かってくる相手は容赦なく倒し、そして中途半端なところでお願いしますと頭を下げて

しまう。

完全に闘志を削がれてしまった相手の男たちは、まずい料理でも食べたかのように顔をしかめ、由起葉が邪魔したせいという理由をつけて退散していった。

「お前、本当になんだよ」

「ねえ、もうやめなよ、こんなこと。あなたのしてることからは何も生まれないよ」

「喧嘩をやめろと言うのはわかる。周りの人間がいつも言ってることだしな。だけど、お前のやってることは結構危ないことなんだぞ？それわかってる？」

「・・・」

「なんだよ」

「心配、してくれてるの？」

「そりゃ、一応はするだろ。俺だって怪我することあるし、お前は女なんだし・・・」

思いもよらなかったかのように驚いた表情をする由起葉に対し、多加弥は妙に慌てた感じになってしまった。最近の立場が逆転したように、由起葉にペースを乱されがちだ。

「私の心配はするのに、自分の心配はしないんだ。あなたは自分が傷付くことは何とも思わないんだ」

「べつに。痛いのは好きじゃないけどな」

「いつか死んじゃうかもしれないよ？」

「いいんだよ。どうなったって・・・」

多加弥は顔を背けた。由起葉はそんな多加弥の襟元をつかんで、首を締めんばかりの勢いで引っ張った。

「うぐっ・・・」

「困る」

「はあ？」

「そうになったら、私が困るの。あなたがどうでもいいっていう自分の存在を、私は大切にしてほしいって思うから。どうなったって

いいなんて、絶対そんなことないって思うから」

「・・・・・・はあ」

（本当、暑苦しい奴だな・・・・）

熱を持って訴えてくる由起葉に、多加弥は面倒臭そうにため息をついた。ここまでしつこいのは初めてだ。言い寄ってくる女の子は多くいたが、ちょっとつき合って冷たくするとすぐにさよならで済んだ。なのに由起葉は突き放そうとしてもなかなか離れていってくれない。

「あのさ、お前俺のことが好きだからそんなこと言ってるの？」

由起葉はぱっと手を放した。そして本気で考え込む。

（考えるなよ・・・・）

「好きならつき合ってもいいよ？恋人らしいことなら、ひととおりしてあげるけど？」

「いや、それはいい」

由起葉はきっぱりと拒否した。

「なんだよ、それ。じゃあ何してほしいの？」

「そうだなあ・・・・。とりあえず、道場に来てほしい」

「はあ？」

「武術の道場なんだけどね。あなたはもっと強くななきゃいけないと思うの。自分に対して、もっと強く」

「お前、武術なんてやってたのか。どうりで強いわけだ」

「まあね。でも私は道場には通ってないよ。通ってるのはお兄ちゃんたちで、私は二人から教えてもらったの。あ、お兄ちゃんたちはあなたが倒れたときに助けてくれたんだよ。ちゃんとお礼も言わなくちゃ」

多加弥はものすごく面倒そうな顔をした。

「べつに助けてくれなんて頼まなかっただろ」

「でも、そのおかげであなたはこうして生きてる。いつもどおり喧嘩までしてる。ならお礼を言わなくちゃ」

「・・・・・・」

しぶっている多加弥の手を強引に引っ張って、由起葉は川沿いの道へと駆け上がった。

・あの頃の夢(6)

道場に着くと、ちょうど第二部が始まるころだった。この道場では一部と二部に分かれており、一部は中学生以下、二部は高校生以上となっている。曜日ごとにも内容が分けられていて、体を動かすための太極拳のようなものから、相手と闘う格闘技のようなものまで幅広い。そして今日は最も激しい棍を使った武術の日だった。

「あ、もう始まっちゃうね。ちよつとの間見学しとこ」

由起葉たちは道場の入口の隅に並んで中をのぞいた。由起葉が道場に来るのは珍しくないのですが、勝手に見ているのも特に何も言われな

い。
中では生徒たちが一葉の声に合わせて準備運動を始めていた。一葉はこの道場の中で主将を務めている。大会成績や武術の能力もちろん高いが、それよりも師範が自分の意志に最も近いとして一葉を選んだのだ。

「あの前にいるのが一葉兄ちゃん、あっちの端にいるのが二葉兄ちゃん。双子だから結構似てるでしょ」

結構どころか顔も背丈もほぼ一緒だ。それなのに二人はまるで違って見えた。髪の色なのか、それぞれの持つ雰囲気なのか。一葉が黒髪なのに対し、二葉はオレンジに近い茶色い髪をしていた。そして活気に満ちた激しいオーラを持つ二葉に対し、一葉は静かで流れる水のようなオーラを持っていた。

「そっくりなのに、全然違うな・・・」

「あの二人が顔以外も一緒だったら、私でも見分けがつかないよ」
ははは、と笑う由起葉は気付いていない。一葉と二葉が由起葉を溺愛するときに限っては、見分けがつかないくらいだということに。準備が整い、通し稽古に入った。各々が棒を手に、構えては打つ。一対一で向き合っている型の稽古では、激しい音が響いた。

「お前もできるのか？」

「私は棒術は教えてもらってないから。武術だって護身の意味でたたき込まただけだし、本当は喧嘩なんかに使っちゃいけないんだけど・・・」

「お前は俺に、あれをやらせたいのか？」

「べつに棒術をさせたいわけじゃないの。喧嘩のために強くなつてほしいんじゃない、私は喧嘩をやめるために強くなつてほしいの。そのための道がここにはあるんじゃないかって、そう思ったから・・・」

「俺には意味のあることだとしても？」

「あなたの喧嘩に意味なんてあるの？」

急に二人の上に影が落ちた。

「ユキハ、なんなんだ、こいつは」

腕組みをして立っていたのは二葉だった。次に行われる対戦形式の稽古の前に一度休憩が入ったのだ。

「君は川原で倒れていた子だね」

一葉も寄ってきた。二人並ぶと同じところと違うところがよくわかるようだった。鼻息を荒くしている二葉の横で、一葉は穏やかな表情を浮かべているが、二人の目はどちらも、由起葉の隣に立つ新参者をじつくりと観察していた。

「もう大丈夫なのかい？」

「平気みたい。今日はお兄ちゃんたちにお礼を言いに来たんだよ」ほら、と由起葉は無理やり多加弥に要求する。多加弥は顔をしかめたが、一応丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます」

これで用は済んだとばかりに帰ろうとする多加弥を、由起葉は腕をつかんで素早く止めた。それとほぼ同時に二葉が由起葉の反対の腕を引く。

「おい。どういう関係だ？名前しか知らないんじゃないのか？」

「いや、どういって・・・」

友達、とは言えないかもしれない。彼氏でもない。問われてみると、うまく答える言葉が見つからなかった。妙な間が、二葉の機嫌を悪くさせていく。

「そういえば最近、ユキハに怪我が増えたような」

「まさか、一緒になって殴り合いしてるわけじゃないよなっ?」

由起葉は詰まる。ほぼそれに近いことをしている。

「お前、うちの妹を巻き込んでどういうつもりだ」

「ち、違うよ二葉兄ちゃん。べつに私は・・・」

「巻き込んだりしてないですよ。むしろ関わるなって俺は言ってるんです」

多加弥は二葉をにらんだ。それを受けて二葉のスイッチが入ってしまったようだ。

「じゃあなにか? ユキハがお前にまわりついてるとでも言いたいのか? 自惚^{うぬぼ}れるなよ。かわいい妹を傷物にしておいて、知りませんじゃ済まないぜ」

「き、傷物って・・・。大げさだよ」

実際まわりついていている由起葉は、段々立場がなくなってきた。

おろおろと二人を交互に見つめる。

「じゃあお兄さんからも言ってもらえませんか? 正直しつこくて困ってるんです」

「しっ、しつこい? ユキハ、どういうことだ?」

「ちよっと、そんな言い方ないでしょ。私はあなたのこと・・・」

「なんだ? ユキハまさか、こいつのことが好きなのか?」

「そうじゃないってば」

「俺は許さんぞ。こんな自分の身も守れんばかりかユキハまで傷付けるような男、俺は絶対に認めん」

「もう、話がややこしくなるから二葉兄ちゃんはちよっと落ち着いてよ」

展開がメチャクチャだ。いつもなら抑えに入ってくれる一葉が黙っているところを見ると、二人して勘違いしている様子である。

（ああ、もう・・・最悪。こんなはずじゃなかったのに）

由起葉はうなだれてため息をついた。これ以上多加弥を引き止めることは無理だろう。そう思っていたのだが、思いに反して突然多加弥がずいっと前に出た。背の高い二葉を見上げる形で鋭い視線を向ける。

「守る必要がない人間はどうするんですか？」

「ああ？」

二葉は眉をぴくっと動かして怪訝な顔をする。多加弥の言っていることが理解できない。

「どうなったっていい人間は、身なんて守らないでしょ？」

「なんだと？」

二葉の代わりに一葉が応えた。

「そう言う君は、誰かを傷付けているんじゃないのかい？ どうなったっていいなら、自分だけが痛い思いをすればいい。相手を傷付けるのは自分の身を守るためだろう」

「・・・違いますよ。俺は守るものなんてないんです。ただ俺自身がどうでもいいのと同じで、周りの人間もどうでもいいんです。くだらない理由をつけて寄ってくる奴は、断るのも面倒だからやり合うだけです」

「君は、ひどく歪んでるな」

「なんとでも言うてください。世の中には、必要のない人間が生まれてくることもあるんですよ。・・・お二人にはわからないでしょうけど」

二葉はわなわなと震える手で多加弥の襟元をつかむと引き上げた。完全に頭に血が上っている。すぐに熱くなるのが二葉の悪いところだ。武術の教えは精神にも及ぶはずなのだが、並み外れた棒術の腕前に対し、心の鍛練はまだまだのようである。

「気に入らねえな。言ってることとやってることがムチャクチャじゃねえか」

「放つといってくださいよ」

「なんだと？ガキのくせに取り澄ました顔しやがって。ここまで親や周りの人がいて育ってきたんだろうが。それを必要ないだど？」

「・・・うるさいな」

（その親が存在価値を奪う場合だってあるんだっ）

二葉の言葉に多加弥のスイッチまで入ってしまった。ぐっと唇を噛むと二葉の手を振り払う。そしてむっとする二葉に向かって、多加弥は拳を突き出した。二葉はよけずに片手でそれを受けとめた。

「ずいぶんな態度だな」

「関係ないのにぐだぐだとうるさいからですよ」

「いい根性してるじゃねえか。俺が一度こてんぱんに叩きのめしてやるっ」

二葉は道場の中に多加弥を引っ張っていった。とんでもない方向に話がいつてしまい、由起葉はもうどうしていいかわからない。傍の一葉の袖を、訴えるようにつかんで見守る。

「大丈夫。もしものときは私が止めるから」

一葉は由起葉から一度離れて師範のところへ事情を説明しにいった。やれやれといった様子で師範はうなずいている。結構なんでもありな人なのだ。

道場の生徒たちが見つめる中、二人は燃えるような目で互いに見合っていた。もちろん素手で勝負する。体格の差もあり、二葉の方が有利に違いなかったが、喧嘩慣れしている多加弥の本気も計り知れない。

（なんでこんなことに・・・私の思いつきがこんなことになるなんて・・・）

しんと静まり返る道場の片隅で、由起葉は自分の行動を責めていた。

・あの頃の夢（7）

当然と言うべきか、勝負は二葉の勝利で幕を閉じた。何度かひやっとする場面もあったが、多加弥は結局決定的な一撃をひとつも当てることができずに、最後は二葉に投げ飛ばされて床に倒れていた。

「そこまでだ」

一葉が二人の間に立つ。ちらりと見ると、二葉は肩で息をしていた。珍しい。思った以上に多加弥にやられたということだろう。

「二葉、気は済んだか？」

「・・・すっきりしねえ」

二葉はぼそりと言った。多加弥と向き合う度に感じた、寒々しく気味の悪い気配。拳を交えても全くかみ合っていないような空虚な感覚は、悪夢のように二葉にまとわりついていた。

「君はかなり危ういバランスを保っているな」

一葉は天井を仰いでいる多加弥の上から言った。

「君はもっと強くならなければいけない。自分を抑えるほどの強さが必要だな」

「・・・あいつと同じこと言うんだな・・・」

多加弥は上半身を起こして一葉を見返した。その目は曇った空のように輝きを求めて暗く淀んでいた。

「ユキハの目は本質を見抜く。君に何があるのか知らないが、少なくともユキハは君に強くなるべきだと思っっているようだな」

「強さの先には、何があるんですか・・・？」

「守りたいものを、守れるようになる」

一葉は多加弥に手を差し伸べた。多加弥はその手を躊躇いがちにとって立ち上がる。

「守りたいものなんてない。強くなったところで、ほしいものは手に入らないってわかってる。先なんて、俺にはないんです・・・」
「君にはまだわかっていないことがたくさんある。たとえば自分の

ことだとしても、先の先までわかりはしないものだ。この先、もしも君に守りたいものができたとしても、今のままでは守ることなんてできない。それどころか君の手で壊してしまうことになるかもしれないよ」

「……」

多加弥は黙ったまま一葉と二葉に軽く頭を下げると、道場から出ていってしまった。

「ま、待って」

由起葉の呼びかけにも応えず、多加弥はどんどん歩いていく。急いで後を追おうと由起葉も道場を飛び出した。

「おいっ、ユキハ」

「ごめんなさい。後でちゃんと謝りに来るから、本当にごめんなさい」

止めようとする二葉を振り切って、由起葉は走って行ってしまった。

「ユキハ……。なんであんな奴を……」

「二葉、まあ落ち着け。まだ彼がユキハの相手と決まったわけじゃない。ユキハの放っておけない優しさが、ちよつと強めに出てるだけかもしれないし、な？」

一葉はなだめるように二葉の肩に手を置く。しかし言葉とは裏腹に、一葉の手には力がこもっていた。

「一葉……痛い」

「はは。若いって、本当恐ろしいよな」

（お前も充分恐ろしいよ）

妹をこよなく愛する男二人は、由起葉たちの消えていった方を見つめて、どんよりと表情を曇らせた。

「ねえ、待ってよ。ねえってば」

やっと追いついた由起葉は後ろから何度も呼びかけるが、多加弥は完全に無視して歩き続ける。

「ごめん。二葉兄ちゃんてすぐかっとなるところがあって、まさ

かあんなこてんぱんに・・・って、べつにあなたが弱いとかそういうことを言いたいんじゃないかってね・・・」

由起葉は後ろにぴったりとつきながらしつこく話しかけた。反応はないが聞こえていないはずはない。今日のことで変に誤解されてしまったら、今までしてきたことが無駄になってしまう。由起葉は必死だった。

「私ももう少し考えればよかった。あなたのこと、まだよく知らないのに、軽率だったよね・・・。反省して・・・って、えっ？」

突然由起葉は腕を押さえられ、傍の民家のブロック塀に押しつけられた。多加弥の目がすぐ近くで見ている。もう辺りは暗かったが、その中でもひととき黒く光っているような目の色に、由起葉は息を呑んだ。

「お前には、あるのか？」

「・・・」

「守りたいもの」

「・・・守りたい・・・もの？」

由起葉は考える。自分のことを愛して止まない兄二人。一人で立派に家族を支えてきた母。笑いの絶えない友人たち。そして、悪夢の中から救い出したい目の前の存在。

「あるよ。たくさんありすぎて、私一人じゃ守れないくらい」

「だからお前は強いのか？俺から見たら、お前は強い気がするんだ」

「どうか。そうかもしれないけど・・・でもね、私はずっと昔に大切な人を守れずに失ったの。私は幼くて、守る力なんてなかったんだけど、でも、強くならなきゃ年をとって一緒にできるものもできないし、守れるときに守れない。私は生きてる今に、できることをしたいって思うの」

多加弥は由起葉の腕を放した。塀に押しつけられていた体が自由になる。ほっとしたのもつかの間、今度は多加弥に抱きしめられて身動きがとれなくなった。

「ちょ、ちよつと・・・」

「俺も・・・できるかな・・・」

小さな声だった。それでも耳元でつぶやかれたので鮮明に聞こえる。

「お前となら・・・変われるかもしれない・・・」

多加弥は今どんな顔をしているだろう。由起葉には見えないが、もし見えたとしたら自分はどんな顔をするだろうか。

いつも瞳を曇らせて、世の中の全てのものを関係ないと切り捨ててしまう冷たい心の持ち主。それなのに触れた体は思いの外熱くて、由起葉は思わず泣きそうになってしまった。多加弥は生きている。世界は彼を大切にしてくれている。

「変われるよ。あなたがそう願う限り」

由起葉はまだもう少し、多加弥の隣でその行き先を見守っていたと思った。

・あの頃の夢(8)

あの日から多加弥の姿をまったく見なくなってしまった。血氣盛んな男たちの喧嘩話は聞こえてくるが、柏井多加弥の名はどこにも登場しない。

(いったい何があったんだろ……。二葉兄ちゃんにやられたことが相当ショックだったとか……。? いやいや、そんなわけないよ、うん)

多加弥についての情報はあまりにも少なく、由起葉には探しようもなかった。あんなにたくさんの時間一緒にいたのに、何をやっていたんだと我ながら思う。多加弥の中学校まで行ってみようかと思っただけもあったが、迷っているうちに期末試験が始まり、そんな余裕もなくなってしまった。

そしてついに終業式の日を迎えた由起葉は、浮かない顔で頬杖をついていた。明日から夏休みに入ってしまう。こんな気持ちで休みを迎えるなんて初めてのことだった。

そこに、机に激しくぶつかり痛がりながら、芽衣が駆け込んできた。由起葉を見つけると、肩をつかんでぶんぶん揺さ振る。あまりの勢いに由起葉の頭は壊れた人形のようにかくかく動いた。

「ユキハちゃん。大変っ。大変だよっ」

「ちよっ……。ちよっと……。落ち着いて……。死ぬっ」

「あっ、ごめん」

揺さ振るのをやめた芽衣は、それでもそわそわした様子で由起葉をうかがっている。

「で、何が大変だった?」

頭を押さえて聞く由起葉に、芽衣は大変さを精一杯伝えようと両手を広げて説明する。

「ユキハちゃんに会いに、恐そうな男の子たちが来てるの。あの柏井って人と同じ中学の人だよ」

「え？」

芽衣は窓に寄って指差した。

「ほら、あの人たち。さっき帰ろうとした子が岬由起葉を連れてこいって言われたって言いに来て……。まさか知り合いじゃないよね？」

芽衣に並んで由起葉も門の辺りを見る。校門から出てすぐの辺りに、確かに多加弥と同じ制服を着た男の子たちがいた。

「たぶん知らない」

「たぶんってなに？ユキハちゃん最近危ないことしてるみたいだったし心配してたんだよ？私が先輩を助けてなんてお願いしたせいで、ユキハちゃんあの柏井って人に巻き込まれてるんじゃないかって。今会いに来てる人たちだって普通じゃなさそうだし、きっとあの柏井って人と関係あるんだよ」

「メイ」

両手を握りしめて訴えかけてくる芽衣に、由起葉は優しく微笑んだ。

「心配してくれてありがとね。でも、あの人は……。柏井多加弥はそんな人じゃないよ」

「な……。何言ってるの？」

由起葉は男の子たちに会うため、一人教室を出ていった。後ろから芽衣の声が追いかける。

「ユキハちゃん、裏門から逃げた方がいいよ。ユキハちゃんは強いけど、女の子なんだよっ？」

由起葉はグラウンドを突っ切って、真っ直ぐに正門へと向かっていった。それに気付いた男の子の中の一人が前に出て待ち構える。

男の子は全部で五人。その中でも一番背の低い、髪を立てた男の子だった。

「岬ユキハってお前か？」

「そうだけど、何か？」

「タカヤのことで聞きたい。お前、あいつに何した」

「は？何って・・・何もしてないけど・・・」

「しらばっくれんな。お前がタカヤにまわりついてたのは知ってんだかな。お前が何かしたから、あいつは急に・・・」

「あの人に何かあったの？」

話の途中で由起葉はずいっと身を乗り出した。怯えた様子ひとつ見せない由起葉に、男の子の方がたじろぐ。

「だから、しらばっくれんなって言ってんだろ」

「教えて。あの人に何があったの？」

「あのなら・・・」

呆れた顔をする男の子は、由起葉の後方に教師の姿を見つけて話を止めた。

「こんなところでいつまでも話すつもりはねえ。ついてこい」

喧嘩を売りにきたわけではないようだ。他校で問題を起こすのはまずいとちゃんと理解している。

由起葉は躊躇うことなく、男の子たちの後をついていった。

ついたのは川原だった。いつも多加弥が喧嘩をしている場所から少し下ったところにある開けた場所で、古びた倉庫が建っていた。ここが彼らの縄張りともいうやつだろうか。

さっき門のところで話した男の子が、やはりここでも由起葉と向き合った。このグループのリーダー的存在なのだろうか。背が低くやんちゃな印象で、正直あまり強そうには見えなかった。

「オレは須王亮平だ。タカヤについて聞きたい」

「スオウくん。私、あの人について話せることなんてないの。だって名前くらいしか知らないんだもん」

「そんなわけないだろ。一緒にいたんだろ？」

「知ろうとしなかったの。あの人も話さなかったし・・・」

「マジかよ・・・」

亮平は気が抜けたように肩を落とした。

「でも、今回のことにお前が関係してる可能性はある。今までずっと反発してきたあいつが急に親父の言うとおりにするなんて、何かあったとしか考えられないからな」

「お父さんの？」

由起葉の頭に、病室で会った厳しく冷たい男の姿が思い出される。あの人は喧嘩をやめるようにと暗に示唆していた。その父親の言うとおりにしたということは、喧嘩をやめたということなのだろうか。

「あの人、もう喧嘩しなくなったの？」

「お前、やっぱり何か知ってんじゃねえか」

「あの人のお父さんには会ったことがあるの。まるで相手にされなかったけど・・・」

「お前、とんでもないところは関わってるんだな。あいつの親父はピアノストなんだ。家族の全員が音楽をやってて、もちろんあいつもやらされてる」

「ピアノスト？」

二人のしなやかな長い腕と綺麗な指が思い浮かぶ。あの手はピアノのためにあったのか。

「ピアノストの卵が喧嘩なんて、ムチャクチャだ・・・」

「あいつはピアノが嫌いなんだ。だからずっと反発してた。なのに突然、あいつは・・・タカヤは親父と一緒に海外に行っちゃった」

「えっ？」

「テストの次の日にはもういなかった。わかってるのは、タカヤが親父についていったってことだけだ。どれくらいで帰ってくるかもわからない」

びしっと、亮平は由起葉に人差し指を突き出した。

「お前の存在がタカヤをおかしくしたんだ。いったい何をした。」

以前のタカヤを返せ」

「そんな……。私は何もしてないってば」

「嘘つくなよ。お前、あの親父と何か企んでるんじゃないのか？」

「違うつてば。私は何も知らないの。あなたに話せることなんてないし、もういいかな……」

由起葉はしつこく言いがかりをつけてくる亮平から逃げるように体を引いた。

「おいっ、逃げる気か？」

亮平は由起葉の腕をつかんで止めようとする。その瞬間、由起葉は素早く逆手をとって亮平を投げ飛ばしてしまった。

「なっ……」

川原に仰向けに倒れ、空を眺める形になった亮平は目をぱちくりさせている。何が起こったのか理解するのに少々時間を要した。

（しまった。いつもの調子で、つい……）

「あの……。ご、ごめん……。？」

言いながら由起葉は少しずつ亮平から離れた。この状況はまずい方向にいく。

「お前、やんのかっ」

「いきなり何すんだ、この女あまっ」

「やっぱり、そうなりますよね？」

言い訳しても仕方がないので、由起葉は早々に逃げた。口々に騒ぎながら男の子たちが追ってくる。やり合ってもなんとかなったかもしれないが、無駄に喧嘩はしたくない。

どやどやとみんなが川原から去った後で、やっと亮平は起き上がった。

（あの女……。何なんだよ）

夏の空はどこまでも青く、亮平ははるか遠くにいるであろう多加弥のことを思っ、雲の流れを見送った。

・あの頃の夢(9)

夏休みも半ばまで来た。由起葉はなんだか心がもやもやし続いている、自分から遊びに行く気が起きず、なんとなく机に座っている時間が長かったせいで宿題も終わってしまった。いた。

こんなことは珍しい。自分でも思うことを、家族が気付くのは当然のことだった。小さな庭にしゃがみこんで雑草をつまんだまま止まっている由起葉の上から、優しい声が降る。

「どうしたんだい？」

はっとして振り返ると、微笑みを浮かべて一葉が立っていた。

「どうもしないよ。今草むしりしてたところ・・・」

「そのわりにはまだ三本しか抜けてないみたいだけど」

由起葉の足元に置かれた三本の草を見て、一葉は苦笑する。

「こっ、これからだから」

由起葉は慌てて手を動かしかじめた。どのくらいここでしゃがみこんでいたのだろう。気付かぬうちに足がしびれ、由起葉は前に動こうとして支えられず転んだ。

「無理しなくていいんだよ」

一葉は由起葉の前に回り込むと、冷えたペットボトルを頬に当てた。冷たさに由起葉はびくっと肩を動かす。

「こんな暑い日にいつまでもぼうっとしてたら熱中症になるよ。」

ほら、これ飲んでちよっと休憩しよう」

「うん・・・。ありがとう」

足がまだしびれていたもので、由起葉は一葉に手を貸してもらってリビングの窓際まで行った。リビングの窓とカーテンを開けて、庭に足を投げ出す形で並んで座る。由起葉はペットボトルの中のスポーツドリンクを一気に半分まで飲んだ。知らぬ間に相当喉が渴いていたようだ。

「一葉兄ちゃん、今日は仕事休み？」

「うん。夜には寮に帰るけどね」

一葉の会社は家からでも通える場所にあつたが、入社して三年までは会社の寮に入れるというので、一葉はそちらを選んでいた。一方の二葉は一人暮らしをしているわけでもないのにほとんど家におらず、所在不明に近い謎な生活を送っていた。

「お休みなんだたら、どこかに連れていってもらえばよかったな」

もったいないといった風を装う由起葉の顔を、一葉は見透かしたような目で見つめた。

「そんな気分じゃ、ないんじゃないのかい？」

「・・・」

「気になってしょうがない。そんな顔をしてるように見えるよ」

「べつに・・・私は・・・」

「ユキハ。私たちがどれだけユキハのことを見てるか知らないのかい？ユキハの気付いていないことでもわかるくらい、いつも気にかけているんだよ。きっと、そのうち二葉も・・・」

言い終わらないうちに、誰かが門を開けて庭に飛び込んできた。

今口に出したばかりの二葉が、しばらくぶりだというのに荷物ひとつ持っていない状態で現れた。

「おっ、一葉。来てたのか」

「たまたま休みでね」

「いやあ、暑い、暑い。ユキハ、それちょうだい」

手の平で仰ぎながら近付いてくると、二葉は由起葉からペットボトルを受け取り、残りを一気に飲み干した。

「二葉兄ちゃん、なんで急に帰ってきたの？」

「なんでって・・・俺もたまたま休みだったからさ」

「お前の場合は休みじゃなくても帰ってくるのが普通だろう。いたいどこで生きてるんだ、お前は」

「いろいろだよ。いろいろ。それよりユキハ、お前まだそんな顔してるのか？」

ものすごく気になる部分をいろいろであっさり片付け、二葉は由起葉の顔をのぞき込んだ。

「そんなんて・・・どんな？」

「元気がないって言ってたんだ。中学二年の夏休みはもう二度と来ないんだぞ？そんなもつたいたいない過ごし方じゃ、後々後悔するぜ」

「・・・」

由起葉は顔を歪めて泣きそうな表情になった。どうしてこの二人は自分に必要なことをさも当然のように言い当てるのだろう。本当はわかってる。自分がどうしたいのか。でも、そこに辿り着く術^{すべ}が今はないのだ。

「よしっ、ユキハ。ちょっと走ってこい」

「は・・・はい？」

「走ると気分がすっきりするぞ。それに、思いがけないことにぶち当たることもある」

「その言い方、なんだか縁起が悪いな」

「車にさえ気を付ければたいは大丈夫だ。そういうわけで行ってこい」

訳のわからぬまま、由起葉は走るようになってしまった。この真夏日に走ってこいと言う、愛なのか何なのかわからない二葉の言葉に、一葉は少々呆れながらも反対はしなかった。途中でちゃんと水分をとるようにと、小銭を渡してくれる。

「じゃ、じゃあ、行ってくる・・・」

「おう。今夜は一葉が帰る前に、みんなで夕飯にしような」

「うん」

四人揃っての食事は久しぶりだ。由起葉は少し走りにいくのが楽しみになった。

そういえば最近、体をあまり動かしていなかったかもしれない。いざ走り始めてみると、以前より足の動きが鈍くなっていることに気付く。もともと体力にはそこそこ自信があるし、走ることも苦手ではなかったが、あのまま家にこもっていたら夏休みが終わる頃

には思ったように動けなくなっていたかもしれないと思うと、二葉に強引に走りに出されてよかったかもしれないかった。

ルートは決めていなかった。足の赴くままに走っていくと、いつしか由起葉はあの川沿いの道に出ていた。やはり自分の心に影を落としているのは彼なんだと、再認識する。会いたい。そう思っ川原の方に視線を向けた由起葉は、そこに一人座り込んでいる男の子をはっきりととらえた。

思いがけないことにぶち当たる。二葉の場合は車だったかもしれないが、由起葉は多加弥という目的の人物にぶち当たることができた。

走ったせいだろうか。それとも別の理由でだろうか。心臓がばくばくいつている。由起葉は胸を撫で下ろして気持ちを落ち着けると、ゆっくりと川原に降りていった。

多加弥はスーツを着ていた。とはいっても、この暑さの中で着ていられるわけもなく、ジャケットは脱ぎ捨てられ、ネクタイを外した胸元は第三ボタンまで開いていた。髪を切ったようで少しさっぱりしている。この男は日焼けしないのだろうか。捲られた袖から伸びる腕は、相変わらず白かった。

「今日は喧嘩してないんだね」

びっくりするかと思いきや、多加弥は声の主をちらりと見ただけでまた視線を川面に戻した。想定外の反応に由起葉は慌てる。

「あの、えっと・・・久しぶり。ずっと、どこに行ってたの？」

「・・・」

「もしかして怒ってる？まだあの日のこと・・・」

「ここにいれば、また会えるかもしれないって思ってた」

「え？」

「本当に会えるなんてな」

突然多加弥は由起葉の手を握った。そして改めて由起葉の方を向く。その目からは以前のような陰りが消えていた。

「お前、俺のこと好きだろ」

「なっ・・・何言って・・・」

由起葉は顔を真っ赤にする。からかわれているのなら、恥ずかしいくらい反応してしまっている自分が悲しい。もう態度でバレバレだ。

「・・・どうなのかな。ただ、ずっと気になってた。もう一度会いたいって、思ってた・・・」

「認めるよ。それが好きってことだろ」

「うっ・・・そう・・・かな」

「俺も会いたかった。早く帰ってきて伝えたいことがいっぱいあった」

由起葉は手を引かれるまま、ゆっくりと多加弥の横に座った。何度も来た川原だが、こんな風に並んで川面を眺めたことなんて一度もなかった。

「どこに行ってたの？お父さんについていったって聞いたけど・・・」

「誰から聞いたんだよ」

「スオウくん・・・」

「なんでリョウが？・・・まあいいや。お前が聞いたとおり、俺は父さんと一緒にヨーロッパに行ってた。俺の父さんはピアノストで、公演についていったんだ。結構有名な人なんだぜ。クラシックに興味がない人間は知らないだろうけど」

「ごめん・・・全然知らなかった」

「だろうな。じゃなきゃ、あんな風に父さんにくっつかかったりしないよ」

病院でのことを言っているのだろう。由起葉は恥ずかしい反面、なんて恐ろしいことをしていたのかと内心ぞっとした。

「あなたもピアノを弾くの？」

「俺は・・・落ちこぼれなんだ」

「・・・」

「俺の家はみんなが音楽をやっていて、当然俺もやる運命にあっ

た。でも、俺には才能がなかったんだ。音楽一家に生まれながら、全く芽の出ない俺は失望され、自分の価値を見失った」

「だからどうなってもいいなんて言ったの・・・？」

「本当は、消えてしまいたかった。毎日のように殴り合いをして、ぼろぼろになって、手も足も動かなくなってしまうばいいんだって、投げ捨てるように思ってた」

「でもあなた、やられてるだけじゃなくて、むしろ相手をボコボコにしてたじゃない」

「ただ殴られるだけなんて我慢できないだろ」

「正論のような矛盾のような・・・」

とにかく多加弥が今まで無事でよかったと思う。何事もなくとはいかなかったが、とりあえず元気でここにいる。

「俺は、まだうまく生きることができない。どこまでいっても音楽はつきまとうし、向き合ったところでピアノの才能はないと思い知らされる。でも、今までのように逃げてばかりいるのはやめようって、お前に会って決めた」

「私に会って・・・？」

「お前がいてくれたら、変われる気がするんだ。俺は父さんの期待に応えられず、自分の価値を見失ってた。けど、お前は俺に価値を与えてくれる気がするんだ。俺は俺として生きて、お前を守る。そうやって強くなりたい」

「・・・なにそれ・・・なんか泣けてくる・・・」

由起葉は涙のあふれてくる目をぎゅっと瞑った。

「泣くようなこと言っていないだろ？」

「いろいろ・・・いろいろうれしくて。絶対変われるよ。私が見てるから・・・それまでずっと見てるから・・・」

「・・・」

多加弥はそっと顔を寄せて由起葉にキスをした。びっくりした由起葉は目を見開いたが、再び静かに瞼を閉じた。

「そういえば、俺が初めてじゃないんだっけ」

「あ、あれ？あれは、その・・・」

「なに？」

由起葉は別の意味で顔を赤くした。

「私のファーストキスは、お兄ちゃんたちに奪われてるから・・・」

「

「はあ？いつの話だよ」

「もうっ。そんなに突っ込まないでよ。ちょっと悔しかったから見栄張っただけじゃない」

「なあんだ」

多加弥は安堵したように息をつくど、少し笑った。そんなことを気にするタイプには見えなかったのに、由起葉は意外な一面に内心驚いていた。

「じゃあ、俺がお前の初めてだ」

「そう・・・だね」

「俺も初めてだ。キスするのにドキドキするの」

由起葉は再び真っ赤になった。多加弥の影のない笑顔に完全にやられてしまっている。この人が強いだけでなく、優しさと本来の笑顔を身につけたとしたら、今までの数倍はもてるようになるんじゃないだろうか。由起葉はほんの少し不安になった。

「ねえ、名前・・・。お前じゃなくて、名前で呼んでよ」

「そういうお前だって、俺のこと・・・」

「ほら、また」

「・・・」

急に多加弥がそわそわしだしたので、由起葉は思わず笑ってしまった。

「結構かわいいとこあるんだね、タカヤ」

鼻先をちゃんと指で突かれ、多加弥はふてくされた顔をする。もつとたくさんのいろんな顔を見てみたいと由起葉は思った。

「バカにするなよ・・・」

「ごめん、ごめん」

「・・・俺が守るから。好きだよ、ユキハ」
多加弥は由起葉の手に自分の手を重ね、もう一度キスをした。

・あの頃の夢（10）

ゆっくりと目を開ける。みぞおちの辺りが少し重く、なんだか体がだるかった。腕が痛い。夢から覚めた由起葉は今の自分の状況を確かめようと、ぼけた頭を動かしはじめた。

（昔の夢なんか見ちゃった……。須王くんに会ったりしたから……。っ）

そうだった。神社で亮平に会い、自分は気絶させられたのだ。急いで周りを見回す。どうやら自分はどこかの倉庫の中にいるようだ。埃臭い小さな建物の中に、木材や鉄パイプなど、資材が置かれている。

（ここって、どこかで見たような……。）

由起葉は思い出した。この倉庫は亮平たちがよく使っていた、川原にあるものだ。やはり自分は亮平に連れてこられたのだと認識する。動くように腕をとられた。見ると、由起葉の手は二つをあわせて頭の上辺りで資材置き用の鉄の棒に括り付けられていた。ぺたんと両足をつけた状態で座らされ、両手を腕ごと上げられている由起葉は、ほとんど動くことができなかった。

「おっ、気がついたか」

声のした方を向くと、古びた木箱の上に亮平が座りこちらを見ていた。

「ちょっと、どういうことなの？これ外してよ」

由起葉は腕を自由にしておいて訴えるが、亮平は聞くつもりはない様子で黙っている。

「こんなことしなくても逃げたりしないよ。おかしいやり方でタカヤを刺激しないで。須王くんとなら、タカヤはちゃんと話してくれるよ」

「。。。。」

「ねえ、聞いているの？タカヤが暴走したら、須王くんじゃ止めら

れないかもしれないんだよ」

「・・・あいつのことなら何でも知ってるように言うんだな・・・」

亮平は立ち上がると由起葉に近付いた。前まで来るとしゃがみ込み、じいっと由起葉を見つめる。まるで珍しいものでも見るかのように、じっくり観察している目だった。

「なんでお前なんだろうな・・・」

「なっ、なによ。私じゃいけないっていうの？」

「タカヤの周りには山ほど女がいたんだぜ？お前とつき合うようになってからだって、密かに人気あったし。なのに他の女には全く興味を示さずお前一筋。どこにそんな魅力が・・・？」

亮平は段々と由起葉に迫ってくる。不思議そうな目はそのまま、由起葉の顔の鼻先まで寄ってきている。

「ちよっ、ちよっと。近いっ」

由起葉は精一杯体を遠ざけようとするが、腕が固定されているのでたいした抵抗にはならなかった。

「お前のこと、知りたくなってきた」

「は、はい？何言ってるの？知るって、何をどう・・・って、どこ触ってんのっ」

亮平の右手は由起葉のスカートから出た太股の部分を押さえるように当てられ、左手は脇腹の辺りから今まさに服の中に入ろうとしていた。

「やめてよ。冗談でしょ？」

「タカヤとはしてるんだろ？」

「なっ、何をよっ。変なことしたら本気で怒るよっ」

「この状況でよく強気なこと言えるな。そういうところがいいのか？」

「知らないから。とにかく離れてよ」

「オレ、冗談で言ってるわけじゃないぜ。ずっと前から気にはなってたんだ。お前のことがもっと知りたい」

「だからって、もつと違うやり方があるでしょ。なんでこんな・・」

言いながらも、亮平から逃げることはできない。

(ダメだ。このままじゃ私、須王くん・・・)

精一杯顔を背けてみるが、無駄だった。亮平の唇が近付いて、今にも触れそうになる。

(タカヤっ。助けに来て)

ぐっと目を閉じたそのときだった。急に押さえられていた箇所が解放される。亮平が由起葉から離れたのだ。

「タカヤっ」

勢いよく目を開けた由起葉の前には多加弥が立っていた。拳を振り下ろした形で亮平をにらんでいる。どうやら殴りかかったらしいが、亮平も素早くよけたようで、少し離れて多加弥を見ている。

「リヨウ。お前ユキハに何した」

「なんでここがわかったんだよ。まだ連絡してないのに・・・」

「俺はユキハがどこにいてもわかるんだ」

由起葉は倉庫の入口にナギの姿を見つけて納得した。ナギが多加弥をここまで連れてきてくれたのだろう。

「ユキハ、ユキハって。そんなにこいつが大事かよ」

「当たり前だ。俺のユキハにおかしなことしてみろ。いくらリヨウでもタダじゃおかない」

「へえ、そりゃすげえや。本気でオレとやり合うってわけだ」

「・・・」

「恥ずかしそうにしちゃってさ、結構かわいいところもあるよな。触り心地もよかったぜ、そいつ」

「ばっ、バカ。何言ってるの？」

亮平は思わせぶりに自分の唇に指を当てる。まだ触れる前に多加弥が来て助けてくれたのだが、多加弥にはどんな風に見えていたのかわからない。勘違いだとしても証明できる状況ではない。

「タカヤ、違うの。何もされてないよ、私」

「おいおい。隠さなくてもいいじゃねえか」

「あなた死にたいの？誤解するようなこと言わないでっ」

亮平はへらへらしているが、明らかに多加弥のまとうオーラが変わっている。どんどん黒く渦巻き、由起葉はその姿にぞくつとした。

「リョウ。お前がそんな奴だったとは知らなかったよ」

「やっとやる気になってくれたか」

「覚悟はできてるんだろうな」

「当たり前だ。本気のお前に勝ってこそ意味がある」

亮平にはわからないのだろうか。多加弥は完全に狂気に吞まれてしまっている。怒り全開の多加弥を、わくわくした様子で迎え撃つ亮平は、命知らずとしか思えなかった。

「やめてタカヤ。落ち着いてよ」

由起葉の声も虚しく、二人はついに拳を交えてしまった。

昔はあんなに小さかった亮平も、今では多加弥を上回るほど背が伸び、その力は数倍は増しているようだった。亮平の攻撃をガードして受ける度、多加弥に衝撃が走る。だが、力だけで倒せるような相手ではない。多加弥は鋭い目つきで亮平の動きを追いながら、ここだという一点で体を少しだけずらし、拳を流すとそのまま腕をとり下に押し込みながら顔面めがけて足を振り上げた。

急いで亮平がもう一方の手でガードする。多加弥はすぐさま足を下ろし、力を込めると持った亮平の腕を振り回すようにして亮平の体を横倒しにしようとした。堪えようとするが、流れるような多加弥の動きが早すぎてついていけず、亮平はバランスを崩して引っ張られる。すると、多加弥は素早く腕を放して、今度は亮平の脇腹辺りめがけて足を振り下ろした。思い切りくだった亮平はうめき声と共に床に打ち付けられる。

顔をしかめて起き上がろうとしたところへ、多加弥が馬乗りになる。口元をにやりと歪めた多加弥は、躊躇うことなく亮平に拳を振り下ろした。そのまま何発も繰り返し繰り返し殴る。その目は怪しく光り、狂気が全身からあふれていた。

「タカヤ、もうやめて」

由起葉は危険を感じて必死に声をかけるが、多加弥にはなかなか届かない。このままでは亮平の命が危ないかもしれない。それに多加弥も、もう元に戻れなくなってしまうかもしれない。

「タカヤっ、お願い。もうやめて」

亮平はぐったりしてしまっている。多加弥の拳には血が付き、顔にも飛び散って悲惨な情景だった。

「お願いだから・・・タカヤ」

ふと、多加弥が殴るのをやめて由起葉の方を見た。じっと見つめながら亮平から離れて由起葉に近付いていく。両手について由起葉と目線を合わせると、そのまま顔を近付けてキスをした。

「タ・・・カヤ？」

由起葉は探るように多加弥の表情をじっと見る。今どういう状態なのかわからない。

「ねえ、何されたの？」

「何もされてないよ。タカヤが来てくれたから平気だった」

「本当に？」

「うん。ほんと・・・あっ・・・」

急に首筋を舐められて、由起葉は思わず反応してしまった。

「本当にされてない？　こういうこととか・・・」

多加弥は首にキスをしながら由起葉の服の中に手を潜り込ませてくる。

「ちよっ、ちよっど。タカヤっ？」

「ユキハ、リヨウに触られてた」

「タカヤ？」

「ユキハは俺のなに・・・」

抱きつかれキスを浴びせられ、ただでさえ動けないのにくらくらしてきた。

（このままじゃタカヤにされるがままだ。早く元に戻さないと・・・）

今の多加弥からは由起葉への独占欲だけしか感じられない。おかしな感情で好き勝手にされるのはごめんだった。

由起葉は決心して、多加弥を闇から連れ戻すための行動にでた。

「・・・あ・・・やっ・・・タカヤ・・・」

「かわいい、ユキハ」

「タカヤ・・・お願い・・・」

精一杯甘い声を出し、目を潤ませて多加弥を見る。

「手・・・外してほしい。私も、タカヤに触れたい・・・」

「ユキハ・・・」

「ねえ・・・お願い」

熱を帯びた顔で一生懸命おねだりしてくる由起葉の頼みを、多加弥が聞かないわけがなかった。由起葉の体から一旦手を離すと、括られている手を自由にしてくれる。

「ありがとう、タカヤ」

由起葉はにつこりと多加弥に笑いかけた。と、次の瞬間、一気に鋭い目つきになったかと思うと、由起葉は多加弥を思い切りひっぱたいた。近距離でもろにくらった多加弥は目をぱちくりさせて座り込む。

「いいかげんにしろっての。バカタカヤっ」

「なっ・・・」

まだだ。混乱状態にはあるが、まだ戻っていない。由起葉は立ち上がって多加弥を見下ろすと、びしっと指を突き出した。

「こんな状況でやらしいことするなんて最低。そんなタカヤ、大っ嫌い」

「なっ、なんで」

多加弥も立ち上がり由起葉に不安げな表情を見せると触れようとしてくる。由起葉は容赦なかった。とどめとばかりにその手をとると、素早く懷に入り込んで多加弥を投げ飛ばす。多加弥の体はきれいに回って、硬い床に叩きつけられた。

「いっ・・・痛ったあ」

「タカヤのバカ」

由起葉の目には演技ではなく、本当の涙がにじんでいた。

「こんなことで心乱されて……。せっかく強くなったのに、私のことなんかで……。バカ……。タカヤのバカ」

「ユキハ……」

上半身を起こした多加弥に、由起葉は泣きながら抱きつく。しがみつくようにして肩を震わせる由起葉を、多加弥はそっと抱きしめた。

「ごめん……。俺……」

「戻らなかったらどうしようかと思った……」

「本当にごめん。でも、リョウが……」

その亮平は、見るも無惨な姿で完全に氣を失っている。あそこまでやる必要はなかった。

「須王くんじゃなかったら、どうなってたかわかんないよ？」

「……」

「心の闇に囚われちゃダメ。人を傷付けることは自分を否定することと同じ。自分を否定することは、タカヤを愛する私を否定することと同じ」

「うん……。ごめん」

「でも、助けてくれてありがとう。タカヤはいつも助けに来てくれるね」

「俺とユキハは、つながってるから」

二人はしっかりと手を握り合いながらキスをした。今度はお互いが思い合いながらの、暖かく優しいものだった。

・あの頃の夢（11）

「ユキハ、また変な奴連れてきたのか？」

まだ気を失っている亮平を一葉のところに運び込み、手当てをしていると二葉がやってきた。二葉は武術のない日でもたまに一葉に会いにくる。用があってもなくても、気まぐれで現れるのだ。

「ひでえな。まさかユキハ、お前が・・・」

「そんなわけないでしょ。やったのはあっち」

由起葉は顔を冷やすために氷を用意している多加弥を指差す。それに気付いた多加弥は気まずそうにうなだれた。

「なんだ、まだ制御できねえのかよ」

「・・・すいません」

「全然成長してねえな。まあ、こいつがユキハに何かしたからなんだろうけど」

二葉は亮平の顔を、嫌なものでも見るような目で一瞥^{いちべつ}した。

「二葉兄ちゃん、わかるの？」

「タカヤがここまでやるのはユキハのためとしか考えられないからな。だからって認められるようなことじゃないが・・・で、何されたんだ？ユキハ」

「い、いや、たいしたことじゃ・・・ないよ」

由起葉はつかえそうになりながら、必死にごまかそうとする。妙なことを言えば二葉はおろか一葉まで、亮平に何をするかわからない。亮平は今怪我人として寝かされているのだ。しばらくはそっとしておいてやらねばなるまい。

「ふうん・・・。じゃあ、こいつには何かされたか？」

氷を持って寄ってきた多加弥をつかまえて、二葉は由起葉の顔をのぞき込む。

「こいつは根が真っ黒だからな。暴走したとなれば理性も何も吹っ飛んでる可能性がある。ユキハにだって何するかわかったもんじ

やないからな」

「そ、そんな・・・」

由起葉は説明しようとして、あの倉庫での出来事を思い出し、一気に熱くなった。多加弥に触れたところが熱を持ったように由起葉の体温を上げ、多加弥と目が合った瞬間、不覚にも顔を真っ赤にして思い切りそらしてしまった。

そんな二人を交互に見て、二葉は不思議そうな顔をしていたが、徐々に不愉快な表情へと変わっていく。

「ユキハ。言えないようなことされたのか」

「ちっ、違うよっ。何もなかったよ・・・」

「嘘つくな。許せん。タカヤ、こいつの手当ては二人に任せて道場に来い」

多加弥は抵抗する様子もなかった。今回のことはさすがに反省しているのだろう。

「二葉兄ちゃん、タカヤは私を助けてくれたの。だから・・・」
「一葉兄ちゃん、止めてよ」

「いいんじゃないか？もう一度武術の教えを叩き込まれた方が、彼のためだ」

一葉は手を止めることなく動かしながら、あまり関心なさそうに言った。

（二葉兄ちゃんの場合、叩き込むのは武術の教えじゃなくて、怒りのこもったただの棒なんだけど・・・）

由起葉はハラハラしながら二人の向かった道場の方を見つめた。
亮平は多加弥の手でボコボコにされ、そんな多加弥は二葉に叩きのめされる。最後に勝つのはいつもこの双子の兄たちだ。なんという力関係か。その二人に守られている由起葉は、今のところ最強と言える。

しばらくすると、およそ武術の稽古とは思えないような激しい音が遠くから聞こえてきた。多加弥でなければ道場を飛び出して逃げていることだろう。

「さて、とりあえずはこれで大丈夫だろう」

傷の手当てを終えた一葉は、道具を箱の中にしまい始める。

「ありがとう、一葉兄ちゃん」

「まったく。ここは病院でも保健室でもないんだからな」

「感謝します・・・」

しゅんとする由起葉の頭をなでて、一葉は優しく微笑むと立ち上がった。

「とにかく、後は彼が目覚めてからだな。というわけで、私も行ってくる」

「えっ？行くって、どこに？」

不思議そうに聞いてくる由起葉に、一葉はにっこりと笑いかける。

「ユキハ、今回のことを許せないのは、なにも二葉だけじゃないんだよ」

「一葉・・・兄ちゃん・・・？」

「大丈夫。死なない程度にはするから」

相変わらずの笑顔を浮かべたまま、一葉は道場の方に消えていった。由起葉は真っ青になって慌てる。一葉が怒ると二葉よりも質が悪い。おそらく見兼ねて止めに入った二葉も、あわせてあの世の前まで送り込まれることになるだろう。

（どうしよう・・・どうしようっ）

この状況をなんとかできるかもしれない人物が一人だけいる。由起葉は二人の生命をかけ、必死の思いで電話をかけた。

6 緑眼のマリア（1）

屋敷の玄関までわざわざ出迎えにきていた天と火臣は、現れた多加弥の姿を見てしばし言葉を失っていた。

「どうした。来る途中で熊にでも会ったのか？」

天は真顔で言う。

「冗談ならもっと軽く言ってくれよ……。これにはまあ、いろいろあって……」

ぽりぽりと頭を搔くその手にも、たくさんの痣と絆創膏が目についた。

昨日は本当に散々だった。どこからどう話せばいいかわからない。我を忘れて亮平を殴り倒した結果二葉から制裁を受け、由起葉に呼ばれて百合子が駆けつけたときには、その二葉もろとも一葉に半殺しにされていた。

（あの人こそ武術の教えを心に叩き込むべきなんじゃ……）
ついでにいうと、その後目を覚ました亮平が由起葉に迫り、いつか由起葉を手に入れると妙な宣言をして二葉を怒らせ、売り言葉に買い言葉で道場に入ることになってしまったのだ。多加弥にとっては悪いことばかりだ。

「俺、しばらくはいいことしか起こらないと思います……」

「なんだかわからないけど、大変だったんだね、カシ君」

火臣に肩を叩かれ、多加弥はなんだか泣きたい思いだった。

「とりあえず、ようこそ。これからしばらくは、ここが君の家だ」

「お前の家じゃないだろ」

「天が歓迎してやらないからオレが代わりに言ってるんじゃないか」

天は聞こえるように舌打ちして、不機嫌そうにそっぽを向いた。
火臣は顔を近付けて多加弥に耳打ちする。

「気にしないで。天はああ見えてカシ君のこと待ってたんだから」

「はあ・・・」

（そんな風には全く思えないけど・・・）

火臣の言っていることがどこまで合っているのか疑問だが、とりあえず浦沢家うらざわに入することは変わらない。それを許すということは、天にしてみれば多加弥を受け入れるのとそう変わらないことかもしれないなかった。

「天君。お世話になります」

「・・・部屋は空いてるからな。まあ、嫌になったらいつでも出ていっていいぞ」

（本当、かわいくないよなあ）

多加弥は荷物を半分火臣に持ってもらって、いざ屋敷の中へ入っていった。

多加弥には二階の奥の部屋があてがわれた。下宿先としてはあまりにも豪華な、ホテルのような一室だ。大学に入れば研究室に入り浸る生活になるであろう多加弥にとって、充分すぎる部屋だった。

「ピアノを弾くというなら、上の部屋に代えてやるが・・・」

「弾かないよ」

「・・・」

多加弥は即答して、黙っている天を見てはっとなる。

「その・・・天君のピアノなら、聴きたいけどね・・・」

「お前のために弾く気はない」

「はいはい・・・」

天からそういう態度が返ってくることはわかっていた。多加弥は軽くため息をつくど、この話はさっさと流してしまおうと思った。考えるとまた動けなくなりそうだ。自分は家から離れてもなお、音楽から逃れられないのかと・・・。

「お前がどう思っているか知らないが、忠浩ただひろさんは悪い人じゃない・・・」

「え・・・？」

聞き返そうとした多加弥の声は、軽やかなノックに続いて飛び込

んできた一人の女性によって遮られた。

「失礼します。あっ、そ、天様。すみません、こちらにいらっしゃるとは知りませんで・・・」

元氣よく入ってきた分慌て方も激しく、持ってきたシャツなどのリネンを落としそうになってよろける。栗色の髪が肩の上で踊る。長いまつ毛とピンク色の頬が印象的なメイドだった。

「お客人がいらっしゃるとのこととで、これ運ぶようにと言われていたのですが、少し遅れてしまつて・・・。お話し中のところに入つてしまい、申し訳ありませんでした」

「いや・・・気にしないで」

天の態度ががらりと変わる。もう慣れたので驚かないが、二面性を巧みに使い分ける天を、多加弥は少なからず感心して眺めていた。
「君、確か新しく入った子だね。メイド長から聞いたことあるよ。元氣がよくてバリバリ働く新人が入つたつて」

「そんな、ワタシは・・・。元氣がよすぎて空回りしてる新人の間違いですよ、きっと」

「謙遜けんそんしなくてもいいのに。君、かわいいし、ちょっとドジなくらいがちようどいいよ」

火臣は軽く、薄っぺらい言葉を並べて笑っている。目の前で堂々と口説いているようなこの男に、多加弥は呆れ顔を向け、天は見る気もないようだった。

「君、名前は？」

「マリアです」

「へえ、マリアちゃんか。そうだ、他の仕事を立て込んでなければ、お願いしたいことがあるんだけど」

「なんでしょう」

「実は彼、客人じゃなくてこれからしばらくここに住む同居人なんだ。よかったら屋敷の中を案内してあげてくれないかな？」

マリアは多加弥に目を向ける。漆黒の瞳には好奇の色が見て取れた。

「かしこまりました。では、ひととおり一緒に見て回りましょう」
「お・・・お願いします」

マリアはにつこりと笑いかけ、多加弥を促した。多加弥は少し戸惑い、火臣を見る。わざわざ出迎えてくれたのに、いきなり引き離すような行動に出たことに他意はないのだろうか。

火臣は行け行けと手で合図する。天は完全なる演技で手を振っている。多加弥はここで何かを聞いたところで無駄だと思い、マリアについて部屋を出ていった。

足音が遠ざかっていくのを確認して、天はため息をついた。

「気になるな・・・」

「おっ、珍しい。まあ、確にかわいかったし、天が興味を持つのもわかるよ」

「お前と一緒にするな。・・・名前が悪いんだ」

「なんで？マリアって、かわいい名前じゃないか」

天はぎろりと火臣をにらんだ。

「アベなんていうおかしな呼び方してるから、お前は気にならないんだ」

「あっ」

本当に気付いていなかったらしく、火臣は間抜け顔で声をあげた。

「べつに彼女が悪いわけじゃないんだが・・・」

「まあ、でも後で調べておくよ」

火臣は足を投げ出してベッドに腰掛けると、そのまま後ろに体を倒した。柔らかい布が火臣の体を受けとめる。

「で、何かあるのか？」

「なにが？」

「いきなりメイドに彼を押しつけて、どういうつもりだ？あいつの案内は僕らがする予定だっただろ」

「・・・」

火臣は両手で顔を覆って黙っている。天は火臣の頭の方に回り込むと、その手を引き剥がした。困ったような、情けない表情の火臣

と目が合う。

「大人気ないことに、ちょっと嫉妬しちゃってね」

「何を言ってるんだ」

「天が忠浩さんへの感謝の念を持ってるのはわかってる。けど、その息子だからってあんまり優しくされると妬けちゃうっていうかさ」

「あいつをここに住まわせると言ったのは火臣だろ」

「そりゃまあ、オレはカシ君嫌いじゃないし、同じ仲間として近くにいるのもいいんじゃないかと思ったからさ……。もちろん天にも仲良くなってるほしいよ。でも、やっぱり一番近くにいるのはオレでありたいんだ」

火臣は体を反転させ、ベッドの上に両手をつくど、体を起こして天と視線を合わせた。小さな主に従う、大きな犬のようだ。

「天を……。大地^{だいち}を守るのはオレでありたい」

「。。。。」

「べつに優しくしてくれて言ってるわけじゃないんだ」

「。。。。よくもそんな恥ずかしいことをべらべらと。。。」

天はぽつりとつぶやく。赤くなりそうな自分をごまかすために、わざとらしく咳払いをして目を逸らせた。

「バカか、お前は。そんなのわかりきってる。。。」

「。。。。」

「僕の本当の姿は、火臣しか知らないんだからな」

「そ。。。天あ」

火臣はその容姿には似つかわしくないほどの喜びの表情を満面に浮かべ、天に抱きついた。

・緑眼のマリア（2）

マリアに連れられて長い廊下を歩きながら、多加弥は説明を聞くたびにうなずき、きよろきよろした。

「ところでタカヤさん。なんだかボロボロですね」

「えっ。あ・・・ああ・・・」

赤く腫れた口元を隠そうと伸ばした手にも、たくさんの痣が見えている。骨が折れていないだけでもよかったと思う。

「俺の周りには暴力的な人が多くて・・・」

周りから言わせれば多加弥だって同類だ。もちろん自覚はある。

「大丈夫ですか？せつかくの美少年が、もったいないですよ」

「びっ、美少ねっ・・・。お世辞でも、ありがとうございます」

「お世辞じゃないですよ。タカヤさん、とても素敵です。天様の周りには、本当に素敵な人ばかりが集まるんですね」

「・・・」

にこにこうれしそうに語るマリアに、多加弥は複雑な思いだった。

「マリアさんは、天君のことが好きなんですね」

「ええ。小さな体でいつもがんばっていらっしやって。ワタシも

早く、天様の傍で働けるメイドになりたいですわ」

（こんな純粋な人をだますなんて・・・。天君の本当の姿を知ったら、がっかりするだろうな）

あそこまで偽っていると、がっかりでは済まないかもしれないなかった。

「どうでしょう。一階と二階さえわかっていれば生活には困らないのですが、上の階もご案内いたしますか？」

「いや・・・あんまり一度に見ても頭に入らないので」

多加弥は驚異的な記憶力で、案内された全ての場所を正確に把握していたが、なんせ広い建物である。これ以上はどこまで覚えられ

るかわからない。

「それに、関係ないところまで見ると、天君に怒られそうだし」

「怒られる？」

「あつ、いや・・・その・・・」

自分の知っている天と、この屋敷の住人が知っている天は違うのだ。多加弥は気付いて言葉を濁す^{にじ}。発言に気を付けないと、それこそ天に怒られる。「タカヤさんは天様と親しいご関係なのですね。うらやましいですわ」

一瞬。ほんの一瞬だけマリアの目が鋭く光った気がした。ぞくつとして見返すが、そこにはにこにここと笑うマリアの顔があるばかりだ。

（気のせい・・・だよな）

「あつ、そうですわ。タカヤさんはここに住むんですよね。でしたら裏口を知っておいた方がいいですわ」

マリアがひらめいたように指を立てて、突然大きな声をあげた。

「裏口？」

「ええ。ここの正面玄関はそれはそれは警備が重苦しくて、毎回入ってくると疲れてしまいますから。もちろん裏口もしっかりと警備されていますが、正面から入るよりはずっと気楽に入れますよ」

多加弥はつい先ほど入ってきたときのことを思い返して、深くうなずいた。マリアの言うことは大げさではない。何人もの警備員にじろじろ見られ、来客リストとしつこく照らし合わされ、きれいな身なりで来たものの生傷だらけの多加弥は、非常に気まずい思いをしたのである。

マリアは多加弥を階段の奥に伸びる通路へと案内していった。華やかな造りの廊下から一変して、薄暗い殺風景な場所に変わる。裏口という言葉がぴったり似合いそうだ。

突き当たりには重厚感のある灰色のドアがあった。マリアはごそごそと襟元を探り、チェーンでつながれた鍵を取り出す。細かな装飾のほどこされた骨董品のような鍵だった。

「タカヤさんはまだ持っていないようなので、今回はワタシのと一緒に出ましょう」

マリアはその鍵を鍵穴に差し込む。そのまま回さず待っていると、ピツという電子音と共に解錠する音がした。

「おしゃれですよ。この鍵、まるでおとぎ話に出てきそうな形をしているのに、中には複雑なデータが入ってるんですよ」

「ICカードみたいなことですか？」

「そうですね。出るときも入るときも、これを差し込まないとドアが開かないようになってるんです」

浦沢邸のセキュリティはこれで済まなかった。出てすぐのところには守衛室があり、裏口からの出入りもきっちりチェックされている。マリアは多加弥を連れて守衛室に挨拶に向かった。

「こんにちは」

「ん？ああ、マリアちゃんかい。どうしたんだい、男の子なんか連れて出てきて」

守衛室から顔を出してきたのは眼鏡をかけた白髪混じりの男性だった。

「こちら、タカヤさん。今日からここに住むんですよ。何も聞いてませんか？」

「え？今日から？」

男性は近くにあった名簿らしき紙をパラパラとめくる。

「思い出した。そういえば火臣さんから連絡があったよ。でも、坊っちゃんが直接連れてくるって話だったんだがな・・・」

「まあ。天様が？」

驚いた表情でマリアは多加弥を見る。

「タカヤさんは、特別な方なのですね」

「まただ、と思った。好奇心でもなく、羨望せんぼうでもなく、まるで付け狙うような視線をマリアから感じ、多加弥はぞくっとなる。おそらく感覚が鋭くなければ気付かないであろうほどの微かな気配なのだが、多加弥にはそれを肌で感じるだけの能力があった。だが、なぜ

なのかまではわからない。瞬きをした次の瞬間には、怪しい気配も消えてしまっている。

多加弥はマリアに守衛室での手続きの仕方を教えてもらった。だが、マリアいわく、ここの守衛はとても優秀で、屋敷の人間全てを把握しているため基本は顔パスでいけるそうだ。手続きをすつ飛ばそうとするマリアを注意しながらも、褒めちぎられた守衛の男性はまんざらでもなさそうだった。

裏口から出ると裏庭が広がっていた。豪華な表の庭とは違って、飾った様子のない静かな庭だったが、きれいに整備されていて、花壇には控えめに花が揺れていた。

「あそこに見えるのが裏門ですわ」

マリアが指差す先には格子状の門があった。道らしきものはないが、見える位置にあるので迷ったりはしなさそうだ。

「あの門から入るのにもこの鍵が必要です。裏門から出ると細い道が伸びていて、それを右に曲がっていくと正面へと続く道につながります」

裏庭をぶらぶらと歩きながらマリアが説明してくれる。多加弥はしっかりと覚えた。あとは鍵をもらうだけだ。

ふと、多加弥たちの前に森が出現した。屋敷の角から少し離れただけなのに、別世界のように木々が生い茂り、昼間の明るさを呑み込んで揺らめいていた。

「なんで庭に・・・森？」

「そう見えますよね。ワタシも最初はびっくりしました。でもこれ、木を密集させてるだけでそんなに奥まで続いてないんですよ。なんでも前の旦那様の思いつきで庭の隅に木をたくさん植えたとか・・・。本当のところは誰も知らないんですけどね」

「お金持ちのすることって、よくわからないなあ・・・」

森林浴でもするつもりだったのだろうか。おかげで庭と屋敷の一角が陰になってしまっている。

「立ち入り禁止というわけではないんですが、庭師以外は基本的

に中に入ったりはしません」

「これ、庭師の仕事には有り余るんじゃない……」

「本当ですね。それに、この森にはちょっとしたうわさがあるんです」

「うわさ？」

「なんでも、夜になると時々奥から音楽が聞こえてくるっていう。その音の主は誰も見たことがなくて、中には……その……」

急にマリアが言いずらそうに声をこもらせた。言おうか言うまいか考えている。やがてマリアは小さな声で秘密を打ち明けるようにささやいた。

「亡くなられた大地様の霊が、バイオリンを弾いているんじゃないかと言う人もいるんです」

「……」

「よくある怪談話みたいなものです。風情のあるお屋敷ですから、七不思議みたいなものも自然と存在していますし……。大人でもそういうの好きな人はいますから」

多加弥は森の暗闇をじっと見つめた。失われた浦沢大地のバイオリン。もしその話が本当なら、多加弥は恐怖よりも一度聞いてみたいと思った。

「マリアさんはどうなんですか？　そういうの興味あるんですか？」

「ワタシですか？　否定はしませんが、驚いたり怖がったりはあまりしませんね」

マリアらしいなあと、のんきに思っただけで笑顔が浮かべる多加弥に、マリアはぽつりと言葉を続けた。

「本当に怖いのは、現実世界の人間ですからね……」

「え？」

「いいえ。なんでもありませんわ。あら、もう昼食の時間になりますね。タカヤさんはどうされるのですか？」

「ええっと……。何も聞いてないんですが」

「では一度お部屋に帰りましょう。天様が待っていていらっしゃるか

もしれませんし」

多加弥はうなずいて、再びマリアについて歩いていった。

この屋敷にはまだまだ知るべきことがたくさんありそうだ。そしてこの、働き者で元気なメイド、マリアについても、知っておくべきことがありそうな気がして、多加弥はなんだか落ち着かなかった。

・緑眼のマリア（3）

部屋に戻ると窓を開けて外を眺めながら火臣が待っていた。天の姿はない。

「やあ、お帰り。だいたいはわかったかい？」

「はい。たぶん大丈夫だと思います」

「そう。マリアちゃん、ありがとね。もう仕事に戻ってくれていいよ」

「わかりました。また何かありましたら、おっしゃってください」
マリアは頭を下げると部屋から出ていった。その後ろ姿を火臣はじつと見つめていたが、急に笑顔になって多加弥の方を向く。

「さて、昼食にしようか。上で天が待ってる」

「上？今見てきたところだと、食堂は下でしたけど・・・」

「そう、食堂は一階だ。でもそれは普通の人の場合。君はこの屋敷に、使用人として雇われたわけでもなく、ただの居候としてやって来たわけでもないんだよ」

意味深なことを言われ警戒する多加弥を強引に引っ張って、火臣は最上階まで向かった。

通されたのは一番奥の部屋だった。無駄に広い空間の真ん中に、横長のテーブルがどんっと置かれていて、その端に天が座っていた。

「カシ君は天の前の席へ。今食事を用意するから」

「俺も手伝いますよ」

「そうだな。ここでの仕事がある程度覚えたら、お願いするよ」

火臣は軽く手を振って部屋から出てしまった。多加弥は仕方なく席に着く。

「広い部屋だね」

「ここは二、三人で食事をするような場所じゃないんだ。本当は何人もの人を集めてお茶会を開くためにある」

「お茶会のためにわざわざ部屋があるっていうのがすごいね」

「あの人が僕にくれた部屋なんだ」

「あの人？」

「・・・父親のことだ。だが、まだ一度もこの部屋でお茶会を開いたことなどない」

天はぷいっと顔を背けた。これ以上語るつもりのないときの合図だと、多加弥はなんとなくわかった。

お茶会のための広い部屋。だがそこは目的を果たすことなく静かに存在している。天にはお茶会を開く意味も、呼ぶだけの人もいなかった。天は世界中に愛されるピアニストでありながら、とても孤独だった。

すぐに火臣がワゴンを押して戻ってきた。天と多加弥の前に、パンやスープ、パスタのお皿を並べていく。火臣は自分の分も用意すると、天の隣に座った。

「今日は天の好きなボンゴレだ。よかったな」

にっこり笑いかける火臣を、天はじとつとにらんだ。

「余計なことは言わなくていい」

「おいしそう・・・」

「実際うまいよ。今のシェフはなかなか腕がいいんだ。まあ、オレの料理も負けなくらいうまいけどな」

「黒川さんて料理もするんですか？」

「なんでもできなきゃダメなんだよ。オレは天が望むなら、どんな厄介な料理だって作るよ」

「・・・」

天は火臣から顔を背けてうつむいた。そんな天を見て、多加弥はもしかして、と思う。一見素っ気ない態度に見えるが、天は照れているのだった。

三人で食事をとりながら、多加弥はこれから通う大学のことを、火臣は屋敷の中や使用人たちのことなどをそれぞれ話した。天は基本寡黙だったが、火臣にしつこく相づちを求められるので、仕方なく少ししゃべったりした。

食事が終わると、火臣が皿を片付け紅茶の用意をしてくれた。

「さて、そろそろ本題に入ろうか、カシ君」

「本題？」

二人分の紅茶を入れ終わると、火臣は自分の分は用意せずに天の斜め後ろに控えた。

「君はお客様でもなく、雇われ人でもない。しかし、ここはただの居候が入れるような場所でもない」

「はい・・・」

「つまり君には重要な役割があるということだ」

「え？」

驚いた顔をする多加弥を、天は呆れた目で見返す。

「お前、タダでこの家に住まわせるわけがないだろう」

「だ、だって、黒川さんが・・・」

火臣はにやにや笑っている。多加弥を浦沢邸に入れることは完全に計画されていたことだったのだろう。

「家賃も食費もいらない代わりにしっかりと働いてもらおうか」

（俺、はめられたのか？）

小さな屋敷の主は、大きな態度で多加弥を見下している。多加弥は半分納得したもの、やはり悔しい気持ちもあって顔をしかめた。それを見た天は追い討ちをかける。

「なんだ？不満なのか？嫌でも言うことを聞かざる得ないようにしてやってもいいが？」

天の舌に五芒星が表れる。

「わっ、何考えてるんだよっ。わかったから。ちゃんと働くから、呪いを俺にかけるのはやめてくれよ」

天は舌を引っ込めた。なんと厄介な力だろう。あっという間に力関係ができあがってしまった。

「で、俺は何をすればいいの？」

出番とばかりに火臣が説明を始めた。

「カシ君にはオレと同じ仕事をしてほしいんだ。もちろんオレほ

いろいろなことができるわけがないし、君には学校もある。だから君のできる範囲で構わない」

「それって・・・つまり天君の付き人ってこと？」

「失礼な言い方をするな。お前なんかいなくても僕は困らないんだからな」

天はつんとした態度で腕組みをした。ただの使用人の方がよっぽど楽なんじゃないかと思ったが、口にできるわけがなかった。天と火臣を敵に回せば命だって保証はない。

「まあ、天の世話人というよりはオレの手伝いって感じかな。気楽にやってくれたらいいからさ」

「・・・わかりました」

「でもひとつ、これだけはお願ひしたいことがある。天を・・・、天を守ってほしいんだ」

「・・・」

「カシ君には力がある。そのうえ呪いに対抗する手段もある。天はこのとおり、金持ちの息子であり、ピアニストであり、世間では天使のようだと言われるほど人気だ。そのせいで妬まれることもあるし、命を狙われることだって正直ある。だから天を、オレと一緒に守ってほしいんだ」

大げさな、と思ったが、珍しく天が憎まれ口をたたかなかったので、多加弥は自然にうなずいてしまっていた。よくよく考えれば、天のために体を張れと言われているようなものなのだが。

「よし、契約成立だな。あれ？なんでそんな、この世の終わりみたいな顔してるんだい？」

「いえ・・・べつに・・・」

多加弥は泣きたい思いだった。浦沢邸に住むことになったときから、どこかで不穏な空気は感じていたが、これで平穏な日々は送れないことに決定したようなものだ。どこに行っても多加弥の心が安まることはない。

(ユキハが恋しい・・・)

昨日会ったばかりなのに、もう戻りたくなっている。

「安心しろ。僕は一人でも戦える。お前に頼るつもりはない」

「あ、でも天。大いに頼った方がいい仕事のひとつあるよ」

火臣が何かに気付き、ぽんっと手を叩いた。

「カシ君。君はまさにこのために浦沢邸へ来たと言ってもいい」

「え？そんな重要なことがあるんですか？」

「ああ。君なしの生活なんて、もう考えられないよ」

「さすがに大きいですよ・・・」

そして、この後聞かされた仕事の内容に多加弥は脱力し、これからの自分の生活を思い描いて頭痛に悩まされたのだった。

・緑眼のマリア（４）

火臣はこの屋敷の管理に携わっている男の一人と一緒に、事務室で書類をあさっていた。

「おかしいですねえ……。まだ新しいもののなに」

男は首を傾げる。浦沢邸の事務方にいいかげんな人間などいない。それは火臣もよくわかっていた。

（誰かが意図的に処分したか……）

火臣はマリアの履歴書を探していたのだ。天に言われて調べてみようと思ったのだが、こうなってくるとマリアに対して警戒せざるをえない。マリアには知られたくない何かがある。

「あの子について何か覚えてることないですか？」

浦沢邸で扱う書類の量は膨大だ。最近入ったとはいえ、一人の使用人についての記述など、完璧に頭に入っているわけがない。

「ええと……。確か歳は二十歳で……。住所はこの辺になってた気がします……。」

「名前は？」

「名前？」

「オレはマリアってしか聞いてないんで」

なるほど、と男はうなずいて火臣の問いに答えた。

「名前はマリア。……。結城マリアです」

桜が咲き始めていた。風もだいぶん暖くなり、春の訪れを間近に感じさせる。

「あつ、柏井くんだ」

無事に卒業の日を迎えることができた詩織^{しおり}が、いち早く正門のところに立つ多加弥を見つけて指差した。由起葉は笑顔を浮かべて駆け寄る。

「卒業おめでとう」

「ありがとう。わざわざ来てくれたんだ」

死ぬほど会いたかったのは多加弥の方だ。今すぐにでも抱きしめたかったが、さすがにここではまずいと思い気持ちを抑えた。

「ユキハのセーラー服も、これで見納めかあ」

「大丈夫。そういうプレイをすればいつでも見れるよ」

「プっ、プレイって。何言ってるの、ケイ」

にやにやして笑う圭^{けい}に由起葉は慌てて突っ込む。一方の多加弥は、なるほどとうなずく始末だ。

「絶対、しないからっ」

「もう、冗談だってば。じゃあさ、最後の制服姿ということ、柏井くんも一緒に写真撮ろうよ」

わいわい言いながらみんなで写真を撮り合っていると、思いがけない人物がいきなり現れた。

「よお」

片手を挙げて挨拶しながら、茫然とする一同の前に歩いてきたのは、なんと亮平だった。

「なんでここに・・・」

「ユキハ、誰？ あれって、コトイチの制服だよね？」

由起葉は説明しようとするが、亮平とのつながりは多々あるものの、どれも飛び飛びで何を選んだらいいのか考えてしまった。結局多加弥の同級生で、今度から道場に入るという説明に終わる。

「リョウ。何しに来たんだよ」

「お前こそなんているんだよ。今日はオレの高校も卒業式だったんだ。センガクも同じ日だっていうから、祝いに来てやったんだ」

「い・・・知らないよ・・・」

長身なうえに威勢よくしゃべるせいで、亮平は完全に周りの注目

を集めていた。

「なんだよ、素っ気ねえな。お前の兄貴に散々怒られて、卒業式くらいはちゃんとしようとかんばったんだぜ？」

「そういえば、なんか感じ違うね」

一番は髪型だろう。今までうつとうしく伸びた髪をバンダナでごまかしていたのだが、今日はさっぱりと切られている。耳にピアスもない。制服は相変わらずボロボロだが、ネクタイだけはきちんと結ばれていた。

「どうだ？ 惚れただろ」

正直なかなかではあった。しかし、それくらいで亮平に心移りするわけがない。

「前よりはマシかもね」

「厳しいなあ。まあ、喧嘩からも卒業だしな」

「そういえば、須王くんはこれからどうするの？」

「オレか？ オレはパティシエになるために専門に進む」

「パティシエっ？」

由起葉だけでなく、詩織と圭も声をそろえて驚いた。この容姿のどこをどう見れば甘いものにつながるというのだろう。むしろケーキを殴って破壊しそうな男だ。

「須王くんが、ケーキとか・・・焼くの？」

「あれ？ 言ってなかったっけ。オレン家、ケーキ屋なんだぜ？」

「そっ、そんなの全然知らない。一度も聞いたことないっ」

思わず多加弥の方を見る。べつに悪いことをしているわけでもないのに、多加弥はどきっとしてしまった。

「リョウの家のことなんて、ユキハに話す必要ないし・・・」

「確かにそうだけど・・・」

「ユキハ、ケーキ好きなのか？ それならオレがとびきりのやつを作ってやるよ。何がいい？」

「えっ・・・チーズケーキ・・・」

心のままについ好物を口にしてしまった。亮平はぱっと顔を輝か

せると、由起葉の両手をとって全開の笑顔を見せる。

「よし、任せろ。オレが一生お前にうまいチーズケーキを食わせてやるからな」

「おい、ちょっと待て。なに一生の約束なんかしてるんだよ」

「いいだろ、べつに。チーズケーキの好きな女は、チーズケーキをうまく作れる男に惚れるんだよ」

「そんな単純なわけないだろ。リョウ、お前とは長い付き合いだけど、今日ほどお前ん家のケーキ屋を潰してやりたいと思った日はないよ……」

多加弥は亮平の手を引き離して割って入った。にらみ合う二人。全然関係ない他校の男二人がこんなところで喧嘩をしたら大変なことになる。

「なんかユキちゃん、モテモテだね」

「うん。あの人、ちょっと恐そうだけど結構男前だし、この際ケーキにつられて乗り換えちゃったら？」

「あのねえ……。そんな気ないから」

圭と詩織はこの二人の喧嘩のすさまじさを知らないのだ。呑気に騒いでいる場合ではないというのに、二人の会話は妄想モード全開で盛り上がっている。由起葉はため息をつく、この手しかないという思いで携帯を取り出した。

「二人共、いいかげんにしてよね。せっかくの卒業式を台無しにするつもりなら、今すぐ一葉兄ちゃん呼んじゃうから」

二葉の上をいく一葉の名前を出され、二人はすっかり気が萎えてしまった。蘇よみがえるあの記憶。まだ完全に傷も治っていない。

「喧嘩はしないんでしょ？二人共」

「うん……。ごめん」

「須王くんも卒業おめでとう。これからまた、新しい道のりを進むんだね」

「ああ……。そうだな」

とりあえずは休戦だ。いろいろな思いを胸に、それぞれの未来へ

旅立っていく。変わるものもあれば、変わらないものもある。でも、大事なものはこれからも同じだ。由起葉は全てを抱きしめて前に進みたいと思う。

「よし。みんなで写真撮ろう。ずっと忘れないように」

なんだかメチャクチャな取り合わせになってしまったが、一層賑^{にぎ}やかになった由起葉たちは輝く笑顔で写真に映った。ただ一人、美^み和^わだけが息を潜めるようにその場になじみながらも傍観していたのだが、誰もそのことには気付かなかった。

家に帰って卒業証書を仏壇の前に置くと、由起葉は手を合わせた。父親がいなくなってもう十年以上経つ。ここまで成長できたことを、亡き父に伝えたかった。

「今夜はきつとみんなでご飯だよ。楽しみだな」

母は買い物にでもいったのだろう。由起葉たちより先に帰っているはずだったが、姿がなかった。

「ユキハ・・・」

「タカヤ？」

多加弥は物陰に隠れるようにして由起葉を抱きしめた。しっかりと腕を回し、熱が伝わるほど体を寄せてくる。急なことに由起葉は驚いたが、拒みはしなかった。

「ユキハ・・・充電させて」

「は？」

「もう、辛くて・・・」

「・・・」

由起葉は多加弥の今の生活状況を考え、よしよしと頭をなでてやった。

「そんなに大変なの？天君のそこ」

「屋敷の人はいい人たちばかりだよ。でも、天使の仮面を被った悪魔が……。それだけじゃなくて、ユキハとは離ればなれだし、俺のいない間にリョウが何かするんじゃないとか考えたら……。帰ってきたい」

道場で身体を、浦沢邸で精神をボロボロにされ、多加弥は今一番まいていた。この先ががんばっていくためには由起葉の力が必要だった。

「タカヤ……。私のせいで、ごめんね」

いつもなら、がんばれと背中を押してくるはずの由起葉が、急に弱々しく謝ってきたことにびっくりして、多加弥は腕を緩めた。由起葉は少し背伸びして多加弥にキスをする。

「タカヤ、好きだよ。私の言葉にはなんの力もないけど、呪いでもなんでもいいから一生離れないでいられるように縛られてしまえばいいって思うくらい」

「……」

「いつもいつもタカヤのこと考えてやってきたつもりだけど、でも時々思うの。これでよかったのかな……。私のせいでタカヤを苦しめてるんじゃないのかな……。って」

「ユキハ……」

「どんなときでも手の届くところにいて、二人だけの世界で好きだよ、なんてささやき合うのも愛の形だと思う。でも、私はタカヤにもっと欲張りなものを求めているんだ」

「どうして？いつだってユキハは俺を自由にしてくれるじゃないか」

「そうじゃないよ……。私はタカヤをもっと強く、もっと自由にとって背中を押しながら、どんどん素敵になっていくタカヤを自分の元に止めておきたがってる。タカヤの可能性を一杯引き出して、そのうえで私のことを好きでいてなんて……。すごくわがまま」

「そんなことないよ……」

「いいの。わかってるの……。でも、わがままでもなんでも、私はこういう形でタカヤとつながっていたいの。タカヤは行けるところまで突き進んで、でもその先には必ず私を見てほしいんだ。私も、いつだってタカヤを見てるから……」

多加弥はそこではっとした。不安で辛い思いを抱えているのは自分だけではなく、由起葉も一緒なのだ。

「魂がつながっていると、不安な気持ちもつながるのかな？」

「そう……。なのかな？」

「だったら俺はユキハを信じるよ。ユキハを取り巻く世界の全てを信じる。それでユキハの心が幸せに向かうなら」

由起葉は目を閉じて多加弥の存在を確かめる。触れる指先に伝わる体温。でも、もし触れられないところにいたとしても、由起葉にだけはその存在がわかるはずなのだ。

「そうやって思い合って、信じ合って生きていこう。俺たちだけの愛の形だろ」

「そうだね」

「じゃあ傍にいる今のうちに、もう一度キスを……」

「ええ？」

しょうがないなあという顔をしながらも、由起葉は目を閉じて身体ごと預けてくる。軽いキスで済ませようと思ったのに、なんだかもっと欲しくなってしまうた。

「ユキハ……。俺、我慢できないかも」

「は……。？え？」

「だって、ユキハがかわいいこと言うから」

「私のせい？」

「うう……。食べちゃいたい」

冗談混じりで由起葉の首に甘噛みしようとした多加弥は、急に大事なことを思い出して勢いよく離れた。

「しまった。俺、行かなきゃいけないところがあるんだった」

「どうしたの？急に」

「天君たちから用事・・・いや、仕事を与えられてたんだ。ユキハの卒業式を祝いにいったらマリアさんのところに行かなきゃいけなかったのに、リヨウのせいですっかり忘れてたよ」

「仕事？」

「はは・・・。タダでは住まわせてくれないらしくてね・・・。
今度ゆっくり話すよ」

行かなくちゃと言っておきながら、名残惜しそうに由起葉を見て動かない多加弥を、由起葉はおかしそうに笑った。

「本当、苦勞が絶えないね、タカヤ」

「うん・・・。この先が不安だよ」

「今日は来てくれてありがとう。会いたくなったらすぐに会いにいくから。それまでまた、信じてがんばろうね」

多加弥はうなずくと、やっと動き出した。天たちから仕事と言われていなければもっと由起葉と一緒にいられたのに。恨めしく思いながらも、逆らえるはずもなく、多加弥は万利亜まりあの元へと向かった。

・緑眼のマリア（5）

「なあ、天。どう思う？」

最後の一言を弾き、ふうと息を吐いた天に向かって火臣は投げ掛けた。

「そんなこと聞かれても困る。いろいろ考えながらだとピアノの音が鈍るから、今はその話はなしにしてくれ」

「ごめんよ・・・」

火臣は謝りながらも不満げな顔をする。天は最近ピアノの前に座りっぱなしだ。春休みに入ったら朝から晩まで部屋にこもりきりになるんじゃないかと心配になってくる。

火臣の前に広げられた手帳には、細かくいくつもの予定が書かれている。天のものと自分のものと分けて書き込んでいるのだが、どちらも余裕のないハードなものだった。自分はいいい。だが天はまだ十一だ。もっと自由にしてやりたいと思うこともある。

（・・・なんてな）

火臣は手帳を閉じて口元を歪めた。自由なんて、許されるわけがない。そもそも天が求めている以上、誰にも自由を与えることなんてできない。ピアノに縛られ、口を閉ざし、浦沢天として生きていくことは、世界が天に与えた賠償^{つぐな}なのだ。

「なんだ？ 気味の悪い顔して」

「気味悪いって・・・失礼な」

「そんな顔で見えていたら、集中できない」

天はピアノの蓋を閉じてしまった。

「休憩だ。火臣、話を聞いてやる」

「じゃあお茶をいれるよ。あ、お菓子はダメだからな。夕食まで時間がない」

「食べたいなんて言ってないだろ・・・」

天は火臣をにらんだが、火臣は気にも留めないで、むしろうきう

きとした足取りで部屋から出ていった。

天はピアノの前から離れて、窓際のティーテーブルの前に座った。外はもう夕暮れを終えようとしている。遠くの空に飛び去っていく小鳥の影が見えた。

静かな部屋の中、天はほおづえをついて考える。今朝、火臣からマリアについての話を聞いたばかりだ。履歴書はおろか、彼女についての身元証明が可能な資料は一つ残らず消え去っており、直接聞く以外彼女について知ることは不可能だということがわかった。

そしてもうひとつ。火臣が得てきたマリアの名前……。その手がかりを持って、今ごろ多加弥は万利亜のところへ行っているはずだ。

（何かつながりがあるのか？ 目的はなんだ？ もし……もし僕に関係があるのなら、早く型をつけないと……）

マリアのことを探っているのがバレれば、彼女はすぐにでも動くはずだ。もちろん、彼女にここで働く以外の目的があるのなら、だが。

マリアは毎日健気けなげに仕事をがんばっていた。疑いたくない気持ちには天にもある。理由もはつきりしないのに、いきなり解雇になんてできるわけがなかった。

「それにしても遅いな……」

火臣はなかなか帰ってこなかった。お茶の用意だけでこんなにかかる男ではない。天は不審に思い、様子を見にいこうと立ち上がった。そのとき。

「天様。よろしいでしょうか」

ノックの後で声がした。マリアの声だ。天はためらったが、拒むだけの確かなものがなかったので受け入れた。

「どうぞ」

「失礼いたします」

マリアの手にはティーセットが乗っていた。天は無邪気な子供の表情を装いながら、細かなところまで観察する。

「あの、火臣さん急な仕事で呼ばれてしまったみたいで、すぐに戻るからお茶の用意を天様にとお願いされまして・・・」

「・・・そうなんだ」

マリアは持ってきたトレーをテーブルに置いた。天は子供らしくがっかりしたような顔を浮かべる一方で、ものすごい早さでいろいろなことを考えた。

「あの、すぐに戻るとはおっしゃってましたが、もしワタシでよかったですらお注ぎしましょうか」

「・・・じゃあ、お願いしようかな」

にっこりと笑いかけると、マリアの顔がぱあっと輝いた。恐ろしい女だ。紅茶一杯いれるのに全力を注ごうとするマリアに向ける天の目は、段々と氷のように冷たくなっていった。

おそらくマリアの目的は自分だ。そしてこのときを、最大のチャンスにしようとしている。何事もなく、穏やかな会話のやりとり程度で済むならそうするが、天は戦うしかないだろうと腹を括った。

「天様、今日はずっとピアノの練習を？」

「うん。春にコンサートがあるから・・・」

「本当にがんばり屋さんなんです。お疲れ様です。いい香りですわ」

紅茶のカップを天の前に置いて微笑むマリアに、天は笑顔ではなく鋭い視線を向けた。

「白々しい演技はやめろ。何が目的だ」

「え？そ・・・天様？」

「火臣は他の奴にお茶の用意は頼まない。それに、僕を置いてまで向かう仕事なんて、あいつにはない・・・」

「・・・」

マリアは驚いた顔をしていたが、ゆっくりと息をつくとき、残念そうに苦笑した。

「ずいぶん賢いんですね。ちょっと見くびってましたわ」

「お前、何者だ」

「それは言えませんか。まあ、言ったところで誰かに伝わるわけでもないですが・・・」

天は間合いをとるために後ろに下がれるよう身構えた。武器の一つも持っていない天は力を使ってこの場をなんとかするしかない。言葉を紡ぐだけの時間が必要だった。

「せっかく楽に逝かせてあげようと紅茶に薬を入れたのに。ワタシ、子供に痛い思いをさせるのは、本当は好きじゃないんですよ」
マリアはどこに隠していたのか、あっという間に手にナイフを出現させた。しかもそのナイフにはまだ新しい血がついている。

「その血・・・まさかっ」

「やっぱり男の方は簡単にはいきませんわね。詳しいことはご想像にお任せしますが・・・」

天はぎりつと歯を鳴らした。怒りで心が支配されそうだ。マリアを呪い殺すつもりで五芒星を浮かび上がらせる。この力で人を殺すことだけは絶対にするまいと心に誓っていたのに、まさかこんな形で制御がきかなくなるなんて思っていなかった。

許せない。自分が生き残ることよりも、火臣の受けた傷を相手にも味わせてやることの方が、天には重要だった。

「そんな恐い顔しないでください。仕事なんです」

『ふざけるな・・・』

「本当のことなのに・・・じゃあ、もう終わりにしましょうか」

マリアはナイフを天目がけて振り下ろした。天は後ろに飛びすさり、ナイフは空を切って床に刺さった。

(こいつ・・・)

マリアの動きにはためらいがなかった。本気で天を殺そうとしている。しかも個人的な恨みの念を一切持たずに。

「ひと思いに、とはいきませんか・・・でも、その速さではワタシから逃げられませんか」

マリアはナイフを引き抜くと瞬時に間合いを詰めて天に襲いかかった。のしかかるように体を押さえ付けるとナイフの刃を天に向け

る。天は呪いの言葉を唱えるために口を開いた。

・緑眼のマリア（6）

由起葉と別れ、電車を乗り継いで万利亜のところに辿り着いた頃にはもう夕暮れ前だった。駅前から少し離れた、服屋や雑貨屋の立ち並ぶ通りのビルの三階に、その場所があった。

「ここか・・・」

入口からして怪しい雰囲気漂っている。小さな看板があるだけで扉も小さく、まるで隠し部屋だ。知っている人間しか入らなそうな空間に、多加弥はおそろおそろ足を踏み入れた。

中は薄暗く、独創的で幻想的な世界が広がっていた。天井に明かりはなく、代わりにテーブルの上や足元のいたるところに小さなライトが置いてある。その形は様々で、中には色のついたものもあった。薄暗いのでよく見えないが、壁一面には紫の布がドレープを描くように吊されているようだ。かすかにバラの香りがする。アロマオイルでも焚いているのだろうか。

「いらっしやいませ」

「ひっ」

突然薄闇から声をかけられ、多加弥は飛び上がりそうになった。部屋の装飾にばかり気をとられていて気付かなかったが、入口からすぐのところには受付があったのだ。

「初めての方ですか？」

受付には初老の女性が座っていた。暗いうえに受付はさらに奥まっているのははっきりと顔が見えない。だがその口調から、品のあるしっかりとした感じが伝わってきた。

「あの、俺、マリアさんに用があつて・・・。黒川さんからマリアさんに渡すよう手紙を預かっているんです」

「黒川・・・。少々お待ちください」

女性は受付から出ると、奥の部屋へと消えていった。ほどなくして戻ってくる。

「先生は今占いの最中でして、申し訳ありませんがお待ちいただいてもよろしいですか？」

「ああ、はい」

多加弥はテーブルの前のイスに座って待つよう言われ、落ち着かない様子でとりあえず腰を下ろした。占いの最中ということはお客が来ているのだろう。多加弥自身は占いやまじないはあまり信じていない方だが、万利亜の占いなら特別当たるような気がした。

多加弥は手元の封筒を見つめる。中は見ていない。昨日火臣から渡され、こうして万利亜のところまで来たわけだが、これが多加弥に与えられた重要な仕事というのがどうも解せない。

（そんなに嫌なのかな・・・）

少しして、さっき受付の女性が入っていったドアが開いた。お客だろうか。一人の女性が出てきて受付に立ち寄り、いくつかやりとりをした後部屋から出ていった。

「お待たせしました。では、中へどうぞ」

受付の女性に声をかけられ、多加弥は立ち上がる。手紙を渡すだけなのに、まるで占いをしてもらいに來たみたいだ。多加弥はやはり落ち着かない気持ちで奥の部屋へのドアを開けた。

「ごめんなさいね、お待たせしちゃって。・・・あら？君は確か・・・」

部屋の中はやはり壁一面に紫の布が吊されており、赤い布がかけられたテーブルの上には水晶玉、カード、その他よくわからない道具とろうそくが乗っている。その奥に座っているのが、やはり紫色のローブをまとった万利亜だった。

「お久しぶりです。神社ではどうも・・・」

「どうしてタカヤ君が？あ、どうぞ、座って」

万利亜に勧められて、多加弥は万利亜の前に座った。

「実は大学に通う間、天君のところでお世話になることになりました」

「なるほど・・・」

万利亜はいきなり水晶玉に手をかざすと、真剣に中をのぞくふりをした。

「タカヤ君、君今だいぶ苦勞してるみたいね。あの二人に振り回されて混乱してる……。もう家に帰りたい……。なんて思ってみたり」

「わ、わかるんですか？」

まったくそのとおりだった多加弥は当てられて驚く。素直な反応に万利亜は苦笑した。

「そのくらい、占わなくてもわかるわよ。どうせ招き入れておいてタダで住まわせるつもりはない、とか言って仕事押しつけられたんでしょ」

「恐いくらい全部当たってます……」

「あの二人にとっちゃ、タカヤ君はいい使いっぱしりね」

万利亜はため息をついて遠い目をした。あの二人と万利亜の関係はどうしてこう微妙なのだろうか。決して仲が良いとはいえないが、完全に関わりを断とうともしない。二人にとって、万利亜との間に多加弥を置くことは相当重要なことのようにだった。関わった以上、気にならないわけがない。

「あの……。マリアさん。マリアさんは天君たちのこと、どう思ってるんですか？ やっぱりお互い嫌ってるんですか？」

「……」

「今回俺がいなかったら、黒川さんは自分でマリアさんのところに行かなきゃいけなかったって言ってました。マリアさんと黒川さんをつなぐのが俺の重要な役目だって……。そこまで言うのに、手紙なんか書いたりして、関わりたいのか関わりたくないのか、よくわからないです」

万利亜は少し間を置いて、もう一度ため息をついた。

「嫌われちゃったのよね、私。あの浦沢の坊っちゃんに」

「天君に？」

「人には知られたくないこととかあるじゃない？ 普通なら自分か

ら言わなければわからないような、秘密のこととか……。それをいきなりのぞき見られたら、相手のこと敵視するのもわからなくはないわよね」

「秘密のこと……」

「べつに悪気はなかったの。ちよつとした好奇心でね。それからあの子が私に近付かなくなっちゃって、その付き人のヒオミも嫌がるようになったってわけ。でもお互い契約者だし、私の力はあの子を助けることができるから関係は切れないってこと」

「そうなんですか。じゃあマリアさんはべつに二人のこと嫌いなわけじゃないんですね」

「勘違いしないでね。好きじゃないわよ。普通に考えて、あの二人のこと純粹に好きになれるわけがないでしょ」

(まあ……。確かに)

「そういえば、手紙があるんだっけ？」

「はい。これです」

多加弥は万利亜に封筒を差し出した。万利亜は受け取って手紙の内容を確認する。

「……どうということ？」

眉間にしわを寄せて悩める表情になった万利亜は、今度は本当に水晶玉に手をかざしてじっと見つめた。

「なんて書かれてたんですか？」

「……。私の名前を語って浦沢のところに侵入した人物がいるみたいね」

「マリアさんの？」

多加弥ははっとした。思い当たる人物が一人だけいる。

「不穏な影が出てる……。彼女の目的はわからないけど、よくないことが起こりそうね」

「俺、マリアさんというメイドの人知ってます。けど、すごく明るくて、いい人そうにしか見えませんでしたよ。それに、マリアって名前だって他にいてもおかしくないだろうし……」

「そうね。でも、同姓同名っていうのは確率低いわよ。しかも結城マリアだなんて、なかなかいいはず。私のことを知ってる人物かもしれないわ」

万利亜は立ち上がると、まどっていたローブを脱いで部屋から出ていこうとした。ドアの前で振り返る。

「タカヤ君、何ぼさつとしてるの。行くわよ」

「えっ？で、でも、お店は？」

「うちの店は基本常連や紹介の人しか来ないし、その人たちはたいてい予約して来るの。今日はもう予定ないし、店は閉めるわ」

万利亜はさっさと出ていってしまった。多加弥は慌てて後を追う。万利亜は受付の女性に何か頼んで外へ出ていった。

ビルの外はもう夕暮れだった。ほの赤い光が差すビルの隙間を抜けて、影で薄暗くなっている裏側にまわる。

「ハク」

万利亜の声に呼ばれハクが現れた。多加弥が万利亜に追いついたときには、ハクは小さな猫の姿から巨大な猫の姿に変わっていた。

「タカヤ君、後ろに乗って。急ぎましょ」

「え、あつ、はい」

多加弥がハクにまたがると、ハクは驚くべき跳躍力でビルの上まで飛び上がり、夕暮れの空に消えていった。

・緑眼のマリア（7）

ハクは風の速さで浦沢邸まで駆け抜けた。薄闇が広がり、屋敷の窓にも明かりが点々としている。

万利亜は裏門の前で多加弥だけ降ろすと、屋敷をじっと見つめながら金色の猫耳をぴんと立てて気配を探った。

「タカヤ君は屋敷に入れるのよね？」

「は、はい。鍵持ってます」

「じゃあ中に入って三階の踊り場の窓を開けてくれる？」

「わかりました」

多加弥は言われたとおり一人で屋敷に戻ると、三階まで駆け上がり窓の鍵を開けた。すぐに万利亜がハクに乗ったまま窓から入ってくる。

「ハク」

万利亜が降りると、声に合わせてハクが通常の猫の大きさに戻った。

「マリアさん……。これって不法侵入なんじゃ……」

「そう……。かもね。でも初めてじゃないからいいんじゃない？」

（マリアさんて、まともな入り方したことないんじゃない？）

早く早くとうながされて、多加弥は万利亜の横に並んで廊下を駆け抜けた。

長く広い廊下には人の姿は見えなかった。物音もしない。二人と一匹の足音も、毛足の長い絨毯じゅうたんに吸い込まれて響かなかった。

万利亜が急に途中で横への通路に入った。多加弥も慌てて方向を変える。そこは通路というよりも、少し奥まっているだけの場所ですぐに扉にぶち当たった。万利亜は勢いよく扉を開くと中に飛び込んだ。

「ヒオミっ」

そこは給湯室のようだった。お茶の用意をするには充分なくらい

の小さなキッチンになっている。火臣はそこにいた。二人の足元に血だまりを作り、うつぶせに倒れた状態で。

「く、黒川さんっ？」

多加弥は信じられない光景に目を見開いて火臣の傍に膝をつく。

「・・・カ・・・シ・・・君」

うつすらと火臣が目を開けた。

「黒川さん、しっかりしてください。いったい何があったんですか？」

「・・・早く・・・、早く天を・・・」

「天君はどこに？」

「・・・一番奥の・・・ピアノ・・・」

そこまで聞いたときだった。万利亜の耳が激しく反応する。

「あの子、屋敷の中で力を・・・」

それだけ言うとうと万利亜は脇目もふらずに部屋から飛び出した。

「えっ？ ちょっと、マリアさん？」

多加弥は追いかけようとするも火臣を放っておけず、ただ万利亜の出ていった後を見つめるばかりだった。

（私の名を名乗る侵入者。刺されたヒオミ。そして浦沢の坊っちゃんは今、呪いの力を使って誰かと戦おうとしてる・・・）

万利亜は耳から得られる情報だけを頼りに一番奥の部屋まで全速力で走っていくと、ドアをぶち破る勢いで中に転がり込み、声を発するよりも早く二人の間に身体ごと割って入った。片手は天の口をふさぎ、もう片方の手はマリアの手を押さえる。

「・・・ふぐっ・・・」

「・・・」

「・・・え？」

時が止まったように思えた。息の根ごと止められそうになり、にらむ天。予想もしなかった邪魔の入り方に驚くマリア。そして、ふわりと金髪を揺らしてさっそうと現れた万利亜は、信じられない人物を目の当たりにしてしばし言葉を失った。

「・・・ワ・・・ワコ？」

マリアからみるみる殺気が消え失せていく。ナイフを握り締める手からも少しずつ力が抜けてゆく。

「マ・・・マリア、お姉さま・・・？」

ついにマリアの手からナイフが滑り落ちた。

「ワコ・・・。ワコなのね？どうしてあなたが・・・」

「マリアお姉さま。まさか、本当に会えるなんて・・・」

息苦しさに我慢がなくなった天は、乱暴に万利亜の手を引きはがした。

「僕を殺す気か。いいかげん二人共どけ。重い」

どういう状況なのかよくわからないが、とりあえず命の危機は免れたようだ。天は二人のマリアを押し退けて自由になると、服をはたいて立ち上がった。

「どういうことだ、万利亜。説明しろ」

「私だって、何がなんだか・・・」

「そいつは誰なんだ？知ってるんだろ？」

指差されたマリアは観念したように両手を挙げて、うつすらと笑みを浮かべる。

「ここまできて失敗だなんて、予想外でしたわ」

力なく言いつつも、悪びれた様子さえないマリアに、天は不快な色をあらわにする。ついさきほど一人の人間を殺そうとした人物の持つオーラではない。汚れすぎて逆にクリアになったという感じでもない。この女はもともと何の重みも持たないまま恐ろしい物事の数々に手を染めてきたのだ。

「ワコ・・・。いったいどういうことなの？」

「見てのとおりですわ、お姉さま。ワタシ、浦沢天を殺しにきましたの」

「なっ・・・」

「でもお姉さまに邪魔されてしまいましたので、諦めることにしますわ」

マリアは落ちたナイフを拾い上げると、付いていた血を自分のスカート裾でぬぐった。

「お前、それで僕が納得すると思うのか？」

「まあ、ちょっと死にかけたくらいで、そうカリカリしないでくださいな。生きてるんだからいいじゃないですか、あなたも、もう一人も」

「そうだ。火臣はどうしたっ。無事なのか？」

「大丈夫ですよ。ワタシは必要以上の殺しはしないんです」

「それって、必要があれば殺すってことじゃないの・・・」

「そのとおりですわ」

さすがお姉さま、とマリアは拍手する。天にはマリアが、頭のネジがぶっ飛んでいるようにしか見えなかった。

「せっかくお姉さまに会えたんですもの、ちゃんと話して差し上げますわ。とりあえず火臣さんをベッドのある部屋まで運んでいただけます？ ワタシが処置いたしますわ」

「ワコ・・・」

「殺しをする人間は、生かす術も持っているものですわ」

さっさと部屋から出ていくマリアの後を、何一つ理解できない顔で天が追う。万利亜はこの後聞かされるであろうマリアの、いやワコの真実に思いを巡らせ、複雑な気持ちになった。

・緑眼のマリア（8）

高戸羽子^{たかとわこ}。それがマリアの本当の名だった。

「これでもう大丈夫ですわ。もともと死ぬような傷じゃないですし」

火臣は羽子の手によって傷の処置をされベッドに寝かされていた。出血が多かったせいで顔色が悪いが、静かに寝息をたてる姿にとりあえず安心する。

「死ぬような傷じゃないって・・・結構血出てたわよ」

「急所を外して思い切り刺しましたもの。仕方ないですわ」

「仕方ないって、お前・・・」

「最初はちよっと眠っていてもらうつもりだったんです。でも薬を吸わせようとしたら見つかってしまったのでとりあえず一度。その後予定どおり薬を当てたのですが、火臣さんなかなかしぶとくて眠ってくれなくて。仕方がないのですぐには動けないようにもう一度刺しました」

まあ、そんな感じです、と羽子は淡々と説明した。羽子に常識は通用しないと諦めた天は、眉間にしわを寄せて聞きながらもそれ以上何も言わなかった。

「あの・・・マリアさん。どういった関係で？」

「タカヤ君には私のことから話さなきゃわからないわね。私ね、実は孤児院育ちなの。とはいっても、ちゃんと親はいて、教会の運営する孤児院に入ったのは中学生になってからなんだけど・・・このあたりの話はややこしいから、またおいおいね」

「はあ・・・」

「ワコとはそこで出会ったの。私が院に入って二年後くらいだったかしら。ワコは誰に連れられるでもなく、一人で教会の前に立ってた」

全身ボロボロの姿で、それでも瞳にだけは強い生きる力をみなぎ

らせて、羽子はしっかりと教会の前に立っていたのだ。

「びっくりしたわ。どこから来たのっていうくらいボロボロだったし、それに、日本の女の子って感じなのに目だけが緑色をしてたから」

「え？」

驚く多加弥の視線を受けて、羽子はおかしそうに笑った。

「最近はすごいですよねえ。カラーコンタクト、知ってます？」

「それくらい知ってます・・・」

「つまりお前はハーフなのか？」

「さすがですわ。ワタシは日本とイギリスのハーフなんですの。

髪の色も本来はもっと茶色いんですが、染めてごまかしてるんです」

「ここに侵入するためか？」

「それもあります・・・。まあ、目立つと何かと困るものですから」

奥の深そうな話だったが、羽子は必要以上にしゃべる気はなさそうだった。

「ワコ・・・。いったいあれから何があったの？ちゃんとした人に引き取られていったはずなのに・・・」

「そうでしたわね。思い出しますわ、お姉さまとの別れを惜しんで流した涙・・・」

「ふざけないで」

「あら。あの涙は本物ですわよ」

「そういうことじゃなくて・・・」

羽子は孤児院に入って数年を共に暮らしていたが、ある日突然引き取りたいと申し出てきた人物がいたのだ。羽子が亡くなった孫によく似ているという理由で強く養子になることを望んできた老夫婦だった。

「いい人そうでしたよねえ、あのおじいさんたち」

「違ったの？」

「世の中というのは本当に恐ろしいものですわね。ワタシはあの

おじいさんたちに連れられて、幸せな家族というものになるはずだったのですが、なんとびっくり。緑の目をした珍しい生き物のワタシは、危うく外国に売り飛ばされそうになりまして・・・」

「ワコ。真剣に聞いているのよ」

「本当なんですってば。ワタシ、必死で逃げて逃げてなんとか魔の手は逃れたものの帰るところもなくて、生きるために仕方なくいろんなことしてたら、こんな状態になっちゃったってわけなんです」「どうして教会に戻ってこなかったの？」

「だって・・・」

羽子は寂しげな眼差しで万利亜を見つめた。

「別れの涙は一度だけって、そう思っていたから・・・」

「・・・あんたはどうしてそうなの？いつも変なところばかりこだわって・・・」

万利亜はため息と共に頭を押さえた。

「だいたい、もう関わらないって決めてたら、私の名前なんて使わないでしょうが」

「だって、やっぱり会いたいじゃないですか。もしかしたらって思っ、いろんなところで偽名使いましたよ。たいていやばい仕事のときですけど」

「最低ね・・・」

「怒らないでくださいな。もうしませんから」

羽子は子供のように万利亜に抱きついて許しをこうた。万利亜の胸元に思い切り顔をうずめる。

「ワコ・・・」

「マリアお姉さま・・・。いい匂いですわあ」

「反省する気がないなら離れなさい」

「つれないですわね、お姉さま」

万利亜は呆れてため息をつくが、天と多加弥はその様子を見てもっと呆れていた。なんだかもう、いろんなことがどうでもよくなりそうだ。

「おい、お前。いったい誰に頼まれた。仕事というからには依頼主がいるはずだろう」

「それは言えませんか。仕事ですもの。でも、気にするほど大したおやじじゃなさそうでしたし、大丈夫じゃないですか？」

「大丈夫って・・・こっちは死にかけてるんだぞ？ だいたいお前はいいのか？ これじゃ仕事は失敗ってことじゃないか」

「いいんですよ、もう。もともとはつきりした契約の仕事じゃなかったですし。浦沢天の抹殺に成功すれば、その証拠と引き替えに多額の報酬を、できなければ何も支払われない、ただそれだけです。ワタシ以外にも今回の仕事の参加者はいましたが、邪魔されるのも嫌だったので先に潰しておきましたし」

「つ・・・潰してって・・・。恐すぎるよ・・・」

「とにかく安心してくださいな。仕事の期限は春のコンサートまで。それまで生き延びればいいんです。陰ながらではありますが、ワタシもお守りしますわ」

「人のこと殺そうとしておいて守るって・・・。そんな都合のいい話あるか」

「信用してくださいな。もうあなたに危害は加えません。マリアお姉さまの知り合いの方の命なら、守らなくてはなりませんもの」

「・・・」

「天君、俺も傍にいるし、とりあえず信じてみようよ」

「・・・火臣が治ったら、信じてやる・・・」

疲れきった様子で言う天に、羽子は顔を輝かせていきなり抱きついた。

「なっ、なにす・・・」

「やっぱり素敵な方ですわ。天さんはたまらなくかわいいですわね。ツンデレ最高ですわあ」

「だっ、誰がツンデレだっ」

（あんたよ、あんた。どこをどう見てもツンデレ代表でしょうが）
羽子にぐりぐりされて暴れる天を横目で見つ、万利亜は心の中

でもっともな突っ込みを入れた。

「ワコ、これからどうするの？この先もこの屋敷で働くの？」

「いいえ。ワタシがいると何かと迷惑がかかりますから」

「じゃあ私のところに来る？」

「マリアお姉さま・・・」

羽子はたまらなくうれしそうな顔をしたが、すぐに表情を曇らせて首を振った。

「いいえ、ダメですわ。ワタシは一人でも大丈夫です。今までも一人でやってきたんですもの。たとえお姉さまといえども、ワタシの世界に巻き込むなんてできませんわ」

「ワコ、あんたまだ何か隠してるんじゃない・・・」

「なんのことですか？とにかくワタシは堂々とお日様の下を生きているような人間じゃないんです。でも、今の生活もそこそ楽しいですし、好きなんですの。だから安心してくださいな。もちろん、これからお姉さまにも天さんにも会いに現れますわよ」

「僕には会いにこなくていい・・・」

「またそんなつれないことを。嫌でも勝手に来ちゃいますけどね」

「なんであんた、そんなにソラに・・・」

「ええ？だってかわいいじゃないですか。ワタシ前から気にはなっていたんですけど、ここで働いてみますます好きになりましたわ。どうせ命を狙われるならワタシの手にかかって・・・」

「恐いこと言うんじゃないわよ」

「冗談ですわ。もうしません。とにかくワタシはお姉さまと天さんが大好きなんですの。それにそちらの、タカヤさん。あなたもとても素敵な方ですねえ。いい顔してます。いじめたくなっちゃいますわ」

「・・・やめてください」

もうこれ以上変な人が周りにあふれるのは勘弁してほしかった。平和と平穏を望めば望むほど、多加弥の手からは遠ざかっていく。この環境に慣れてはいけなないと、多加弥は自分自身に言い聞かせた。

こんな不安な春は初めてだ。新しいことを迎えるドキドキやワクワクで胸が一杯になるはずだったのに、それらを吹っ飛ばすくらい不安要素ばかりだった。

7 漆黒の迷い猫

羽子^{わこ}が現れてからというものの、万利亜^{まりあ}の日常は必要以上に騒がしくなっていた。教会や店には一切姿を見せないものの、どこからともなく現れてはべったりとくっついてくる。聞くところによると天^{そら}のところにも突然出沒しては驚かせているらしい。

（本当に大丈夫なのかしら、あの子・・・）

考えるだけでどっと疲れが出る。万利亜はため息をつき、だるそうに部屋の明かりをつけようと手を伸ばした。

「ずいぶんお疲れみたいね」

突然声がした。万利亜は驚いて振り返る。視線の先には、窓枠に座って微かな笑みを浮かべる女の姿があった。真っ白な肌に、黒い髪と瞳。切れ長の目が知的だが冷たい印象を与える。

（なんの気配も感じなかった・・・）

窓の鍵は閉めていたはずだ。最近ではいとも簡単に羽子に侵入されるせいで感覚がマヒしかけているが、普通なら物音ひとつ立てずにあんなところに座っているなど不可能なはずだった。

「あなた、何者？」

「私は何者か、聞いてどうするの？」

「不法侵入って言葉、知ってるかしら」

「あら、私を訴えでもするつもり？ ドロボウ猫のくせに」

「どういう意味よ」

突然黒い何かが視界の端をよぎった。万利亜は急いで体を横にずらし、その何かからよける。耳元で風を切るような音と、その直後にバリッという壁の傷付く音がして、万利亜の髪が少し散った。

ただ事ではない。万利亜は力を解放し、相手の姿を探ろうとした。万利亜の頭に金色の猫耳が表れる。それを見た窓辺の女は不愉快そうに眉を上げた。

「やあね。あなたも猫なの」

「もって・・・どういうっ」

女は窓辺から瞬く間に万利亜の目前まで移動すると、万利亜を突き飛ばして壁に押し付け、猫耳を引っ張った。呪いの象徴とはいえ体の一部だ。万利亜は痛みで顔を歪めた。

「ちぎっちゃおうか、片耳」

「いっ・・・、やめ・・・ハクっ」

声に応えてハクが飛びかかる。女は万利亜から手を離れた。すぐさま万利亜は蹴りを突き出すが、女は後ろに飛んでよけた。

「あなたのは白猫なのね」

女は目を細めてハクを見ると、また不愉快そうに口元を歪めた。

「その子、どうしたの？あの人からもらったの？」

「あの人って・・・」

「わかってるくせに、嫌味な女ね。ねえ、私のはどうかしら。クロエっていうのよ。かわいいでしょ」

万利亜はさっきよけた黒い影を思い出し、急いで横に視線を向ける。暗闇の中に金色の眼が二つ浮かび上がる。闇に溶け込んで、巨大な生き物がこちらをじっと見つめていた。

「どっちが強いかしらね。その子とクロエ。あなたと私・・・」

「こんなところで戦うつもり？」

「私はどこでもかまわないわよ。あなたさえ消せば」

女はにんまりと笑みを浮かべる。よほど自信があるのだろう。万利亜は相手の力量も、いったい誰で何の目的があるのかもわからないまま、ただ戦うしかないだろうと腹をくくった。

・漆黒の迷い猫（2）

「ここでもいいかな」

「すいません。ありがとうございます」

多加弥たかやは火臣ひおみと二人で本棚を運び込んでいるところだった。多加弥の大学入学に伴い、大量のテキストが必要になるとわかったため、わざわざ火臣が手配してくれたのだ。

「屋敷の中には書庫もあるんだけど、経済の本と音楽の本ばかりだからね」

「普通理工学の本なんて置いてないですよ。それより、こんな立派な本棚入れてもらっちゃってよかったんですか？ テキストなんてその辺の棚にでも置いておいてかまわなかったのに」

多加弥の言葉に、火臣は何を言っているんだという顔をする。

「ここは浦沢うらさわの屋敷だよ？ カシ君の部屋だからって適当なこと、天が許すわけないだろ」

「もしかして、この本棚って・・・」

「うん。天が選んだんだよ」

（どうしよう。お礼言うべきだよな・・・でも、絶対お前のためじゃないとか言われて終わるんだろうな・・・）

本当は優しいのに、なかなか素直になってくれない天にも慣れてきた。だからといって火臣のようににはまだまだ対応できない。

「あの、天君はまたピアノですか？」

「最後の詰めてところかな。コンサートは明後日だからね。でも始業式の前でよかったよ。スタートからちゃんと学校に行かせてやれるからね」

「天君で、すごく忙しいのに学校にもちゃんと行こうとして、偉いですよね」

「ああ・・・本当に、偉いよ天は」

火臣は遠い目をする。天が学校に少しでも多く行こうとするのは、

学校が好きだからではない。むしろ嫌な思いをたくさんしているかもしれない。ピアニストである天には手を守るために禁止されていることも多くある。そんな天を特別扱いされていると見ていじめをする子もいるかもしれない。学校の中までついていくわけではないので火臣にはわからないが、天から親しい友達の名前が出たことのないことを考えると、なんとなく想像はついた。

それでも天が学校に通うのは、天が自分に課せた義務なのだ。おそらくそれは中学にあがっても変わらない。

「カシ君はさ、呪われた体になって不幸かい？」
突然の火臣の問いに、多加弥は考える。

「不幸・・・とは思ってないです。俺はユキハを守りたくて契約したから、少しでも力になれることがむしろうれしいくらいです」

「そうか・・・。オレもそうだよ。この足は、オレが望んで手に入れた。でも天は違う。天は・・・きっと幸せじゃない・・・」

なんとかしてやりたい。この子のためにできることがあるなら何だってしてやりたい。そのためなら足の一本くらい平気でくれてやる。そう思って契約者になった。おかげで今まで見えなかったモノからも天を守るようになった。でも、いくら外から天を守っても、心まで救うことはできない。守る力も必要だが、火臣は天を幸せにする力がほしかった。

「オレじゃダメなんだよな・・・」

ぽつりとつぶやく火臣を、多加弥は見つめる。

「黒川^{くろかわ}さんて、天君のことなんでも知ってるみたいですね」

「知ってるよ。たぶん世界で一番・・・」

「天君には何があるんですか？」

「それを聞いてどうするんだい？」

「それは・・・」

火臣の目は冷たい光を放っていた。表情は穏やかなまま、刺すような鋭さで多加弥を見つめ返す。

「教えられないな。カシ君だけじゃなく、誰にも教えられない。」

天はオレだけのものだからね」

「・・・黒川さん・・・」

「あれ？冗談なんかじゃないよ。オレは天をこよなく愛してるんだ。だから天の全てを受け入れるのはオレだけで充分。他の奴には知らせたくないんだ」

そこで火臣はにっこり笑った。多加弥は真意を計りかねる。火臣はいつも大事なところでいいかげんになる。どこまで本気か、本当のところはわからないのが常だ。

火臣も天もまだまだ謎だらけだ。抱えているものが多すぎて、本人たちの口からでなければ真実は暴かれない。

（でも、黒川さんの言うとおり、知ってどうするんだ？）

自分には火臣のような感情はないし、そもそも自分の力で天がどうにかなるとも思っていない。知らないなら知らないままでもかまわないのだ。

（ただ、なんていうか・・・やりずらいんだよな・・・うん）

「さて、夕食の用意をして天を呼びにいくか」

「あ、あの。ひとつ聞いてもいいですか？もちろん、教えたくないことだったらいいですから」

「なんだい？」

「その・・・どうして天君のご両親はここに来ないんですか？」

「・・・」

多加弥は浦沢邸に来てからまだ一度も天の両親と会っていない。ここに住むことになるのだから挨拶くらいしておかなければと思っていたのに、今のところできていないのが現状だ。

この屋敷の人たちは皆活気があり、さらに火臣と天が自由奔放なせいか賑やかさには事欠かない。しかし、ここには家族の温かさともいふべきものが一切感じられなかった。それもそうだ。家族の存在自体がないのだから。

「あの人たちは滅多にこの屋敷には顔を出さないよ。いつも別邸か、海外を飛び回ってるか・・・」

「別邸……。てことは、ここが本邸？」

「そう。なのにおかしいだろ？いつも天しかない」

「仕事の……。関係とかですか？」

多加弥はおそるおそる聞いた。これ以上は答えてもらえない範囲の話かもしれない。

「もちろん忙しい人たちだからね、それもある。けど、それだけじゃない。それだけなわけがない……」

「すいません。家族のことにまで口を出すべきじゃなかったですよね」

まずいと思った多加弥は自ら話を終わらせようとした。しかし、火臣はそれを許さなかった。

「天の周りの人間はみんな離れていく。あんなに一生懸命やってるのに、辛くてもちゃんと向き合ってるのに、なんでなんだろうね」
火臣は静かに多加弥に近付くと上から見下ろした。

「カシ君にはわからないかもね。天が手に入れられないものを与えられているのに、自ら目を逸らして向き合わないカシ君には……」

「……」

「君は気付くべきなんだ。そうじゃないと、天はいつまでもカシ君のことを気にかけて……。天は自分のことだけ考えてればいいのに、わずらわせる君はオレにとって……」

そのときだった。突然窓ガラスが激しく叩かれる音がした。緊張が一気に解け、二人は同時に外へ目を向ける。そこには必死の顔で窓に張り付く羽子の姿があった。

「何してるんですか」

多加弥に鍵を開けてもらい、羽子は部屋の中に転がり込んだ。

「普通に入ってきたらいいじゃないですか。鍵持ってるんですから」

「ごめんなさい。ちょっと急いでたもので……」

急いでいるからといって警備の目をかいくぐり二階のベランダま

でやってくる羽子の気が知れない。普通に入ってきた方がよっぽど楽そうだ。

「オレたちに何か用かい？」

「はい。皆さんの力を借りたいと思ひまして。まず天さんのところに行つたのですが、本気で殺されそうな目を向けられたので慌てこちらに参りました」

「コンサート前だからピリピリしてるのさ」

あれからというものの、羽子はしつこいくらいに屋敷にやってきては天に煙たがられていた。一応メイドとしての仕事はやめたものの、臨時の手伝いとして屋敷への出入りを許されているのでいつでも鍵を使って入ってこれるのだが、羽子はいつも勝手に忍び込み、いったいどうやってと思うようなところから登場しては天に怒られている。羽子なりにコンサートまで天を守るといふ約束を果たそうとしているのかもしれないが、天には迷惑な話だった。

「で、どうしたんですか？」

「大変なんです。マリアお姉さまが・・・」

「アベがどうかしたの？」

「とにかくワタシと一緒に来てくださいませんか」

羽子が珍しく真剣な顔で訴えかけてくるので、二人はただ事ではないと感じた。少し気は引けたが、天も連れて火臣は車を出す。四人は夜の道を万利亜の家へと向かった。

・漆黒の迷い猫（3）

まずい状況だった。こんなに追い詰められたことは今までない。

黒髪の女は由良^{ゆら}とだけ名乗り、その素性も目的も、全くはつきりしていない。ただ、その強さは半端なものではなかった。そのうえ巨大な黒猫のクロエによってハクが押さえ込まれてしまうため、万利亜は戦うには不利な状況に立たされていた。

万利亜は建物の陰に身を隠し様子をうかがった。頭上ではビルの上でハクとクロエが戦っている。なんとかあそこまで行き、ハクと共にクロエだけでも倒すことができれば勝算はあるかもしれない。だが、由良を振り切ることは不可能に近かった。

（本当に何者なのかしら。力を使ってさえ気配を探るのが難しいなんて……。契約者じゃないはずなのに呪いのことも知ってるし、あの猫を見たって普通じゃないわよね……。）

「こんな状況で考えごと？」

すぐ後ろで声がした。万利亜は血の気の引く思いで急いで距離をとる。

「ずいぶん余裕じゃない」

余裕なんてあるわけがない。逃げ回るしかない万利亜を、由良はなぶるように追いかけてくるのだ。まだ致命的な攻撃は受けていないが、もともとサポート力しかない万利亜が有力な反撃をできるわけもなく、体力ばかりが消耗されていく。

「どんなもんかと思ってたけど、たいしたことないわね。あ、でもあの猫はなかなかいいわ。さすがあの人がくれたものだけあるわね」

「あの人、あの人って……。フキのことを言ってるの？」

「ふふ……。そうよ。がっかりだわ、あなたが最初の契約者だなんて」

「どういう意味よ」

「あら、何にも知らないのね。いいわ、知らないなら知らないで。そのまま死んじやいなさいな」

由良の爪が長く伸び、鋭い光を放つ。確かに指から生えているのだが、その質感は鋼のようで、とても人間業とは思えなかった。

由良は爪を振り下ろして万利亜に飛びかかってくる。由良のスピードは異常に速い。全てをよけられる自信はなかった。

万利亜は胸の十字架を外すと、耳から力を集中させた。手の平にすっぽりと収まるサイズだった十字架はみるみる大きくなり、杖として使えそうなくらいの長さになった。気休めでしかないのはわかっている。それでもなんとかして攻撃を防がないと、本当に殺されてしまう。

万利亜は繰り出される由良の爪を、時に十字架で防ぎながらよけた。

（なんとかしないと・・・。私一人じゃ・・・）

そうは思うものの、由良の攻撃から逃れるだけで手一杯で、とても他のことに力を使う余裕がない。天たちに助けを求めるにしても、一度由良から遠く離れ、力を広域に渡って分散させる時間が必要だった。

（まあ、私のためにあの子たちが来るとは限らないけどね）

だからといって一般人を巻き込むなんてもってのほかだ。不生が絡んでいる物事なんて普通でないのは明らかである。きっと特殊な力の持ち主でなければ由良には対抗できないだろうし、それが可能な人物として万利亜が思い浮かべられるのは契約者しかいなかった。

「あら、大丈夫？息が上がってきてるわよ」

「うるさい・・・。まだ平気よ」

強がってみるものの、正直辛い。さっきから力を使えばなしだ。いくら契約によって授かったものとはいえ、使えばそれだけ身体に負担がかかる。耳をしまい生身で戦えば負担も減るが、力を使わずに由良の動きについていけるかは疑問だ。少しの隙が命取りになる。

「だいたい、なんで私なのよ・・・」

「なんで？ そんなのわかりきってるわ。あなたが不生につきまってるからよ」

「私はフキと契約してるの。つながりがあるのは当然でしょ。ベつにつきまってるわけじゃないわ」

「どうかしら……。それだけじゃないんじゃないの？」

「……」

由良の爪が万利亜の十字架をなぎ払った。

「かなわない恋からは、手を引いた方がいいわよっ」

「ぐっ」

防ぐ術を失った万利亜は、左腕に由良の爪をくらってしまった。ぐっさりと腕を貫通している。激しい痛みが襲ってきたが、不思議と血は出なかった。

万利亜はすぐさま刺さった爪をつかむと力を集中させた。耳にスパークが起こり、それが腕を伝って爪へ、さらに由良へと流れていく。力は光の電流となり、由良の全身を包み込んだ。

悲鳴をあげて由良が離れる。爪が元の長さになったため、万利亜の腕からも引き抜かれた。由良がうずくまっている隙に万利亜は駆け出しビルの合間を走り抜ける。

「ハクっ」

頭上を仰ぎ見て呼ぶと、すぐにハクが降りてきた。もちろんその後をクロエが追ってくる。万利亜は傍に來たハクに飛び乗る。もう限界だった。あとどれくらい力を使っていられるかわからない。意識が飛んでしまったらハクはただの猫に戻ってしまう。そうなる前になんとか逃げ切らなければならない。

「まったく……しつこい猫ね」

ハクの背に倒れるように身を預け、万利亜は首を捻ひねって後ろを確認する。闇と一体化したかのような黒い毛並みのクロエは、金色の目を光らせて迫ってくる。その背に由良の姿は見えない。

（なんでもあの猫は単独で動けるのかしら……）

もしクロエがハクと同じ存在なら、由良の傍から離れないはずだ

った。多少ならわかる。だがここまで距離がある状態で形状を変えずに命令どおり動かすのはかなり力が必要なはずだし、難しい。

（やっぱり同じじゃないんだわ・・・）

わかるのはそれだけだ。

万利亜は腕の痛みに汗をにじませた。左腕は全く動かない。爪が刺さった部分には黒い跡が残って見える。だが、やはり血は一筋も流れていなかった。

おかしいことばかりだ。見方を変えなければ状況を理解できないかもしれない。しかし今の万利亜には考えるだけの余裕がなかった。少しでも思考に時間をとられればハクの姿さえ保っていられそうにない。

「なんで・・・なんで私なのかしら・・・」

本当は由良の一言でわかっていた。ずっと、出会ったときからずっと胸に抱いていた思い。自分がここにいる理由。自分だけが彼を救えるのだと信じ、今までたくさんの時間を費やしてきた。それがまさかこんな状況を招くなんて、思ったこともなかった。

（こんなところで終われないわよ・・・）

万利亜は力を集中させてハクのスピードを上げた。クロエとの距離が少しずつ空きはじめる。もう少し意識を保っていられれば逃げ切れるかもしれない。そう思った矢先、突然黒い物体が横から飛び込んできて、万利亜はハクと共に弾き飛ばされ地面に落下していった。

ちょうど公園の上を飛び越えていこうとしていたところで、万利亜の落ちた場所は芝生の上だった。木々を伝って走っていたためさほど高さはなかったが、それでも衝撃は打ち付けた部分から全身に伝わっていく。

見ると、ハクも傍らに小さくなった姿で横たわっていた。もう力が残っていない。立ち上がりたくても体が動いてくれない。

「残念。ちょっとだけ逃げられそうだったのにね」

万利亜の傍に立ち見下ろしているのは由良だった。さっきまで姿

が見えなかったはずなのに、いつの間に追いつかれたのだろう。少し遅れてクロエも降り立つ。

「どうしたの？もう猫耳も出せなくなっちゃったの？」

由良はしゃがみ込むと万利亜の髪をつかんで引き上げた。ぐっと顔を寄せる。

「小娘が私の大事な人を盗ろうとするからこんな目にあうのよ」

「あなた・・・フキのなんなの？」

「私はあの人のたった一人の女。あの人を一番に思っているのは私で、思われているのも私・・・。そう、私だけなの。あなたみたいな十年ちよつとの思いとは重さも長さも違うのよ」

「ずいぶん偉そうに言うのね・・・。思い思われてるわりには、何にもしてあげてないみたいだけど・・・」

「・・・」

「フキを解放するのは私。時の長さなんて関係ないわ。だって私は、そのために契約者としてここにいるんだもの」

「こんな状況でよく言えるわね。その癬しやくに触る口をふさいであげようかしら」

由良は髪を放すと、万利亜の口を手でふさいでそのまま地面に押しつけた。そして空いている右手を上挙げる。いつの間にか由良の手には黒い先の尖った物体が握られていた。暗くてよく見えないが、物体はまるで手と一体化しているように思えた。

まずいと思った万利亜は由良の手をとにかく外そうとつかみにかかったが、そこで驚くことが起こった。なんと万利亜の手は由良に触れることなく通り抜けてしまったのだ。

「・・・っ」

「バイバイ。子猫ちゃん」

由良の手は万利亜に向けて思い切り振り下ろされた。

・漆黒の迷い猫（４）

万利亜の部屋についた四人は驚愕きょうがくの光景を前にしばし立ち尽くしていた。

ちなみに表のドアは羽子が窓から侵入して開けている。

「なんだこれは・・・」

部屋の中は嵐でもきたんじゃないかと思うほど荒れに荒れていた。棚は倒れ本は散らばり、そして壁には異常なほど巨大な爪跡が残っている。

「いつものごとく窓から入ろうとしたら窓ガラスが割れていました、中に入ってみたらこんな状態に・・・」

「ワコさん、いつも勝手に入ってるんですか？」

「あら、ちゃんとインターホンを鳴らすときもありますわよ。たいてい帰れて言われますけど」

万利亜の苦労を考えて、多加弥は少なからず同情した。

「お前が入ったときには誰もいなかったのか？」

天は部屋の中を観察して歩きながら羽子に聞いた。

「ええ。すぐにこの付近も探してみましたがお姉さまの気配はどこにも。それに、この窓なんです、外からじゃなくて中から割られてるんです。侵入目的ではなく、身体ごとぶつかった衝撃で割れたような激しい割れ方ですし・・・」

「ワコちゃん、プロだな」

「実感しますね・・・」

火臣と多加弥がささやき合う先で、天は壁に残った爪跡に触れていた。

「妙だな・・・」

部屋には呪いの気配が満ちていたが、その影までとらえることはできない。そんな中、この獣が引っ掻かいたような爪跡だけははっきりと見えるし、天にも触れられるのだ。

「それ、何なんでしょう。ライオンにでも襲われたんじゃ・・・」

「ライオンか・・・。その方がマシかもしれないな」

羽子にも見えている。やはりこれは呪いではないのだ。ライオンよりも巨大な体を持つ得体の知れない生き物。それがこの部屋を荒らしたのか。だとすると肌に感じる呪いの気配が何なのかわからなくなってくる。

天は有力な手がかりがつかめず、諦めて多加弥を呼んだ。不思議そうな顔で寄ってくる多加弥に耳打ちする。

「あいつを呼べ」

「あいつ？」

「由起^{ゆきは}葉だ。あいつの力なら万利亜を見つけられるかもしれない」
「今から？」

「犬に乗ってくればいい。あれだけの呪いの犬なら僕らの居場所と言わなくてもわかるはずだし、そんなに時間はかからない」

「どうしてユキハなんだよ。前にやってみたいに天君の力で追うことはできないの？」

「今回は無理だ。万利亜の状態がわからないのにむやみに呪いはかけられない。もし万利亜が力を使っているとしたら、弱い呪いなら消されてしまっただけじゃない。だからといって強く呪えば、弱っていた場合もろにくらってしまう。僕の力は攻撃型だから探すには一定の条件が必要なんだ」

多加弥はためらった。自分たちには荒れた部屋と壁に刻まれた爪跡しか見えない。しかし、この場所では確かに通常ではあり得ない何かが起こっており、それは羽子を除く全員が感じているとおり呪いが絡んだ出来事であるのは間違いないさそうだった。

（俺たちには見えないけど、ユキハには見えるモノ・・・）

ここへやって来て、由起葉は何を見るのだろうか。分かち合えないような恐ろしいモノだったらどうしたらいいのだろう。

「多加弥」

「……」

「あいつの力を借りたい。今はそれしか思い付かないんだ」

いつもなら絶対そんな風に頼んできたりしない。天は真剣なのだ。迷いは拭いきれなかったが、多加弥は由起葉に連絡することにした。外に出て電話をかける。一度かけて出なかったらあっさり諦めるつもりだった。しかし由起葉はすぐに出た。

「もしもし。どうしたの？」

「ああ……うん……」

「なんかタカヤから電話がくるような気がしてたんだ。まさか本当にくるとはね」

「……」

これもつながりのせいだろうかと多加弥は思った。逃げられないなら向き合うしかないのかもしれない。

「ユキハ、今何してるの？」

「今？ご飯食べ終わって片付け手伝ってたところ」

「そっか……」

「なに？どうかしたの？」

「いや……」

電話の向こうで由起葉の小さなため息がした。

「タカヤ、何かあるならはつきり言って。言わなきゃいけないことあるんでしょ？声でバレバレだよ」

今度は多加弥が小さくため息をついた。

「あのさ、ユキハ。今から出てこれないかな？」

「今から？」

「ユキハの……力を借りたいんだ。実はマリアさんがいなくなっちゃって……。襲われた可能性があるんだ」

「マリアさんが？それって、私の力でなんとかなるの？」

「……わからないけど」

「……」

「あっ、でも無理ならいいんだ」

「いいって、どういうこと？」

「え？」

「いいって、マリアさんがどうなってもいいってこと？」

「ちっ、違うよ」

「じゃあどうしてそんなに後ろ向きなの。何を気にしてるの？私で力になれるなら行くに決まってるじゃない。タカヤだってそうでしょう？」

「俺は……。俺はユキハに嫌な思いをさせたくないんだ」

沈黙が流れた。多加弥だって万利亜を助けたい。でも、そのために由起葉を犠牲にするのは嫌だった。

由起葉がいなければいいで、天たちだってなんとかするはずなのだ。きっと他にもやり方はある。なにも由起葉が見たくないものまで見なくたって……。

「ねえ、タカヤ。私に後悔させたいの？」

「見て後悔するかもしれないよ？」

「マリアさんのためにできたことをしなかった後悔の方が大きいに決まってるでしょ。心配しなくても大丈夫。だってタカヤが守ってくれるんでしょ？」

「……。ああ。そうだね」

由起葉なら絶対断らない。そんなことはわかりきっていたはずなのに、自分は由起葉の気持ちを無視しようとした。由起葉がいつも真つすぐ進むばかりだから、自分は傍にいて守ってやれる人間になろうとしていたのに、今は距離をおこうとした。

普通なんて、もう自分たちにはない。それでも由起葉にだけは出来る限りの平穏を与えてあげたかった。

（そのために俺はここにいいのか？……違うだろ。俺はユキハと一緒に生きてるんだから）

多加弥は天からの言葉を由起葉に伝えた。

「わかったけど……。ナギに乗っていくの？」

「そうすればすぐに来れるって、天君が。実際電車で来たら一時

間以上はかかるよ」

「うん……。でも私、ナギに乗って移動したことなんてないから。大丈夫かな……」

「大丈夫だよ。ナギは優秀だって、天君も言ってるし。それよりこんな時間にいきなり家から出れるの？」

「その点は大丈夫。なんとかするよ」

電話の向こうでいたずらに笑う由起葉が見えた気がした。多加弥は嫌な予感がして、背筋がぞわりとする。

「待っててね。どれくらいかかるのか知らないけど、急いでみるから」

多加弥はわかったと答えて電話を切った。そのまま部屋には戻らず、壁に背を預けて由起葉を待つことにした。少しだけ、心の不安が和らいだ気がした。

・漆黒の迷い猫（5）

「天さんたちって、いったい何者なんですか？」

「……」

純粋な目で疑問をぶつけてくる羽子に、天と火臣は顔を見合わせた。

「ワコちゃんはどう思うんだい？」

「ただ者じゃない……。そうとしかわかりませんわ」

「僕たちからしたら、お前だって普通じゃないぞ」

「それはわかってますわ。けど、この部屋を見たとき、ワタシ背筋がぞわりとしたんです。今までいろんなものを見てきたし、いろんなことを経験してきたけど、そういうのとは全然違うっていうか……。理解の外にある光景に恐怖すら感じてしまったんです。なのに、皆さんは最初こそ驚いたものの、とても冷静で、ワタシとは違う世界のものを知っていると思えたのです」

「ワコちゃんて、言ってること時々ムチャクチャだけど、実はかなり頭がきれるね」

「褒めていただけで、うれしいですわ」

にっこり笑い合う二人。妙な一体感が二人の間に生まれている。羽子に刺された傷はつい数日前に治ったばかりだ。あのときの痛みや怒りはもう気にならないのだろうか。

（刺されたのが僕だったら、こうはならなかったかもな……。）
恐ろしくて口には出さないが、おそらくもし天が刺されていたら火臣は己の命を捨てても羽子に刃を向けていただろう。結果としてこの場にどちらかの姿はないはずだった。

「お前は どうして僕たちに助けを求めてきたんだ？」

「それは……。自分ではどうにもできないと思ったから……。」

「他に助けを求めようとは思わなかったのか？ お前と同じような仕事をしている奴なら頼りになるだろう」

「ダメですわ。ワタシたちの世界では誰も信用できませんもの。昨日の同志は明日の敵。仲間というものが存在しません。気の合う人はいても気を許すなんてことは決してない……。だからマリアお姉さまのことで頼るなんて考えられません」

「へえ。じゃあオレたちには気を許してくれてるってこと？」

「それは・・・違いますわ。ワタシはやはり一人ですもの。でも、マリアお姉さまにとっては皆さんはつながりのある仲間だと、そう認識しております。だからワタシのためではなく、マリアお姉さまのために力を貸してくれるのではないかと・・・」

「アベと、オレたちがねえ・・・」

火臣は皮肉めいた笑みを浮かべる。それをたしなめるように一瞥いちべつして、天は羽子の前に進み出た。

「お前に秘密があるように、僕たちにも言えないことがある。正確には言えないというより言ったところでどうしようもないということなんだが・・・。とにかく、お前が言うとおり僕たちは普通じゃない。だが、そのことについて話すつもりもない」

「・・・」

「しかしだ、そのことと万利亜を助けることとは別問題だ。お前は万利亜を助けたいんだろう？なら目の前で起こる様々な出来事には一切目も触れず、ただ万利亜のことだけを思っていればいい。できるだろう？」

真っすぐな天の目を受けて、羽子は複雑な思いを全て呑み込んでうなずいた。諦めたように息をつく羽子と、ほっとして息をつく天。火臣はやれやれといった様子で肩をすくめる。

「まったく、天は優しいな」

「うるさい。こんなことであいつを呪いたくないんだ」

天の力を使えば羽子の記憶を飛ばすこともできる。だがそれは一時的なものではなく、この先ずっと続いていく呪いなのだ。一度呪えばつながりは永遠に断ち切られる。

呪いの力を使いたくなかったのは、なにも羽子が特別だからでは

ない。天は極力この力を使いたくなかった。しかも天の場合は気を抜いて思いのままに言葉を発してしまえば、それらは全て呪いとなってしまう。もし羽子が天の言葉を聞き入れず反論してきたら、天も感情的になって力を発動させてしまったかもしれない。そう思うとほっとするのだ。

（本当に、嫌な力だ・・・）

天は指を口元にそっと当てた。それを見て火臣は悲しげな顔になる。火臣が手を伸ばして天に触れようとしたとき、部屋の扉が勢いよく開いた。

「ごめんなさい。遅くなっちゃって」

「・・・・。いや、むしろ早くてびっくりだよ」

入ってきたのは由起葉だ。すぐ後ろに多加弥もいる。ナギの姿は見えなかったが、すぐ近くにいます。ナギはびっくりした。

「そんなに力を使って大丈夫なのか？」

「え？力？私はナギに乗っけてもらっただけだから、べつに・・・」

「力を使わずにあいつを動かしてるのか？」

驚く天に、由起葉は困惑する。

「ごめん、天君。よく意味がわからない・・・」

「不生の奴・・・。あの犬は相当特殊らしいな。主の力を使わずに動けるなんて、あり得ないはずなんだが」

「そうなの？私何も知らなくて・・・」

「まあいい。あいつがお前のために特別にやったプレゼントなんだろう。それより、お前に頼みたいことがあるんだ。力を貸してほしい」

天は由起葉の手をとると、部屋の中へ引っ張っていった。すぐに由起葉の全身を嫌な感じが襲う。

「・・・・」

「感じるだろう？ここには呪いの気配があふれてる。だが、僕たちにはその影すら捉えることができない。この部屋には確かに呪い

が存在したのに、それは万利亜に向けられたものじゃなかった可能性がある……。そうすると万利亜を襲ったものの正体がわからなくなってくる」

「あれは何？」

由起葉の視線の先には壁につけられた巨大な爪跡があった。

「僕たちにもわからない。けど、あれは呪いじゃない。羽子にも見えているのが証拠だ」

「あんな大きな爪を持った生き物が現実にいるっていうの？」

「そういうことになるな」

足がすぐみそうだった。万利亜の安否がわからないことが、たまらなく不安にさせる。

「由起葉。この部屋に残った影を見てほしい。僕たちには無理でも、お前になら見えるかもしれないんだ。もし呪いの影を見ることができれば、それをたどって万利亜を探せるかもしれない」

「……。わかった。やってみる」

由起葉は見ようとした。しかしうまくいかない。考えてみれば、見ようとして見たことなどないのだ。いつも勝手に視界が呪いに奪われてしまうだけで、由起葉は望んで力を使ったことがない。

段々と息苦しくなってきた。額に汗がにじんでくる。肌では呪いの存在をしっかりと感じているのに、必要なときに力が役に立たない。

由起葉はその場に座り込んでしまった。多加弥は急いで駆け寄ろうとする。それよりも早く、天が由起葉の前に膝を折って座り、そっと頬を両手で包んだ。

「焦らなくていい。力を自在に操るには慣れが必要なんだ。お前は契約者になってからまだ日も浅いし、力を使った経験も少ない。見ようとして見れるほど器用に力は使いこなせないだろう」

「天君……」

「一度目を閉じろ。肌で感じるその気配を追うんだ。見ようとしてもここにはもう呪いは存在しない。影を見るためにはその呪いの

本質に思いを寄せなければならぬんだ」

「うん・・・」

由起葉は言われたとおりに目を閉じた。さっきよりも大きな不安にかられる。ただの暗闇ではない、まるで生きているかのような闇の手が、由起葉を呑み込もうとしてくる。

（すごく強い・・・。重くて、苦しい思い・・・。それがここにあった呪い。・・・怖い）

由起葉は両手を握り合わせて身を強ばらせた。すぐに天の声が降ってくる。

「大丈夫だ。どんなものが見えたとしても、お前は僕が守ってやる」

「天君・・・」

由起葉は目を開けて天を見つめた。

「そんなセリフも言えるんだね」

「この状況で茶化すな。心に余裕ができたなら右目に集中しろ」
「うん」

由起葉は感じる気配を追うように視線を動かした。右目が赤く光り、五芒星が表れる。

その姿を見ながら、多加弥は複雑な思いで唇を噛んだ。自分が言うべき言葉はあれだったのだ。なのに自分は不安な気持ちをただ伝えただけで、逆に由起葉に諭さとされてしまった。自分にできなかったことをあつさりとやってのけた天に、悔しさが募つる。

「何か見えたか？」

「・・・もう少し」

由起葉は段々と、現実と夢の狭間を彷徨さまようような感覚にとらわれはじめていた。視界から色が消えていく。それに伴って黒い影の姿が色濃く浮き上がってくる。煙のように漂っていた影は少しずつ集まりだし、やがて壁側に巨大な生き物の姿を作り上げた。

（・・・猫？）

ナギよりも一回り大きい黒い猫は、目を光らせて由起葉を見つけ

ると、いきなり口を開けて襲いかかってきた。息が止まりそうな恐怖にかられ慌てて手を伸ばすと、その手を天が受けとめてくれた。

「どうした？ 大丈夫か？」

「う……うん……っ」

再び現実に戻りかけたそのとき、ふいに後ろから手が伸びてきて由起葉を包み込んだ。驚いて後ろに首を傾けると、黒髪の女が間近で微笑んでいた。その目に光はなく、ただ深い闇の色が由起葉を見つめている。

声も出せない由起葉に、女はにんまりと笑いかけると手を離し、猫の元へ移動した。女が猫の頭をなでると、次の瞬間猫の足元に金髪の女性が現れた。力なくぐったりと倒れたその体を、黒髪の女は乱暴に引っ張り上げて猫に乗せる。そして自分も猫にまたがると、もう一度由起葉に笑いかけて窓から飛び出していった。

「マリアさんっ」

由起葉は猫を追いかけようとして天に止められた。

「危ないだろ。落ち着け」

窓ガラスは割れ、残った破片は鋭い光を放っている。天に止められていなかったら呪いに魅せられたまま進み、大怪我をしていたことだろう。

「ご、ごめん……」

現実に戻り戻されて頭がクラクラした。右目が痛い。由起葉は目を押さえてしゃがみ込む。

「大丈夫か？」

「早く……早くマリアさんを探さないと……」

「何が見えた」

「大きな猫と、黒い髪の女の人。マリアさん、その人に……。窓から出ていったの。だから外に出ればまた見えるかも」

「わかった。ならお前は犬に乗って追え。僕たちはその後を車で追う」

「……やってみる」

由起葉は少し休憩して気持ちを新たにすると部屋から出ていった。天は火臣に指示してすぐに車を出させると多加弥を先に向かわせた。自分だけ部屋に残り、羽子と向き合う。

「いったい、何がどうなっているんですか？」

「説明できるようなことじゃないんだ。ただ、今ので少し手がかりがつかめた。これから万利亜を探しに行く」

「なら、ワタシも連れて行ってください。マリアお姉さまを助きたいんです」

「羽子の気持ちはわかるけど、今回は待っていてくれないか」

「どうしてですか？ワタシ、足は引っ張りませんわ」

「わかってる。羽子は強いし、頼りになるよ。けど今回は相手が悪いんだ。わかってほしい」

これ以上言われたら力を使わざるをえない。そう思って天は身構えたが、羽子はしばらく黙ったあと、少し肩を落としてうなずいた。

「わかりましたわ。必ずマリアお姉さまを連れてきてくださいな」

「大丈夫だ。僕は言うほど万利亜は嫌いじゃないからな・・・」

最後の方は聞き取れないくらいの小さなつぶやきだったが、天が珍しく柔らかく笑いかけてくれたので、羽子も笑顔で送り出した。

主の消えた部屋は不気味に静かで羽子の前に広がっている。沈みそうな気持ちを奮い立たせて、羽子は片付けにとりかかった。

・漆黒の迷い猫（6）

ナギに乗った由起葉は目を凝らして影を探しながら建物の上を移動していった。ナギも一緒に探してくれているらしく、さり気なくナビゲートしてくれる。

一方の天たちは由起葉の気配を追いながら車を走らせていた。由起葉の姿は目で見えなくとも感じ取ることができる。もし離れてしまったとしても、多加弥ならその場所がわかる。

「もう少し近付ければ僕たちでも万利亜の場所は感じれるはずなんだが・・・」

「でもアベが力を使っていなかったらオレたちにはちょっと難しいぜ。・・・ところでカシ君。さっきから浮かない顔してるけど、どうしたのかな？」

「・・・」

多加弥は否定するわけでもなく、ミラー越しに火臣に物言いたげな視線を向けた。

「なんだ？ 言いたいことがあるなら言え」

黙っている多加弥に天が投げかける。多加弥は居心地悪そうに下を向いた後、小さく息をついて顔を上げた。

「あのさ・・・。どうして天君はそんななの？」

「・・・はあ？」

いきなり何言っただ。そんな思いの詰まった声が出た。

「だってさっき、ユキハに・・・。天君が本当は優しいのは知ってるけど、でも、もしユキハが特別なら・・・」

「なに？ カシ君、天に嫉妬してるの？」

「しっ、嫉妬・・・なのかなあ・・・」

「なんだその曖昧な言い方は。お前のことだろう」

「そうだけど・・・。なんか言っただけ段々恥ずかしくなってきた。俺、何言っただろ」

「それはこっちのセリフだ」

「天君はさ、なんでそんなに落ち着いてられるの？俺は本当はユキハに大丈夫だからって言ってあげなきゃいけなかったんだ。天君がユキハに向けて言った言葉を、俺が言うべきだったんだ……。なのに俺は、自分の思いを一方的にぶつけて逆に不安にさせて、傍に意味を見失ってしまった。情けないって、あのときユキハに語りかける天君を見て思った」

「……」

天は不愉快そうな顔をしていたが、聞いているうちに視線はどこか遠くなり、少しずつ悲しげな表情に変わっていった。

「天君はどうしてそんなにいろんなことを受け止められるの？自分のことでも精一杯な生活を送ってるのに、いつも冷静でぶれることがなくて……。俺は感情に流されることもあるから余裕がなくて、天君にあんなことされると自信がなくなるよ……」

「……そうじゃない」

「え？」

「そうじゃないんだ。僕には何もないんだよ。優しさとか冷たさとか、余裕とか冷静さとか、多加弥の言うようなものは何も持っていないんだ。ただ物事を流していくだけ。だから僕はわがままにも見え、包容力もあるように見える……」

「思ったままにしてるだけってこと？」

「僕の言動に思いは存在しない。僕は誰も大切じゃないし、誰も憎くない。守るつもりもなければ傷付けるつもりもない。だから僕の言葉はただ流れていくだけ……」

「カシ君。今はユッキーのことで悩んでる場合じゃないだろ」

途中で火臣が割って入った。表情はいつもどおりだが、声には有無を言わさぬ強さがあつた。

「そうですね……。ごめん、天君」

「……」

「でも、天君は優しいと思うよ。何もないなんてことは、ないと

思う・・・」

「知ったように言うな。気色悪い」

天は言い捨ててふいっと窓の外へ視線を向けた。余計なことをべらべらしゃべってしまったと少し反省する。隣に座る火臣のオーラが恐い。

まずいなあと思っている、ふいに車が止まった。

「見つけたみたいだぜ」

すっかり暗くなった道にぼつぼつと街灯が立っているだけで、辺りを見回しても心細い。人の通りも今はなく、車の前に行儀よく座るナギが、ひとときわ白く浮き立っていた。

「ユキハ、ここにいるの？」

「たぶん・・・途中でマリアさんの姿は見えなくなっちゃったんだけど、黒髪の女の人はこの公園に降りていったから」

「確かに嫌な感じはする。だが、万利亜の気配が感じられないな」
考えられることは二つだ。この場所に万利亜がいないか、いたとして力も使えないほどに弱っているか・・・。

「とにかく行ってみよう」

うなずき合うと、四人は公園の中へと入っていった。
見つけるのに時間はかからなかった。入口から入って少し歩くとすぐに芝生の広がる広場に出る。そこに追っていた黒髪の女、由良と探していた万利亜の姿があった。

「マリアさんっ」

くると、由良が顔だけこちらを向けた。刃を突き立てられた万利亜に反応はなく、由良の下でぐったりと横たわっている。

「あら、お友達の登場かしら」

由良は万利亜の腹部から刃を抜くと立ち上がる。

「へえ・・・。みんな契約者なの」

「あなたいったい・・・。どうしてマリアさんを」

「どうして？ 邪魔だからに決まってるじゃない」

「邪魔って・・・」

にらむ由起葉を見て、由良は右目に気付き驚いた顔をする。

「あなた、目の契約を・・・」

「だったら何？」

由良の表情が変わる。余裕たっぷりに笑っていたのに、急に真剣な顔になる。

「そう・・・もう揃ったのね」

「・・・」

「でも、あなたまだ開眼してないわね」

「開眼？」

「目の力は呪いにとって最大の凶器。真実を暴き呪念を浄化する。でも、そんな未熟な力じゃ恐るるに足らず。今のあなたじゃ何もできないただの小娘にすぎない」

再び由良に笑みが戻った。すっと片手を上げると、背後に黒い塊かたまりが降り立ち、それがもぞりと動いたかと思うと、二つの金色の目が光った。

「なんだ、あれ」

「ね・・・猫？しかもすごく大きい」

「あの爪跡はあいつのか」

由起葉はさっき見た映像を思い出す。あのときもぞくつとしたが、こうして目の前で見るとそれ以上の恐怖を感じる。そもそもこれは何なのだろう。今まで見てきた呪いとは種類が違う。人が憎しみによって生み出したものではない。

「なんだか気に入らないわね。特にそのお嬢さん。契約していながら力を抑えられてるなんて、不生に特別扱いされてるとしか思えない」

「フキ・・・あなたも契約者なの？」

「違うわよ。・・・そうね。契約者だったら仲良くできたかもしれないわね」

「ユキハ。こいつ、俺たちとやり合うつもりだ」

「理由がわからないよ。マリアさんだけじゃなくて、契約者みんな

なに恨みがあるってこと？……そういえば、マリアさん……ふと視線を外すと、由良の背後で万利亜を抱き上げる火臣が見えた。いつの間に移動したのだろう。由良にばかり目を向けていたので気付かなかった。

「黒川さん」

由良もはっとして振り返る。

「お前……」

「悪いけどもらって帰るよ。こいつのせいで夕飯食べ損ねて腹ペコなんだ」

その言葉に、思わず多加弥と天は反応して腹に手を当てた。

「そうなの？ごめんね、私だけ食べて……」

「いや、ユキハが気にすることじゃないよ」

「あなたたち、私を馬鹿にしてるの？」

この状況でいきなりまったりしたりした空気が流れたことに、信じられないといった様子で由良は声を挙げる。

「そういうことだから、また今度。天っ」

火臣は駆け出す直前に天に合図した。すぐに汲み取った天は力を解放させる。

『動くな』

一言天が口になると、急に芝生が由良たちの周りだけ伸びはじめ、まるで蔓のように体にまとわりついて動きを制した。

「僕たちも行くぞ。あの程度の呪いじゃすぐに破られる」

「う、うん……」

「今は万利亜の身の確保が優先だ」

由起葉はうなずくとナギを呼び寄せまたがった。多加弥たちは火臣の後を追って車に戻る。

ナギに乗った由起葉が走り去ろうとしたときだった。由良はそのまま動こうとすることもなく、ただぼりつとつぶやいた。

「許せないわ……。あなたも、あの女も……」

その後ろで金色の目がぎろつと動く。由起葉はぞくつとしてナギ

を走らせた。

・漆黒の迷い猫（7）

火臣は万利亜を浦沢邸に連れて帰った。激しい外傷はなく火臣でも充分手当てできそうだったが、羽子が心配しているだろうと思い、天は屋敷に羽子を呼んだ。

「傷は大したことないですね。手当てもちゃんとしましたわ。でも、お姉さまとても苦しそう・・・」

羽子の言うとおり、万利亜は息も荒く、汗が浮かんでいる。悪夢にうなされているように見えるが、どれだけ声をかけても決して目覚めることはなかった。

「変な薬でも飲まされたんじゃない・・・」

「いや、そういうわけじゃない」

「でも、こんなに汗をかいてるのに体が異常に冷たいなんて・・・」

「

「羽子、ありがとう。とりあえず今夜は屋敷で万利亜の様子をみるから、できたら羽子は万利亜の部屋に戻っていてくれないか？防犯上の問題もあるし、羽子なら任せても安心できる」

羽子は動かない万利亜の手を握って、名残惜しそうに見つめた。

「部屋が片付いたら迎えにきてやってくれ。そのときにはきっと元気になってる」

「・・・わかりました。天さんの言うとおりにいたしますわ」

羽子は立ち上がると、一人部屋を出ていこうとして扉の前で足を止めた。

「でも、もしお姉さまに何かあったら・・・。そのときはちゃんと教えてくださいね。ワタシだって黙っていられるのも限界がありますから」

「うん・・・。みんな同じ気持ちだ」

「そうですか。では、また参りますわ」

扉が閉まると、しばし沈黙が流れた。万利亜の息遣いだけが部屋

に響く。なんとかしなければ。気持ちばかりが急かされる。

「天君。あんなこと言って、助ける方法が何かあるの？」

「いや。僕たちでは無理だろう」

「無理って。マリアさん、どうなっちゃうの？」

天はおもむろに万利亜の服をめくり上げた。腹部があらわになる。天の突然の行動と、そこに表れた光景に由起葉と多加弥は驚き、声を失った。

万利亜のへそより少し上には、真っ黒な模様ができていた。小さな虫が無数に飛び回り円を描くように、黒い靄もやのようなものが広がっている。天は続けて右の袖をまくった。すると、同じように右手にも黒い模様ができていた。

「呪いだ・・・」

「呪い？」

「どんな思いが込められているのか知らないが、これが身体に浸透すれば呪い主の思いは遂げられる。つまり、あの女の恨みの念が万利亜を襲う」

「そんなんっ。今でも充分苦しんでるのに」

「・・・あの人、許せないって言ってたの」

「そうか・・・。女の恨みは恐いからな。アベの命はないかもしれないな」

「黒川さん。そんな恐いことさっさと知らないでください」

多加弥は右手の模様に触れてみた。しかしつかむことはできなかった。

「ここまで入り込んでいたら、いくら力を使っても引き剥がせないだろう」

「じゃあどうすればいいの？このまま黙って見てろっていうの？」

「僕に当たるな。ただ、一人なんとかできるかもしれない人物がいる・・・」

ちらりと、天は由起葉を見た。考えた由起葉は思い付いた名前を叫んだ。

「・・・フキっ」

由起葉は部屋を天井から窓の外までぐるりと見回しながら必死に呼んだ。

「フキっ。マリアさんを助けて。お願いだから出てきて」

しかし反応がない。

「フキのバカ。私が呼んだら来てくれるって言ったのにっ」

「バカはないだろう。だいたい、ワタシは君を助けるとは言ったが、マリアを助けるとは言ってな・・・」

「フキっ」

一瞬のうちにして現れた不生に、由起葉は飛びついた。由起葉を受けとめながら、やれやれといった顔をする。

「なんですぐに応えてくれないの。早くしないとマリアさんが」

「人使いが荒いなあ。それに、ワタシだって何でもできるわけじゃないんだよ」

不生は万利亜に近付き様子をみた。そして模様に軽く手をかざす。

「ユラか・・・」

「ユラ？」

「これならなんとかなる。君の頼みでもあるし、力を貸そう」

不生は何事か唱えながらそのまま手を当て続けた。すると、少しずつ模様が消えていく。腹部が終わると右手にも行い、万利亜の体から完全に呪いを消し去った。

「これで大丈夫だ。ただ、相当力を使ったようだから、しばらくは目を覚まさないかもね」

「よかった・・・」

苦しそうだった万利亜も、今ではすやすやと眠りにについている。

「それにしても、ずいぶんやられたものだね」

「フキはあの女の人を知ってるの？」

「知ってるよ。君たちが見たのはおそらく、ユラという人物だ。黒い猫もいただろう」

「うん。すごく大きかったけど」

「・・・」

「あいつは何者なんだ」

「ユラは・・・、ユラはワタシが人間だった頃の恋人だ」

その発言の背景に、様々な疑問が浮かぶ。

「恋人？」

「それに、人間だったって・・・ということ？」

「昔の話だよ。昔はワタシも人間で、その頃には恋人もいた。それだけのことだ」

「そんな簡単に片付けられる話じゃ・・・」

「なんだい？君はワタシに興味があるのかい？」

「あるかないかで言ったら、かなりあるけど・・・」

「へえ」

「興味があるのと好意があるのとは違うからっ」

二人の間に多加弥が割って入る。じとつと不生をにらむと由起葉を自分の元に引き寄せた。

（なんかこの頃、ユキハ無防備じゃないか？）

亮平りょうへいに天に不生に、次々と気になる人物が現われては多加弥を不安にさせる。今はそれどころじゃないとわかっていても、とりあえず傍に寄せておかなければ安心できない。

「ねえ、どうしてフキの恋人だった人がマリアさんを襲うの？私
のことも許せないって言ってたし・・・」

「・・・厄介だなあ」

「そう思うならさっさと始末をつけろ」

「ワタシにだって情があるんだよ。けど、こうなった以上放っておくわけにもいかないな・・・」

「フキ・・・？」

覚悟を決めたような表情に、由起葉はどきつとする。いつも何を考えているのはわからないのに、急に暗い部分を見せられた気がした。

「ある程度の話ならマリアから聞けばいい。もっとも、彼女に話

す気があればの話だが」

「私たちはこれからどうすればいいの？」

「もし君たちがユラと決着をつけるといふのなら、そのときは君たちの力になるためにまた現れるよ」

「え？ちよっ、ちよっ」と

由起葉の声も虚しく、不生はあつという間に姿を消してしまった。また沈黙が落ちる。万利亜の安らかな息遣いだけが部屋に流れていた。

・漆黒の迷い猫（8）

「今夜はオレがみてるから、みんなは休んでくれよ。ユッキーも泊まっていくだろう？」

「あ、いえ……。私は帰らないとマズいことに……」

「マズいこと？ やっぱりユキハ……」

あの電話のときに感じた予感当たっていたようだ。

「ユキハ。なんて言って出てきたの？もしかして何も言わずに……」

「それならまだよかったかも……」

「ええ？ どういう……」

言い合っているところで多加弥の携帯が鳴った。びくっとなってポケットから取り出す。青ざめたのは由起葉だ。ディスプレイには一葉の名前が光っていた。いちは

「一葉さん……」

「タカヤ、適当に嘘ついてくれたらいいから」

必死な顔の由起葉が不安をあおる。多加弥は一葉に嘘なんてつけるわけがないとわかりつつも、うなずいて電話に出た。

「はい、多加弥です。どうしたんですか？」

「タカヤ君。どうしたとはずいぶんだね」

「あ、あの……」

「ユキハ、一緒にいるんじゃないかい？」

「えっ、ええ？」

声が上がってしまった。思わず口を押さえる。おかげで妙な間が空いてしまった。

「……いるんだね」

「は……はい」

やっぱり嘘はつけなかった。意味もなく汗をかく多加弥の横で由起葉はがっくりとうなだれる。

「ユキハと代わってくれるかな」

ちらりと見ると目が合った。沈黙。多加弥が携帯を差し出すと、しぶしぶ由起葉は受け取った。

「もしもし・・・」

「ユキハ、どういうことかな？」

「ごめんなさい・・・」

皆が見つめる中、由起葉は電話の向こうの一葉にしきりに頭を下げながら必死に謝っていた。言い訳のひとつもできないまま、しゅんとしすぎて小さくなっていくなうだ。そんな状態がしばらく続いた後、由起葉は多加弥を見て聞いた。

「一葉兄ちゃんが、タカヤも一緒に帰ってこいって言ってるんだけど・・・」

「えっ・・・。それってつまり、覚悟を決めろってこと・・・？」

「私ちゃんとタカヤは関係ないって説明するよ」

「それが通用するならいいんだけどね・・・。でも、ここで断ったらもっとひどいことになるのは目に見えてるし、一緒に行くよ」
電話を切った後で重いため息が二人の口からもれる。

「なんだか深刻そうだね」

「深刻なのは明日の俺の状態ですよ。ああ・・・顔はやめてほしいなあ。入学式が近いのに、最初の見た目で退^ひかれたくないよ・・・」

「わ、私が代わりに受けるよ。タカヤは悪くないんだもん」

「ユキハ。そんなの無理ってわかってるだろ？ だいたい、なんで一葉さんを怒らすようなことになったんだよ」

「それは・・・。家を出るとき、お母さんに一葉兄ちゃんのところに夕飯のおかずをお裾分けに行ってくるって言って出たの。もしかしたら遅くなるかもとは言ったんだけど、まさかお母さんが一葉兄ちゃんのところに電話してるなんて・・・」

「それでバレたのか」

「一葉兄ちゃんがうまく話を合わせてくれたから、お母さんには

バレてないみたいだけど。それにしたって、なんで今日に限っておかずの味のこともなんかで電話するのよお・・・」

(嘆きたいのは俺だよ。ついてない・・・。本当についてない・・・)

「なんかよくわからないけど、がんばって」

「がんばってなんとかなる相手ならいいんですが」

多加弥は引きつった笑みで火臣に応える。

「とりあえず帰ります。明日戻ってきますんで」

多加弥は由起葉と共にナギの背に乗り出ていった。詳しい事情はわからなかったが、大変そうだということはわかった。火臣と天は少しだけ心配した。

「さて。じゃあ僕も部屋に戻ることにする」

「ああ。コンサート前だからな。ゆっくり休んでおいた方がいい」

「まったくだ。大事なときに面倒に巻き込まれるなんて・・・」

「天はピアノのことだけ考えてればいいよ」

「そうだな・・・。代わりに火臣は万利亜のことだけ考えておけ」

「・・・」

意味ありげな笑みを残して去る天に、火臣は渋い顔をする。部屋は一気に静かになった。

火臣は安らかに眠る万利亜の寝顔を見つめる。長いまつ毛が白い肌に落ちる。金色に染めた髪は少しパサついていて、日々の疲れを感じさせた。

「まったく。あんな奴のために必死になってるから、こんなことになるんだ・・・」

(それでもお前はあいつのために一生を捧げるのかよ)

なんだか悔しくて、火臣は寝ている万利亜の頬を軽くつまんだ。

万利亜は夢をみていた。

いつものように部屋から追い出され、雨だというのに傘も渡されず外へ出る。足音の響く階段を降り、細くてじめじめした路地に立つ。人気はなく、近くの工場の音だけがせわしなく聞こえてくる。

万利亜は階段の下側に回って雨をしのぐ。部屋に戻るまであと一、二時間はある。少しの雨なら傘なんてなくても遊びにいくのだが、その日は前も見えないほど激しい降りだった。

（つまらないなあ……。何か持ってくればよかった）

一度部屋から出されてしまうと、呼びにくるまで入れない。万利亜は膝を抱えて座り、これから何をして時間を潰そうか考えていた。しばらくの間広がっていく水溜まりを見つめてぼうっとしていると、路地を歩いてくる足音が聞こえてきた。こんな雨の日にも用もなく路地に入ってくるような人はいない。万利亜は警戒して階段の隅に身を隠した。

少しだけ首を伸ばして様子をうかがうと、黒い傘が通り過ぎようとしているところだった。顔は見えないが、背の高い、黒い服を着た男の人ようだった。

ふいに傘の中から白い何かが落ちた。地面に落ちたそれは素早い動きを見せ、一直線に万利亜の元へやってきた。

「みゃあ」

「・・・っ」

目の前で鳴いたのは白い小さな猫だった。万利亜はびっくりして声が出そうになるのを手で押さえた。とても可愛いが、今はそれどころではない。万利亜は手を振ってあっちに行けと合図した。しかし猫は去るところか万利亜に懐いてすり寄ってくる。

心臓がバクバクいつている。万利亜は恐る恐る顔を上げてみた。今度は心臓が止まりそうになった。黒い傘の男は無表情で万利亜を見下ろしていた。

「ひっ・・・」

「恐がらなくてもいい。そんな顔しなくても、何もしやしないよ」
思ったよりも優しい声だった。万利亜は少し体の力を抜く。

「こいつが懐くなんて、珍しいな」

万利亜は足元の猫を抱き上げた。ふわふわとした毛が気持ちいい。

「私、猫好き。この子なんていうの？」

「名前はないよ。好きに呼んだらいい」

「ふうん・・・」

「君はこんなところで一人で何してるんだい？」

「今ね、お部屋にお母さんの恋人さんが来てるの。その人が帰るまで、私お部屋に入っちゃいけないんだ。だから遊んで待ってようとしたんだけど、今日はいっぱい雨が降ってるから雨宿り」

「・・・」

男はしばらく考えた後、傘を閉じて万利亜の横に並んだ。

「そいつがもう少し君と遊びたいみたいだから、ワタシも雨宿りしていいのかな」

「・・・お兄さんだと思ってたけど、おじいちゃんだった・・・」

「

「お、おじい・・・」

万利亜の目はまじまじと男の頭を見ていた。男の顔は若かったが、その髪は真っ白だったのだ。

「ああ、これか。髪が白いのはべつに歳のせいじゃないんだよ。

君からしたらお兄さんで歳じゃないのかもしれないけど、おじいちゃんとはちよつと悲しいなあ」

「不思議だね。でも、この子と一緒にキレイな色」

「そんなことを言われたのは初めてだよ」

「ねえ、お兄さんはなんていうの？私は万利亜だよ」

「ワタシか・・・。ワタシの名前は不生だ」

「フキ・・・。変わった名前。お兄さんは不思議だらけだね」

「そうかもしれないな」

ずっと冷たい表情だった不生が、ふっと笑った。万利亜は直感す

る。この人は絶対に自分を傷付けない。

「ねえ、フキ。また遊びに来てよ。この子ともまた会いたい」

「・・・そうだな。じゃあ、君が一人で寂しい思いをしていたら、そのときは会いにくるよ」

「うん」

不生はにっこり笑う万利亜の頭を優しくなでた。暖かい。声に
じみ出る優しさや、ふっと笑ったときに感じる柔らかさが、触れた
手から伝わるようだった。

フ
・
・
・
キ
・
・
・
・
○

ゆっくりと目を開ける。何かが頭に触れている感覚があり、万利

亜は夢と交錯する思いで視線を横に流した。

(・・・・・。・・・ヒオミっ?)

万利亞に手を伸ばしたままベッドに伏せる形で寝ていたのは火臣だった。

「何してんのよ……」

ぽつりとつぶやいて万利亜は火臣の手をどけようと手を伸ばした。すると、触れた瞬間、今度は火臣に手を握られた。万利亜はびくつとなったが、火臣はまだ眠っている。

「……まったく。本当に何してるんだか……」

ふうつと息をつく、思わず笑みがこぼれた。火臣に起きる様子がないので、万利亜はそのままにして再び目を閉じた。

・漆黒の迷い猫（9）

コンサートを明日に控えて最終調整をしていた天は、休憩のついでに万利亜の様子をみにいった。多加弥が戻ってきたら一度会場に向かい、リハーサルを行う予定になっている。

「具合はどうだ？」

「悪いわね、面倒かけて。おかげさまで元気よ。まだ力は使えない状態だけどね」

「そうか。羽子が迎えに来るまでは休んでおけ」

「あら、ずいぶん優しいじゃない」

「怪我人を追い出すほど冷たいわけじゃない。ただそれだけだ・・」

天は万利亜の傍に椅子を持ってきて腰掛けた。

「ところで、少し聞きたいんだが」

「なにかしら？」

「お前を襲ったあの女、ユラとかいうらしいな。面識は？」

「ないわよ。突然人の部屋に入り込んで叩きのめされたわ。

まったく、わけがわからない・・・ってわけでもないんだけど・・」

「あの女は不生の昔の恋人らしいな。なぜ今になって現れたのかは不明だが」

今まで部屋を空けていた火臣が戻ってきた。万利亜のためにハーブティをいれていたらしい。カモミールの香りが漂ってくる。

「天、来てたのか」

「・・・ずいぶん献身的に看病してるじゃないか」

「ち、ちがつ・・・。べつにアベが特別なわけじゃない」

「ふうん・・」

天のじとつと見つめる視線に居心地悪い思いをしながらも、火臣はとりあえずカモミールティをカップに注いだ。

「無理に飲まなくてもいいぞ・・・」

「嫌いじゃないわ。ありがとう」

「・・・ふうん」

「なんだよ」

「べつに・・・。火臣もそこに座れ。万利亜、少し話を聞かせてくれないか。昨日の様子だと、僕たちはユラとの対決を避けられそうにない。第一にお前が狙われたのはわからんでもないが、ユラはお前だけに敵意を持っているわけではなさそうだった」

「そうね。ユラはフキに関わる人物全てを消すつもりかもしれないわね。独占欲っていうのかしら・・・。フキには自分だけだって思ってるみたいだった」

「嫉妬心で攻撃されたんじゃないかな」

「でも、そうでしか存在できないのかも・・・」

「どういう意味だ？」

万利亜は昨日のことを思い返し、確信はなかったがはっきりと言った。

「ユラは、人間じゃない。呪い・・・なのかもしれない」

「呪い？」

「私、力の弱った状態じゃユラに触れることができなかったの。もともと私の契約じゃ呪いに触れることはできない。いつもは耳からの力を伝送させて触れることを可能にしてるけど、あのときは猫耳も出せないほど力を失ってた。もしユラが人間なら、それでも手が貫通するなんてあり得ないはず・・・」

「それが本当なら、いったいどうやってあいつは存在してる。呪いを生み出す元がいるはずだろう」

「ユラは自分の意志で行動してるみたいに見えたよな。・・・もしかして、人間のユラが呪いのユラを生み出したんじゃない・・・」

「もう一人ユラがいるってこと？」

「それにしてもおかしい。あんなに鮮明に姿が見えるなんて・・・。しかもあの猫はなんだ。呪いが化物を使うなんて聞いたことがな

い」

「そもそもフキの女だったんだろ？ そんな奴、普通なわけがねえよ」

「とにかく、もう一度対面する必要があるそうね」

（できれば二度と会いたくないが・・・）

話が一段落ついたところでノックの音がした。

「羽子か？」

入ってきたのは多加弥だった。見た感じ変わったところはないが、少し歩き方がおかしい。

「今戻りました。あ、マリアさん気がついたんですね。よかった」
にこっと笑う顔もいつもどおりだ。

「カシ君も無事に戻ってこれで何より」

「ええ・・・まあ・・・」

「・・・」

曖昧な返事をする多加弥に、天は椅子から立ち上がってずいっと近寄った。じっと下から見上げる。その視線に耐えかねて、多加弥はふいっと目を逸らした。

「えっ、ちよっ・・・天君っ？」

それを合図にしたかのように、天は急に多加弥を押し倒すとシャツを脱がしにかかった。

「わああ、やめてよっ。いきなり何して・・・」

「黙れ」

「・・・っ」

天に乗られてシャツを脱がされた多加弥は、その哀れな体をさらすことになった。

「お前はここに来る度に熊に遭遇するののか？」

「・・・そんなわけないだろ」

多加弥の体には痣になりかけの赤い腫れがいくつか見られた。

「由起葉の兄とやらは相当厳しいようだな」

「まあね。でも今回のは違うんだ・・・」

昨晚道場に帰った二人を待っていたのは一葉と二葉^{ふたば}。だが、幸いにもそこには百合子^{ゆりこ}がいてくれたのだ。由起葉と並んで一葉から散々説教はされたものの、体に覚えさせるといつもの制裁は受けずに済んだ。

ならばなぜ身体中ボロボロなのか。

「リヨウが、扱えもしない棒を振り回すから・・・」

二葉の余計な一言が悲劇を生んだ。まだ道場に通うようになって間もない亮平に、多加弥とやり合えと言うのだ。もし多加弥が負けたら由起葉の彼氏として今後一切認めないという条件まで出してきた。

（今だっただけにして認められてない気がするけど・・・）

多加弥がいなくなれば自分にチャンスがあると思った亮平はもちろんやる気だ。二人の兄に対し拒否権を持たない多加弥は受けるしかない。百合子は反対してくれたが、最終的には一葉に打ちのめされるよりマシだということで合意した。

「それでこのザマか・・・」

「棒術を身につけていない奴に棒を持たせたら、凶器ありのただの喧嘩だ。ルール無用、制限なし。けど俺は一葉さんの前で武術を無視するわけにはいかない」

それに加え、多加弥は顔への傷だけでもさけたかった。顔をかばうがゆえに腕や足にいらぬ怪我を負わされるハメになる。

「で、結局勝ったの？」

「当たり前です。リヨウなんかユキハを渡す気はありませんから」

「でも楽勝とはいかなかった・・・。それじゃあ相手も、まだ引き下がる気はないだろうな」

「そうなんだよ・・・。なんでユキハなんだろう？リヨウの周りには他にもいっぱい女の子がいるのに・・・」

「・・・」

（こいつ、言ってることが自分にも当てはまるって、わかってる

のか・・・?)

どう見てもわかっていない様子の多加弥に、三人は思わずため息をもらした。

「え？な、なんですか？みんなして・・・」

「いや、なんでもないよ」

「多加弥、今から出られるか？」

「え、うん。でも、出るって・・・」

天は多加弥が服を着直すのを待って言った。

「僕と一緒にリハーサルに来るんだ」

「俺が？マリアさんはどうするんだよ」

「火臣が残る。そのうち羽子も来るだろうしな」

その言葉を聞いて、火臣は椅子を鳴らして立ち上がった。そんなことは聞かされていない。

「なんでだよ、天っ。なんでオレじゃなくてカシ君を連れてくんだよ。だいたい会場までどうやって・・・」

「屋敷の運転手に頼めばいいだけの話だ。どうしても気に入らないというなら僕だけで行ってもいいんだが」

「・・・っ」

火臣は言葉をぐっと呑み込んで目を逸らすと椅子に座り直した。

「一人で行くのだけはなしだ」

明らかに不満な顔をして、火臣はポケットから手帳を取り出すと多加弥に向けて差し出した。

「関係者からコンサート当日について何か話があったらメモしておいてくれ」

「わかりました」

「もし・・・、もし天に何かあったら、いくらカシ君でも許さないからな」

爆発しそうな思いを抑えたような低い声に、多加弥は思わずびくっとなる。

「こんな奴に守ってもらわなくても、僕一人でなんとでもなる。」

いつまでも子供扱いするな。行くぞ」

「う、うん……」

振り返ることもなく出ていく天の後を、戸惑いながら多加弥が追う。扉の閉まる音を聞いてから、火臣は頭を抱えてうつむいた。

「なに？ ついに親ばなれてやつ？」

「知るかよ……。最近どうもうまくいかないんだ。いつも一番近くにいるのはオレだったはずなのに、カシ君と知り合ってから天が遠くなっていくような気がして……」

「いつもベタベタしてるから、そろそろ嫌になられたんじゃない？」

「……」

「冗談よ。恋する乙女じゃあるまいし、そんなことで泣きそうな顔してんじゃないわよ」

「してねえよ」

「あの子はすごく賢くて繊細な子よ。考えなしにあんたを傷付けるようなことするわけじゃないじゃない」

「……わかってる」

「わかってるならタカヤ君に対する歪んだ感情は捨てたら？ ソラが最後に助けを求めるのは結局あんたに決まってるんだから」

火臣は両手で顔を覆ったまま、しばらく動かなかった。

・漆黒の迷い猫（10）

見慣れぬ運転手の車に揺られながら、多加弥は火臣から渡された手帳を少しだけ開いて見た。スーツのポケットに収まるほどの小さな手帳には、天の仕事に関して細かく情報が書き込まれていた。整理されていないところをみると、メモ代わりのようにして使っているものなのだろう。

「すごいな……。俺じゃ代わりは務まらないんじゃないか」

「当たり前だ。お前なんか火臣と同じことができるか」

「ええ？　じゃあなんで俺を連れてきたんだよ」

「……」

「ねえ……」

「いいから僕の言うとおりにしてろ。お前でもできることがあるんだ」

ちなみに、この会話は運転手に聞こえないくらいの小声で行われている。

車は会場となるコンサートホールに到着した。天は帰る頃連絡を入れると告げ、運転手を屋敷に戻らせた。

マネージャー代理として来ているはずの多加弥だったが、初めて来るコンサートホールに勝手もわからず、ただ天の後についていくしかない。どちらが付き添いかわからない有様だ。

「多加弥、わかってると思うが僕は浦沢天だ。ここからは浦沢天としてお前も扱え」

「う……。うん。とりあえず余計なことはしないでおくよ」

「それでいい」

関係者用の入口から入る直前、天は一度ゆっくりと瞬きをした。目を開けた瞬間から浦沢天としての舞台が始まるようだった。少しだけ、その表情が悲しげに曇る。多加弥は横顔を見ながら、心の奥がぐっとなまれる感覚に陥った。

中に入ると様々な人が天に寄ってきた。天は皆に微笑みかけ、謙虚に挨拶し、ほとんど口を開かぬまま大人たちに手を引かれるようにしてピアノの前に辿り着いた。

「じゃあ、準備が整いしだい、始めましょうか」

天はピアノの前に座る前に多加弥の傍に寄っていった。子供らしく袖を引くと顔を寄せてささやく。

「多加弥、なるべくピアノの近くにいろ」

「え？でも邪魔なんじゃ・・・」

「これが最後だ。羽子に僕の殺害を頼んだ奴がここにいる。こんな直前になってさすがに直接的には手は下せないだろう。でも、もし相当な思いがあったとしたら、呪いとして僕を襲う可能性がある」

「俺にもできることって、それかよ」

「もし失敗しても僕が対処する。ただ、できるならお前が僕を守れ」

（俺が・・・天君を守る・・・）

天はくるりと向きを変えるとステージへと戻っていった。多加弥はステージの下、ピアノからなるべく離れない位置に移動する。

進行役の合図でリハーサルが始まった。今回のコンサートは完全に天のピアノソロとなっているようだ。ステージにはピアノ一台しかない。

多加弥はライトの当たらない場所から、辺りに注意を向けた。口ぶりから、天は相手が誰なのかわかってるようだったが、多加弥には見当もつかない。羽子は、たいしたおやじじゃなさそうと言っていた。その言葉から女性と若い男性はとりあえず外しておく。

天のピアノの音が降ってくる。しつとりと、流れるような旋律。気持ちのいい、春の暖かさを感じさせる音色だが、少しだけ何かが足りない。おそらく普通の人は音色の心地よさに気付かないであろう欠落部分。

（天君のピアノは、どうして・・・こんなにも悲しいんだ？）

多加弥の注意が周囲からピアノの音に向きかけたとき、急に毛の

逆立つようなぞわりとした感覚が襲った。多加弥は慌てて見回す。しかし呪いの姿はとらえることができなかった。

（気のせいかな？）

最後に天の方を見て、多加弥はそこに信じられないものを見つけた。なんと、ピアノが奇妙な形に動いているではないか。

真っ黒なピアノの表面を滑るようにして影が立ち上がり、歪んだ形を成してうごめいたかと思うと、目の前に座る天に向かって一気になだれ込もうとしている。

多加弥は考えるよりも早く体が動いていた。ステージに跳び上がると右手で天を守り、左手で影をつかみ振り払った。ピアノから引き剥がされた影は床に激しく叩きつけられて消える。

必死な多加弥はしばらく気付かない。息が詰まるような緊張から解放され、呼吸を整えてから天を見ると、凍り付きそうなほどの冷たい眼差しがそこにはあった。

「……」

そこでやっと自分の失態を把握する。会場の人間全てが、突然の行動にわけもわからず呆氣にとられた目で多加弥を見ていた。

「この……バカが」

天は忌々しそうに舌打ちすると、急に頭を押さえて多加弥にしがみついた。

「えっ、天君？」

「いいから」

「……」

寄りかかる天を多加弥は受けとめるしかない。

「天君、気分でも悪いのかい？」

間を置いてスタッフの一人が寄ってきた。それを皮切りに、次々と関係者が近付いてくる。リハーサルは一時中断となった。

「すみません、迷惑かけて……」

「いや、無理してたなんて全然気付かなかったよ。さすが付き人だな。わかって止めたんだろ？」

「えっ？」

「違うのかい？」

すかさず天が多加弥をつかむ手に力を込める。

「すいません。少しだけ休んでもいいですか？時間内に終わるようにはしますから」

「ああ。リハーサルのことには気にしなくても大丈夫だよ。明日のコンサートさえしっかりしてくれたら問題ないんだから」

「ごめんなさい……。ちょっと休んだら、きっと大丈夫ですから。戻ってきたら弾かせてもらっていいですか？」

「もちろん。控え室があるから一旦そこで休んできたらいいよ」
「ありがとうございますと微笑んで、天は支えられるふりをしながら逆に多加弥を引っ張ってステージから下がっていった。

今日は直接向かったので使用していないが、明日は天が使うはずの控え室。誰もいないその場所に入るなり、天は多加弥を突き放して激しくにらみつけた。

「誰が後先考えずに飛び込んでこいと言ったんだ？」

「ご、ごめん……。なさい……」

「真っすぐなのは由起葉に対してだけで充分だ」

「おっしゃるとおりで……」

しゅんとする多加弥をしばらくにらんでいた天だったが、長いため息をついた後は怒りの表情を緩めた。

「正直、まさかピアノに呪いの影があるとは思わなかった」

「でも、天君は相手が誰なのか知ってるんだろ？」

「まあ、証拠はないが……。見た限りではステージの傍にはいなかった。だから呪いが襲ってくるのにも間があると思ったんだ」
「だが、すでに呪いはピアノの一部となって天の目の前にあった。」

「間に合わなかったかもしれない……」

「え？」

「だから、僕の力じゃ間に合わなかったかもしれないって言うてるんだ。もっとうまくやってくれたらよかったんだが……。」と

にかく、守ってもらったことに感謝はしている」

「天君・・・」

「なんだ」

「もっと子供らしくありがとうって言ってくれたら、ユキハと同じくらいかわいいのに」

天は無言で多加弥の腕をとると、思い切り力を込めて押した。

「いっ、痛っ」

ピンポイント。天は多加弥が昨日打たれて赤くなっている部分を、きっちり狙って押してきたのだ。

「ご、ごめん。お礼を言うのは俺の方だよな。さっきはフォローしてくれてありがとう。黒川さんなら、もっとうまく対処できたんだろうけど・・・」

「当たり前だ」

「でもさ、なんで俺を連れてきたの？黒川さんじゃダメだったの？」

「・・・ダメなわけないだろ」

「じゃあどうして」

「火臣は、僕に縛られすぎてるんだ。このままじゃ、自分が何なのかわからなくなってしまう・・・」

「黒川さんのために俺を？」

「さあ・・・どうだかな」

「なんだよ、それ」

（本当は、自分のためなのかもしれない・・・）

「休憩は終わりだ。行くぞ」

「あ、うん。ねえ、もう大丈夫なのかな」

一度呪いを消したからといって、もう襲われることはないと言い切れない。もしかまだ恨みの念があるとしたら、いくらだって呪いは生み出せる。

「心配か？」

「一応・・・」

「ならすぐ横にいればいい。リハーサルなんだ。お前が傍にいてもべつにかまわないだろう」

「そんな状態でピアノが弾けるの？」

「僕を誰だと思ってる。浦沢天だぞ。それに、今日はお前が守る約束だ」

「それって・・・」

「なんだ？ 由起葉じゃなきゃ嫌なのか？」

「そんなことないよ。黒川さんのようにはいかないけど、俺の力で天君を守るよ」

天と多加弥はステージに戻りリハーサルを再開させた。時間の遅れを取り戻すように天はぶっ通しで弾き続け、周りの大人たちを感じさせた。その間は、もう呪いの姿さえ見ることはなかった。

・漆黒の迷い猫（11）

万利亜は完全に復活を遂げていた。生活も部屋も元通りである。皆も新しいスタートをきって、それぞれ忙しくなっていた。

日曜日の礼拝堂。朝のお祈りにやってきた人々が帰り、ステンドグラスの窓から光の差し込む中、万利亜は一人祭壇の前にいた。

胸元の十字架に手を当て目を閉じる。外からは子供たちの楽しい声が聞こえてくる。穏やかな昼下がり。このまま眠りに落ちてしまいたいほど心地いい。

（忘れてしまいたい……。何もかも）

自分の身に起こった不幸な出来事。汚れた家庭環境。捨ててきた過去の自分。全てなかったことにしてしまいたい。

でも、それらがなければ今の自分にはいったい何があるというのだろう。忌々しくて腹の底から沸き上がってくるような記憶だが、ふと立ち止まると、それしか自分にはないような感覚に捉われるのだ。

（私には、それしかない……。この先生きていても、あの頃の思ひしかない・・・）

万利亜は両手を組んで祈りを捧げた。

ふと、音が消えた。空気が止まる。万利亜は肌で空間の気配を追いつながら、静かに力を解放させた。

扉の開く音のないまま、床を歩く足音が響く。背を向けている万利亜には、どうやって入ってきたのかわからないが、この場に現れた人物は見なくてもわかった。

万利亜はすぐに力を外へ向けて放った。一人では勝てないわかっている以上、助けを呼ばなければならない。話し合っただけで天たちと決めた約束だった。

「その格好、似合っていないわよ」

通路の中ほどまで来て、皮肉たっぷりのセリフを吐いたのは由良

だった。

「余計なお世話よ」

くると、万利亜は向きを変えて由良を見た。

「呪われた人間が神の使いだなんて」

「あなたに心配されなくても、シスターは本職じゃないわよ。この教会への恩返しで手伝っているだけ」

教会のシスターは万利亜のもう一つの顔だった。孤児院を出た後、毎週日曜日にはこの教会の手伝いにやって来ていたのだ。

（また来るとは思ってたけど、まさか教会で対面するなんて・・・

）

万利亜は由良の周囲をよく見たが、猫の姿は捕らえられない。

（こっちにはハクがいるし、あのクロエとかいう猫がいなければユラともやり合えるかも・・・）

万利亜は耳からの力を足に流し、由良に気付かれぬよう注意しながら結界を張る準備を始めた。万利亜の張る結界は呪いを出さず、そして入れることも不可能にする。もし由良が呪いならこの教会からは出れないだろうし、クロエが呪い猫なら入ってくる事ができないはずだ。

「私の呪いの味はどうだった？」

「最高だったわよ。立てないくらいシビれちゃったわ」

「なのに今はずいぶん元気ね。不生に助けてもらったの？」

「私が頼んだわけじゃないわよ。でも、おかげでこうしてもう一度あなたと対決できるんだもの。感謝しなくちゃね」

由良は不愉快そうに眉をぴくっと動かした。

「あなた、私に勝てると思ってるの？」

「どうかしら。一度ダメだったからって、次もダメとは限らないわよ。それに、もし危なくなったら今度はフキが助けにきてくれるかも」

由良の顔から完全に笑みが消えた。ぎろりと万利亜をにらむ。

「調子にのってんじゃないわよ。不生はあなたのせいで運命を動

かさざるをえなくなったのよ。本当なら恨んで呪い殺してもいいくらいなのに・・・」

「なんで私のせいなのよ。私はフキを解放してあげたくて今まで力を注いできたの。フキを解放するためには契約者の存在が必要なの。私はその一人。だから・・・」

「そんな余計なお世話なのよ。ずっと・・・ずっと私が傍にいてあの人の心を満たしてあげるはずだったのに・・・。この体が朽ちようとも、魂は寄り添い永遠に二人で過ごさずだったのに、不生はあなたを助けるために死ぬための道を歩まなければならなくなった」

「私を助けるため・・・？」

「不生は呪いを受けて生死のない体になってしまった。でもあの人はそれでいいと思っていたの。呪いを解く方法はあなたも知っているとおりよ。でも、完成させるためには六人の契約者が必要になる。契約者は各々の人生の一部を捧げることになり、体の一部も奪われる。不生はそれを嫌がったの。このまま流れゆく身でいいと、傷付いた心を抱いたまま決心していたのに・・・」

「私が・・・」

万利亜は不生と契約したときのことを思い出していた。

どしゃ降りの日に不生と出会い、それから数年間、万利亜が一人でいると決まって路地にやってきてくれた。しかし、それが急にぴたりとなくなった。待てども待てども不生は姿を見せることはなかった。なぜなのか、理由もわからず、ぽっかりと空いた心の寂しさだけがいつまでも万利亜の胸に影を落とした。

そして万利亜が中学生になってすぐの頃、事件は起こる。

学校から帰ってくると家の鍵は開いたままになっており、中を見ても誰もいなかった。相変わらずごちゃごちゃとした狭い部屋に入ると、妙な静けさに身震いした。そこで万利亜はテーブルの上のメモを見つける。メモには母の字で危険を伝えるメッセージが書かれていた。

わけのわからぬまま万利亜は急いで部屋を飛び出し、階段を駆け降りたがもう遅かった。タイミングは最悪だったといえる。ちょうど下に来ていた男たちに追われ、万利亜はすぐに捕まりねじ伏せられた。

「君のお母さん、どこに行つたのかな？」

「知りません」

「女の子一人置いてどっかに行っちゃう親はいないでしょ」

「わかりません」

「なんでおじさんたちがここに来てるか知ってる？」

「・・・知りません」

「君のお母さん、体売ってお金稼いでたみたいなんだよね。それでうちの大事な奥様の旦那にまで手出してたみたいでね、二人してどっか行っちゃったらいいんだよ。ここにいたら戻ってくるかなあ？」

「来ないと思います・・・」

「へえ・・・。奥様はたいそうお怒りでね。お母さんが捕まらないんじゃ、代わりに君に来てもらうしかないかな」

「どうして私が」

「自分の娘が罰を受けてるって知ったら、さすがに出てくるんじゃないかな」

「そうそう。悪いことしたら大人でも子供でも罰は受けなくちゃね」

「・・・」

なんとなくはわかっていた。母親が自分を追い出した部屋の中で何をしていたのか。そうやって自分の生活は成り立っていることも、その行為に目を伏せていくしか今は生きられないことも、ずっと前から知っていた。

でも、母親はいつも目一杯の愛を注いでくれた。色香の漂う体からは想像もつかないほど明るく笑い、たくさん抱きしめてくれた。そんな母親が自分を捨てて男と共に逃げるはずはなかった。

（お母さんはきっと私を迎えにくる。だから私は、この人たちに捕まるわけにはいかないんだ）

万利亜は意を決して押さええている男の手を振り払い、逃走を試みた。

しかしそれは失敗に終わり、万利亜は男たちに囲まれ地面に押さえ込まれた。

「君、いくつ？」

「・・・」

「この制服、確か近くの中学のやつだぜ」

「まだ中学生かよ。それにしちゃあ、ずいぶんと・・・」

「母親譲りなんだろう。男に愛される体になるよう、生まれつきできてんだよ」

男たちの目つきがいやらしいものに変わっていくのを、万利亜は身動きのとれないまま憎悪に満ちた目で見ていた。

「気の強そうな顔してやがるぜ」

「恨むなら、自分の母親を恨むんだな」

上に乗った男が顔を寄せて首筋に舌を這わせてきた。他の男たちも次々と手を出してくる。

（い・・・嫌だ。気持ち悪い・・・）

抵抗して暴れたが、すぐに押さえ込まれてしまった。

（誰か・・・誰か助けて・・・。お母さん・・・）

顔を殴られ服も破かれ、意識が朦朧もろろろとしはじめた万利亜の心に、不思議と浮かんできたのは不生の存在だった。

（助けて・・・フキ・・・）

声にならない叫びをあげたときだった。急に周りの景色が一面の闇に変わった。男たちの姿も消え、万利亜は黒い世界にただ一人で横たわっていた。

（私・・・死んじゃったの・・・？）

頭がくらくらした。体もだるくて、とても立ち上がる気になれなかった。

そのまま周りをゆっくりと見回し、静かに瞬きをする。すると、何回目かの瞬きの後で、ふいに男の姿が視界に入った。しかもすぐ傍でこちらを見ている。

「大丈夫かい？」

男は黒い服に身を包み、闇の中で浮き立つような白い髪をしていた。

「・・・フ・・・キ？」

かすれた声で呼ぶと、男は少し寂しそうに笑った。

「君を助けてあげるよ。何もかもなかったことにしてあげるから、心配しなくていい。ただ、そのためには契約が必要なんだ・・・」

そして万利亜は片耳と引き替えに不生の契約を成立させることとなる。

・漆黒の迷い猫（12）

「あなたと契約したことにより、呪縛を解くための運命が回りはじめた。不生の前には契約者になる条件を備えた者が次々と現れ、五人揃うと最後の契約者が現れる。今の時点ですでに契約者は五人。なのに六人目はまだ現れない・・・」

「・・・」

「あの小娘がストッパーになっているから・・・。不生はなぜか、あの子との契約だけ不完全なものにしている」

（ユキハちゃんか・・・。彼女にいったい何が・・・）

由良は手を横に伸ばした。空を切るように振ると、その手に大鎌が表れる。黒髪に黒い服。その姿はまるで死神のようだった。

「私はあなたもあの小娘も大嫌い。私と不生の大事な時間を奪い、充分すぎるほどの罰を受けた不生を今だに苦しめるあなたたちを許せない」

「だったら・・・。だったらどうだって言うのよ」

万利亜も胸の十字架を外し、杖に変形させた。

にらみ合う二人。ふと、由良が口元を緩めて笑った。

「あなた、自分が契約者だからって言ってたわね。でもね、あなたである必要はないのよ。あなたが消えれば、新しい契約者が現れて穴を埋める。つまり・・・、あなたがここで死んでも、誰も困らないってことよっ」

由良は真っ向から飛びかかってきた。万利亜は逃げることなく十字架で受ける。鎌かまの擦れる音が耳に響く。

万利亜は力を込めて弾き返すと、杖を突き出した。由良は飛び上がってよけると、くると体を回転させて少し間を置く。そして再び襲いかかってきた。

（速い・・・）

飛び上がる高さも、間を詰めてくるスピードも、ただの人間とは

思えない。こうして目の前で捕らえていても、余裕をもって先手を取るなど不可能といえた。

「やっぱり、たいしたことないわね」

「ぐっ・・・」

由良は鎌を振り抜いた。万利亜は体を反らせてよけたが、次の瞬間由良の爪が鋭く伸び、凶器となって万利亜に襲いかかってきた。完全に体勢を崩している万利亜に受ける術はない。

（まづいつ）

「ハクッ」

万利亜の呼び声に応え、ハクが瞬時に間に入り、由良の爪を口で受けとめた。そのまま体重をかけて首を振り、由良を壁まで弾き飛ばす。由良は体を打ち付けて床に落下した。

その隙に、万利亜は杖を地に立て準備していた結界を一気に張った。床から天井まで、教会全てを取り囲んでいく。呪いにとって特殊な空間ができあがった。

「やっぱり、その猫はなかなかね・・・」

由良は起き上がると鎌を持ち直し、万利亜をにらんだ。

「私一人じゃ勝てなくても、ハクと一緒にならどう？少しは相手になれるかしら」

（これでユラは囲った。あとはあの猫さえ来なければ・・・）

「そうね・・・少しはマシかもしれないわね」

由良はゆつくりと、万利亜の動きに合わせるように移動した。お互いが向き合ったまま、隙を探っている。結界を張ったせいもあるが、音が消え静寂が不気味に教会を支配していた。

にらみ合う二人。踏み出すために体勢を落とした由良を見て、万利亜も素早く杖を構える。次の瞬間には鎌と杖がぶつかり合っていた。

何度か交えた後、由良は飛び上がり上から鎌を振り下ろした。杖で受けた万利亜を由良の蹴りが襲う。万利亜はガードが間に合わず横に吹っ飛ばされた。

床に倒れこむ万利亜にすぐさま由良の鎌が襲いかかる。それを間に入って防いだのはハクだった。

鋭い爪で弾くと、由良の体にのしかかる勢いで飛びかかる。由良は身軽な動きでかわしていくが、ハクも巨体に似合わず非常に素早い。段々と由良を追い詰めてゆく。

ついに扉の前まで追われた由良は、そこで結界の存在に気付いた。これでは扉が開いても出られない。ちっ、と舌打ちしてハクをにらむ。ハクはうなり声をあげて右手を振り下ろした。床が沈みそうなほどの重い一撃を由良は飛び上がったよけ、そのままハクを飛び越えようとした。

「私のことも、忘れないでよねっ」

空中で待ち受けていたのは万利亜だった。完全に無防備になっている由良の脇腹に、杖を打ち当てる。急速に落下していく由良を追うようにして万利亜は床に着地すると、すぐさまその体に乗りかかった。

「うっ・・・」

万利亜は由良の胸に十字架を突き立てる。もし由良が呪いなら、万利亜の力では消すことができない。だが、この十字架を突き刺せばこの場に縛り付けることは可能だ。

（でも、もし呪いじゃなかったら・・・）

万利亜は気を失っているように見える由良の首に手を回した。もし由良が人なら、このまま力を込めれば戦いは終わるかもしれない。

「ユラ・・・」

そのとき、突然万利亜の耳に声が流れ込んできた。

もう・・・やめたい・・・

（何？・・・声？）

もう・・・終わりにしたい

(呪い主の声？ユラ・・・じゃない)

ワタシを消して

主を楽にしてあげて・・・

はっとして手を離れた瞬間、由良が目を開き力一杯万利亜を殴り飛ばした。口を切った万利亜は、端から流れてくる血を手の甲でぬぐうと、ふらつく体を杖で支えて由良を見据えた。

「なめんじゃないわよ」

「・・・」

「あなたはいつもそうね。肝心なところで違うことを考える。そんな余裕はないって、わからないのかしら」

「べつに余裕があるわけじゃないわよ・・・」

万利亜は再び杖を構えた。決定的場面は逃してしまったが、それでも由良にだってダメージが残っているはずだ。もう一度ハクと共に追い込めばチャンスはある。

(その間に誰か来てくれたら・・・)

万利亜では無理でも、多加弥や火臣なら力で呪いを消すことができる。さっき送った信号を受けて誰か来るまでの時間が稼げたら、なんともなるはずだった。

「せっかくのチャンスだったのにね」

「また作ればいいだけのことよ」

「ふふ・・・。また、ね・・・」

由良が不敵に笑う。万利亜は嫌な予感がして、構えた足に力を入

れた。

「あなたじゃ私には勝てないわよ」

「そうね。でも私にはハクがいるわ。一人じゃ無理でもハクがいれば・・・」

「忘れたわけじゃないでしょう？私だって一人じゃないのよ」

由良は片手を上げてその名を叫んだ。

「クロエっ」

ステンドグラスの窓を激しく割って、黒いかたまりが転がり込んできた。由良の後ろに降り立ち、もぞりと動く。

（結界が破られた？まさか・・・でも・・・）

現れたのは間違いなく巨大な猫のクロエだ。

「どうして？って顔してるわね。それも当然かしら。だって、よくできた結界だもの」

「・・・」

「でもね、この結界はクロエには効かないの。どういふことか・・・わかるでしょ？」

「まさかとは思ってたわよ・・・」

万利亜の額に汗が浮かぶ。この状況は絶対的に不利だ。

「さて、この前と同じ展開になっちゃったみたいだけど」

「そうね。リベンジのチャンスが来たってことかしら」

「相変わらず余裕をみせるのね。まあいいわ。今度はいたぶって遊ぶのはなし。すぐに終わらせてあげるから」

由良はにんまりと笑うと、再び大鎌を手にした。万利亜は結界を解き、その分の力を手に集中させる。由良のスピードについていくようにしっかりと見据え、万利亜は奥歯を噛んで覚悟を決めた。

・漆黒の迷い猫（13）

由良が飛びかかってくる。万利亜はそれを受けるのでもかなり手一杯だ。そのうえクロエの手まで伸びてくる。間にハクが飛び込んできてサポートしてくれるが、その分万利亜の力は取られてしまう。（これじゃ前と一緒にだわ。正面からぶつかっても勝ち目がない）せっかく由良を閉じ込めた結界も解いてしまった。今度こそ勝負をつけるはずだったのに、また逃げるのか。

「精一杯、って感じね」

「あいにく戦闘には不向きなのよ」

「そうだったわね。あなたの力は人の心を盗み見る、卑しい力ではなかったわね」

「・・・・」

「あら、怒ったの？ 気にしてたなら、ごめんなさいね」

由良は万利亜の反応を楽しむように笑みをこぼす。万利亜は冷静さを保ちながらも、少なからず傷付いていた。由良の言うことも間違ではない。そのせいで天との仲を複雑にしまったのだ。

「でも安心なさいな。その卑しい力も今日であなたから消えるわ。もちろんあなたの命も一緒に消えることになるけどね」

由良は低い体勢から一気に間を詰めてきた。急いで構えるが間に合わず、なぎ払われた鎌によって杖は万利亜の手から弾かれた。すかさず由良の鎌が襲う。防御の術をなくした万利亜を、間一髪でハクが助ける。ハクは口でがっちりと鎌を挟んでいた。

ほっとしたのもつかの間。死角からもの凄い勢いで黒い影が伸びてきた。確認する暇もなくギリギリでよける。伸びてきたのはクロエの左手だった。

（まずいっ。クロエ相手に何もしゃ・・・）

左手が床につくと、すぐに右手が振りかかってくる。もうよけられる体勢ではなかった。クロエの一撃を真っ向から受けたらどれだ

けの衝撃なのか。想像もつかない恐怖に、万利亜は全身の筋肉を強ばらせた。

しかし、その一撃は途中で止められた。空を切って万利亜に襲いかかっていた右手は、たどり着く前に強い力で床に落とされる。

「危なかったな」

万利亜の前に降り立ち余裕の顔を見せる。光の加減で真っ赤に揺れる赤髪は、火臣だった。

「もうちょっと早く来てよ・・・」

「はあ？ 助けてもらってありがとうも言えねえのかよ」

「そうね。じゃあその言葉はユラをなんとかしてから言うことにするわ」

やっと希望が見えてきた。

「相変わらずの負けっぷりだな」

万利亜の手から離れたことで元の大きさに戻った十字架を拾い、天が近寄ってきた。

「知らないでしょうけど、一度は追い詰めたんだから」

「まったくこたえてないように見えるが」

「まあ・・・そうみたいだけど。でも、おかげでわかったこともあるのよ」

万利亜は十字架を再び杖に変えて由良と向き合った。一方の由良は後ろにクロエを従えて静かに三人を見ている。

「仲間を呼んでたなんて、知らなかったわ」

「悪いわね。一対一じゃ勝てないって認めるしかなかったから、今度は助けを呼んだのよ」

「正しい判断ね」

「どうも」

火臣は万利亜の後ろに下がって天にこっさり耳打ちする。

「こいつらのやり取りって、なんでこんな他人事みたいなんだ？」

「知るか。お前みたいにかッとなることがないんだろ」

「その言い方ひどくない？ なんだかさあ、余裕があるんだかない

んだかわからないよな」

「この状況で余裕なんてあるわけないだろ」

「ちょっと、何を後ろでこそそくだらないこと言ってるのよ」

何しに来たんだと言わんばかりの目で万利亜がにらむ。杖がカンツと床を鳴らした。

「遊びに来たわけじゃないんでしょ？ 私は今日ここでユラにとどめを刺すつもりでいるんだから」

「わかってるよ。オレだってあんな不気味な奴にいつまでも付け狙われるのはごめんだ」

「いい？ 二人共。ユラは呪いで間違いなさそうなの。けど、あの黒猫・・・クロエはたぶん、呪いじゃない」

「あれが呪いじゃないって？ 象並みにデカイ猫なんて、地球上に存在するのかよ」

「そんなの、私だって知らないわよ。でも、私の結界が効かなかった。それに・・・」

「もう話し合いは終わったかしら。そろそろ続きを始めたいのだけれど」

由良の後ろでクロエが不気味なうなり声をあげる。

「とにかく、ユラに直接とどめを刺せるのはヒオミだけ。でも、全ての解決の糸をにぎってるのはユラじゃなく、クロエの方よ」

「要するに、どっちも倒せばいいってことだな」

「まあ、そうなんだけど・・・、どっからくるのよ、その自信」
「やるしかないからやるって言ってるだけだ。行くぜっ」

火臣は駆け出す。さすが足に契約があるだけのことはある。素早さでは由良に負けていなかった。

由良の攻撃はことごとくよけられ、逆にカウンターが当たってゆく。

「やるわね。言うだけのことはあるか・・・」

「でも火臣だけじゃユラとクロエ両方を相手にするのは無理だ」

「わかってるわ。私とハクでクロエをなんとか押さえ込む。ソラ

は無茶しないで。相手の存在もはっきりしてないし、相殺能力も使えないんだから」

「足を引っ張るなど言ってるのか？」

「そうじゃないわよ。あんたに何かあったらヒオミに殺されるのは私なのよ」

万利亜もハクと共に飛びかかっていった。火臣に伸びるクロエの手を杖で払う。上からはハクがクロエの首元に爪を立てる。

痛みに暴れるクロエの顔を、これでもかとばかりに火臣が蹴り飛ばす。クロエは堪えきれず横に倒れて祭壇の机を押し潰した。

「ちよつと、教会ごとぶち壊す気？」

「そんなこと言われたって」

すでに窓はひとつ割れてしまっている。そのうえ中までボロボロにされてしまったのはたまったものではない。

「いくらかかると思ってたんのよ」

「安心しろ、万利亜。金のことなら黒川の資産でなんとでもしてくれるさ」

「おい、天。何勝手なこと言ってるんだよ。だいたいあの家の金はオレには・・・」

「わかったわ。修繕費の心配はないとして、あんまり壊されると説明のしようがなくなるんだけど・・・」

「あなたたち・・・。建物の心配より、自分の身の心配をした方がいいんじゃないのっ？」

由良が鎌を振り回して飛びかかってきた。

激しいやり合いが繰り広げられる。どちらも引くことなく攻撃しあう様を、天はじっと見つめながら考えた。

（僕にできること・・・）

下手に力を使っても役に立たないどころか邪魔になるかもしれない。見る限りではどちらが勝ってもおかしくないような戦いぶりだが、真っ昼間の教会でいつまでも戦っているわけにもいかない天たちは早く決着をつける必要に迫られる。なんとかして情勢を有利に

したいが、今の天には決定的攻撃をする手段がない。

（ユラが呪いなら相殺できるかもしれないが、そのためには正式な名が必要だ。クロエの方は得体が知れないとなると、僕の力では・・・）

そこではつととなった。天の頭にひとつの案が浮かぶ。

（僕になら、できるかもしれない）

天は舌を出すと五芒星を浮かび上がらせた。じつとユラとクロエの姿を捕らえながら一言だけ叫ぶ。

『クロエ』

次の瞬間、天の背後に黒い影が沸き上がり、どんどん膨れ上がった巨大な猫の姿になった。

「なっ・・・何あれ・・・」

「天が力で猫を・・・？」

天の後ろにはクロエと同じ大きさの影の猫が従えていた。天は思いを込めて言葉にすることにより、呪いを具現化したのだ。

「そんな使い方をしてくるなんてね・・・」

現れた呪い猫に由良も驚いているようだ。

『行け』

天が指差しながら命令すると、影のクロエは勢いよく飛びかかっていった。クロエと影のクロエが絡み合うようにして戦う。どちらも引かない巨大な猫同士のやり合いは、周りに入る隙を与えないほど激しいものとなった。

それならばと、万利亜と火臣は二人がかりで由良に当たっていた。かなりこちらが有利になった。このままいけば由良にとどめを刺せる。そう思ったときだった。

「うっ・・・」

急に天が口を押さえてしゃがみ込んだ。同調して影のクロエの動きも止まる。

「天？」

「ゲホッ・・・ゴホッ・・・」

天は苦しそうに咳^{せき}をすると、押さえていた手の中に血を吐き出した。大量ではないが、放っておいていいわけがない。

天が忌々しそうに舌打ちすると、影のクロエの姿は消えてしまった。その隙について由良はクロエの背に乗り、割れた窓から飛び去っていく。それを見つつも、火臣も万利亜も追おうとはせず、天の傍に駆け寄った。

「天、大丈夫か？」

「もう少しだったのに・・・逃がしたか」

「そんなの気にする前に自分のこと気にしなさいよ。どうして血なんか・・・」

「容量オーバーだ・・・。力を使いすぎ・・・ゲホッ」

火臣はハンカチで天の口を押さえると、しっかりと抱き上げた。

「屋敷に帰って天を休ませる。ユラも相当痛手を負ってるはずだし、すぐに襲ってくることはないだろう」

「そうね。あの・・・ソラ、助けてくれてありがとう。そんな無茶までさせて・・・」

「べつにお前のためだけじゃない」

「相変わらずかわいくないわね。でも、あるとき二人が来てくれなかったら正直どうなったか・・・。だから、ありがとう」

「・・・」

天は静かに目を閉じ、火臣に抱かれたまま教会を出ていこうとして扉の前で万利亜の方を見つめ声をかけた。

「万利亜」

「なに？」

「すぐに建物の修理の業者を呼んでやる。費用は黒川持ちでな」「ええ？ 天、あれ本気だったのかよ」

「だからお前はこの状況のうまい言い訳を考えろ」

火臣の不満の抗議を聞こえないふりをして、天は再び目を閉じると出ていった。

「・・・わかったわよ」

万利亜はつぶやいて顔を上げる。割れた窓からは、一際強い光が差し込み、教会にひとつの道を作っていた。

・漆黒の迷い猫（14）

浦沢家の力のすごさには本当に感心してしまう。

天と火臣が去った後、遅れて由起葉と多加弥が到着した頃にはすでに教会の修理をするための業者が現場を見にきていた。あまりの対応の早さに万利亜も驚くばかりだ。

「すいません。遅かったみたいです」

「ソラたちが来てくれたから大丈夫よ。おかげで教会はメチャクチャだけどね」

「マリアさんて、シスターもしてたんですね」

「違うわよ。こんな格好してるけど、私はただのお手伝い程度しかできないわ。前に少し話したと思うけど、私この教会の施設で中学生の頃からお世話になってるの。施設を出てからは恩返しのもりで手伝いにきてるのよ」

「なんかかっこいいですね、その格好」

さっき似合っていないと言われたばかりの万利亜は苦笑いだ。

「ありがとう」

天の手配してくれた業者は任せておいてもしっかりやってくれそうだったので、万利亜は由起葉と多加弥を連れて施設の方へと移動した。

「せっかく来てくれたんだもの、少し話しましょ」

万利亜はお茶をいれるためにキッチンに立つ。二人はテーブルの前に並んで座り、部屋の中を観察していた。

「静かですね」

「子供はみんな外に遊びに行ってるわ。夕方まで帰ってこないんじゃないかしら」

二人の前にカップを置くと、万利亜も向かいに座る。一口飲んで息をつくど、なんだかどっと疲れが出た。

「二人はどうして契約者が存在するのか、知ってる？」

突然万利亜が言った。二人は顔を見合わせてから不思議そうな顔で首を振る。

「私たちはね、フキの呪いを解くためにいるのよ。契約者が全員揃うと、フキは永年の呪縛から解放されるようになっていくの」

「フキの、呪い？」

「ユラとの戦いに巻き込まれてるんだもの、あなたたちにも知る権利があるわよね。フキのこと、呪いのこと、契約のこと……。私が知り得たことを二人にも話しておくわ」

万利亜は何から話そうか考えるようにしばらくカップをもてあそんでいたが、再び一口飲むとゆっくりと口を開いた。

「フキはね、もともと呪いを扱う呪術師だったの。もっとも、呪いをかける方の専門で裏の世界で仕事をしてた」

「裏の世界……。ワコさんと同じですね」

「そうね。あの子の仕事がどこまでなのかは知らないけど、フキは人の依頼を受けて代わりに呪いをかけるのが仕事だった。軽いものから重いものまで……。呪いで人を殺したこともあったわ」

「人を……」

「信じられない？ 呪いを使って人を殺すことはできるのよ。私たちの力じゃ無理だけど、ソラなら可能だわ。もちろん、あの子はそんなことに力は使わないでしょうけど」

言ってから、どうだかなと思う。火臣が刺されたことでたがが外れた天は羽子を呪い殺そうとしていたように感じた。あのと時間に合って本当によかったと思う。

「フキは自分のためには呪術を使わなかった。すべて他人の恨みを代行していただけ。でも、大切な人を呪い殺された遺族はそうは思わなかった。長い年月をかけてフキのことを調べあげた一人の遺族が、他の仲間を集めてフキに逆襲したの。呪いには呪いを。フキは呪いの力でこの世から存在を消されてしまった」

「死んだってこと……？」

「その方がましだったかもしれないわね。フキは、この世にもあ

の世にも行けず、永遠に黒の世界をさまよう運命にされてしまったの。心も体も奪われ、歳もとらず生まれ変わることも許されず、延々と続く呪いの世界で独りきり……」

「でも、フキは今私たちと会ってるし、力も貸してくれてるじゃないですか」

「そう。この呪いにはひとつだけ救いがあったの。おそらく遺族の人たちの情が生んだひとつの光だと思うんだけど、フキの呪いには解く方法が存在するの。そのために必要なのが、私たち契約者」

「俺たちが……」

「フキの奪われた心と体はこの世に散り、それを全て集めることができれば呪いから解放される。目、耳、口、手、足、そして心。フキは契約することでそれらを自分のものとし、自由になる。五人の契約者と最後の鍵……」

「契約にはそんな意味があったのか……」

多加弥は自分の左手をまじまじと見つめた。

「マリアさん、呪いが解けたらフキはどうなるんですか？」

「解けてみないとわからないけど、たぶん……消えるんじゃないかしら」

「消える？」

「人間としての死を迎えるって意味よ」

「そんな……。フキは死ぬために契約者を探しているってこと……？」

「ユキハちゃんは今のままフキにずっといてほしい？」

「それは……」

万利亜はテーブルに置かれた由起葉の手の上に、そっと自分の手を重ねた。

「私はね、フキに楽になってほしいの。確かに呪いの力でたくさんの人を苦しめてきたのはあの人だけど、その分辛い思いをしてきたと思うの。そして今も、私たち契約者への罪の意識を持ちながらいるはず……。フキはそういう人なのよ。だからもう、解放して

あげたいの」

「マリアさん・・・」

「私、フキがまだ人間だった頃に出会ってるの。そのときから、不器用だけど優しくかった。また会いたいって思ってたけど、まさか次に会ったときに契約者になるなんて思ってもみなかったわ。初めは困惑したけど、フキが私を助けてくれたのは事実だったし、それから契約者としてフキのためにできることを必死に調べて考えてきたの。だから二人も、力を貸してくれないかしら」

由起葉と多加弥はお互いを見合い力強くうなずいた。

「それがフキのためなら、私はかまいません」

「俺も。全てがいいことばかりではないけれど、俺が今生きているのはフキの力のおかげだから」

「ありがとう。こんなに素直に受け入れてくれると、逆に戸惑っちゃうわね」

「あの・・・天君たちは・・・」

「もちろん知ってるわよ。ただ、素直にはいかないわよね・・・二人共歪みまくってるから仕方がないんだろうけど」

万利亜は皮肉を付け加えて苦笑する。

「契約者は五人揃ってる・・・。マリアさん、六人目は？」

「それなのよね。本当ならもう存在してるはずなんだけど・・・。フキが契約してないだけか、それとも何らかの理由でまだ現れていないか・・・」

万利亜はちらりと由起葉を見た。

「ユラが気になることを言ってたのよね。まだ契約が不完全な者がいるって・・・」

「・・・」

万利亜が確信に迫る発言をしようとしたときだった。ふいに伸ばされた手で軽く口を制される。

「あまりおしゃべりなのは良くないよ、マリア」

「フキっ」

万利亜の後ろから手を伸ばしていたのは不生だった。

「あなたこそ、何もしゃべってくれないのは良くないわ」

「君が先に知ってしまうから話す必要がないだけだよ。べつに秘密にしてるわけじゃない。けど……この子に関して探るのはダメだよ」

不生は由起葉の手から万利亜の手をどけさせた。

（やっぱりユキハちゃんに何か……）

「フキ、今まで何してたの。マリアさんたちまたユラに狙われて大変だったんだから」

「そのようだね」

「知ってて出てこなかったの？ フキはマリアさんがどうなってもいいわけ？」

「そんなことはないよ。ユラには君たちを消させたりしない。それだけは、やはり許せないよ」

「だったらなんで……」

「ユキハちゃん」

感情的になる由起葉に、万利亜は静かに声をかけた。

「私も納得できないところはたくさんあるけど、でも、自分のこととして考えてみて。もしタカヤくんが私たちを殺そうとしたらどうする？ ユキハちゃんはタカヤくんを消せる？」

「……」

「マリア、酷なことを言うな。それに、ワタシとユラは君たちの関係とは違う。ただ、かつて一緒にいたことがあるというだけだよ」

「ユラはそう思っていないみたいだね」

「だから困っているんだよ」

苦笑する不生はどこか悲しそうだった。由起葉はうつむいたまま、多加弥の方を見ることができずに黙っている。

「そろそろ本当に終わりにしなきゃならない。ユラもそう思っているはずだ」

「そうね……」

（終わりにしたいって、確かに言ってた・・・）

万利亜はあるとき由良から流れてきた声を思い出す。呪い主は苦しみ、この現実を終わらせたいと望んでいた。

（主がやめたいと思っているのに、なぜユラは消えないのかしら）

「ねえ、フキ。私に力をくれない？」

「契約以上の力を与えることはできないよ」

「それはわかってるけど、でもユラは私の手で倒したいのよ。私が彼女の最期を決めたいの・・・」

由良の不条理な怒りを理解できるのはおそらく自分だけだ。ただ愛し方が少し違っただけで、自分とそんなに変わらない。だからこそ決着をつけなければならぬし、その最後はどうしても自分の手で決めたかった。

「君は無茶が過ぎて困る」

「わかってるなら何とかしてよ」

「・・・少し時間をくれ。次にみんなが揃ったとき、また現れるよ」

不生は考え込むように難しい顔をして、最後に由起葉の方をちらっと見てから姿を消した。

・漆黒の迷い猫（15）

万利亜のところから帰ってきた二人は柳楽神社なぐらの境内にいた。空はもうすぐ夕暮れを迎える。日が沈む頃には多加弥は浦沢邸に帰っていないかなくてはならない。

学校が始まりお互い忙しくてなかなか会えなかった。やっと会えたのが由良との交戦の応援で、複雑な真実を聞かされた今では、暗い表情の由起葉にうまく言葉をかけることもできない有様である。

最近どう？学校は楽しい？新しい友達はできた？聞きたいことも話したいことも山ほどあったのに、胸のもやもやが口を開かせてくれない。多加弥の心は由起葉がそれを望んでいないと感じ取っているのだ。

「あのさ・・・」

「・・・」

「ユキハ。どうしたの？」

「・・・っ、え？」

「・・・」

「ご、ごめん。ちゃんと聞いてなかった」

慌てて元気に振る舞おうとする由起葉の目をじっと見て、多加弥は手を伸ばすとその頬に触れた。由起葉の動きが止まる。

「どうかした？・・・って言ったんだよ」

「タカヤ・・・」

由起葉は目を逸らすと、そっと多加弥の手をどかした。静かな拒絶だった。

「・・・ユキハ？」

「なんか・・・よくわかんなくなっちゃった・・・」

「さっきマリアさんに言われたこと気にしてるの？そんなの起こりっこないから考える必要ないって」

「わかってる。タカヤはそんなことしない・・・。でも、あのと

き考えたの。私の守りたいものって何なんだろうって……。タカヤを生き長らえさせて、終わるはずだった人生を先延ばしにしたのに、どうして私はその時間を大事にしなかったんだろう。離ればなれでいつもいつもタカヤのことを考えてるくらいなら、どうして一緒にいたいようとしなかったんだろう」

「ユキハ……」

「私たちの魂には限りがあるのに、どうして私は未来のことを考えて今をこんな風にしちゃったんだろう。本当に正しい選択だったのかな……。なんでこんなに不安なんだろう。私はいったい何のためにこんな道を選んだんだろう……」

「ユキハ、どうしちゃったの？」

多加弥は駆り立てられるように由起葉を抱きしめた。しっかりと腕を回しているのに、つかまえきれていないような不安定な感覚に陥る。

「ユキハ、いったい何を考えてるの？」

「私……。タカヤをどうしようとしてるんだろ……。タカヤの人生はタカヤのものなのに、私がそれを決めてる……。生きるのも死ぬのも私が決めれるなんて……」

「それは俺だって一緒だろ。俺が死ねばユキハも死ぬんだよ」

「じゃあタカヤはなんで生きようとするの？私を生かすために生きてるんじゃないの？自分が生きたいからじゃなくて私を死なせたくないから……。全部私が……」

「なんでそんな考えにいくんだよ。本当にどうしちゃったんだよ、ユキハ」

由起葉の目から大粒の涙がこぼれて多加弥の肩を濡らした。感情が伝染し、不安ばかりが掻き立てられていく。

「生きようとしても死のうとしても、いつも私の存在がつきまとうんだよ？魂がつながってるっていうのは、お互いを思い合って愛し合ってるのとは違う……。縛られて、繋がれて……。これじゃ呪いと一緒だよ」

「……」

多加弥は急に腕の力を緩めると、由起葉の顔が見えるように少し体を離れた。涙で目もろくに開けられない由起葉を、微かに笑ったような表情で見つめる。

「ユキハ、今更何言ってるの」

「……え？」

「俺がこうして生きてるのは、フキの力でなんだよ？ 神様が俺を助けてくれたわけじゃないんだ。フキは神様でもなんでもない。ただ契約の傍らで俺とユキハのために力を使ったにすぎないんだよ」

「それは……」

「これは神様がくれた奇跡じゃないんだ。もともと、呪いなんだよ」

多加弥は由起葉の涙を指でぬぐう。

「俺たちは呪いで離れられない運命にされているんだ。ユキハがどんなに苦しくても従うしかないんだよ」

「私、そんなつもりで言ったんじゃない……」

「わかってるよ。俺が言いたいののは、ユキハの考えてることは俺には通用しないってこと。俺はこうなったこと、全然後悔してないし、ユキハの思い通りに生かされても全然かまわない。ただ、もしユキハの方がそう思ってるなら……離れたいのに離れられないって思ってるとしたら、かわいそうだなって思うよ」

「タカヤっ」

「でも従うしかないんだ。どうしても終わらせたいときは、自分の死をもって終わりにするしかないんだよ。俺から逃れるためには自分の未来を捨てるしかない……」

「そんな言い方しないでっ。そんなこと望んでないし、この先だって絶対にあり得ないんだから」

激しく言い放つ由起葉を、多加弥は再び抱きしめた。今度は優しく包むように腕を回す。

「わかってくれた？ 俺もユキハと同じ思いなんだよ」

「タカヤ・・・」

「俺は生きるんだ。それが自分のためではなくユキハのためだとしても、俺は死んだりしない。限りある時間だとしたら、その最後の瞬間まで俺はユキハと一緒にいる」

「ごめん・・・タカヤ。私タカヤのこと思ってるようで自分のことばかり考えてた・・・」

「いいよ。不安にさせた俺も悪いんだから」

多加弥は由起葉の涙が完全に止まるまで、ゆっくりと頭をなでた。由起葉の息遣いが静かになっていくにつれて、少しずつ心も鎮ま^{しず}ってゆく。ただ、多加弥の心にだけ払いきれない違和感が残る。

（なんだろう・・・。少しずつ何かがずれてきてる。ユラに会ったからのユキハは何かおかしい・・・。そう思うのは俺だけだろうか）

「私、きつとタカヤを止めないと思う」

「え？」

「マリアさんの質問への答え。仮にもしそんなことが起こったら、私はタカヤを連れて遠くに逃げるの。そして誰にも知られず二人で生きるの」

「すごいな。まるでおとぎ話だ。でも、ユキハラしくないよ」

「・・・やっぱりそうかな。タカヤは私がどうするのか、きつと私以上に知ってるんだね・・・」

「大丈夫だよ。それも含めて、俺は全てを受け入れられるから」
赤く沈む太陽が二人の影を伸ばしてゆく。

多加弥は由起葉にキスをして、心の中で強く誓った。

（俺は決してユキハを死なせない）

それは多加弥自身の生きる意志でもあった。

・漆黒の迷い猫（16）

数日後、五人が揃ったのは浦沢の屋敷だった。

「ユキハ、今日は大丈夫だね」

「うん。ちゃんとお泊まりの許可もとってきたよ。うるさいのはお兄ちゃんたちだけで、お母さんはタカヤのことわかってくれてるし大丈夫」

「一葉さんたちの許可をとったわけじゃないんだ・・・」

「なんでお兄ちゃんたちに許してもらわなきゃならないの。べつにやましいことしてるわけじゃないし、二人には関係ないことだもん」

「まあ・・・そうかもしれないけど・・・」

（なんか強気だな・・・。ユキハもついに反抗期か？）

集まった部屋は、天の父親が天のために用意したあのお茶会の部屋だった。楽しいお茶会を催すどころか秘密の会議に使用されてしまっている。どちらにしても五人ではあまりにも広すぎる空間だった。

「あれからユラとの接触は？」

「ないわ。けど、次に会ったときが全ての終わりになる・・・」

「まるで預言だな」

「これは決定よ。次は、私がユラを探して会いに行く」

「おいおい、マジかよ」

強い決意をその目に宿して、万利亜は壁の一点を見つめた。

「約束どおり集まったんだから、出てきてくれる？」

万利亜の呼びかけに応えて不生が現れた。長いテーブルの端に立ち、静かに万利亜を見返す。

「みんなで行くのかい？」

「どうかしら。それはこれから各々が決めることだと思うわ。ただ、私は行くわよ」

「君だけじゃ、返り討ちにあうかもしれないよ、マリア」

「私は勝つわ。もう終わらせなきゃいけないのよ。ユラだって、きつと同じ……。だから早く力をちょうだい」

不生は小さくため息をつくとき姿を消した。次の瞬間、万利亜のすぐ後ろに現れる。

「マリア。君が戦いたいのユラとかい？」

「そうよ。笑われるかもしれないけど、これは女の戦いでもあるの。私はユラに勝ってその思いもろとも消し去る」

「そうか……。君の戦いはただの自己満足のためだな」

万利亜は眉をぴくっと動かすと、椅子から勢いよく立ち上がり、振り向きざまに不生の胸ぐらをつかんだ。

「その何が悪いのっ。あの女だって自己満足のためにこんなことしてるんじゃない。あの女の主張する愛は、ただの思い上がりよ。相手を苦しめてまでする愛なんて、愛じゃないわ」

「君は愚かな人間だな」

不生は冷たい言葉とは逆に優しくな目で万利亜を見ていた。

ハラハラして見守る由起葉たちとは対照的に、天と火臣はどっしりと構えたまま冷静に座っていた。天が疑問を投げかける。

「そう思うなら、なぜお前がユラをなんとかしない」

不生は万利亜の手をゆっくりと外して、天を見た。

「そうだな。本来ならワタシがユラを消さなければならぬ……。だが、ワタシにそれはできない」

「昔の女だからって、できないじゃ済まされないぜ」

「そういう理由じゃないんだよ。ワタシはユラを止めることならできかもしれないが、消すことはできないんだ」

「どういうこと？」

「ワタシが手を出せるのは呪いに対してだけなんだよ。それを生み出す本体に対しては力の使いようがない」

不生の説明に由起葉と多加弥は首を傾げるばかりだが、残る三人は確信を得て、やはりという顔つきになった。

「クロエが、本体なのね・・・」

「気付いていたのかい。さすがだな」

「あの猫はいったい何なんだ？ただの猫じゃないのは見てもわかるが、ユラを呪いとして生み出すなんて、普通じゃ考えられないだろ」

「クロエはワタシがユラにあげた猫だよ。だが、ハクと違ってクロエは、元々は普通の猫だった」

「なら、なぜ今はあんな姿なんだ」

「ユラが呪術を使っただ。ユラはワタシが呪縛を受けてこんな姿になった後も、ずっと力を貸してくれていた。呪縛を解く方法を見つけてくれたのもユラだ。だが、心労がたたったのか、ユラはある日病に侵され倒れてしまった。ワタシは為す術もなく、ただ彼女の死を待つしかなかった」

「ユラが・・・死んだ・・・？」

「あの頃のままだったら、ユラは静かに眠りについたかもしれない。だが、ワタシはすでに契約を進め、歯車は動き始めていた。ユラはそのことをずっと気にしていて、このまま終わりにはできないと、うわごとのように繰り返していた・・・。そしてユラは、病院を抜け出し姿を消した」

「それじゃあユラは生きてるって可能性も・・・」

「それはないよ。ワタシはユラの執り行った呪術を知っている。

彼女は自らの血肉を捧げ、その強い呪念によりクロエを化猫ばけねこへと変えた。そしてその思いを化猫となったクロエに植え付け、クロエの念によって呪いを生み出させたんだ。クロエは呪いでもないが、この世のものとも言いがたい。その存在には終わりがなく、化猫たらしめる呪いの念を取り去らなければ不死身といっても過言ではない。つまり、物理的な攻撃だけではクロエを倒すことはできないんだ。そしてクロエが消えない限り、ユラが消えることもない」

「クロエが消えなきゃユラは消せない・・・。ユラの恨みを消さなきゃクロエは消えない・・・」

由起葉は不生の言葉を小さく繰り返す。

「それって、無敵ってことなんじゃ？」

「方法はあるよ。クロエがいる限りユラは何度でも生まれることが可能だが、ユラ自体は倒すことができる。呪いのユラを消し、次のユラが生まれる前にクロエをたたけば呪念ごと消し去ることは可能だ。ただ、どちらもかなり手強いが」

惨敗続きの万利亜は息をつくのと同時に肩を落とす。

「一人じゃ無理ってことじゃない・・・」

「だから、返り討ちだって言っただろう？」

多加弥や火臣の力で由良を消し、その直後にクロエを倒さなければならぬ。残念ながら万利亜一人ではとてもできることはなかった。

「でも、私はやるわ。ユラもクロエも、あるべき世界に還す」

「そうか。マリア、これを渡すよ。約束だったからね」

不生は万利亜の手をとると、銀色に輝くバングルをその両手首にはめた。

「これをつけてならユラに触れることができる。君の力を伝送させれば止めを刺すことも可能だ。ただ、一つにつき一回だけ。両手を使えばチャンスは一度だけしかない」

「一回って・・・。そういうとこケチらなくたって・・・」

「言っただろう。契約以上の力は与えられないって。それでも精一杯なんだよ」

「いいわ。その一度で、私がユラを止める」

万利亜は腕のバングルを触りながら決意を固めた。

（終わりにしなくちゃ・・・。ユラの望みには果てがない・・・。）

「で、どうやってユラを探すんだ？」

「ヒオミ・・・来てくれるの？」

「あのなあ、ここまできいて最後は知りませんなんて言うわけないだろ」

「俺たちも行きますよ」

由起葉も続けてうなずいた。

「いつの間にやら見事な仲間意識ができたものだ」

「不生。茶化すな」

子供の天にしかられて、不生は肩をすくめて微笑した。

「これは失礼。ユラのところにはナギが案内してくれる。ナギには居場所がわかるようにしておいてあげるよ」

不生は行儀よく座っているナギの頭を優しくなでた。最後にみんなの方に向き直って、それじゃあと消えようとしたところに、由起葉が駆け寄って腕をつかんだ。

「フキっ」

突然のことに、不生だけでなく、その場の誰もが驚いて見ていた。

「あの・・・あのね」

不生は由起葉の手を離すと、ナギをなでたのと同じように由起葉の頭をなでた。そして悲しげに微笑む。

「ユラを、止めてやってくれ」

「・・・」

まだ何か言いたそうな由起葉を残し、不生はそのまま姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4617t/>

呪眼一闇の呪縛

2011年12月21日15時48分発行